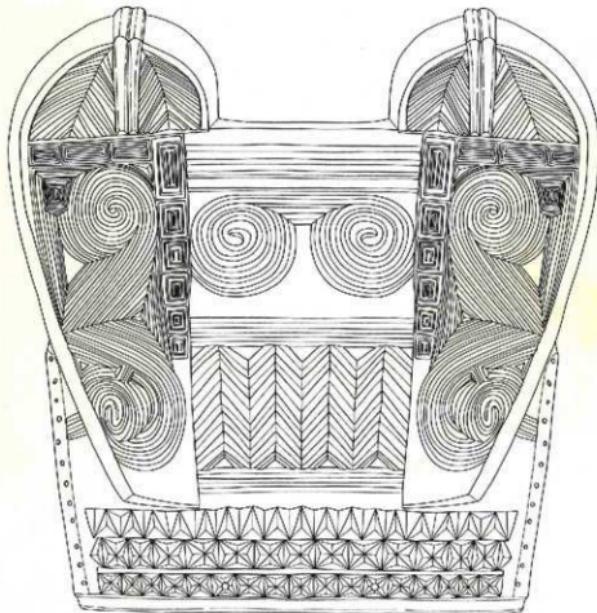


伊場遺跡遺物編 8

(木製品Ⅱ・金属器・骨角器)



2002

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書 第10冊

伊場遺跡遺物編 8

(木製品Ⅱ・金属器・骨角器)



例　　言

1. 本書は、伊場遺跡発掘調査正式報告書の第10冊となるものである。伊場遺跡の報告書はこれまでに、当市教育委員会から以下に示す9冊が刊行されている。

第1冊『伊場木簡』本文31ページ、別冊写真18ページ、別冊図版19ページ。

1976年3月刊行 第3次調査から第7次調査までに出土した木簡を報告。

第2冊『伊場遺跡遺構編』本文162ページ、写真103ページ、別冊図版40ページ。

1977年2月刊行 第2次調査から第7次調査までのうち、第5次調査分を除いた検出遺構に関する記録。

第3冊『伊場遺跡遺物編1』本文77ページ、写真105ページ、別冊図版30ページ。

1978年3月刊行 第3次調査から第7次調査までに出土した、木製品と竹製品に関する記録。

第4冊『伊場遺跡遺物編2』本文80ページ、図版18ページ、別冊図版35ページ。

1980年3月刊行 第3次調査から第12次調査までに出土した、墨書き土器と木簡(補遺)を収録。

第5冊『伊場遺跡遺物編3』本文78ページ、別冊写真80ページ、別冊図版63ページ。

1982年12月刊行 第2次調査から第7次調査までに出土した、弥生土器に関する報告書。

第6冊『伊場遺跡遺物編4』本文100ページ、写真39ページ。

1987年3月刊行 第2次調査から第7次調査までに出土した古墳時代の土器で、大溝からの出土品を除く。

第7冊『伊場遺跡遺物編5』本文121ページ、写真33ページ。

1990年3月刊行 第2次調査から第7次調査までに出土した、大溝内X層からVI層までの土器を掲載。

第8冊『伊場遺跡遺物編6』本文38ページ、写真17ページ、別冊図版77ページ。

1994年12月刊行 第2次調査から第13次調査までに出土した、大溝内V層から上層の土器と、第8次以降の遺構内出土土器を掲載。

第9冊『伊場遺跡遺物編7』本文154ページ、写真36ページ。

1997年3月刊行 弥生土器の内、第5冊に掲載されなかった環濠出土土器(第4次、12次1・2調査)、各時代の石器・土製品と、自然遺物の一部を掲載。

伊場遺跡の発掘調査のうち、第1次調査は國學院大學によって実施され、報告書が刊行されている。第2次から第13次までの調査が浜松市の主催事業で、この一連が報告書の対象である。第8次以降の調査は、報告書の刊行開始以後に実施されたため、未報告のものがある。今後の報告書刊行事業では、こうした未掲載の遺構及び出土資料を報告する。

2. 伊場遺跡報告書の刊行状況と、未掲載資料の残存状況を次表に示した。

調査次		第二次	第三次	第四次	第五次	第六次	第七次	第八次	第九次	第10次	第11次	第12次	第13次
内 容		2	2	2	2	2							
追 構		2	2	2	2	2							
木 本													
木 竹 塔 品		X	3	3	3	3	3	1	4	4	4	4	4
竹 塔 品		X	10	10	10	10	10	X	10	X	10	10	X
新 生		5	5	5	5	5	5		9	9	9	9	9
土 器	大溝跡く	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
	大溝下層	7	7	7	7	7	7	X	8	8	8	8	8
灰 良		8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
鑑 番		X	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
平安 以後		8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
土 塚 島 等		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
金鏡部・骨角器		X	10	10	X	10	10	X	10	X	10	X	X
石 墓		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
自然 遺物		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
其 他													

挿表1 伊場遺跡発掘調査と既報告関連図

3. 本書（第10冊）では、第3冊の木製品の内、写真だけが掲載され、実測図が作成されていなかったもの、第8次調査以降に出土した木製品、すべての金属品・骨角器についてまとめた。また、梶子遺跡6次調査で出土した木製品等についても掲載した。

4. 本書の編集は、浜松市博物館が行った。担当は、以下の通りである。

浜松市博物館 学芸員 鈴木敏則
浜松市博物館 指導主事 鈴木 靖
浜松市博物館 非常勤職員 倉田晴巳
浜松市文化協会 嘱託職員 熊谷洋子

<役割分担>

遺物実測 熊谷洋子、倉田晴巳、小泉 香、下位育世、藤森紀子、森岡篤子、伊藤早苗
図面清書 熊谷洋子、小泉 香、下位育世、藤森紀子、小泉祐紀（静岡大学学生）
写真撮影 鈴木 靖、鈴木敏則
原稿執筆・編集 鈴木敏則
作表・原稿清書 倉田晴巳

5. 掲載した出土品及び記録類は、すべて浜松市博物館で保管している。

凡 例

1. 出土位置・層位については、当時の記載のとおりに表記した。
2. 遺構その他については、従前の報告書に準拠している。
3. 方位は当時磁北であったが、城山遺跡、梶子遺跡での測量成果をもとに、真北を求めた。
4. 図中の標高は、海拔を示す。
5. 写真図版の遺物番号は、挿図の遺物番号と一致する。

左図の1～9が、報告書第1冊～9冊で取り扱った範囲（濃い網掛けを施した部分）である。10が本書で取り扱う範囲（粗い網掛け）である。図中のX印は、対象となる遺構・遺物が存在しなかったことを示す。空白は、今後整理報告する部分である。

目 次

第1章 伊場遺跡発掘調査の経過と整理作業	1
第1節 伊場遺跡の発掘調査	1
第2節 整理作業の工程	3
第2章 伊場遺跡の発掘区設定方法と大溝層位	5
第1節 発掘区とその表記方法	5
第2節 大溝の層序と年代観	6
第3章 弥生時代の木製品	8
①木甲	8
②鍬鋤・鎌柄・杵	9
③有頭棒・出納材	9
第4章 律令時代の木製品	10
第1節 分類	10
第2節 生産（労働）用具	10
A. 農具	10
①鋤	10
②鋤	11
③代搔	11
④柄振	11
⑤馬鋤	11
⑥田下駄（大足）	12
⑦鎌柄	12
⑧豎杵	13
⑨木柄類	13
⑩横槌	13
B. 渔具	13
①筌	13
②撫網	14
③四ツ手網	14
④アカカキ	14
⑤櫂	15
C. 運搬具	15
①背負子	15
②天秤棒	15
D. 繩具	16
①縄台（目盛板）	16

②縛錘	16
E. 機織具	16
①タタリ	16
②杼(かせ)	17
③かせかけ	17
④糸棒	17
⑤管大杼・刀杼	17
⑥底(おさ)	18
⑦経巻具・布巻具・中筒・綜続棒・腰当具	18
⑧機台	18
F. 工具	19
①斧柄	19
②刀子柄	19
③塗鍛	19
第3節 生活用具	19
A. 厨房具	19
①俎	20
②火鑊臼・火鑊杵	20
③箸	20
④杓文字	20
B. 容器類	20
①曲物	20
②箱物	24
③挽物	24
④剝物槽	24
⑤柄杓	24
⑥釣瓶	25
C. その他の生活用具	25
①横櫛	25
②下駄	25
③物指・松扇?・撥・印判・洗濯板	26
④腰掛け	26
第4節 建築部材	26
①柱材・垂木など建築部材	26
②梯子・鼠返し	26
③礎板	27
④杭	27
第5節 武器武具・馬具	27

①丸木弓	27
②馬具（壺鎧・鞍）	28
第6節 祭祀用具・楽器	28
①人形	28
②馬形	29
③絵馬	29
④舟形	30
⑤畜串	30
⑥剣形・刀形	31
⑦琴柱	31
第7節 その他の木製品	31
①木簡材	32
②有撓角状木製品	32
③筒状木製品	32
④櫛状木製品	32
⑤有撓木製品	32
⑥有頭棒	32
⑦柄材	33
⑧有孔材	33
⑨先端加工材・尖頭棒	33
⑩組合材	33
⑪その他の加工材	33
第5章 金属器・骨角器	35
第1節 金属器	35
①鎌・手鎌	35
②刀子	35
③鉄鎌	36
④鉄斧	36
⑤その他の鉄製品	36
⑥青銅器	36
第2節 骨角器	37
第6章 梶子遺跡6次調査出土木製品	39
第1節 農工具	39
①鋤・鋤柄・柄振	39
②鋤・鋤柄	40
③田下駄・鎌柄・臼	40
④工具	40
第2節 狩猟・漁撈・運搬具	40

①弓	40
②櫂	41
③アカカキ・舟材	41
④そり	41
第3節 紡織具・容器	41
①紡織具	41
②容器	41
第4節 建築部材	42
①梯子	42
②垂木・桁梁材・扉板	42
第5節 その他の木製品	42
①有頭棒	42
②納材	42
③有孔板他	42
第6節 奈良時代の木製品	43
第7章 市内他出土の木製品	44
①三和町遺跡出土木製品	44
②市外の遺跡から出土した木製品	44
第8章 まとめ	46
第1節 伊場遺跡における木製品の組合せ	46
第2節 遠江における木製農耕具の変遷	48
A. 弥生時代	48
B. 古墳時代	51
C. 奈良時代	53
第3節 木甲の復元について	53

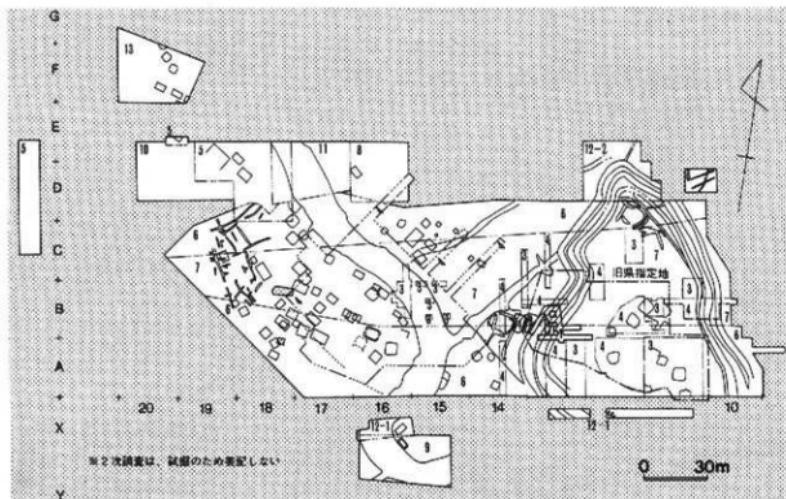
第1章 伊場遺跡発掘調査の経過と整理作業

第1節 伊場遺跡の発掘調査

伊場遺跡は、戦後市立西部中学校の生徒によって発見された遺跡で、最初の発掘調査は國學院大学によって1949年に実施された。これを第1次調査と呼ぶ（國學院1953）。この調査により、伊場遺跡は、浜松市における弥生時代遺跡発掘調査の端緒となったばかりでなく、静岡市の登呂遺跡と並ぶ弥生時代の遺跡として、市民の希望もあって静岡県指定史跡となった。

その後、国鉄東海道線の浜松駅周辺高架化計画に伴い、伊場遺跡付近に貨物駅が移転する計画がおこった。そこで浜松市教育委員会は、遠江考古学研究会の協力を得て、遺跡の広がりを確認するための調査を実施した。東海道本線とその北側に並行する堀留運河の間を対象にした比較的大規模な試掘調査であった。これを第2次調査と呼んでいる。この試掘調査により、遺跡の範囲が指定地以外にも広範囲に及んでいることと、弥生時代以外、特に律令期の遺構・遺物の存在が明らかにされた（浜松市1968）。

第3～5次の調査では、弥生時代の環濠集落、5世紀代の集落などの他、地方では当時ほとんど発見されていなかった多数の木簡や、墨書き器群が出土し、考古学・古代史学上注目された。大溝は、第3・4次で調査され、多くの木製品が出土した。



挿図1 伊場遺跡本調査区全図（第3～13次）・年次区分図

浜松市主催の第3～13次調査の範囲を示す。第6・7次は第3・4次調査区も再精査した。

編號次		時代		土 壤 品		木 腹 品		石 腹 品		金屬品	
第 3 次	新 生 時 代	A11K	A13K	学生土器2件	有孔2件 无孔2件	木片		新料1点·砾石1点			
1969.12	B1区	B1区	C1区		支钉			砾石1点·砾石1点			
1970.12	占 墓 時 代	A11K	B1区	土器56件	11件		木工1点				
1,600m ²	余 金、平安時代	B15区	B16区	漆器器、土師器16件	平底土器·椭圆形 平底土器	木器·人形·鸟形·白 胎器·火苗形	纺轮·灰	铁器2点·刀子1点 铁器2点·刀子6点·砾2点			
第 4 次	新 生 時 代	A12K		漆器文具7件				竹节状瓦砾1点·砾石1点			
1971.6	B1区	B1区	B1区	学生土器	竹节3点·小型有孔漆器5件 竹节1点·残破漆器1件	炭化米2点					
1972.3	占 墓 時 代	A12区	A13区	瓦器·土器·陶器	手制土器	木器·人形·鸟形·白 胎器·火苗形	竹节1点	竹节1点·砾石1点			
7,400m ²	余 金、平安時代	A15区	A15区	漆器器·土器·陶器	陶器·十四·陶器 平底土器	木器·人形·鸟形·白 胎器·火苗形	竹节1点·砾石1点	竹节1点·砾石1点 竹节1点·砾石1点			
第 5 次	新 生 時 代	A12K	B12区	漆器片·漆器片·山茶碗	竹节片	竹节0点·漆器品10点	木工2点·砾1点·杆1点·灰1点				
1975.10	B1区	B1区	C1区	学生土器	手制土器	竹节先·亚麻·树胶	木工先·砾1点·杆1点·灰1点				
1975.11	占 墓 時 代	A16区	A16区	口 盆	漆器器	竹节先·亚麻·树胶	木工先·砾1点·杆1点·灰1点				
15,000m ²	余 金、平安時代	D16区	D16区	漆器器	漆器片	漆器先·亚麻·树胶	木工先·砾1点·杆1点·灰1点				
第 6 次	新 生 時 代	1975.3	1975.3	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石6点·砾石12点			
1,150m ²	余 金、平安時代	D11区	D11区	漆器器	漆器片	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·黄铜2点·手链1点			
第 7 次	新 生 時 代	1975.8~1976.3	1975.8~1976.3	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,200m ²	余 金、平安時代	E12区	E12区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 8 次	古 墓 時 代	E19区	E19区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,100m ²	平 安 時 代	E20区	E20区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 9 次	新 生 時 代	E17区	E17区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,200m ²	余 金、平安時代	E18区	E18区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 10 次	古 墓 時 代	X12区	X12区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,100m ²	余 金、平安時代	X13区	X13区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 11 次	新 生 時 代	1977.7~1977.11		漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
2,700m ²	余 金、平安時代	X10区	X10区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 12 次	新 生 時 代	E12区	E12区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,000m ²	余 金、平安時代	D12区	D12区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
第 13 次	新 生 時 代	F19区	F19区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			
1,400m ²	余 金、平安時代	F20区	F20区	漆器器	漆器器	漆器器	漆器先·亚麻·树胶	砾石2点·砾石1点·手链1点			

调查成果一览表

第6・7次調査は、貨物駅開発に先立つ調査で、全面調査となった。しかし、遺構は線路下に埋め戻して保存することが確認されたため、西部地区の律令期建物群の下層に弥生時代の遺構が存在することとは確かめられていたが、建物跡の保存を優先して未調査とした。

第8次以降の調査は、東海道線下の一部の調査（第12次の1）を除いて、保存用地の整備事業の一環として行われた。第8・10・11・12次-2は保存用地（公園用地）の調査で、第11次では大溝の調査を行っている。第9次調査は東海道線の南側、第12次-1は東海道線下の調査で、大溝の調査を行っている。最後に実施した第13次調査は、伊場遺跡公園整備計画の中で行われ、遺構を検出したところで中断し、埋め戻された。

報告書の刊行事業は、第7次調査終了後から開始された。このため、初期の正式報告書では第8次調査以降の報告が掲載されていないものがある。

第2節 整理作業の工程

今回の報告書では、以下のものについて報告する。

- 1) 遺物編1に写真だけが掲載され、実測図がない木製品について、その図を公開する。
- 2) 遺物編1に掲載されなかった第8次調査以降の木製品を、全て整理し報告する。
- 3) 全ての骨角器を整理し、報告する。
- 4) 全ての金属器を整理し、報告する。

5) 植子遺跡6次調査他、博物館で収蔵している未報告の木製品について、整理し報告する。

木製品の整理作業は、当初保存処置が済んだものだけについて行った。それが1998年11月から1999年10月末までの12ヶ月の期間をかけて行った1次整理である。

その後も順調に保存処置が行われ、水没状態の木製品もわずかとなったことから、全ての木製品について実測し、報告することになった。これが2次整理で、2001年4月～2002年3月までの12ヶ月間行われた。

1次整理で実測した木製品は第1～50図、2次整理は第51～93図に示した。なお遺物編1に掲載されている木製品については、原則、写真は撮影していない。実測図版の掲載順序は、遺物編1に掲載されたものから始め、未掲載のものについては調査次順（第3→4→6→7→9→11）とし、出土位置が不明なものを最後とした。2回に分けて整理し上げたため、同じ調査次で出土した同じ種類の木製品であっても分散して掲載されており、やや見にくくなっているが、ご容赦願いたい。

出土木製品の一覧表について、少し説明しておく。

- 1) 図版番号一本編の実測図と写真図版に掲載されている遺物番号であり、表・図・写真の番号は、一致している。
- 2) 遺物番号—調査次と取り上げNo.である。例えば第6次調査の取り上げNo.が72であれば、6-72と表記した。遺物番号が掲載されていないものは、遺物編1に報告されているものである。
- 3) 写真番号—遺物編1の写真図版の番号を示す。
- 4) 出土地区・層位—遺物編1に掲載されたものは同じ内容で、今回新たに図と写真を載せたものは、遺物台帳に記された内容を示した。表記法については、遺物編1を参照されたい。
- 5) 樹種—大半のものは、素人の調査員が肉眼で観察したものであり、正確ではない。なお、樹種の

欄の後に○印を付けたものは、元東京国立科学博物館の山内文氏の同定によるものである（「山」の欄）。

6) 木取り－遺物編 1に準拠した。

7) 処置－以下に示す保存処置のこと。

PEG ポリエチレングリコール

FD 凍結乾燥

HA 高級アルコール

ND 自然乾燥（未処置）

W 水浸け状態（未処置）

1次整理

1998～1999		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
木 製 品		実 測											
ト レ ー ス		ト レ ース 版 下 作 成											
ト レ ース		ト レ ース 仕 上 げ											
作 表													
金 骨 角		実 測											
器 器		ト レ ース 版 下 作 成											
ト レ ース		ト レ ース											
作 表													

2次整理

2001～2002		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
木 製 品		実 測											
ト レ ース 版 下 作 成													
ト レ ース													
ト レ ース 仕 上 げ													
作 表													
写 真 摂 影													
写 真 版 組													
原 稿													
総 集													
校 正													

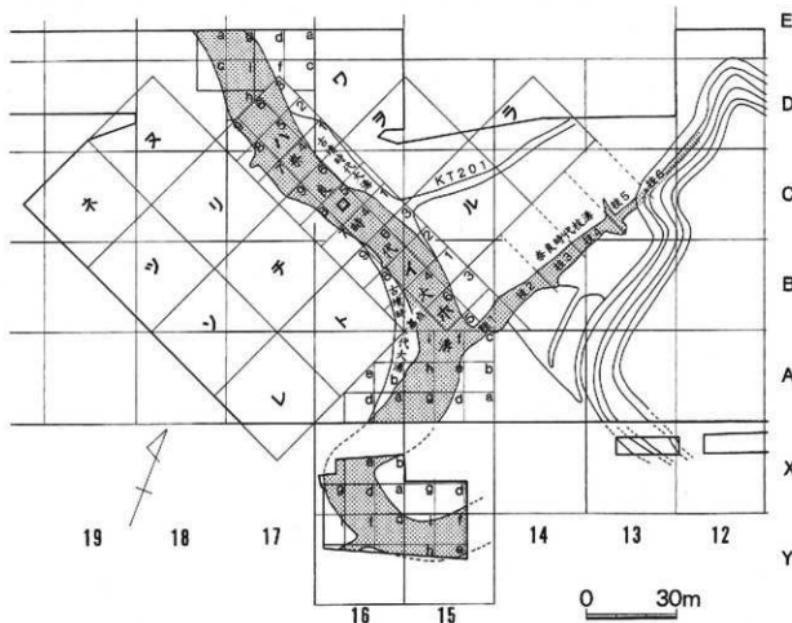
挿表 3 整理作業工程表

第2章 伊場遺跡の発掘区設定方法と大溝層位

第1節 発掘区とその表記方法

伊場遺跡の発掘調査は、国鉄（当時）東海道線と、その北側に並行して流れる堀留川にはさまれた東西に細長い区域を対象としていた。基準点は、第2次発掘調査での試掘位置を基本に、東海道線と南北横断道路の交点を基点（A1区）とした。一区は30m四方で設定され、東海道線に沿って北方向へABC列、西方向へ123列として、各発掘区を呼称することにした（挿図2参照）。第3次以降の本調査は、この細長い中央付近に限られたため、出土品のほとんどは東西列で言う10区から20区に集中している。

なお、東海道線以南の発掘にあたって、XY区が追加設定された（同図）。



挿図2 伊場遺跡大溝と枝溝周辺の発掘区・発掘小区の設定状況

伊場遺跡では当初（第2次調査）、堀留運河と東海道線に平行して発掘区を設定していた。第4次調査で、大溝の方向に沿って、A15区北西杭を起点に45度変更した発掘区を設定した。このため、大溝周辺では、二通りの表記が用いられることになった。

ところで第4次調査では、後に「大溝」と呼称される河川の両側の調査が開始されている。この大規模な遺構の方向が、設定した発掘区に対して約45度斜行することが確認されていたので、発掘区も45度回転して再度設定している。この新発掘区も30m四方で、設定順にイロハで呼称している。従って大溝周辺では、出土位置について二通りの表記の仕方が生じている。本報告書では、発掘当時の記載のとおりに表記することにした。さらに各区は10m四方の小発掘区9区に細分されている（挿図2参照）。すなわち、ABC区では「A15 b区」、イロハ区では「リ4区」のように表示されている。続けて示されているのは出土遺構または層位で、大溝ではローマ数字、その他ではABCを使用して表記されている。層位については、第2節で示す。

第2節 大溝の層序と年代観

大溝および枝溝については、「伊場遺跡遺構編」に詳細が説明されているが、その概略を記しておく。第I層から第Ⅹ層までに区分されていて、全体の組成は泥炭層・粘土層・砂層に分けることが可能である。I層は耕作土で、II層は水田床土、III層が泥炭層、IV・V層が有機質粘土層、VI～Ⅹ層が砂層もしくは砂質粘土層である。IV層とV層との間には泥炭層が挟まれていて、この泥炭層がIV層とV層とを分ける鍵層とされている。またIV層は泥炭質でやや青味がかった粘土層であり、V層はやや粘質に欠け、砂質を帯びる部分が多くみられた。V層は当初V a、V b、V cもしくはV上、V中、V下と細分したが、その後の調査でさらに下までV層が及んでいて、それが從来の細分とは異なる特徴をもっていたため、V 1、V 2、V 3と呼び変えることにした。V層には貝層が多く挟まれていて、その上面や周辺には有機物の堆積が顯著であった。下層にいくにしたがい砂の薄層や細かなブロックを含む層、あるいは植物質を夾雜する層などが交互に現れてくる。八区の西岸ではこうしたⅤ層が顯著であってV 2層とは異なった遺物群を含んでいたため、V 4層として把えた。またホ区東岸からA15区東岸にかけての地域にはV層とVI層とに挟まれて青灰色微砂質粘土層が認められ、天武朝の紀年銘木簡が含まれていた。これもV 4層と把えた。したがってVI層は砂層の無遺物層と規定したが、ホ区ではVI層がやや粘性を帯びていて、遺物を含んでいたものと考えられる。Ⅹ層は粒子の粗い砂層で、部分的に分解していない有機物を含んでいる。Ⅹ層は比較的細かい粒子の砂層もしくは微砂質粘土層である。VII層及びⅨ層には植物遺体や砂ブロックなどが入り混って偽層となる部分が多く、一区画離れる層が連続しないのが一般的であった。したがってVII・Ⅸ層ともabcに3区分したが、同一層と認識した層であっても、隣接する層で組成が異なっている部分が認められた。

以上のⅩ層までの年代観は、III層は基本的に無遺物層であり、年代を示す資料が少ないが、IV層とのかねあいから11～12世紀に比定できるものと考えられる。IV a層およびIV b層は9世紀から10世紀の堆積物で、木簡第77号を出土させた。IV c層は無遺物層である。V 1層はいわゆる奈良朝様式最後の土器群を出土させる地層で、8世紀後半から9世紀初頭頃に比定される。V 2層は天平年間の紀年銘木簡を出土させるので、8世紀中葉から後半に比定される。V 3層は、最古の奈良朝様式の土器群を出土させ、一部天武朝の紀年銘木簡が出土していて、7世紀末年頃より8世紀前半に比定される。V 4層は部分的に認められた層であるが、比較的短期間の単純層と考えられ、7世紀後半に比定できる。VII a層は7世紀中葉に比定されるが、VII b、VII c層には6世紀中葉から7世紀前半代の遺物が混在している。Ⅹ a～Ⅹ c層は5世紀後半頃より6世紀中葉までに堆積したものであるが、各層を細分した

ほどに年代を限定することはできていない。以上が年代観の大綱であるが、IV層の堆積がV層堆積後に大溝を改修してから始まっていると判断された断面図がある（『伊場遺跡遺構編』別冊図版第38図A）。事実V1層には現在10世紀前半とされる土器群が混在している地点が數ヵ所確認されていて、改修を裏付けるものと思われるが、1972年の第11次調査を含めて現段階では改修を積極的に断面図の中に認め得ない。したがってV1層の年代観は、若干の幅を持たせる必要があるものと思われる。

第3次調査地点と層序について

第3次調査では主としてOA地点を発掘し木簡4点をはじめ俎・案・鎌等を検出し、多くの成果を収めることができた。しかし第4次調査によって新たなグリッド名を変更したほか、層序の呼称も変更することになった。そこで第3次調査区の名称を、第4次調査区の名称に呼び換えるのが、完全に整理しきれていないため、旧名称で今回も表示した。主なものを表示換えると木簡はすべてイ5区で、鎌と刀子がイ6区で出土したことになる。B16ba区出土の大足はイ7区大溝縁にあたる。貝塚ではSAはイ5区、SBの主体はイ5区で一部イ6区に及んでいて、SDはイ6区にある。またC16a区出土の俎と案はイ3区にあたる。出土層位については、第3次のIV層は第4次以降のIVa層に、V層はIVcもしくはIVb層に対比される。VI層にはV1層及びV2層が含まれて、VII層がV3層もしくはV4層に対比されるものと思われる。大溝縁辺部では、層が複雑になっていて対比が完全にはなされていない。（浜松市 1978より一部修正）

第3章 弥生時代の木製品

弥生時代後期の木製品は、環濠と A16区杭列（YF1）から出土したものがある。YF1からは、463の有頭棒の1点が出土しただけである。また550の鎌柄？と565の有頭棒が、環濠の東側上層A10f区のD層から出土している。

器種には、木製短甲（以下木甲）と鍬身、鋤身、鎌柄？、杵、有頭棒、山柄棒がある。伊場遺跡から出土した弥生時代の木製品は、以下に示すもので全てである。

木甲 - 1・2

鍬身 - 9・332

鋤身 - 10

鎌柄？ - 550

杵 - 127

有頭棒 - 461・463・466～468・565

山柄棒 - 420

①木甲

1が胸当て、2が背当てであり、元東京国立科学博物館の山内文氏同定によると、材質はいずれもヤナギである。

胸当ては右前胴で、細かに割れて出土したが、上端部が腐蝕のため欠損していること、左端が埋没時点ですでに折れていたことが判った。上端部は薄くなってしまっており、同心円文の上端で8mmであるが、他の部分ではほぼ同じ厚さで、18mm前後を計る。ただし右端は、片刃状にそぎ落とし、下端部は段をつけている。縦位の断面は、中央やや下部寄りを頂点としてゆるやかな甲高とし、横位の断面は、左側に向かうほど曲率を大きくしている。

表面には、彫刻文が刻まれている。上端近くに5重の同心円文、その下に4条の第1平行文帯、その下に三角形を4つ合わせた単位文を横に連ねた三角繋文帯、そして第2平行文帯、第3三角繋文帯、第3平行文帯と続き、無文帯を置いてさらに第4平行文帯、第5三角繋文帯、2条の第5平行文帯、第4三角繋文帯を経て、1条の横線で終わる。

また各所に大小の円孔があり、その大半は虫喰孔と推定されるが、その内第1三角繋文帯の右側と、第5平行文帯の右側の2孔は、人工の貫通孔であり、孔の周辺に摩耗痕がみられる。この2孔は、右前胴と連結するための引き合わせ孔と考えられ、位置関係からさらに上の襟下あたりにもう1孔あり、計3孔が存在した可能性が高い。また、第3・第4平行文帯の間の無文帯上部にある2孔も、人工の貫通孔である可能性が高い。表面全面にわたり赤色顔料を塗布してあるが、これは東京国立文化財研究所の江本義理氏の分析によって、酸化鉄を主成分とするいわゆる丹であることが判明している（第3図では、赤漆と表記）。さらに同心円文、第2平行文帯、無文帯、左上脇部の縁には黒漆がかけられており、右端にもそれらしい痕跡がある。

本例は、脇部にあたる左上の削り込みの形と横断面の曲率の具合、さらに縦断面にみる甲高の状態や上下2つの縦じ紐孔の存在から、前綴じの短甲胸当てである。短甲全体は、胸当てが2枚、背当て

が1枚の3枚構成となる。胸当では現状での大きさが、天地34cm、最大現存幅21cmである。

背当ては、向かって右側が欠損しているが、他はほとんど無疵である。胸当と同様、各所に円孔がみられるが、それらはほとんど虫喰もしくは葦の根のいたずらである。しかし、左側縁辺部の縦位の孔列や、羽根状板背面のやや大きい円孔は、人工のように見える。縦位の孔列は、胸当を縫じ合わせるための孔に当たる。羽根状部背面にある孔は、懸緒を通した孔（ワタガミ緒孔）である。

まず全体の形は、横断面に曲率をもつ天地39cm、幅15.5cmの蒲鉾形をした板に、その上端より上へ突き出し、さらに下方へ続く反り返った羽根状の板を取り付けたような外見を呈しているが、すべて一本から彫り出したものである。脇部に相当するところは、削りが入れられている。

文様は、本体の表面全体から羽根状部分の上端突出部の裏面に及び、彫刻文は胸当と比べて複雑である。突出部には縦位に2条の隆帯が垂下し、その左右に羽状文が施されている。下の羽根状部分には上下に連続する渦巻文（あるいは巻手文）を配し、これを重四角文帶でL字形に囲んでいる。下の渦巻文の周辺は、無文帯となっている。本体部分には、3条の平行文帶、同心円文、3条の平行文帶、羽状文、平行文帶を経て、三角文を上下に連ねた鋸齒状文帶と三角繋文帯を2帯配して終わる。なお、下端は胸当と同様に段をなしている。突出部の裏面には、表から続く縦位の隆帯とこれに沿わせて4～5条の弧線文を配し、3条の横位平行文帶で終わる。

丹は表のはば全面と、裏面の平行文帶以上の突出部だけに塗布されている。また羽根状部分の縁と下辺、上位の渦巻部、それに本体部分上位の同心円文には黒漆がかけられている。本体裏面以外のところでは、褐色の樹脂光沢が認められることから、下地に生漆が塗布されていた可能性が高い。（浜松市1978より一部修正）

②鎌鋤・鎌柄・杵

332は、下半部を欠損するが、平鎌の身と推定される。断面形は蒲鉾形で、先端に行くほど薄くなっている。軸部上端には、柄を装着するための紐かけ用の溝が彫られている。肩部は撫肩となっている。

9はかなり欠損しているが、四本歯をもつ又鋤である。肩部は撫肩で、柄穴が無いことから、332のような装着軸をもつ形態であった想像される。

10は平鎌で、刃部先端が鋭角に削り込まれているが、平面形は丸味をもつ。身の断面形は菱形で、柄は欠損しているが、一本造りと考えられる。肩部は怒り肩で、身の上半部側面には、両側から三角形の抉りが入れられている。

550は鎌柄のようであるが、二次的に火を受けて炭化が著しく、はっきりしたものではない。下半部と柄頭部の突起は欠損している。127は、把部中央に算盤玉状の突起が作り出された豎杵である。片端を欠損するが、復元長は80cmを超えると推定される。端部は、使用による磨滅で丸くなっている。

③有頭棒・出柄材

有頭棒は461・463・466～468・565である。全て、遺物編1でも紹介されている。461・467・468・565が芯持ちの丸木材を用いた有頭棒で、463が割材、466が板材を用いたものである。466はT字形の頭をもつもので、鎌把手など何らかの製品の一部であった可能性が高い。

420は一端に突起をもつものであるが、もう一方は欠損している。現状では、乾燥により弓状に変形し、断面形も菱形を呈しているが、本来は真っ直ぐなものであった。遺物編1では、用途不明の木柄とされている。

第4章 律令時代の木製品

第1節 分類

伊場遺跡の大溝から出土した木製品は、古墳時代中期後葉から中世に及ぶが、出土量としては、7～9世紀のものが圧倒的に多い。

出土した木製品は、遺物編1に従い、生産（労働）用具、生活用具、建築部材、武器武具・馬具、祭祀用具など主に機能別に大別し、その中で各器種ごとに説明していく。

生産（労働）用具には、農具・漁具・運搬具・編具・機織具・工具がある。生活用具には、厨房具・容器類の他、横櫛や下駄などの日常的な道具・用具が含まれる。その他上記の分類に含めることができないものは、有頭棒や有孔板、抉板など形態で分類し、その他の木製品として説明する。なお部位の名称は、「木器集成図録近畿原始篇」（奈文研 1993）に極力合わせた。

第2節 生産（労働）用具

A. 農具

農具には、鋤・鋤・代搔・柄振・馬鋤・田下駄・鎌・豎杵・横槌がある。

①鋤

鋤は、遺物編1でナスピ形鋤とされたものを含む。近年の研究では、ナスピ形は装着方法から鋤として使用された可能性が高いとされる。鋤には、ナスピ形平鋤と又鋤がある。ナスピ形平鋤は3～6、ナスピ形ではあるが平鋤か又鋤か判らないものに7・287・584がある。3は、鉄製の刃先が装着されたまま出土した。鋤身下半は、鉄製刃先を受ける構造となっているが、4～6については不明である。柄とは、軸部の上端と笠部下の括れ部の2ヶ所で結束されるが、上端は紐が脱落しないように、4・6・7のような突起（軸頭）が作り出されている。7・287・584は鋤身上半部（軸部）の破片で、又鋤になる可能性もあるので、単に鋤身としておいた。287の笠部下には、紐の結束痕が認められた。585は平鋤身の破片でしたが、上下が欠損しているため、確証はない。

586は鉄刃装着用の構造をもつもので、上半部を欠損するが、他の出土例から考えて、ナスピ形の可能性が高い。

又鋤には二又と多歯があるが、二又の例は伊場遺跡からは出土していない。多歯の又鋤には8と620がある。ともに3本以上の歯をもっていたと考えられる。620は、軸頭に突起をもつ。8は肩部が撫で肩であることから鋤先としたが、333のような鋤となる可能性もある。

又鋤の刃部の可能性があるものとして、575・577・796がある。また鋤の肩部の可能性があるものとして、244がある。材は、いずれもカシ類である。

鋤柄もしくはその可能性があるものとして、372・445・474がある。372は装着部を欠損するが、下端にはかかりが作り出されている。474は、上半が断面四角形に、下半が丸く加工されたものである。445は乾燥し変形しているが、反柄の装着部破片の可能性が高い。以上3点とも、材はカシ類である。

3・6・287・474・577・584～586は7世紀代、4・5・445は8世紀前半、他はほとんどが8世紀代である。なお6は、層位的に6世紀代まで遡る可能性がある。

②鋤

鋤には、一本造りのものと組合式のものがあるが、伊場遺跡出土例では確実なものは一本造りだけである。身の形態では、平鋤と又（多歯）鋤がある。

333は、ほぼ全形が残存していた例である。4本歯で、現代のスコップと同じ逆三角形の把手がついている。鋤の把手は他に377～379があるが、いずれも逆三角形のものである。なお木柄の把手には、T字形のものがあり、一部は鋤の把手であった可能性がある。

286は、平鋤の可能性が高いものである。柄と刃先部を欠損している。

333は8世紀、286・379は7世紀、377・378は6世紀中～7世紀前半頃のものである。

③代搔

馬鋤と同じ形態であるが、小型のものを代搔とした。民俗例では、「手馬鋤」とも呼ばれるものである。台木としては、27と302の2例があり、ともに角材が用いられている。別に795の歯がある。

白木はともに5本歯で、中央には歯と直交するように長方形の柄穴があけられている。長さは27が約39cm、302が約35cmである。27は5本歯の内、4本が残存している。歯は楔で固定されているが、腐蝕によりだいぶ痩せている。795の歯は、基部が断面方形で、刃部が紡錘形を呈している。

27は8世紀中葉～後業、302は8世紀前半、795は9世紀代の製品である。

④柄振

鋤歯状の刃部をもつものと、平らな刃部をもつ横鋤を柄振とした。前者は11、後者は209と437である。11は、横位に木目をもつカシ材で、6本の歯が作り出されている。内側の4本の歯の先端は、U形の抉りが入れられ、二又になっている。柄穴は、方形で2個あり、二又になった枝材を柄にしていった可能性が高い。これは出土層位から考えて、7世紀代の製品である。209は、横位に木目が通る針葉樹材で、方形の柄穴が1つあけられている。厚さは刃部に向かって厚くなり、その縁辺は摩耗している。437も木目を横位にもつ針葉樹材で作られたもので、中央に隆起と方形の柄穴をもつ。本例は、幅約17cmの小型品である。209と437は、ともに7世紀代の製品である。

⑤馬鋤

長さが1mを越える角材の台木に、方形の穴を一直線上にあけ、そこに剣状の歯をうえた耕起具で、馬鋤と呼ばれている。牛馬などに引かせた農具である。

21は、台木の一端が欠損し、歯をうえる方形の穴が現状では9個あるが、本来は10個あったはずである。実際出土した歯は、10本である。穴と穴との間隔は、約6.5cmで、全長は推定で約122cmである。引き棒もしくは引き綱を入れる穴は、両端に2つずつあったようである。引き棒であれば、枝材が用いられた可能性が高い。柄を挿入する穴は、歯をうえる穴とは直交する方向に、端から3番目と4番目の間、7番目と8番目の間にあけられている長方形の穴である。歯は21-2-11の10本で、いずれも剣形を呈する。基部は断面方形で、刃部は菱形となっている。歯の基部が台木に挿入され、その上下を木製の楔で固定されて出土した。うえられた状態での歯の長さは、出土状況から29cmほどであった（遺物編1写真図版10B参照）。

22の台木は折れているが、ほぼ完存し、長さは124cm弱で、本来9本の歯がうえられていたと考えられる。歯は剣形の22-2と22-3の2個が残存し、また歯をうえるための方形の穴の2つには、歯

の基部が残存している。その歯の基部にも穴があけられていた痕跡があり、木釘を打つことで脱落を防止していたと考えられる。歯とは直交する方向に穴が、4つ存在する。外側の2穴は円形であるのに対し、内側の2穴は方形に近い。外側は引き棒、内側が柄を挿入した穴である。歯は22-2と22-3であるが、基部は断面方形、刃部は滴形を呈している。

23は、10本の歯がうえられていたと考えられる長さ140cmを越える台木である。引き棒用の方形の穴は、1・2番目の歯と9・10番目の歯の間にあったと考えられる。柄を固定する穴も、円形に近いもので、中央の2つの歯（5・6番目の歯）の外側にあり、その間隔は26cmほどと、多例と比べ短い。歯の基部は23-2であるが、端部近くに小さい方形の穴があけられている。22と同じように、木釘を打つて台木から離脱しないようにしていったと考えられる。なお23-3・4は、歯や柄を固定するために用いられた楔である。

その他馬鍔の台木には、247と443がある。また歯には21～23の他に、24～26・446・621がある。いずれも基部は断面方形、刃部は菱形もしくは滴形であり、446の基部には方形の穴があけられている。

台木の22が7世紀中葉、他は8世紀代の製品である。歯は25・26・446が7世紀代、他は8世紀代である。

⑥田下駄（大足）

田下駄には、下駄形のもの、枠型の大足、輪かんじき型がある。下駄形は、遺物編1写真図版6B5で紹介されている1例だけである。大足と輪かんじき型の足板は、識別ができないこと、また確認される枠は大足ばかりであることから、本書では全て大足の足板とした。よって、今回報告する田下駄は全て大足と言うことになる。

大足は、遺物編1の写真図版6A1に縦板と桟木が組み合わされた状態で出土した例を紹介している。今回報告するものは300・301・625・706・786・806・807が縦枠、12・622・705が足板、581・623・624が横枠である。300は、写真図版6A1と同様に、70cmを越える大型品である。手綱を縛っていたためにできた紐擦痕が、端部近くで認められた。301には、桟木が脱落しないように木釘が打たれている。625・706・806・807は縦枠材の破片と考えられるものである。786は桟木を受ける枘穴が円孔であり、他例とは異なる。片面は、二次的な火を受けて焦げている。蒸籠のような箱物の枠であった可能性もある。

12・622・705は大足の足板としたが、前述のように輪かんじき型田下駄の足板の可能性もある。12・705は平面形が筋鉢形をしたもので、705には頭が作り出されている。12は前蓋の位置が片方に寄っているが、705はほぼ中央にある。622は曲物を転用して作られたもので、刃物による切傷が多く認められる。これは乾燥し、かなり変形している。

581・623・624は横枠で、平面形は横長の正等辺三角形で、中央に長方形の穴が穿たれている。この穴に足板の端部が挿入され、固定される。581は他例と比べ肉厚であることから、別製品の可能性もある。706が7世紀代、他のほとんどは8世紀代のものである。

⑦鎌柄

鎌柄は、鉄刃を装着するための細長い穴をもち、その穴の上には鋒側に張り出す突起をもつ。また柄は断面が丸く、下端にはかかりが作り出されている。

鎌柄としてほぼ間違いないものに、13～15・17・303～305がある。ほぼ完存する14・15・303から、長さは30～35cmが一般的なサイズであったと考えられる。また、未製品と思われるものに、16・18・

282がある。

その他19は、50cmを越える大型品で、鉈鎌などの大型鎌の柄と考えられる。582は粗雑な作りで、頭には鉄刃を装着するための「ワリ」が入れられているだけである。かかりは作られているが、丁寧ではない。

16は9世紀代、他の一般的なサイズのものは7～8世紀代である。大型の19は8世紀前半、粗雑な作りの582は7世紀末葉である。

⑥堅杵

堅杵は、710の1例が出土している。自然乾燥し、断面形は梢円形となっている。把手部分は欠損しているが、長さは40cmほどの小型の堅杵である。材はカシ材で、年代は8世紀代である。

⑨木柄類

丸木材を用いた把手は、柄と柄結合するために方形の穴を穿ったものである。長さは10～33cmとかなり幅があり、農具に限らず様々な柄に伴っていたと想像される。類例には、198～200・340・352・414～419・473・551・626～629・714～719がある。

中央の穴に対し、直交する小さい方形の穴や円孔が穿たれた例がある。方形の穴をあけた例には200・416・417・419・627・716・717が、円孔の例には418・719がある。この穴（孔）は、把手が木柄から脱落しないようにするための、目釘穴（孔）と考えられる。198と199の柄穴の片面には、直交する方向に溝が彫られている。上からみると、柄穴と溝は十文字形に交わっている。この溝に沿って、目釘が木柄の基部にあけられた穴に差し込まれたのだろう。

414の把手は201に伴っていたもの（遺物編1写真図版90B12）で、201の出柄部には小さい方形穴が穿たれている。414にも本来方形の穴が穿たれ、両者は目釘で固定されていたはずである。201の片面には十字形と方形の切り込みがあり、もう一面には刃物による切傷がついている。

その他、木柄の可能性があるものとしては、283・371・374・375がある。371は、かかりが作り出されたものであり、これで完形品である。375は本来80cmを越える長さを有していたが、大半を保管中に紛失し、現在残っているのは頭部だけである。頭部は両面が削られ、細くなっている。また小口には径0.9cm、深さ4.9cmの円孔が穿たれている。374も本来は80cmを越えるものであったが、現存するのはほぼ半分であり、小口近くに1.05×2.9cmの長方形の穴があけられている。

いずれも、7～8世紀代のものである。

⑩横槌

横槌は、円筒形の身と、細く削り込まれた把手からなる。薬打ちや脱穀の道具、繊維を打つ道具、掛け矢や木槌としての工具、さらに洗濯など幅広い用途が考えられるが、本書では農具に含めた。

72は短く太い身で、把手の端部には頭（かかり）が作り出されている。身には、刃物による切傷が認められる。また表面には調整痕が残るなど、使い込まれたものではない。

70・71・73・279・306・708・709は、細い身をもつもので、70・71にはかかりが作り出されている。279と306の身の中央部は、使用に伴う潰れが認められる。この潰れから、掛け矢や木槌のように用いられたと考えられる。73は、粗い作りである。

72は6世紀代で、他はほとんどが8～9世紀代の製品である。

B. 漁具

漁具には、筌・魖・撫網・四ツ手網・アカカキ・櫂・浮子がある。魖と浮子は、遺物編1で紹介されており、第8次調査以降では出土していないことから、これを除くものについてここでは説明する。

①筌

筌は、第1号・2号と名付けた2点が出土している。遺物編1の写真図版12A・Bにそれぞれ掲載されているが、実測図はない。第1号の部品は、写真図版11B3に示されており、今回それを実測し、第8回28に示した。なお2号については、保管中に崩壊してしまった。

1号の部品はいずれも口縁部の破片である。口縁部は枝材を丸く曲げたもので、28-1はその合わせ目にあたる。本体は、篠竹を主体に用い、蔓状の植物で結束して作られている。口縁部での固定法は、複雑かつ巧妙である。出土状況から、本末の大きさは、口縁部の直径が推定55cm、全長が1mで、円錐形を呈していたと考えられる。年代は、1・2号とともに7世紀末葉である。

②撫網

撫網は、4点が出土している。遺物編1の写真図版14A2は、保管中に紛失した。29は、写真図版14A1に示されたものである。材としては、二又に分かれた枝の部分が用いられ、上半の幹を切断し、下半の幹を把手にしたものである。枝の部分は、丸く曲げて網枠としている。枠には網が固定されるが、網自体が残存するものはなかった。29と30の把手はほぼ残存しており、前者が約133cm、後者が75cmの長さである。630は把手の下半を欠損している。29と30は丁寧な作りであるが、630は余分な枝の付け根を残すなど、やや雑な作りである。いずれも8世紀代である。

③四ツ手網

遺物編1では、有櫂十字形木製品（遺物編1写真図版91・92A）とされたもので、写真図版91は十字形に組み合はされたまま出土した。他に写真図版92A1・92A2・202（=92A3）・203（=92A4）・341・471・472の7点がある。

遺物編1写真図版91は、丸木材を縦に半割した後、平らな面には中央部を残して長軸方向に櫂を通して、反対の甲丸の面には両端に溝を切っている。同じように加工された2本は十字形に組み合はされ、中央に穿たれた方形の穴には、木製の目釘が打たれ、固定されている。長軸方向の櫂には、四ツ手網の網枠がはめられ、紐で固定される。その紐が脱落しないために、両端には溝が切られていると考えられる。

202・203は、未製品の可能性が高い。341は目釘孔がないが、甲丸の面の中央が抉られており、そこにもう1本が組み合はされ、紐で結束されていた可能性がある。端部には、溝ではなく、隆帯が作り出されている。471と472は破損がひどいが、端部には341と同じように隆帯が存在する。

いずれも、8世紀代のものである。

④アカカキ

舟に入った水を掻き出す道具に、民具で言うアカカキがある。把手の付いた刳物で、現代の塵取りの形をしたものである。既報告を含め、全部で6例が出土している。

図示したのは122・123・307・639の4点で、122と123は遺物編1に写真が掲載されている（写真図版41B5・7）。122と307には把手が残存しており、全長は38cm弱と36cmである。307の身の幅は、18cm弱である。307は二次的に火を受け、各所で焦げている。123と639は、身の半分が残存するだけである。以上4点のうち、123が7世紀代、他は8世紀代である。なお既報告の1点は、6世紀後半に

廻るものである。

⑤櫂

櫂は、水搔き部と柄の部分に分けられるが、その接続部が有肩となるものと、スムーズに続きその境界がはっきりしないものの2者がある。前者の例が142、後者が408であり、後者の例が一般的である。いずれもカシ材が用いられている。142は現存長113cm、水搔き部の長さは53cm、幅は8cmである。把手は断面楕円形、水搔き部は紡錘形で先へ行くほど薄く作られている。408は長さ80cm以上で、柄の上端部を欠く。把手の断面形は丸く、水搔き部にいくに従い徐々に扁平となる。

水搔き部の破片には、409・413・552・595・631・712の他、紛失した1点（遺物編1写真図版88A4）があることから、櫂は計12点が出土したことになる。水搔き部の破片は、いずれも片面に鏽をもち、材はカシ材である。なお遺物編1写真図版88A9で櫂状木製品とされているものは、狹鉗の可能性が高い。身と装着部は、片面が平らに作られ、装着部の上端部には紐の脱落を防止するための頭部を作り出されている。櫂の水搔き部の破片としたものの中には、同様に狹鉗が含まれている可能性が高い。

年代は6世紀～9世紀代と幅があるが、8世紀代のものが多い。なお142は8世紀代、408は9世紀代、遺物編1写真図版88A9は8世紀代の製品である。

C. 運搬具

伊場跡遺跡で出土した運搬具は、背負子と天秤棒だけである。

①背負子

Y字形をした木製品で、枝と幹の部分からなる。残りが良いのは、33・34・37・38・41・349・722などである。幹部の長さは32～46cm（平均39cm）で、40cm強のものが多い（21例中12例）。枝部の長さは20～35cmで、30cm前後のものが多い。紐ずれや他の部材が接することで擦れた痕跡は、34のように鋭角になった枝の付け根部分と、枝の反対側の部分で著しい。一部のものには、36・351のように枝の付け根から垂下するように擦痕を留めるものがある。また枝部に切り込みや抉りを入れるものに、33・351・724・725などがある。既報告の中には、枝部に蔓状の紐を巻き付けたものが2例ある。幹部の下端は、斜位もしくは平坦に削られている。下端部近くには、切り込みが2段に施されるものが多い。41・290・291のように、段を作っているものも少数ある。裏面は、面取りして平らにされたものが多い。一部加工されていないもの、浅い段が形成されているものがある。下半部の切り込みもしくは段を、枝を右にして入れるものと、逆に左にして入れるものとがある。それぞれ14点と13点で、ほぼ半数を占めることから、2個1組であった可能性が高い。

材は、特定なものが用いられているわけではない。どのように組合わざって背負子となるのか、現状ではまだ復元できていない。なおこの木製品については、機織具の一部材、舟の櫂受け、舟の帆立柱に伴うものなどの説もある。なお478は、幹部の下半がV字形に加工されたものである。擦痕は不明であるが、背負子が再加工されたものと考えられる。

7・8世紀のものがほとんどであるが、248・479・725は9世紀まで降るものである。

②天秤棒

天秤棒の可能性があるものとしては、334の1点が出土している。ヒノキと思われる針葉樹の芯持材である。長さは126cm、直径は3.3cmで、両端に抉りが入れられただけの簡単なものである。一方の端部は、断面四角形に再加工され、火鑄臼として利用されている。7世紀代の製品である。

D. 編具

編具には、編台と編錘がある。編台は、蘿や俵を編むために用いられた台で、脚と目盛板でできている。脚の出土例はないが、目盛板が出土している。編錘は、編台に伴って用いられた木製の錘である。

①編台（目盛板）

目盛板は、細長い板材の側面に切り込みを入れたものであり、第7次までに13点、第11次で1点、合計14点が出土している。42～44は、遺物編1で写真図版が掲載されているものである（写真図版18B8・9・13）。

721は第11次調査で出土したものである。42と43は片側だけに、44と721は両側に切り込みが入れられている。切り込みの間隔は不揃いであり、これは1つの編台で、対象となる編物により切り込みの位置を変えて用いられたためと考えられる。44には小方孔が1～2個あけられており、1つの孔は木釘で塞がれている。何らかの転用材であろう。721は再加工を受けたためか、半分以上、切り込みが抉り取られ、細くなっている。

②編錘

編台に伴うもので、絹糸の両端につける木製の錘である。材は一定しない。形態は大きく2つに分類される。

A類—亜鉛形を呈するもの。輪切りにした芯持材を用い、中央を細くしたもの。中央が細長い筒状になったもの（45・46）と、谷状になったもの（51～55）がある。ただし、その中間形態のものも存在する。類例は45～56・469・590である。長さは約13～17cm、直径は4～6cmのものが多い。

B類—有孔蒲鉾形のもの。輪切りにした芯持材を半截し、両面から穿孔したもの。類例には57～67・245・246・293・294・588・589がある。大きさは、長さが12～14cm、幅が5～7cmのものが多い。例外として、68は板材が用いられたもの、69は輪切りにした芯持材を縦位に面取りしてから穿孔されたもの、711も芯持材で、断面形を滴形に加工してから穿孔されたものである。

その他373のように、小槌形の編錘も1例認められた。

A類の出土層位はⅧ層がほとんどで、少数Ⅸ層の下層から出土した。主に7世紀代の編錘と見て良い。B類はⅨ層からも出土しているが、大半はⅧ層であることから、8世紀代に盛行した編錘と認められる。なお小槌形の373は、Ⅸ層出土であり、8世紀代の製品と考えられる。

E. 機織具

糸を作るための紡績具と、糸を整えるための用具もここに含める。これらの用具には、タタリ・紡錘・棒・かせかけ・糸棒が知られている。紡錘は、木製品としては伊場遺跡では確認されていない。

布を実際に織るための道具が機織具である。機織には原始機・地機・高機があるが、後二者は機台を伴う。しかし、機台そのものの確実な例は知られていない。

無機台の原始機では、経巻具・中筒・綜続棒・刀杼・布巻具・腰当具・貫といった道具が用いられる。機台が出現すると、管大杼や籠・梭が加わる。まずは紡績具から説明を始める。

①タタリ

糸を作るために纖維をかけておく台が、タタリである。タタリと思われるものに、376の1例がある。欠損部分は多いが、頭部中央の突起は二又に分かれて上に延び、その両側は翼状に開いている。柱

部には、耳らしい張り出しをもつ。遺物編1の写真図版9A3に、木柄把部として示されている。作りは精巧である。表面は黒色を呈していることから、漆が塗られていた可能性が高い。現時点では、大半が腐蝕し、欠損してしまっている。彩色されていることから、実用品ではなく、祭祀遺物として用いられたものかもしれない。

②棒（かせ）

捲った糸を巻き取る道具として、棒がある。工字形をした棒は、弥生時代より存在する。伊場遺跡には、2点の支え木と考えられるものが存在する。

713は一般的な形態で、端部を幅広くし、そこに枘を作り出している。枘結合部を幅広くするのは、腕木との接地面を多くすることで、ぐらつきを防ぐためである。また目釘で留めることで、より強固にしている。79は断面円形の長い棒で、端部では断面四角形となり、枘を作り出されている。枘部には、腕木を固定するために、木製の釘が3つも打たれている。やや枘が短く、構造上問題はあるが、棒としておく。

713は7世紀代、79は8世紀代の製品である。ともにヒノキ材のようである。

③かせかけ

糸を巻き取る道具の一つに、“かせかけ”もしくは“まいのは”と呼ばれるものがある。細長い板材を相欠きして十文字に組合せた支え木と、糸をかける細い棒の腕木、そして回転軸を備えた台部からなる。伊場遺跡では、支え木が多く出土している。類例には、219・221～228・230・231・342・470・591・632がある。

支え木の中央は、幅が広くなるものと、そうでないものとがある。しかしどちらも相欠きされ、軸受けのやや大きい円孔をもつ。支え木の両側には、腕木を立てるための小さい円孔が、斜位に数個ずつあけられている。219や222のように、腕木が円孔の内に残存している例がある。223・225・230は、腕木用の円孔が支え木に対し垂直に入れられている。219は軸受けの所で折れているが、ほぼ半分が残存する。元々の長さは、80cmを越えると推定される。

かせかけは、いずれも、ヒノキなどの針葉樹材を用いて作られている。224・632は6世紀代、他は7～8世紀代のものである。

④糸棒

糸棒には、組合式のものと一本造りの2者があるが、形態はほとんど同じである。前者が一般的で、後者は珍しい。一本造りのものは遺物編1（写真図版23A5）で紹介されている。

組合式のものは、309のような相欠きした紡錘形の支え木を十字形に組合せ、これを2つ用い、81のような棒木を外側から4個はめ込んで作られたものである。81はヒノキ、309は木目がやや粗いことから、スギ材と思われる。写真図版23A5の一本造りのものも含め、いずれも8世紀代の製品である。

⑤管大杼・刀杼

縫打具としての刀杼には、中央に管室をもつ管大杼がある。

74は平面形が紡錘形、断面形が滴形に成形されている。また両側に向かって、薄くかつ細く作られている。長辺のはば中央片面には、縫糸を巻いた管を納める断面袋状の割り穴（空と呼ぶ）が作られている。空からは、縫糸を出す小孔が元々は存在したはずであるが、その部分は欠損している。全長80.4cm、幅6.2cmの大きさで、カシ類で作られている。出土層位から、7世紀中～後半頃と考えられる。

784は、カシ類で作られた刀杼形をしたものである。長さは約35cm、幅は4.5cmであり、やや乾燥

し変形している。断面形は二等辺三角形を呈し、中央背に方形の穴をもつ。側面から方形の穴に対し、小さい円孔が穿たれている。方形の穴は管室、円孔は縫糸を出す孔かもしれない。糸擦れ痕は、認められなかった。管大杼としては小型であり、また管室が袋状になっていないことなどから、杼とする確証があるわけではない。8世紀代の製品である。

管大杼は縫越具と縫打具を兼ね備えたものであるが、その他縫越具として、貫がある。310は貫となりうるもので、中央が少し括れ、両小口近くに円孔があけられている。長さは7.7cm程で、年代は8世紀代である。

⑥ 筋（おさ）

筋は、糸の間隔を一定にし、布幅を揃えるためのものであるが、後に縫打具の機能も備わる。伊場遺跡では、筋そのものは出土していないが、筋枠となる筋框が出土している。

75～78は、筋框と考えられる部品である。77と78は、断面長方形の長い棒の両端に、枘結合された小板がはめられていることから、全体形は細長い長方形の枠であったと思われる。長辺の内側には、筋を落とし入れる溝が切られていないことから、串状に束ねられた筋框本体は、側面に当てて固定されたものと考えられる。内側面には糸擦れ痕があり、77では1cm当たり10～16本、78では6～13本の糸目が認められた（遺物編1写真図版22A4・5、23A2・3）。大きさは、途中に欠損部分があるため、不明である。年代は7世紀後半で、材はヒノキらしい。

75は、77と同じ形をしているが、枠の内側にあたる所には溝が彫られ、両端には枘穴と目釘孔があけられている。枘穴には、枘材の一部と木釘が残存していた。1cmにつき平均24本の糸目が認められる事から、筋框を見て良い。糸目の痕跡は、77・78と比べ、非常に繊細で密である（遺物編1写真図版22A2・23A1）。また側面には2.4cm前後の間隔で、目盛りが26個ふられている。糸擦れの範囲と目盛りがふられている範囲は一致しており、その長さは64cmである。ほほこれが織られた布幅にあたると推定される。全長は75cm、最大幅3cm、材はヒノキである。年代は、8世紀末～9世紀前葉である。

76はやや小振りで、溝も彫られていないが、形態的に75や77と近いものであり、筋框と考えることも可能である。断面形は丸く、作りはやや粗雑である。両端には、枘穴と目釘孔がある。孔の片方は、木釘が残存している。全長は約68cm、材はヒノキである。詳細な年代は、不明である。

⑦ 経巻具・布巻具・中筒・綜続棒・腰当具

これらには画一的な形態のものもなく、候補として挙げられる木製品が存在するに過ぎない。遺物編1の写真図版22A6は布巻具としたもので、両端に頭部が作り出され、その内側には抉りが入れられている。中央部での断面は、梢円形である。同じ形の2つの棒で布端を挟み、布を巻き取ることが可能である。出枘状の突起をもつ棒や有頭棒の中にも、経巻具・布巻具・綜続棒に使えるものが存在する。例えば80の他、有頭棒の370・465、出枘棒とした206～208・343などは、その候補となる。中筒は開口具であり、両端に抉りを入れた幅広い板材をあてる場合が多い。このような板材は、伊場遺跡では認められなかった。

腰当具の可能性があるものに、有頭棒とした811があるが、作りは粗雑である。少し弓状に湾曲した長さ約45cmの棒である。

⑧ 機台

使用される角材の大きさから、機台の可能性があるものに、444がある。9.5×7.0cmの角材には、枘穴があいており、そこに4.6×2.5cmの角材がはまっている。丁寧に加工された角材が用いられ、枘組

部分を木製の目釘で固定するなど、強固な作りであったと想像される。材はヒノキで、年代は8世紀代である。

447は、回転軸と納穴を有するもので、回転軸は使い込まれたため、かなり擦れて断面楕円形となっている。納穴に継続棒を弔るために棒が入れられていたとすれば、これは機台のまねきの一部となる。納穴に挿入された別材が脱落しないために、さらに木釘で留められていたようで、木釘の一部が残存する。材はヒノキで、年代は8世紀代である。

F. 工具

工具には、斧柄・刀子柄・塗鍔がある。

①斧柄

斧柄は、形態的に手斧の柄と考えられる3点が確認されている。幹から枝分かれした部分が用いられ、幹が斧台部に、枝が柄に加工されたものである。鉄斧が装着されたまま出土したものに、308がある。鉄斧を下にすると、台部と柄は鈍角となる。しかし柄は円状に湾曲していることから、実際に握る位置では直角もしくは鋭角になっていた可能性が高い。

20は鉄斧がはめられていた痕跡や、はめるための加工が認められないことから、木製品の可能性もある。587も手斧柄であるが、腐蝕が著しい。20と587は7世紀、308は8世紀に降る可能性がある。いずれも、カシ類が使用されている。

②刀子柄

刀子の柄は、断面形が倒卵形もしくは楕円形に加工されたもので、長さは13～22cm程である。288と354の小口部（関部）には、鉄製の鍔が柄本体にはめ込まれている。344は鉄刃が装着されたまま残存した例であり、鍔もはまつた状態である。鉄刃は使い込まれており、内反りしている。この他、小刀の鞘と考えられるものに83がある。83は7世紀代、刀子柄のほとんどは8世紀代のものである。

③塗鍔

壁塗りや苗代などの表面を均す道具であり、本書では工具に含めた。磨り板下面は曲面をもち、上面には把手がつく。

196と197の2点が出土している。196が25cm、197が26cmで、大きさ・形態ともによく似ている。断面形はおおよそ扇形を呈し、把手は上の2面から削り込むことによって作られている。196の把手は貫通していないが、手擦れの痕跡が認められる。ともに磨り板下面の使い擦れは著しい。材はヒノキで、年代は8世紀代である。

第3節 生活用具

生活用具は、厨房具・容器類・その他の生活用具の3つに分けて説明していく。

A. 厨房具

小白・俎・火鎧白・箸・杓文字がある。平安時代の調理具である小白と案については、遺物編Ⅰで既に紹介されているので、ここでは省略する。

①俎

俎は、2点の完形品が検出されている。1点は遺物編1の写真図版45で、長さが48cm、幅が26～28cm、厚さ6cmの天板に、枘組みされた4つの脚部をもつ。脚部を入れた高さは19cmで、天板上面には刃物による切傷が多く付いている。9世紀代の製品である。

もう1点は遺物編1の写真図版49・50に示したもので、本書の128である。天板は、長さ43cm、幅11.4cm、厚さ4cmの上面を甲高にした厚板で、枘組みされた2脚をもつ。脚部を入れた高さは15cmであり、天板上面には刃物切傷が少し付いている。針葉樹材が用いられたもので、8世紀前半の製品である。

なお、700は指物の案もしくは俎などの脚部である可能性が高い。これは8世紀代の製品である。

②火鑽臼・火鑽杵

発火具としては、火鑽臼とそれに伴う火鑽杵がある。伊場遺跡では、火鑽杵は確認されていない。火鑽臼は既報告のものを含め、8点存在する。3点は遺物編1に、写真・実測図とともに掲載されている。125と126の2点は、写真が遺物編1に、実測図が本書に掲載されている。第8次調査以降に出土し、今回初めて報告するのが、311・353・334（天秤棒を転用）の3点である。

126と311と334の3点は、転用材が用いられたものである。353は、20.9×3.9cmの長方形の板材で、火鑽穴は長辺の縁辺に並んでいる。側面には、火鑽穴の下に断面V字形の溝が存在する。火鑽穴は、いずれの例も木材の縁に存在する。材はヒノキなどの針葉樹で、年代は7～8世紀代のものである。なお既報告の中には、9世紀代のものもある。

③箸

箸と思われる細い棒は、118・683・778・779・809の5点がある。いずれもヒノキと思われる材を縱割りにして、多少の調整加工を施したものである。118が8世紀、683が8～9世紀である。既報告のものには、9世紀以降のものが多い。

④杓文字

杓文字と考えられるものは、既報告のものを含め3点が出土している。遺物編1写真図版38A8（＝119）、同38A9、698の3点である。

119は長さ21.3cm、幅4.8cmの板材で作られたもので、半分を両側から削り込んで柄とし、残る部分は断面凸レンズ状に加工し、身としたものである。作りはやや粗雑である。年代は、7世紀代である。

698は、長さ20.8cmのヒノキと思われる材が用いられたものである。元々は隅丸長方形の身に、細長い柄が付いていたと思われるが、縱割れして半分しか残存していない。身は、断面形が凸レンズ状に加工されていたようである。698と写真図版38A9は、8世紀代のものである。

B. 容器類

容器の大半は曲物であり、箱物・刎物の槽・挽物の盤・柄杓が少数ある。また釣瓶と考えられる大型の刎物もここで紹介する。なお遺物編1では、竹の籠物の箕1点と、笊7点を紹介しているが、第8次調査以降の出土例はないことから、本書では取り上げない。

①曲物

曲物は、伊場遺跡から出土した木製品の中で、最も多い。弥生時代の木製品を除く約1200点の内、側板・ヘギ板を含めた曲物関係品は約210点であり、約18%を占める。

曲物は、底板と側板の結合の仕方により、大きくカキイレゾコとクレゾコの2つに分類される。カキイレゾコは、底板の周縁に段をもつもので、その段に合わせて側板がはめられ、両者が構紐で結束される構造のものである。場合によっては、木釘も用いられる。側板が底板の上に載るため、底板自体は外にはみ出る。それに対し、クレゾコの底板には段ではなく、端面が作られているに過ぎない。側板は底板の外側にまかれ、木釘で固定される。そのため側面から見た場合、側板に隠れて底板は見えなくなる。カキイレゾコが多く（107点65%）、クレゾコは少数（58点35%）である。なお、かつて伊場遺跡の概報では、円形のカキイレゾコを蓋板、クレゾコを底板、楕円形のものを折敷と呼んだ。

底板の形には円形と楕円形があり、楕円形のものには長辺に把手が付くものがある。なおクレゾコのものは、円形に限られる。またクレゾコの底板には、刃物による切傷が少ないので対し、カキイレゾコの底面にはほとんどものにそれがある。カキイレゾコの底板は、内面にも、少数の切傷をもつものがある。この切傷は、曲物底板を遺代わりに使用したためだろう。

曲物は、以上に述べたような底板、薄い板を曲げて作られた側板、側板を縫めるまわしの側板、側板とまわしの側板との間に差し込むヘギ板、そして綴じ紐である樺紐や木釘で構成される。側板の綴じ合わせには、樺紐が用いられる。側板の内側には、ほとんどのものにケビキが認められる。刃物による縦位のケビキは等間隔に施され、部分的に斜位のケビキが加えられる。側板を均等に曲げる工夫である。また楕円形曲物や方形曲物では、屈曲率が高い部分に集中して入れられる場合が多い。曲物の材はほとんどがヒノキで、わずかにスギとサワラが底板として用いられる。木取りは、大型のものはほぼ板目、小型のものは柾目が多い。遺物編1では、曲物を以下のように分類している。

分類	形	細別	大きさ	備考
第I類	楕円形	A種	φ60~75cm 大型	把手付のもの有
		B種	φ40cm前後 中型	把手はつかない
第II類	長方形・方形		φ20~30cm	例数はわずか
第III類 (カキイレゾコ)	円形	A種	φ50cm前後 大型	留が4ヶ所以上
		B種	φ30cm余り 中型	(Bは少数・群としてのまとまりはない)
		C種	φ24cm前後 小型(φ21~24cm)	留が4ヶ所のものが大半を占める
		D種	φ20cm以下 極小	(Dが大半を占める)
第IV類 (クレゾコ)	円形	A種	φ20~30cm 大型(φ26cm前後)	木釘が4ヶ所のものが多い
		B種	φ18~20cm 中型(φ14~18cm)	
		C種	φ10~16cm 小型(φ11~12cm)	(B・Cが大半を占める)

挿表4 曲物分類表

(遺物編1の一部を修正)

第I類の把手を有するものは、84~86・271・486・554・645・728で、全長がほぼ判明しているものは、いずれも70cmを越える大型品で、A種に分類される。ただし276は、現存長15cmの小型品で、しかも円形の底板に把手が付けられたものらしい。これは、希な例と言えよう。第I類の楕円形曲物の中には、きれいな楕円形のものから、90・91・335・726のように隅丸長方形のものまである。大きさの分かれる90・335・726と遺物編1別図13-2・3は、長さ60~66cmで第I類A種、91と別図12-2は長さ約40cmで第I類B種となる。

楕円形曲物の法量による分類は、新たに加えた今回の資料や、梶子遺跡9次調査区で検出された伊場大溝出土例からも、有効であったことが検証された。

遺物編1写真図版27A1をもって第II類の大型品とされたが、楕円形曲物を誤認している可能性が高く、この類例の大型品は存在しないと考えられる。方形曲物は、既報告を含め5点が出土している。94

や316を見ると、正方形に近いものである。93と94・316は、一辺約20cmの大きさである。写真図版27B4は長さ26cm、757は現存長で30cm弱であることから、前者のものよりは大型となる。316は方形と言っても、隅が少し丸く切られている。また短い側板が残存し、内側のコーナー部分にはケビキが入れている。折敷として使用されていたものと考えられる。

第Ⅲ類については、A～D種の4つに分類されている（底径ヒストグラム参照）。A種とした50cm前後の超大型のものは、49～54cmの幅の中に、6個体が存在した。梶子北遺跡9次調査区で検出された伊場大溝のIV層からは、60cmに及ぶものが出土している。B種は直径30cm余りのものとするが、25～40cmの範囲にあるものは極めて少ない。B種とするまとまりは、どうもなさそうである。遺物編1ではC種を24cm前後、D種を20cm未満とするが、ヒストグラムでは15～23cmが最も数の多い範囲であり、正規分布に近い状況を呈する。しかし微視的には、21cm代のものが1点と少ないとから、20cm以下のものと21～24cmのものに区分することも可能で、それをD種とC種に当てるものもある。25cm以下のものを1つのまとまりと見るか、2つに分けるのか、もう少し資料数の増加を待った方が良さそうである。いずれにせよ、円形カキイレゾコの主体は、16～20cmあたりの大きさのもので、これが60%以上を占める。

95の底板は、2枚の板を合わせて樋紐で留められていたようである。内面の合わせ目には、「×」印が2ヶ所に付けられている。材は同一であることから、製作途中で割れ、補修して用いられたためと思われる。335のような大型のものは、一枚板が取れなかったためか、2枚の板を樋紐で結束して用いられた可能性が高い。綴じ合わせ部には、小さい円孔が3つあけられており、ここに樋紐が通され、結束されたと考えられる。

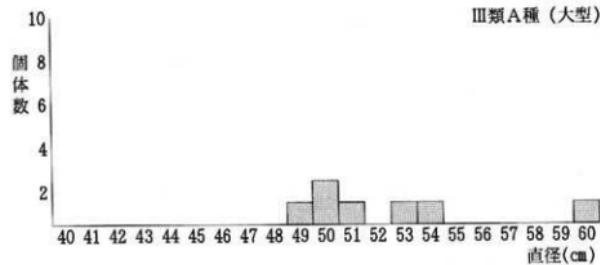
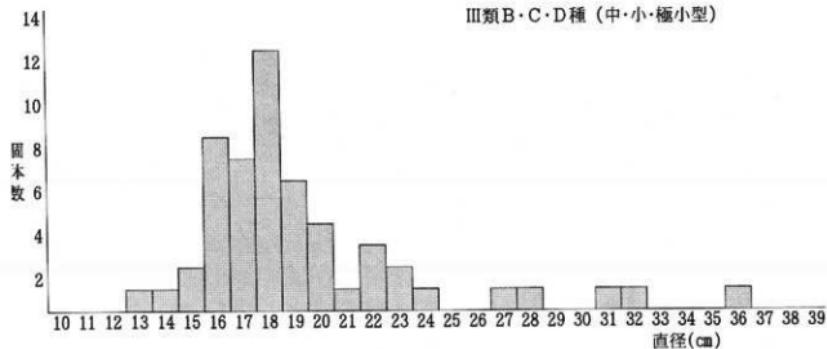
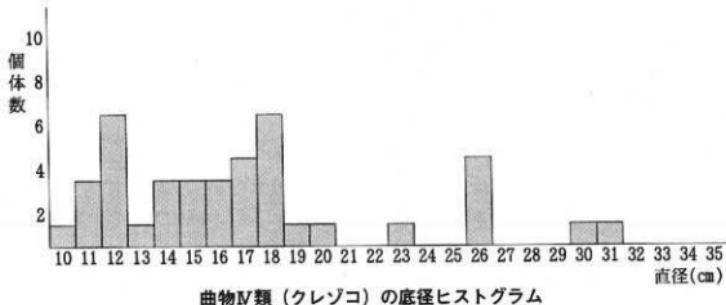
100は、小孔が3列にあけられている。確認がある訳ではないが、蒸籠として用いられた可能性がある。106と742には、文字らしい焼印があるが、判読できない。736の底面は、黒色であり、柿渋のようなものが塗布されていた可能性が高い。本例は、外周に段が作られていないものであるが、樋紐結合のものであることから、カキイレゾコの仲間に入れた。9世紀に降る可能性はあるが、当地方の古代における曲物底板としては珍しい。

IV類は、クレゾコで、円形に限られる。底板の直径と個体数をヒストグラムにしてみた。法量的には概ね3つに分けられる可能性が高く、遺物編1での区分は、A種が26cm前後の大型のもの、B種が14～18cm前後の中型のもの、C種が11～12cm前後の小型のものに訂正される。小型のC種には、柄杓の身が含まれていると考えられる。

112は中央に円孔と小孔2孔が、745と750は中央に円孔もしくは方形の孔があけられている。117の底面には、「千」の文字が焼印として残っている。また側板の一部が残存している。362と365は、1個体の可能性が高く、3枚の板を木釘留めして、1枚の底板としている。木目が揃っていることから、製作途中に割れたものを補修して使ったのか、割れたために補修したものと考えられる。556・660・746・747は、底面が黒色になっている。425と426は、再加工されているようである。

曲物側板やまわしの側板も図示しているが、いずれも破片である。まわしの側板の内、285・381・382・498・663～665は、合わせ目にあたる部分で、両側から切り込みが入れられている。382は、樋紐の綴じ合わせがよく分かる例である。また、焼き印も認められた。671は、ヘギ板である。

カキイレゾコの曲物底板の内、VII層から出土し、7世紀に遡ると考えられるものは、数例存在するだけである。把手付の柄円形曲物は、645が7世紀後葉に遡り、728が9世紀に降る可能性はあるが、他



曲物III類（カキイレゾコ）の底径ヒストグラム

※伊場・城山・梶子9次・梶子北出土資料を含む

はほとんど8世紀代のものである。また方形曲物については、7世紀に遡るものはなく、8～9世紀代のものである。円形カキイレゾコの曲物底板やクレゾコの曲物底板も、7世紀代にも少数存在するが、8世紀代以降のものとの違いを認めることはできない。また8世紀代のものと平安時代に遡るものについても、現状では識別できない。

なお遺物編1では、曲物底板の内、厚手のものが占い可能性が高いと指摘されている。105は厚さ2.4cm、442は1.9cmで、他の例と比べると突出して厚い。梶子遺跡9次調査の伊場大溝で出土した厚さ1.7cmの底板2点も7世紀代のもので、8世紀代の中にはこれ以上のものは存在しない。また5世紀代の山ノ花遺跡から出土した曲物は、いずれも厚い作りであった。以上のことから、厚いものは古墳時代のもので、7世紀代にもその名残があったと考えられる。しかし7世紀代には、薄い作りのものが出現して盛行し始め、8世紀を待たずに厚手のものは一掃されたようである。

②箱物

箱物の可能性があるものに、315・422・758・759がある。315は、正方形もしくは長方形の箱物底板と考えられるもので、カキイレゾコの曲物底板と同様に、縁辺は彫り下げられ、段をもつ。側板はこの段に沿わせて置かれ、下面から木釘で留められていたと考えられる。422は、側板である。同形態のものを4枚組合せ、木釘で留めることで、箱物の外形が作られていたと考えられる。758と759は、箱物の側板もしくは底板で、ほぼ同形同大である。側板であれば、周囲にあけられた穴を利用して、紐縛じされていたと考えられる。底板であれば、穴は目釘孔であったと考えられる。年代は、いずれも8世紀代である。

③挽物

120は、弥生時代後期の環濠YT9から出土したほぼ円形の盤である。弥生時代にはほとんど挽物が存在しないことから、再考の余地がある。他の挽物は、全て8～9世紀代のものである。254は有台の盤としたが、挽物とする確証はない。その他は、いずれも多少の違いはあるものの、口縁部の立ち上がりが小さい盤・皿の類である。本書では全て盤とした。656と741の底部には、ロクロの爪跡が認められた。いずれも白木のままで、漆を塗ったものは一例も存在しなかった。

④刷物槽

今回報告するものは8点であり、内124・339・637の3点は、長方形の槽本体に把手が付けられたものである。124の本体は、浅い作りのものである。637は、保管中に乾燥し変形してしまった。388と638は、ヒノキ材の長方形の槽と考えられる。501はアカカキの可能性もある。539は、カシ類で作られた隅丸方形をした大型品で、盆状の槽である。大半は8世紀代であるが、339・539は出土層位から9世紀に遡る可能性がある。しかし材質や形態的には、7世紀以前のものと変わりない。平安時代にもこのような槽が一定量残存したのか、類例の増加を待って再検討したい。

⑤柄杓

曲物底板の第Ⅲ類D種、第Ⅳ類C種の一部には、柄杓の身として使われていたものが含まれる可能性が高い。柄になりそうな棒に262があるが、確証はない。その他、有頭棒とした232や370・465（これらは機織具部品の可能性も指摘した）、先端加工棒の455・514・685・687・776・777、尖頭棒とした238・513、加工丸棒とした510～512、出柄棒とした569・688なども、柄杓の柄になりうる。

⑥釣瓶

121の1点が出土している。完形品で、広葉樹を用いた削物である。平面形は隅丸台形で、その上辺

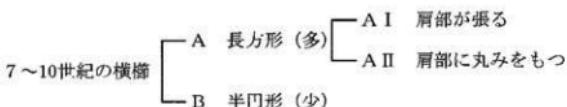
近くには柄穴がある。そこに真っ直ぐな柄を装着すれば、現用の鎌れんに似た形態となる。大きさは29.3×37.0cmで、高さは7.0cmである。釣瓶としているが、大溝から出土したもので、井戸に伴った訳ではない。出土層位から、7世紀代の製品である。

C. その他の生活用具

その他の生活用具として、横櫛・下駄・物指・松扇?・撥・印判・腰掛け・洗濯板がある。

① 横櫛

横櫛は、既報告を含め16点が出土している。『木器集成図録近畿古代篇』(奈文研 1985)では、横櫛の分類を以下のように行っている。



型式	遺物No. : 29~33は別図26. V・VIIは層位. a b cは棟形	別図は遺物編1
A I	133Vb 135Vb 336Vb 29Vc	a: 平棟 V: 主に8世紀
A II	338Vc 30Vc 32Vc 33Vc	b: 丸棟 VII: 主に7世紀
B'	129VIIa 131VIIa 132VIIa (337VIIa) (136VIIa)	c: 山棟

挿表5 横櫛分類表

伊場遺跡では、全体形が半円形を呈するBは存在しない。そのかわり脊だけが刃弧を描くものが出土しており、これをB'をしておく。遺物編1でも指摘されているように、B'は棟を平らに作るaが7世紀代、長方形のAは8世紀代を中心に存在したと言える。肩が丸いA IIは、『木器集成図録近畿古代篇』では、7世紀代には出現していないと記載されており、また伊場遺跡でもV層やVII層の下部から出土した例はない。なおA IIの棟は、いずれも山形(c)である。

肩が張るA Iも全てV層からの出土であるが、V3層から出土した133は弱いながら、脊に丸味をもち、B'に近い。また平棟(a)であることから、A Iの中では古相を呈する。A Iの棟は平・丸・山形があり、a平→b丸→c山形と変化している可能性がある。自然流路である大溝からの出土といつた資料的な制約があり、また出土数も十分ではないが、およそ8世紀前半をボーダーラインとして、棟が平らなもの(a)から山形(c)への変化は認めて良い。

② 下駄

下駄は、既報告を含め4点が存在する。遺物編1において記述だけで実測図・写真ともに掲載されなかった1点は、保管中に紛失した。よって、現存するのは3点である。137は、すでに遺物編1で説明されているので、ここでは省略する。

出土した下駄はいずれも一本造りで、314は137と同じように歯下端の幅が台より広く作られている。314の緒孔(前底)は、中央にある。8世紀末~9世紀初頭の製品である。774は、後歯の破片である。緒孔(後底)が後歯より内側に1つ確認できる。歯の縦断面は、台から外下向に延びるものである。7世紀代の製品である。

③物指・桧扇？・撥・印判・洗濯板

物指は、156の1点（8世紀代）が、桧扇はその一部と思われる157の1点（9世紀）が、撥は215の1点（8世紀）が、印判は218・289の2点（7世紀）が出土している。これらはすでに遺物編1で紹介されているので、それを参照されたい。なお撥215の側面には、縦位に「一」の字形の焼印らしい焦げが認められた。印判218の端面には、墨が付着している。同形態の289には、墨は認められなかつた。

洗濯板とされたものに140があり、既に遺構編（浜松市1977）や遺物編1でも紹介されているので、それを参照されたい。実際、洗濯板として使用されていたかは不明であるが、出土状況からその可能性が指摘されている。

④腰掛け

腰掛けと考えられる製品が1例、第9次調査で出土した。318は長さ35.5cm、幅13cm、高さ6cmで、一本式（刎物）のものである。座板は長方形で、上面は平らである。脚は2脚で、まさに下駄の大型品である。脚は、座板より少し幅が狭い。

実際に、腰掛けとして使用されていたかについては不明である。なお、機織に使われた腰掛けであれば、機織具とすべきである。7世紀末葉の製品である。

第4節 建築部材

建築部材には、柱材・垂木・梯子・鼠返し・礎板がある。なお、大型の枘をもつ丸太材・角材・板材も、これに含めた。

①柱材・垂木など建築部材

建物のコーナー部分に配されたと考えられる柱材385については、すでに遺物編1で詳細が述べられている。386は遺物編1で説明されているように、当初の長さは119cm存在したが、その後大半を欠損し、現在34cm弱を残すだけである。347は方形の枘穴を2つもつ板材、348は未貫通の穴を3つもつ角材、387は方形の枘穴を3つもつ板材であり、いずれも建築部材の可能性がある。816は丸太材で、上部には出枘が作り出されており、建築部材の可能性が高い。619は樹皮を残したままの丸太材である。先端は段が作られ、段の下は半円形に抉られた後に、枘穴があけられている。梁や桁、もしくは垂木材の可能性がある。

第111図71は、伊場遺跡の第4次調査で出土した垂木材と考えられるものである。長さ217cmに及ぶ抉りが入れられた丸太材であり、先端は尖っている。6世紀後葉～7世紀前半代のものである。

以上は大溝から出土した柱材であるが、これ以外に掘立柱建物の柱穴に残存していた柱根が多く存在する。この柱根については、遺構編と遺物編1で詳細に説明されているので、それを参照されたい。なお第8次調査以降のものについては、今後刊行される報告書に掲載する予定である。

②梯子・鼠返し

丸太材を削り抜いて足掛けを作り出した梯子は、3点が出土している。2点は遺物編1で紹介されているが、残る1点は紛失した。報告された2点の内1点は、実測図が掲載されていなかったため、今回実測し、141に示した。ただし下端部は、保管中に欠損し紛失した。元々は足掛けが3段あり、長さは106cm存在した。詳細は、遺物編1を参照されたい。

鼠返しは、方形もしくは隅丸方形をした板で、中央には柱を通すための穴があけられている。伊場遺跡では、138・389・390の3点が発見されている。3点とも、遺物編1に写真と詳細が記載されている。389と390は、遺物編1が作成された後、自然乾燥によりだいぶ変形してしまった。

③礎板

礎板は、掘立柱建物の柱穴内に残されていたもので、第7次調査までに17点ある。材質的にはヒノキが多いが、ヒメユズリハ・ヒメコマシ・シイなども使われている。遺物編1では、3例の写真が掲載されている。礎板は1枚で使用されている場合と、小板を2~3枚用いる場合とがある。第8次調査以降でも、保存用地内で掘立柱建物が多く検出され、礎板も多数認められている。その内、同一部材を断ち割って作られた礎板の822と823を図示した。幅20cm、厚さ7.5cm程のヒノキ材で、2枚を合わせると長さは65cm程である。溝状に彫り空められた中央には、円孔があけられており、その部分で2枚に切られている。また縁寄りには、正面と側面の両方から抉られた方孔が2孔あけられている。上端も下端も粗削りされており、元々はさらに長い板材であったと思われる。溝が掘られ、円孔や方孔があけられていることから、何らかの建築部材であった可能性が高い。

④杭

先端部を尖らせた丸太材もしくは角材で、図示したのは236・237・239・240・264の5本である。236~240は、遺物編1の写真図版101B・102Bに掲載されたものである。236の頭頂部は、掛欠などで打たれたためか、潰れが認められた。239は先端が2面から削り込まれたもので、撥状を呈する。240は、角材が用いられた例である。264は、大型の丸太杭である。

第5節 武器武具・馬具

武器には丸木弓・木鎌、武具には木甲、馬具には壺鏡・鞍などがある。木鎌は、梶子遺跡9次調査の伊場大溝から出土しているが、伊場遺跡からは出土していない。しかし鏑矢の可能性のある写真図版99A2が、遺物編1で紹介されている。木甲は弥生時代後期のもので、前章で紹介した。ここでは、丸木弓と馬具について紹介しよう。

①丸木弓

丸木弓は、既報告のものを含め、3点が出土している。2点は遺物編1に写真が掲載されており、残る1点は312である。なお、遺物編1ではもう1点出土したと記載されているが、所在不明となっている。丸木弓は、遺物編1で記載されているように、I・II類に大別できる。

I類-内側を平らに削り、さらに浅く樋を通すことで、漆が塗られている。

遺物編1写真図版57A2

II類-丸木をそのまま使い、仕上げは粗雑で、不規則に湾曲したもの。

遺物編1写真図版57A3・別図20-1・本編312

312は第9次調査で出土したもので、弓弭は出柄状に加工されている。弭(握)の部分は丸木のままであるが、弓弭にかけては多少内側を削っているようである。長さは152.6cm、最大径は2.5cmで、材はイヌマキと思われる。8世紀代の製品である。

②馬具(壺鏡・鞍)

馬具には、壺鏡と鞍がある。139は、柄杓形をした壺鏡である。長径13.5cm、長さ30cm余りのシロ

ダモの丸木材の片方を削り込んで鎧軸とし、もう一方を横から削り、鎧本体を形成している。上端は方形の穴を穿って、鎧軸の通し孔としている。この穴の上縁には、紐擦れによる擦痕が認められた。伴出遺物から、6世紀後葉に位置付けられる。

210は、カシ類製の鞍で、洲浜形から爪先にかけての破片である。内側に方形の切り込みが2つあり、それに対応するように方形の穴が2つある。方形の切り込みに居木をはめ込み、方形の穴に革紐を通して居木を固定していたと考えられる。

伊場遺跡では、遺物編1に図示したもの（別図27-6）と210の2例が、梶子遺跡では9次調査区の伊場大溝から1例が出土している。また愛知県豊川市山西遺跡からも、同様の鞍橋が出土している。上原真人氏は、河野通明氏の説に従い、山西遺跡例を乗馬鞍としている（上原1993）。遺物編1では、雉子股の発達が弱いことから、荷鞍や牛の鞍の可能性を指摘している。210は7世紀代、既報告のものが8世紀代である。

第6節 祭祀用具・楽器

伊場遺跡出土木製品の中で、祭祀遺物と言えるものは、人形・馬形・舟形・盾串が大半で、少数刀形などが存在するだけである。遺物編1で鳥形としたものは、刀形のようである。また絵馬も祭祀遺物に含まれるが、ほとんどは遺物編1で報告された。絵馬については、今回1点だけを紹介する。また木筒の中には、「急々如律令」と記されたいわゆる呪符木筒（第39号木筒）があり、これも祭祀遺物となる。なお伊場遺跡出土の土製祭祀遺物には、7世紀以降のものとしては人形・馬形・塔形・瓶形・革袋形・土玉などがある。

①人形

短冊形の板を切り抜いて作られた扁平な人形には、正面全身人形・側面全身人形・顔面だけの顔人形の3種類がある（奈文研1985）。しかし、伊場遺跡から出土した人形はいずれも、正面全身人形である。

正面全身人形はABCの3つに分類され、A→Bへと変化したとされている（奈文研1985）。

A-頭部と肩部を区画する切り欠きを入れ、両側面には切り込みを入れて両腕を表し、下端の小口からは深い切り欠きを入れて両足を表したもの。

B-腕の表現を欠くもの。胴と脚との区別があるものとないものがある。

C-A・B以外のもの。

人形の頭部の形には、円頭・半頭・半頭があり、肩部の表現には怒り肩のものと撫で肩のものがある。脚部は、コの字形に切り取ったものとV字形に切り込んだものがある。遺物編1の分類に従って、挿表6を作成し直した。

遺物編 本編	遺物編1写真	分類			出土層位	長さ(cm)
		頭	首	脚		
	59A-2	1	2	0	V2	(8.8)
	59A-3	1	2	0	V3	(8.7)
143	59A-4	3	0	0	IV	(6.1)
144	59A-5	3	1	0	IV	(4.7)
	59A-1	1	2	2	V	14.2
	60A-2	1	2	2	V	15.2
145	60A-3	1	2	2	V	(11.1)
146	60A-4	3	1	1	IV	14.1
147	60A-5	3	2	2	V	16.3
	60B-6	2	2	1	IV	(23.2)
	60B-7	2	2	1	IV	(19.4)
	60B-8	0	2	2	V	(19.4)
148	60B-9	3	2	1	V	21.4
149	61A-1	1	2	0	V4	(10.4)
150	61A-2	3	2	0	IV	(14.2)
151	61A-3	1	2	0	V3	(12.6)
	61A-4	0	2	0	IV	(8.6)
152	61A-5	3	2	0	V	(8.5)
153	61A-6	0	0	2	IV	(7.2)
154	61A-7	0	0	2	IV	(6.9)
184	82B-17	1	2	0	V4-5	(10.1)
195	82B-19	3	2	0	V3	(10.0)
250		3	1	0	V2	(10.8)
251		3	2	2	V	(11.5)
329		3	2	0	V2	(8.3)
330		0	0	2	V1	(15.5)
673		3	1	2	V	14.8
764		1	1	0	IVc	(55.1)
頭部欠損0-円頭1-平頭2-半頭3						
脇り肩1-椎2						
脚部欠損0-折り取り1(コの字形の脚)-切り取り2(V字形の脚)						
長さは遺物編1の数値を記入(表状=本編の数値ではない)						
標9A-139						
標9A-140						
標9A-141						
標9A-142						
標9A-143						

頭部欠損0-円頭1-平頭2-半頭3
脇り肩1-椎2
脚部欠損0-折り取り1(コの字形の脚)-切り取り2(V字形の脚)
長さは遺物編1の数値を記入(表状=本編の数値ではない)

挿表6 人形分類表

Aが大半であり、脇の表現を欠くBの確実な例としては、梶子遺跡9次A調査区の伊場大溝から出土したもの（梶9No139）と、本編の764がある。2点とも9世紀に降るもので、大型である。遺物編1では、肩部・脚部には年代的な特徴は認められないが、頭部の形態には年代差が認められたと記述されている。円頭形は奈良時代を中心に存在し、平頭は平安時代に数は少ないが存在する。圭頭は平安時代に多いとされるが、新たな資料を加えると奈良時代から平安時代にかけて断続的に存在することが判明した。伊場遺跡では、圭頭が主体を占めている（43%）が、梶子遺跡9次調査で出土した平安時代の人形は6点あり、頭部が残る5点はいずれも圭頭であった。

人形の大きさは15～20cm程のものが主体のようであるが、30cmを越えるものもしくは越える可能性が高いものに、写真図版60B6・61A1（149）がある。前者は平安時代のものであるが、後者はV4層から出土したもので、8世紀前半以前のものである。しかし764のように50cmを優に越えるものは、平安時代にならないと出現しないようである。なお墨画のある144は、現存長4.7cmで出土例中最小であるが、平安時代のものである。（写真図版のとびらには、人面墨画のある遺物を集成）

②馬形

短冊形の薄いヒノキの板材を切り欠いて作られたものである。いずれも鞍や一繁などの表現はなく、裸馬であり、抽象化されたものばかりである。遺物編1では、第7次までに11点が出土したと記述されている。遺物編1の写真図版には9点があり、本編の158～160はそれに掲載されたものである。601は第7次調査、331は第9次調査で出土したものである。伊場遺跡では、331を加え17点以上が出土したことになるが、図を公にできたものは11点である。

尾を下げた平面形がM字形のもの（160）と、尾を上げたN字形のもの（158・331）、下から切り込みを2つ入れ、尾を上げたもの（159・601）の合計3種類がある。腹部には切り込み（孔）があり、細い棒が刺さったままのものが認められた。馬形は、細い棒に刺して立てられていたと考えられる。7世紀代に遡るもののが2例ある他は、いずれも8世紀代のものである。なお既報告の中には、目を墨書きした例がある。

③絵馬

薄いヒノキの板材に、牛や馬が墨書きされたもので、計7点が検出されている。絵馬第1～6号については、遺物編1に実測図と写真が掲載されている。1号と4号は牛、残る4点は馬が描かれている。5号は裸馬、6号は飾り馬が表現されている。（実測図版ととびら参照）

7号（346）は、墨が薄いながらほぼ完存していたが、保存処置の過程で完全に消えてしまった。346は出土当時の写真と見取り図から、図示したものである。材はヒノキで、裏面に刃物による切り傷が見られることから、出物の底板を転用したものと考えられる。中央から少し左にずれた上辺に、懸紐孔が1つあけられている。表現は大変稚拙なもので、見えるはずのない裏側の足の付け根まで描かれている。たてがみは3本線、尾は2本線で描かれている。出土層位から、9世紀に降る製品である。なお、絵馬は6号が8世紀中葉まで遡る可能性がある他は、ほとんどが9世紀代のものである。絵馬は、梶子北遺跡からも1点出土しており、伊場遺跡群での出土点数は合計8点である。

④舟形

舟形は、87点が出土している。62点については、遺物編1で紹介されている。本編に掲載した56点の内31点は、遺物編1で写真図版だけが掲載されたものである。ヒノキなどの針葉樹の角材や、半截された丸太材、小型の丸太材が用いられている。角材が主倒的に多く、半截材もしくは小型の丸太材

が使用されたものは、167・249・319・322・768・798だけである。この内、249・319・768・798は大型品である。角材が用いられた大型品は、161・521・769の3点だけである。針葉樹以外の材が用いられたのは、249・319・392・768・798で、大型品が多い。大型品は半截丸太材で、ヒノキなどの針葉樹材以外のものも用いられる傾向がある。

形態的には船首と船尾は明確にされていないが、船倉との間には溝が切られたり、刻目が入れられたり、段が作られたりするものが多い。船首・船尾との区画をもつが、船倉をほとんど削らないもの（166・167・169・173・396・766・767）、刻目もなく平らなもの（174・179）、平面形を紡錘形にし、船倉を断面逆三角形に削るもの（161・163・165・319・323・324・394・399・401）、断面U字形に削るもの（162・168・170～172・177・178・320・367・797）、平面長方形もしくは楕丸長方形で、断面逆台形に削るもの（175・176・180・321・368・393・402・403・520・765）などがある。

底部の形態には、丸底・平底のものがある。船首・船尾は、尖るもの、丸いもの、隅丸もしくは隅切りされただけのものなどがある。船首・船尾に堅板を取り付けた準構造船を表現したものに、175・319・322・392がある。165は船首に日、両側の舷に波形が墨書きされた珍しい例である。小型舟形の船底中央には、小孔や小さい切り込みがあり、399・400・797には、小孔の中に細い棒が残存していた。小型の舟形は、馬形と同じように、船底に細い棒を刺して立てられていたと考えられる。大型の舟形は、船底に孔はない。166・167・398・672には、船首と船尾の両方に水平方向の小孔があけられている。398と672の孔内には、別材が挿入されたまま残存していた。169は船首・船尾と船倉を区画するのに、両側舷に刻目を入れている。

形態的には多様であるが、年代的な変化は現状では認められない。今回実測図を掲載したもので、V層出土の3点（7世紀代）、IV層出土の7点（9世紀代）以外は、ほとんどがV層出土であることから、主体は8世紀代と考えられる。

⑤斎串

斎串は、遺物取上台帳の上では総数167点が存在するらしいが、その内には木簡材や人形の破片なども含まれていて、実数を確定することはできていない。遺物編1写真図版に掲載されたものは97点を数え、今回新しく報告するもの38点を加え、総数135点となる。遺物編1でなされた斎串の分類は、以下の通りである。

- A - 上端部を主頭に作り、側辺に切り掛けを施さないもの。
 - B - Aの側辺に、上方向からのみ切り掛けを施すもの。切り掛けが1対・2対・3対・4対以上を、それぞれ斎串B1～B4とする。
 - C - Aの側辺に、上方向と下方向からの切り掛けを交互に施すもの。C1は上下各1対、C2は上下上と3対、C3は上下上下と4対、C4はC2の下部になお数回上方向からの切り掛けを施すものなどに細分する。
 - D - 主頭を呈し、上部を両側からV字形に切り欠き、頭を作るもの。その内D1は切り掛けを施さないもの、D2は1対の切り欠きの下部に上方向から切り掛けを数回施すもので、D3は切り欠きの下部に上方向からと下方向から切り掛けを施すもの。
 - E - 平頭を呈するもの。E1は切り掛けのないもの、E2は上方向から切り掛けを施すもの、E3は下方向から切り掛けを施すものをいう。
- 181・183がB2、182・184がB4、187・188・404がB、345がD1、186がD2、189・190・243が

E1、185・674がE2、299がA?、328がD?である。674の頭は斜めに切られているが、平頭とした。なお345には、人面が墨で描かれている。675~677は下半部の破片で、切り掛けが2~3対見られる。斎串は遺物編1で報告されたものも含め、主体はBで、次いでA・C・Eがあり、Dは少ない。

Aは小型で、表面を丁寧に削り込んだものが多い。特にOA地点NT301内及びその周辺のV2層もしくはV3層で、集中して検出された。Bは、各層位を通じて検出された。Cには最も長大化するグループ（別冊図版24-1~4）と、表裏に八の字を連続して墨書きしたグループ（別冊図版24-8~12）とが認められていて、ともにV1層から出土している。前者はOF地点で一括して検出された他、後者の墨痕のあるグループはOE地点で一括して出土した。D1で切り欠きを数回施す例は、328や梶子遺跡9次調査の出土品中に類例がある。一般的には、1対だけ切り欠いたものが多いようであるが、木簡材あるいは曲物まわしの側板との区別が難しい。E1も、木簡材との区別がつきにくい。

遺物編1では、出土層位から長大化するものとともに、切り掛けが複雑化するものも新しい傾向であると指摘されている。

⑥剣形・刀形

遺物編1では、剣形の可能性があるものとして、写真図版61B9・10の2点が紹介されている。2点とも8世紀後半~9世紀初頭のものらしい。

刀形は155・211・606の3点がある。155は遺物編1では鳥形とされたが、抉りを柄と考えれば刀形と見ることができる。明確ではないが、刃部も形成されているし、鋒もカマス鋒を表現していると見られる。211は、遺物編1でも刀形とされている。柄と柄頭が表現され、刀身部は断面三角形に作られている。606は、断面三角形をした刀身の鋒部分の破片である。155はⅦbc層の出土で6世紀後半、211はⅧ層出土で6世紀前半、606はⅨ層出土で7世紀代のものである。いずれも古墳時代の遺物である。

⑦琴柱

楽器としては、琴柱が1点出土しているだけである。214は下辺を少し欠損しているが、ほぼ全形を留めている。現状の高さは2.2cm、幅は5.1cm、最大の厚さは0.6cmである。保存処置前の数値が遺物編1に記載されているが、多少縮小しているようである。全体形は台形であるが、側辺は下に向かって外開きしている。上辺と下辺の中央には、抉りが入れられている。奈良時代の製品である。

第7節 その他の木製品

以上の分類に含めることができなかった木製品について、木簡材とともにここで一括して説明する。この中には有極角状木製品・筒状木製品・櫛状木製品など、一定量存在し定型化したものがある。これは何らかの製品であったと思われるが、現状では用途不明品である。これ以外のものについては、形状や穴の有無などの特徴から、有頭棒・枘材・有孔板・先端加工板（棒）・尖頭棒・加工板（棒）などと、機械的に分類した。

①木簡材

木簡は、『伊場遺跡発掘調査報告書第1冊伊場木簡』（浜松市 1976）で全て紹介されている。木簡材についても、その多くは遺物編1で紹介されているが、今回対象とした木製品にも10数点存在する。頭が山形もしくは平坦で、先端を尖らせたヒノキの薄板を、とりあえず木簡材とした。上部は、両側から切り欠いて紐を縛りやすくしたものと、何も加工されていないものがある。遺物編1では木簡形・尖

頭薄板・斎串片とされたものを含む。また、木簡材としたものの中には、曲物のまわしの側板（合わせ部）や、ヘギ板が含まれている可能性がある。

頭が平らなものに456・523～525・528・770、頭が平らで切り欠きをもつものに212・252・357・407、頭が山形に切られたものに405・771、頭が山形で切り欠きをもつものに213・406がある。

213は、7世紀代に遡る可能性はあるが、他は8～10世紀代のものである。

②有柄角状木製品

遺物編1の写真図版92B5は、片方が四ツ手綱の把手と同じ作りで柄と頭が作られ、もう一方が角状に屈曲するものである。これと似たもので、中央で屈曲し、片方に柄を入れる369と720がある。720は粗雑な作りで、柄の中央に小型の方形の穴があけられ、側面には切り込みが入れられている。これらは、用途不明品である。720は8世紀後半、写真図版92B5は8世紀前半である。

③筒状木製品

復元すると円筒状になりそうな木製品に、284・780・781の3点が存在する。長さは284が14.7cm、780が15.0cm、781が15.0cmであり、ほとんど同じ大きさである。上下の内側は削られ、少し薄くなっている。小型の桶のようなものを、想定できないだろうか。いずれも、8世紀代の製品である。なお781には、小円孔があけられていたようである。

④櫛状木製品

458は、薄いカシ材で作られた櫛状の木製品で、7本の歯が作り出されている。保管中に乾燥し、変形しているが、現存長7.1cm、幅4.6cmの大きさである。何らかの道具であることは明らかと思われるが、現状では用途不明である。

⑤有柄木製品

柄を入れた棒状の木製品に、428と457の2点がある。428は筒框の可能性がある。457はこれで完存品である。片方の小口だけが尖らされており、柄は全体に通る。舟形木製品の可能性もある。428は7世紀代、457は9世紀代である。

⑥有頭棒

丸太材や角材の先に、括れを入れて頭を作り出したものである。小型のものや作りが丁寧なものは、柄杓の柄や布巻・糸巻・総統棒といった機織具であった可能性もある。大型のものの中には、建築部材になりうるものも存在する。また数10cmの中型のものは、馬鍬の引き棒や把手の一部であった可能性もある。有頭棒は他の部品と組合わさって出土しない限り、何の道具の一部であったのか限定することは難しい。

232・233・607・702は、角材が用いられたものである。370や465は、作りが丁寧であることから、機織具の部品になる可能性がある。607は、カキイレゾコの曲物底板を作る時に用いられた物指の可能性が、遺物編1で指摘されている。811は両頭で、湾曲していることから、機織具に伴う腰巻具の可能性がある。

⑦枘材

枘組みが可能な材を一括した。枘穴材については、方形で大型の穴が穿たれたものに限り、小さいものは有孔板の中に含めた。枘穴材としたものは、549・574・618・817で、内618は刃物による切傷が存在することから、曲物を転用していることが分かる。出枘が作り出されたものの中には、204・205のように目釘孔があたり、実際に目釘が残るなど、箱物であった可能性が高いものも含む。206～208

や343は、布（糸）巻具とか継続棒といった機織具の部品の可能性がある。566～569・689など、段を作らず先端を細めているものは、大足の横桟になる可能性がある。421はカシ材であることから、馬鍔の刃であった可能性がある。748は、両端が出柄に加工されたものである。本米は、カキイレゾコの曲物底板であり、それが再加工されたものである。

⑧有孔材

有孔材には、板材・棒材・薄板材・角材などがあり、また孔は、方形・円形などがあり、大きさも様々である。方形の孔を持つものは柄組みされていたものが含まれる可能性が高い。

429は方形孔を2個もつもので、刃物による切傷が多く認められ、曲物底板が転用されたものである。441は、箱物側板の可能性が高い。504は四角い頭が作り出されたもので、その付け根辺りに小孔が斜位にあけられている。782は平面形が稍円形で、中央には円孔があけられている。円孔と小口の間は、彫り窪められているため、縦断面は山形を呈する。縦4.7cm、横2.3cmの大きさである。類例には、梶子北遺跡出土品（梶子北報告書No.224）がある。大きさもほぼ同じで、ともに8世紀代の製品である。783はヒノキの薄い板材を用いたもので、平面形は剣形をしている。中央に円孔があけられており、形代（剣形）もしくは木針の可能性がある。

⑨先端加工材・尖頭棒

先端が尖るように加工されたものを一括したため、形態はもとより大小も様々である。241は、斎中や木簡材の可能性がある。749は刃物による切傷があることから、曲物底板が転用されたものである。450は、先端がヘラ状に薄くされたものである。776と777については、柄杓の柄になる可能性を前述した。

⑩組合材

691～693は、1個体のものである。小口を製いて別材を入れた後、木製の釘で固定されたものである。現状では、用途不明品である。691と692には、刃物による切傷が残る。8世紀代のものである。

⑪その他の加工材

加工材には、板材・薄板材・角材・丸棒・抉り板などがあるが、いずれも用途不明品である。製品の一部破片や、未製品・失敗品・製作過程の不要品なども含まれるであろう。詳しくは、実測図と一覧表を参照されたい。

	大分類	個体数	%	遺物名	個体数	大分類別%
生産用具	農具	141	11.9%	鍬・鋤柄 鋤・鋤柄 田下駄・大足 馬鞍 代福 柄握 鎌柄 木柄 堅忤 臼 搔	22 5 17 11 4 3 17 48 3 1 10	15.6% 3.5% 12.1% 7.8% 2.8% 2.1% 12.1% 34.0% 2.1% 0.7% 7.1%
	工具	13	1.1%	斧子柄 刀子柄 索錠	3 8 2	23.1% 61.5% 15.4%
	漁具	32	2.7%	筌 エリ 撻網 櫛 アカカキ 四ツ手網(把手) 浮子	1 1 3 14 4 8 1	3.1% 3.1% 9.4% 43.8% 12.5% 25.0% 3.1%
	運搬具	45	3.8%	背負子 天秤棒	44 1	97.8% 2.2%
	織機・編具	86	7.3%	織機 糸枠 杼・タタリ かせかけ 籠台(目盛板) 編綴	12 3 3 15 14 39	14.0% 3.5% 3.5% 17.4% 16.3% 45.3%
	厨房具等	21	1.8%	火鍋 箸 杓文字 俎・案	7 8 3 3	33.3% 38.1% 14.3% 14.3%
	容器類	233	19.7%	鉢物 枕物 盤 曲物底板カキイレゾコ 曲物底板クレゾコ 方形曲物底板 曲物側板他 箱物 柄杓 釣瓶	13 17 107 58 5 22 6 4 1	5.6% 7.3% 45.9% 24.9% 2.1% 9.4% 2.6% 1.7% 0.4%
	その他生活用具	27	2.3%	桶 下駄 腰掛 洗濯板 物指 印判 檜扇 燈	16 4 1 1 1 2 1 1	59.3% 14.8% 3.7% 3.7% 3.7% 7.4% 3.7% 3.7%
	武器武具・馬具	7	0.6%	丸木弓 箭矢 畫眉 鞍	3 1 1 2	42.9% 14.3% 14.3% 28.6%
	祭祀用具・楽器	275	23.3%	人形 馬形 舟形 刀形 剣形 賣串 絵馬 琴柱	29 11 87 3 2 135 7 1	10.5% 4.0% 31.6% 1.1% 0.7% 49.1% 2.5% 0.4%
生活用具	建築材・土木用具	27	2.3%	縄子 風返し 柱根 碇板 建築部材(柱・垂木・板材) 杭	2 3 3 5 9 5	7.4% 11.1% 11.1% 18.5% 33.3% 18.5%
	その他	273	23.1%	木筒材 有様木製品 櫛状木製品 箇状木製品 模状木製品 その他加工材	19 5 1 3 1 244	7.0% 1.8% 0.4% 1.1% 0.4% 89.4%
		1180	100.0%		1180	

挿表7 伊場遺跡出土土器一覧表

(木簡を除く)

第5章 金属器・骨角器

第1節 金属器

金属器には、鉄製品と銅製品がある。鉄製品には、鍔先・鎌・手鎌・鉄斧・刀子・鐵鎌・釣針・劔・錘車・釘があり、銅製品には、銅鎌・銅釧・銅製釣針・銅帶金具・耳環・不明品がある。なお第96図には、梶子遺跡から出土した鉄鎌・鉄斧・鉄製釣針・銅鐸飾耳片・銅鎌も掲載しておいた。鍔先については第4章で、耳環については遺物編7で紹介されているので、ここでは省略する。

①鎌・手鎌

鎌は、伊場遺跡から第94図1～9の9例が出土している。10と11は、梶子遺跡9次調査区で検出された伊場大溝から出土したものである。1は木器編1でも紹介されたものであるが、身の大半は崩壊してしまった。出土時の観察から、94図1のように復元された。身は幅広で大きく湾曲し、基部は折り曲げられている。鎌柄には身を入れるための細長い穴があけられており、身は楔で固定される。1は身を固定する楔が残存しており、装着状況がよく分かる資料である。2も身が装着されたまま発見されたものであるが、楔は残存していなかった。身は幅が細く先細りしていることから、使い込まれたものと考えられる。

いずれの鎌身も基部は折り曲げられているが、鋒を左側にして上に折り曲げられたものと、それとは逆のものの2者がある。1～10は全て前者で、右利き用の鎌である。また基部に残る木目の方向や折り曲げ方から、刃と柄の角度が鈍角になるもの(3～6・8・10)と直角に近いもの(1・2・7・9)とに分けられる。伊場遺跡や梶子遺跡から出土した鎌は使い込まれたものが多く、古墳出土品と比べると形態が一様ではない。2と9は刃部がだいぶ減っており、使用前とは形態が異なっていると考えられる。7が7世紀代、1～6が8世紀代、8・9が不明、梶子遺跡の10が8世紀末～9世紀、11が7世紀代である。

46は、手鎌である。薄い長方形の鉄板の両側に小孔が穿たれたもので、その半分が残存していた。本例は、8世紀代の貝塚から出土した。

②刀子

刀子は、第95図に示した23点が出土している。12～16の5点は、柄が装着されたまま出土した。12は、身と柄の間に鍔がはめられており、断面倒卵形をした柄は、黒漆が塗られている。刃部は内反りしていないことから、ほとんど使用されていなかったものと考えられる。13～15は刃部が内反りしており、使い込まれていることが分かる。14と15には鍔がはめられ、15の茎には、柄が身から離脱しないように滑り止めの糸が巻かれている。16は、柄の半分を欠く。鍔は存在するが、木柄に完全にくい込んでいる。茎には両側面に隆帯があり、柄が脱落しないために糸が巻かれている。なお写真は、柄を外して撮影したものである。17の茎にも、糸が巻かれた痕跡がある。18と25には鍔の痕跡が、29の茎には糸が巻かれていた痕跡がある。

もともと刀子の身と茎の間は両開造りであったと考えられるが、使い込まれることによって、13や20は刃部側の闇が消失したものと思われる。また12・17を除くと、ほとんどのものは多少なりとも内

反りし、使用されていたことが分かる。32～34は茎としたが、錫びが著しく進行しており、確實ではない。大半の刀子は、貝塚（S）からの出土品であり（12・13・16～19・22～24・29・33）、8世紀代に位置付けられる。その他も、28と34が9世紀代である以外は、全て8世紀代である。

③鐵鎌

鉄鎌は、伊場遺跡で35～40の6点が出土している。41は、櫛子遺跡9次調査区の伊場大溝から出土したものである。35と36は、大きさは異なるが、笠被広鉋両丸造三角形式である。古墳時代のものと比べると、以下に説明するものを加え、茎が極めて長いといった特徴がある。

37と41は、（笠被）飛燕形式である。脇抉は広抉で、鎌身の造りは両丸造である。41は、ふくらを有する。38は、雁又式である。鎌身と茎の間はスカート状に開き、段が作られている。茎には角もしくは骨製のリングがはめられ、桿紐が残存していた。鎌矢であった可能性が高い。39と40は、棘笠被をもつ破片である。40が中世の包含層から出土した以外は、櫛子遺跡出土の41を含め、全て8世紀代である。

④鐵斧

42～45が有袋鉄斧であり、内45が櫛子遺跡9次調査で出土したものである。42は、袋部の断面形が横円形をした大型品である。残りは極めて悪く、鉄がほとんど砂に置き換わってしまっている。大型の42が伐採斧（縦斧）、小型で角ばった43～45が手斧（横斧＝加工斧）であった可能性が高い。43は実際に、手斧の木柄が装着されたまま出土した。43は、本編の木製品第43図308と同一物である。袋部は、断面四角形になっている。44は、袋部を欠損している。

大型の42が9世紀、43・44が8世紀代のものである。櫛子遺跡出土の45は、大溝検出面からの出土で、時期は不明である。

⑤その他の鉄製品

その他には、47の鉄釘と48・49の紡錘が存在する。47は断面四角形で、頭を叩いて扁平にし、その部分を直角に折り曲げた釘である。48は断面が薄い台形をしたもので、中央に円孔をもつ。48は紡錘、49はそれに伴う紡糸と考えた。表土層から出土したもので、中世の可能性がある。ただし、何らかの座金具とそれに伴う釘であった可能性も否定できない。

50は、櫛子遺跡9次調査で出土した奈良時代の鉄製釣針である。参考のために掲載した。全体形は「J」字形をしたもので、針先にアグ（逆刺）は存在しない。軸部は単に先細りしているだけであることから、伊場遺跡出土の第97図60・61のような骨製品と組み合わさり、擬鮮針となっていた可能性が考えられる。50の軸部には、それらしいあたりが認められた。釣針は、次に紹介する銅製品を含め、2点が出土しているだけである。

⑥青銅器

弥生時代後期の青銅器には、銅鏡・釣針・銅鎌・不明品がある。その他伊場遺跡群からは、櫛子遺跡7次調査区で53の銅鐸飾耳、同7次と9次で56と57の銅鎌が出土している（第96図）。また、奈良時代のものには鎧帶金具がある。

52は、環濠集落内でその西側包含層から出土した銅鏡である。板（帯）状銅鏡であるが、直径（外径）は約3.4cmと腕輪としては小さすぎるし、指輪としては大きすぎるといった中途半端なサイズである。

51は銅製の釣針であり、断面形は菱形で、針先は尖るがアグ（逆刺）は存在しない。長さ6.8cm、重さ29.5gの大型品である。軸部は少し凹んでおり、ここに釣糸を縛りつけたものと考えられる。出土

位置は、西地区のC12 g区で、内側の環濠(YT7)から内部に入った地点である。蛍光X線分析の結果、銅・錫・鉛の合金で、アンチモンと銀が微量含まれていることが判明した。また鉛同位体の分析では、朝鮮半島産の原料が使われていることが判明した。朝鮮半島産の青銅器は、初期の伝来のものと考えられていることから、古い時期に作られていたものが伝世したか、改鑄された可能性が考えられている(浜松市1990)。

54と55は、A11・A12区から出土した銅鐵である。A11・A12区は、環濠集落のはば中心部分にあたる。54は有茎腸抉三角形式で、鋒と腸抉先端を少しずつなく。本体は、表面に砂が付着して固まっているために、何とか崩壊を免れている状態である。鐵身は断面菱形で、茎は杏仁形である。形態から、弥生時代後期のものと考えられる。55は周縁部が崩落し、鐵身の中央部が残るだけである。なおこれらはIV・V層から出土したとされているが、当時律令時代と弥生時代の包含層との識別ができるいかなかったらしく、出土層位から年代を限定することはできない。

伊場遺跡群から出土した銅鐵は、以上2点の他に56と57があり、合計4点が存在する。56は梶子遺跡7次調査区、57は同9次調査区で出土したもので、ともに残りは極めてよい。56の鐵身は五角形、57はふくらをもつ長三角形もしくは柳葉形である。基部は、ともに平基式である。56は腸抉や茎にバリを残すもので、伴出土器から弥生時代後期前半、57は後期後半から古墳時代前期のものである。

58は、断面四角形で長さ2.9cmの棒状をした用途不明品である。環濠内から出土しているが、層位はⅢ層であり、弥生時代のものとは限らない。

鈎帶金具は第97図75と76の2点が、石帶は74の1点が出土している。75は、丸頭で裏金を欠く。鉄は3本が残る。76は、巡方の裏金であり、4剛に孔があいていることから、4本の鉄で固定されていたことが分かる。2点とも、V層からの出土であり、8世紀代のものと思われる。74は緑色凝灰岩製の石帶で、半分が欠損した鉄尾である。裏面には探り孔があけられているが、直にあけられた孔は表面まで貫通している。奈良時代の遺物と推定されるが、出土位置は弥生環濠のYT1・2の上層である。

第2節 骨角器

骨角器には、留針・擬餌針・同末製品・紡錘車・小刀柄・鉗状製品・卜骨がある(第97図)。

59は骨製の留針であり、現在の鉄釘の形状をしている。頭は扁平で、上から見ると丸い。本体は断面円形で、先端に向かって細く尖るように作られている。貝塚SSから出土していることから、8世紀代の製品である。

60と61は、擬餌針の基部に用いられた骨製品である。下端にあけられた穴には、鉄製釘の軸部が挿入され、両面穿孔された上の穴には、釘糸が結束されたものと思われる。大きさは、60が7.5cm、61が7.0cmで、ともに断面梢円形を呈している。擬餌針の未製品と思われる62と共に、貝塚SEからの出土で、8世紀末頃のものと考えられる。

63～66が、骨製紡錘車である。直径は3.6～3.8cm、厚さは0.3～0.4cmと薄く、重さは2.7～5.3gと軽い。断面形は、扁平な凸レンズ形を呈している。いずれも、大溝内の貝塚SE・SS及びその周辺から出土したもので、8世紀代のものである。骨製の紡錘車は、弥生時代後期のものが、市内角江遺跡で発見されている以外、県内には類例がない。

67は鹿角製品で、先端が尖るように加工され、基部には円孔があけられている。體の部分は抉り取

られていることから、小刀の柄に用いられた可能性が考えられる。大きさは13.2cmで、8世紀代の貝塚SMから出土した。

68は、鹿の角坐部分を加工して作られた円環（釧）状の角製品である。内側はきれいに磨かれ、外側は多少調整して故意に凹凸を残しているように見える。大きさは外径で5.5cm、内径で3.2cm、厚さ1.1cmである。年代は、出土層位がV層下部にあたることから、7世紀末～8世紀前半頃のものと推定される。

69～73は、卜骨である。肋骨などの扁平な骨が用いられ、長方形の窪み（鑽）が連続して作られている。窪みの中央には、先が十字形をした焼火箸を押し付けたためか、白く変色したところがあり、一部貫通している。いずれも4次調査のV層からまとめて出土したもので、8世紀代に位置付けられる。県内では、奈良時代のものとして静岡市神明原・元宮川（大谷川）遺跡（解説文1989）、弥生時代のものとして静岡市登呂遺跡や清水市石川遺跡（静岡県1968）出土品が知られている（第118図参照）。

第6章 梶子遺跡6次調査出土木製品

梶子遺跡の6次調査区で出土した木製品を中心に紹介するが、2・7次調査で出土した木製品も一部加える（第98～114図）。まず一覧表の説明をしておく。写図番号欄の「表No.」は、6次調査概報（浜松市1983）の「第2表DD'層出土木製品」の番号である。DD'層は、弥生時代中期中葉の包含層で、瓜郷式土器を多く伴った。「写真No.」は、同概報の写真図版の番号である。「台帳No.」は、現地で作成された遺物台帳の番号を示す。「不明」と記したものと一部のものを除くと、全てDD'層からの出土品である。72～74もDD'層の出土品と思われるが、出土位置・層位を記入したラベルが保管中に外れてしまったため、出土層位を不明とした。

75～98の「出土地区・層位」の欄に、「NT1」「NT2」「NT1」と記したものは、奈良時代の溝の番号である。また「II層」は律令時代の包含層で、上部では灰陶陶器（9～10世紀）、下部では7世紀代の遺物が混じるもの、8世紀代の遺物が多く出土した。

木製品の多くは、弥生時代中期中葉のものであることから、これらについては分類に従い説明するが、奈良時代のものについては第8節でまとめて紹介する。

第1節 農工具

農具には、鋤・鋤・柄振・鎌・田下駄・臼・横樋があり、工具には塗鍛がある。

①鋤・鋤柄・柄振

1～4・11・12が鋤身、13が鋤身の未製品、25・26が鋤柄である。材はカシ・コナラなどのカシ類が多い。1・2・12は曲柄の鋤、3・4・11は直柄の鋤である。

1は平鋤で、刃部は薄く作られ、円弧を描いている。横断面は蒲鉾形を呈する。装着軸には、柄に紐を緊縛するために、上下2ヶ所に幅広い凹帯が作られている。25や26のような膝柄を伴うと考えられる。

2は細長い剣形をした鋤身で、断面形は扁平な菱形を呈している。肩部は怒り肩で、断面半円形を呈する棒状の装着軸が付いている。軸頭は、作り出されていないようである。

3は、直柄の半鋤であるが、周縁部の腐食が著しい。柄穴はほぼ円形で、隆起が作り出されている。

4は直柄の狭鋤であり、隆起は高くしっかりしたものである。柄穴は円形で、柄と身の角度は鋭角となる。鶴嘴状の鋤であったと想像される。

11は直柄の平鋤であり、横断面形は薄い蒲鉾状を呈している。刃部は半らで薄いが、丸い柄穴に向かって厚みを増している。12は1のような曲柄の平鋤と思われるが、装着部をはじめ欠損部分が多い。13は小型であるが、カシ材で、最も厚くなっている所に未貫通の穴が両側から彫られていることから、未製品とした。

25は鋤の木柄であり、装着部の上と下に紐かけ用の凹帯が彫られている。装着面中央に段があることから、これに伴う鋤身にも装着軸に段が作り出されていたはずである。このような例は今回の調査では発見されていないが、市内角江遺跡では、同時期の類例がある。26も鋤の木柄であるが、腐食が

進み、表面は落けてしまっている。鍔台上端部には、紐かけ用の頭が作り出されている。

5はクヌギ材で作られた直柄の柄振で、4本歯をもつ。又鍔もしくは多歯鍔、横鍔の仲間に入れられる場合がある。柄穴の形は、横長の隅丸長方形である。身の上辺部は、円弧を描いている。

②鍔・鍔柄

6・7が鍔身、14が鍔柄である。いずれもカシ類が用いられている。6は一本造りの鍔で、柄の大半と一方の肩部を欠損している。残る肩部には焦げた痕跡がある。平面形は、現在のスコップの形を呈している。柄と身は直線的ではなく、幾分屈曲している。

7は、組合せ式の鍔身である。上辺には装着軸、中央には方形の柄穴、両側面には半円形の抉りがある。肩部から抉りの上部まで、縁が厚く作られている。装着軸には紐かけ用の軸頭がある。14は鍔柄の把手であり、現在のスコップ把手と変わりない。

③田下駄・鎌柄・臼

田下駄は、10の1点が出土しただけである。長方形の板材に、4つの穴が台形に配されていることから、横長の田下駄であったと推定される。

鎌柄は、クヌギ材で作られた8の1点が出土している。柄の基部にはかかりがあり、上に向かって幅広く作られている。実際に握る部分は、断面が梢円形となっている。鎌身をはめるところは、柄と身の角度が鋭角になるように、幅広い蟻溝が彫られている。静岡市有東遺跡の例にあるように、木製の鎌身がはめられていた可能性が高い。

43は、臼の中央部の破片だと思われる。上面は、火を受け黒くなっている。

横槌は、27の1点が出土している。腐朽が進んでいるため、表面の残りは悪い。土圧によるためか、全体的に扁平になっている。

④工具

塗鎧をここで説明するが、苗代の表面を整えるために用いられたとすれば農具、壁塗りに用いられたとすれば工具となる。伊場遺跡出土品については、工具としたため、梶子遺跡のものもこれに従った。

塗鎧は、ケヤキで作られた15の1点が出土している。長さは18.5cm、幅8.5cmで、環状の把手がついている。磨り面は、凸レンズ状の曲面をもっている。周縁部には、焦げた痕跡が認められる。

第2節 狩猟・漁撈・運搬具

狩猟具として弓、漁撈具として舟に伴う櫂とアカカキ、そして舟本体、運搬具としてそりをここでは扱う。

①弓

狩猟具としては、丸木弓が存在するだけである。17～19・21～24の7点が出土している。白木の17～19・21・22はイヌマキ、飾り弓の23・24はツリバナが用いられている。

17は現存長118.7cmであるが、片方の弓弭は欠損している。現状では反りではなく、ほぼ直線状になっている。芯持材であるが、断面を見ると、弦が張られる側が削りこまれている。弓弭は、弦を掛けるために両側から三角形の切り込みが入れられている。

18・19・21・22は丸木弓の破片である。17と同じように芯持材で、弦側が削り込まれている。22の

弓弭は、4面から削り込んで作り出されたものである。24は全面に黒漆が塗られた弓幹の破片、23は蔓が巻かれた弓弭近くの弓幹破片である。材が同一であることから、1個体であった可能性が高い。2点とも、断面形が橢円形をしているが、木目ははっきりしない。

②櫂

櫂は、29と30の2点が出上している。29はサクラ、30はヒノキ材が使用されている。29は長方形の水かきに、断面形が丸～隅丸方形の柄がつく。水かきと柄の間は、明確な肩を有する。柄の先端は断面四角形で、擦れた痕跡らしい小さな滝みが認められる。

30は、柄から徐々に幅を広げて水かき部に移行するものである。この形態の櫂が、弥生時代から奈良時代の一般的なものである。材はヒノキ材が用いられており、櫂の材としては珍しい。しかし、角江遺跡から出土した櫂の中にも、スギやヒノキなど針葉樹が少数認められていることから、弥生時代には、材はカシ類に限定されていなかったと考えられる。

③アカカキ・舟材

アカカキは、サクラ材で作られた9の1点が出上している。現代の座取り形をしたもので、全長は31cmで、長さ10cmほどの把手がついている。身の作りはやや深く、先端は使用されていたためか擦れている。

舟材は、50と51の2点がある。材がクリとシイであることから、別々の舟であったと考えられる。2点とも丸舟の船首もしくは船尾の破片で、土圧のためか歪んでいる。50の舳先もしくは舳には、方形の孔があけられている。係留するために紐を通していったのだろうか。

④そり

16は、運搬具としてのそりとした。横断面形は、滑り面が曲面をもち、凸レンズ状をなしている。上面には、隆起が作り出され、そこに2つの穴があけられている。そりは、このような台木を2つ左右に並べて、横桟を渡して作られていたと考えられる。

第3節 紡織具・容器

①紡織具

紡織具には、機織具の部品と思われるものに39と40がある。39は再加工されて杭に用いられているようであるが、本米は両端に頭をもち、中央が彫り窪められ、しかも半らに面取りされていたと考えられる。40は中央が半らにされた両頭棒であることから、39と同じ仲間であろう。静岡市登出遺跡や、沼津市雞鹿塚遺跡に類例があり、布巻具と考える研究者が多い。

②容器

容器には、刳り物としての槽と片口鉢がある。

28は、長さ約26cmの隅丸長方形をした槽で、長さ約10cmの把手がついている。腐朽が進んでおり、底部は薄くなっている。49は大型の槽のようであるが、傷みが著しい。28はケヤキ、49はヒノキ材で作られている。

48は、平面形が滴形をした底部と思われる破片であり、片口鉢であった可能性が高い。

第4節 建築部材

①梯子

梯子は、クリの芯持材を用いた70の1点が出土している。現存長156cm余りで、4段に足掛けがあるが、下端は腐朽し、どの程度まで下に続いているかは不明である。上端は当時のままのようである。芯の部分は、腐朽により中抜けになっている。

②垂木・桁梁材・扉板

垂木もしくは桁梁材と考えられるものに、72と73がある。72は抉りが2方向から入れられた角材である。下端は4面から削り込まれているが、先端は尖っていない。73は一端を段状に抉った丸太材で、もう一端は欠損しているため、本来の長さは不明である。74は断面四角形の柄が作り出された丸太材で、大きさからして建築部材であった可能性が高い。なお71は、伊場遺跡の大溝から出土した垂木材である。

その他、44は扉板に作り出されていた門受けの破片のようである。長方形の隆起に対し、横位に方形の門孔となりうる孔があけられている。ただし、門受けらしい部分以外は、ほとんど再加工が施されているようである。材は、広葉樹である。

第5節 その他の木製品

①有頭棒

有頭棒には、31～38・41・42がある。31と38は大型品であり、建築部材であった可能性もある。32と33は片方にだけ頭があり、35は両端に頭が作り出されている。34は、中央近くに段状の加工が施されている。31の下端は、焦げて尖っている。33・38・41は芯持材、それ以外は割材である。ただし41は、半截された材が用いられている。

②納材

納材には52～59・94があり、52～55・94が出納材、56～59が納穴材である。52は断面四角形の厚い板材の小口部分に、断面円形の出納が作り出されている。53は断面円形の芯持材で、現状では一方の小口に断面円形の出納をもつ。54は、52と同じようなものようである。55は53に似ているが、作りは粗い。94は、芯持材の丸太材が使用されたもので、53と同形態である。

56は、厚い板材の端部近くに方形の柄穴があけられたものである。57は小型であるが、56とほとんど同じ形態である。ただし、穴は円形に近い。58は、中央が少し括れて細くなった板材で、端部近くには方形の穴、もう一方には未貫通の穴が彫影されている。59は薄い板材で、両端近くに方形の穴をもつが、一端は幅が狭められている。また中央から幅が狭い側にかけて、片面に棱をもっている。

③有孔板他

60～69を有孔板とした。60は、端部近くで段をなして薄くされた板材である。円孔が、2箇所以上にあけられている。61は、縁辺がL字状に厚く作られていることから、大型槽の可能性がある。槽であれば、中央にあけられた孔は、再加工に伴うものとなる。62は隅丸長方形の板材に、方形の穴が2つあけられたものである。63は、やや反りのある幅広い板材で、2穴があけられている。64と65は、

複数の穴があけられた板材である。66と67は、円孔があけられた不定形の大型板材である。68と69は、複数の孔があけられた大型の板材で、69には部分的に焦げが見られる。68の一端には、未貫通の穴（凹み）が彫られている。これらは建築部材の一部であったり、何らかの組合材であったと考えられるが、それが実際何だったのか、明らかにできなかったものである。

その他、47のように角杯形をしたものもあるが、これは自然遺物である。

第6節 奈良時代の木製品

梶子6次調査で出土した奈良時代の木製品は、第112～114図に示した。主にNT1・NT2・NT1'とした奈良時代の溝から出土したものである。II層はこれらの溝の覆土であり、しかも調査のほぼ全域で確認された土層である。NT1の下層は8世紀前半、同上層は8世紀後半の遺物包含層である。

農具としては、鍬身75・田下駄76・馬鍬の歯77がある。鍬身はいわゆるナスピ形の曲柄鍬で、軸部と身本体の一部が残存している。軸部上端には軸頭がある。腐食が進んでいるため、紐の擦れた痕跡は認められない。76は長さ47cmのヒノキの板材で、緒孔が3つがあけられている。大足もしくは輪かんじき型田下駄の足板であろう。なお概報には、大足の横棧らしい木製品が2点出土したとされているが、实物は行方不明である。77は馬鍬の歯で、現状で43.7cmの長さである。下半は断面レンズ状の刃部、上半は断面四角形の基部で、上端には枘穴があけられている。

祭祀遺物には、舟形78、馬形79、簀串80・81がある。78の舟形は、割材が用いられ、船首・船尾は両端を少し削ることで表現されている。上面は少し彫り認められ、船倉が表現され、船底には小孔があけられている。79は平面形がM字形をした馬形で、腹部には小孔があけられている。80と81を簀串としたが、確証はない。ともに下端は、山形に尖っている。81の上端は、欠損している。82～84は、きれいなヒノキの薄板であり、形態から木簡材としたが、全て簀串の可能性もある。

服飾具として、一本造りの下駄が1例出土している。85はII層の下層から出土したもので、8世紀前半代のものである。つま先側が幅広く、かかと側が狭くなっているもので、歯は擦り減って後歯は痕跡すら留めていない。緒孔が3孔あり、上から見ると前壺が左に片寄っており、右足用の下駄であることがわかる。また長期間使われていたらしく、指やかかとの痕が擦れて窪んでいる。

容器としては曲物があり、86～88のカキイレゾコと、89・90のクレゾコのものがある。86は把手の大型梢円形曲物底板の破片で、側板を固定する桙紐が詰まった状態の小孔2つが認められた。87も大型の曲物底板の破片である。補修もしくは貼り合せ用の小孔が、1つ認められた。88はかなり腐朽が進んだもので、辛うじて曲物とわかる。裏面には刃物による切傷があり、縁辺には側板を固定するための小孔の痕跡も認められた。89は、直径12cmほどの円形のクレゾコ曲物底板で、側板を固定していた木釘が2ヶ所に認められた。また裏面には、刃物による「大」の線刻と切傷がある。90は形状及び刃物による切傷があることから曲物底板としたが、外周は焼け焦げており、確實ではない。小孔が1つ認められた。

食事具としては、ヒノキ製と考えられる91の杓文字がある。91は、出土層位から8世紀後半と考えられる。

その他、有孔材92・93と加工棒20がある。何らかの部品のようであるが、はっきりしない。なお94は弥生時代中期のもので、すでに説明した。

木簡は4枚出土しているが、内97・98は同一個体であることから、3点となる。96（1号木簡）は短冊形でNT1の下層から出土した。「□万呂」と記されていたが、保存処置の過程で墨は消失した。95・97・98はNT1'から出土したもので、いずれも8世紀代のものである。95（3号木簡）は上が平らで下が尖る形態のもので、「竹田宗我マ（部）薬師」と記されている。97と98（2号木簡）は、下端は平らであるが、上端は欠損している。「廣麻呂□□」と記されていたが、保存処置の過程で墨は消失した。なお概報の写真には、文字が写し出されているので参考されたい。3点とも、人名を記した付札木簡である。

旧国鉄浜松工場内遺跡もしくは現梶子遺跡から出土した木製品にはその他、2次調査で出土した舟形99と7次調査で出土した下駄100があり、それらを第114図に示しておいた。99は、梶子遺跡の環濠の北側の溝にあたるYTAから出土したもので、弥生時代後期前半の伊場式土器に伴うものである。全長は32cm程で、上から見た平面形は紡錘形、中央部での断面形はV字形に作られている。船倉もしっかり彫り込まれており、全体的に薄い作りである。船首もしくは船尾には、突起が作られている。100は、表土直下から出土していることから、近世の下駄と考えられる。歯は一木造りで、乾燥が進んで変形している。

第7章 市内他出土の木製品

①三和町遺跡出土木製品

第115図1～3は、浜松市三和町遺跡において、工事中に大量の後期弥生土器とともに一括採集された木製品である。この弥生土器は、当地域における後期後半欠山式土器並行期の基準資料（三和町様式）となっている。

1は鍼の柄で、曲柄もしくは膝柄と呼ばれるものである。装着面は平らで、上部には紐かけ用の突起が本来存在したはずであるが、現状では欠損している。下部には紐を緊縛していた痕跡が残っている。柄の断面形は丸で、かかりがある下端は欠損している。2も膝柄の鍼柄であり、装着部上半の破片である。装着面は平らで、上には紐かけ用の突起があり、紐の緊縛痕を残す。

3は方形の枘穴をもつもので、一端は段状に削りこまれている。建築部材の破片の可能性がある。

4は、三和町遺跡から出土した曲物の側板である。口唇部に沈線を施した土師器の坏身が伴出していることから、年代は10世紀代と考えられる。本体は薄板を二重に巻いたもので、その外側にはまわしの側板が4段に巻かれている。下端のまわしの側板には円孔があけられていることから、本来はクレゾコの曲物底板を木釘で留めていたものと考えられる。底板が外されていたことから、井戸枠に転用されていた可能性がある。

②市外の遺跡から出土した木製品

浜松市博物館で保管している木製品には、引佐郡細江町岡の平遺跡・浜名郡雄踏町鹿小路遺跡・清水市石川遺跡から出土したものがある。

第116図1～4は、岡の平遺跡から出土した木製品である。これらは、1960年に日本考古学協会が範囲確認調査を実施したときに出土したものである。報告書は刊行されていないが、弥生時代後期後半

三和町式土器と共に伴したものらしい。

1は二本鉗（多歯鉗＝又鉗）で、全長60cmを超える長いものである。装着部と身上半部の断面形は、蒲鉾形を呈している。装着軸の上端には、紐かけ用の突起が作り出されている。2は、全長124cmに及ぶ鉗柄である。装着部は、腐食により表面が満けている。装着面は平らに加工されているが、紐かけ用の突起は腐食によりはっきりしなくなっている。3は、斧柄である。装着部中央には段が作られており、その下半に扁平片刃石斧もしくは同鉄斧が装着されたものと考えられる。装着部の下端には、紐かけ用の突起が作り出されている。装着部上半には、縱位に稜線が通っている。掘りの断面は、円形である。4は大きさから考えて、鉗柄（曲柄）の未製品と思われる。

第117図5～7が、鹿小路遺跡から出土した木製品である。これらは1974年に発掘調査されたもので、既に浜名郡雄踏町教育委員会により報告書（雄踏町1978）が刊行されている。

5は木製高杯の軸部である。三部材からなる組合式の高杯であり、登凸遺跡に類例がある。断面形は、中央が円形、出納部分が四角形である。6は塵取形のアカカキで、その両側が欠損したものである。把手は円筒形で、断面形は丸い。7は火鑓臼で、棒状の割材の縁辺に6つの焦げた火鑓穴がある。以上3点ともスギ材である。材質鑑定は、県立大庭林業高校木材試験室による（雄踏町1978）。年代は、いずれも弥生時代後期前半の包含層からの出土であり、当期を考えることができる。その他、鹿小路遺跡からは、工事中に梯子が発見されている（第118図参照）。

第117図8・9は、石川遺跡からの出土品である。東名高速道路の建設に先立ち、1965年に発掘調査されたものである（静岡県1968）。これらは、弥生時代後期の包含層から出土した。その他、弥生時代のものとしてト骨と鉄斧の出土が知られている。

8は肩部が怒り肩で、柄が断面円形であることから、又鉗（多歯鉗）と考えられる。歯は現存状況から5本歯が想定される。現存長は、約53cmである。身の中央部はゆるやかに隆起し、歯先に向かって薄くなっている。肩部側面には、2つの刻目が入れられている。材は、カシ材である。

9は全体的に薄い作りの平鉗で、柄穴より上は欠損している。舟形突起が認められるが、ほとんど剥がれ落ちている。柄穴の横には小孔があけられている。現存長27.7cm、幅は16cmで、カシ類で作られている。

第8章　まとめ

第1節　伊場遺跡における木製品の組合せ

伊場遺跡出土の木製品は約1200点を図示し、遺物編1と本編に掲載した。この1200点が、今までに伊場遺跡から出土した木製品の全てである。これに梶子遺跡6次調査で出土した弥生時代中期を中心とした100点の木製品を加え、紹介した。なおこれら出土木製品を基に、挿表8には年代別に主要器種の消長表を示した。あくまでもこの表は、伊場遺跡群での現状を示すに過ぎない。

梶子6次調査で出土した弥生時代中期中葉の木製品の種類は、農耕具では鍬・鋤・柄振があり、その他の農具として田下駄・木刃用鎌柄・臼・横槌等がある。また漁具として舟・櫂・アカカキ、機織部品、容器類として刎物槽、武器（狩猟具）として丸木弓等がある。おおよそ各種の木製品は揃っていると言えるが、斧柄等の工具や祭祀遺物、発火具が欠落している。これら欠落器種については、中期中葉～後葉前半の梶子北遺跡（浜松市1997）の出土例で補うことができる。梶子北遺跡では、堅杵、石斧用の斧柄、発火具の火鑓臼、祭祀遺物としての舟形が出土している。

さらに市内角江遺跡においては、中期中葉～後葉とやや年代的に幅はあるが、木製品のほとんどが種類が揃って出土している（静理文1996）。数量的にも十分に出土しているため、器種組成や各器種における多様性もしくは規格化の程度等を知ることができる。また角江遺跡からは刀杆等の機織具、準構造船らしい船材、盾等の武具、琴等の楽器、剣形・舟形等の祭祀遺物と言った優品が多く出土している。

伊場遺跡出土木製品の内、弥生時代のものは、東部地区の弥生時代環濠と西部地区のA16区杭列周辺から出土したが、その数は少ない。弥生時代後期の木製品の種類には、木甲2点、鍬2点、鋤1点、鎌1点、杵1点、有頭棒等が存在する。環濠はその大半を発掘しているが、調査面積に比べて出土点数は極めて少ないと見える。それにもかかわらず、優れた木甲の出土は、驚くべきことである。

伊場遺跡以外の弥生時代後期の例は、角江遺跡と梶子遺跡（浜松市1991）に存在するが、両遺跡とも少数の木製品が出土したに過ぎず、種類が揃って検出された遺跡は、西遠江では現在報告されていない。古墳時代は、中期の例が恒武町山ノ花遺跡（浜松市1998）・西浦遺跡（静理文2000）でまとまって出土している。古墳時代中期の農耕具については、後述する。

伊場遺跡では、弥生時代以外の木製品のほとんどが、大溝もしくは枝溝の堆積層から出土している。木製品の年代は、古墳時代後期（6世紀）から平安時代後期（11世紀）に及ぶが、奈良時代（8世紀）を中心に、7～9世紀代のものが多い。出土層位は、VII・V・IVの3層を中心である。

7～8世紀の平鍬は、ナスピ形ではほぼ占められている。鋤については、6世紀と9世紀代のものが確認されていないが、本来は存在したはずである。大足や鎌柄も、挿表8では7世紀後半に出現したようになっているが、他遺跡の例を考えると、遡ることは明らかである。馬鍬が7世紀後半に出現しているが、これは東海地方では初現例であり、注目される。漁具の内、櫂やアカカキは全時期を通して見られる。編具も7世紀以降に揃うが、編籠は逆鉢形のAがほぼ7世紀代で姿を消し、8世紀以降には有孔漁鉢形のBだけとなる。機織具は、管大杼が7世紀後半に出現している点、8世紀代にかけ

			AD 弥生時代 中期 後期 櫛子6 伊場理港	500 古墳時代 VII	600 VIIb・c VIIa	700 奈良時代 VI・V4 V2・V3	800 平安時代 V1 IV
生産用具	鍛錬						
	田下	鉢足					
	大馬	鐵鋤					
	代柄	搔					
	鎌	振柄	木刃用	鉄刃用			
	豎	杵	南北	?			
	臼						
	横	杵					
	工具	斧	南北				
		刀子柄					
漁具	筌(エリ)						
	罠	網					
	櫂	櫂					
運搬具	アカカキ						
	舟	負子					
織具	編台						
	織錠A						
機織具	織錠B						
	部品各種						
生活用具	火鉢	臼					
	厨道具等	箸					
		俎					
		案					
容器類	挽物	盤					
	刮物	槽					
	曲物I						
	曲物II						
その他の生活用具	曲物III・IV						
	横下	杓					
武器武具・馬具	横下	歟					
	丸木	弓					
	木	甲					
	壺	鐙					
	鞍						
祭祀用具	人形						
	馬形						
	舟形		南北 櫛子2				
	剣形、刀形			(刀形)			(剣形)
	斎串A						(主体)
	斎串B						(BD)
	斎串C						(少數)
	斎串D						
斎串E							
繪馬							
金属器	鍾身						
	刀子身						
	鉄鎌						
	鉄斧						
	帶金具						
骨角器	留針						
	撥針						
	鶴針						
	結骨						

(注)資料取上げ台帳に単にVII層あるのはVIIaに、V層あるのはVIIに含めた

挿表8 主要遺物年代別編成

かけや糸巻きが豊富に存在する点等が、注目される。紡織関係資料が多いことは、都衙と言った遺跡の性格を表している可能性が指摘されている（向坂 1985・鈴木 1999）。

厨戸具においては、案や俎など優れた指物が8世紀代以降に見られる点が注目される。容器においては、7世紀代には削物槽を中心であったのに対し、8世紀代には曲物が主体となる。大きく主客が変わるのは、7世紀後葉頃であろう。挽物は、伊場遺跡ではどうも8世紀にならないと普及しない。

木製祭祀遺物は、6世紀代では、刀形が知られているに過ぎない。馬形・舟形・車輪は7世紀代に出現するが、多くなるのは人形の出現以降、奈良時代になってからのことである。ただし、舟形については弥生時代から連続と存在する遺物であり、単に6世紀以前の例が伊場遺跡では確認されなかつたにすぎない。

以上、木製品の組合せについて概観したが、伊場遺跡では7世紀前半までは種類において片寄りがあり、7世紀代を通して徐々に充実し、奈良時代に至って全ての種類が揃うと言った出土状況である。奈良時代から平安時代の初め頃（8～9世紀）が、遺構・遺物から見て、伊場遺跡が最も充実していた時期と言える。

第2節 遠江における木製農耕具の変遷

A. 弥生時代

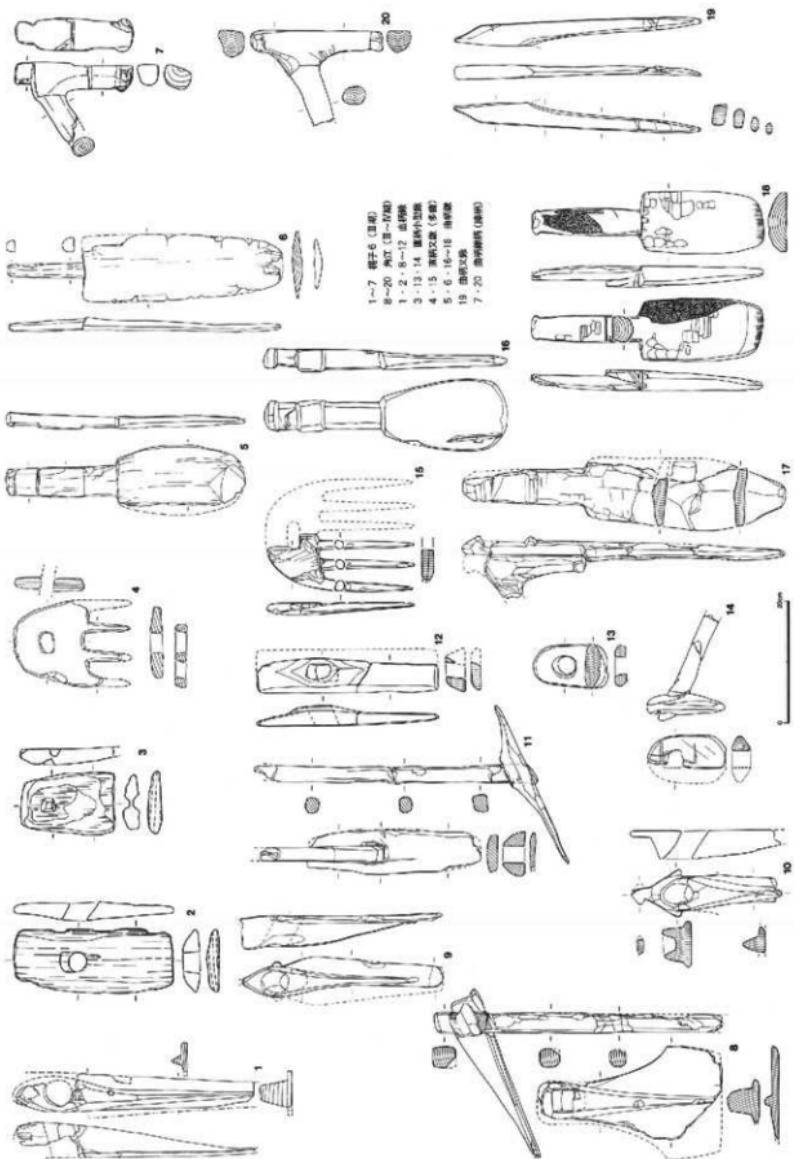
弥生時代中期の鋤は、梶子遺跡6次、梶子北遺跡（浜松市 1997）、角江遺跡（静里文 1996）で出土している。直柄が主体で、曲柄は少数である。直柄には、挿図3-2・8のような平鋤と、1・9のような狭鋤があるが、11・12のような中間的な幅のものも多い。また挿図3-3・13・14のような小型の平鋤も存在する。

弥生時代中期においては、1・8～10のような高い舟形隆起をもつものが特徴的に存在する。高い舟形隆起は、挿図5-1・2のように後期前半にも少数認められるが、後期後半になると、明確なものはほとんど見られなくなる。また中期の高い舟形隆起をもつ鋤身の上部に、三角形・半円形・笠形の突起を伴う例が目立つ。挿図3-10はさらに、擬宝珠状の突起が付く。これらの突起は、単なる装飾なのか、何らかの目的があって作られたのかははっきりしない。なおこの装飾的な突起は、挿図5-2に見られるように、後期後半にもわずかに残存するらしい。2・11・12は、平面形が長方形もしくは梢円形の平鋤であり、少なからず柄穴周辺に隆起をもつ。12の隆起は、舟形を呈している。4・15は直柄の柄振もしくは直柄の又鋤である。

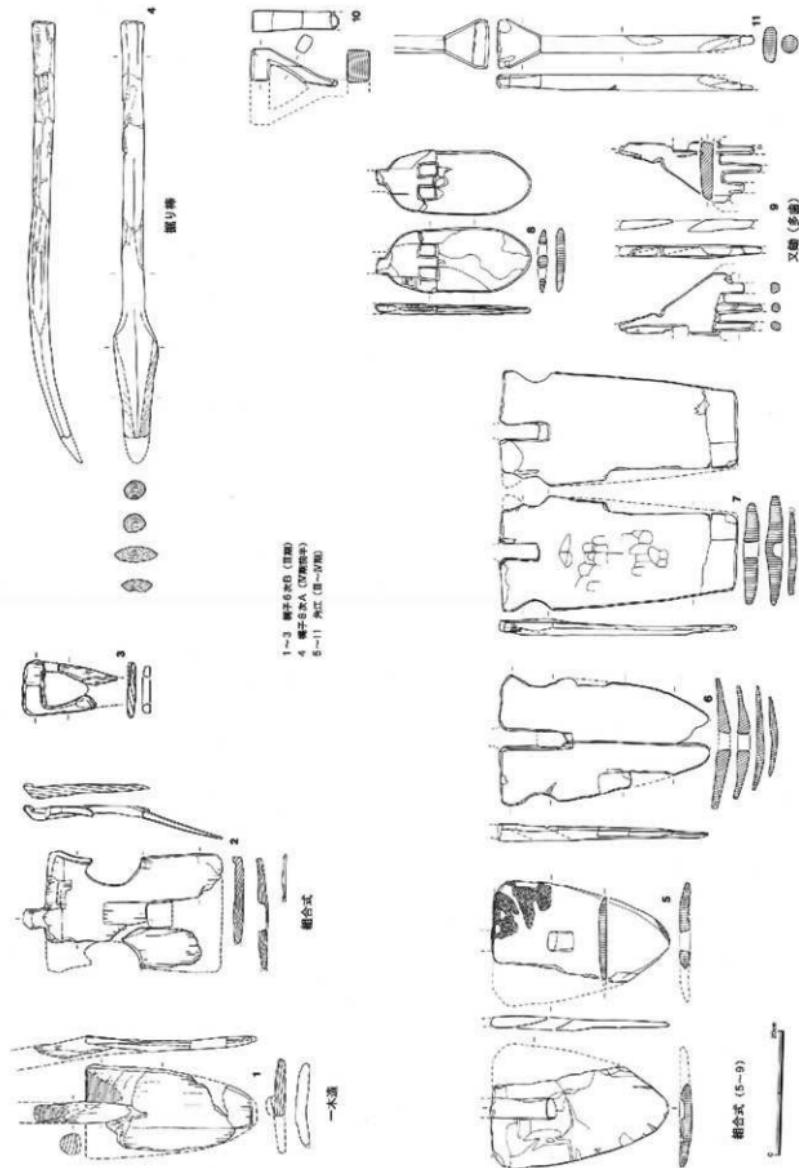
中期の鋤は直柄が主体であるが、5・6・16～19のような曲柄（膝柄）鋤も一定量存在する。5・16～18は断面蒲鉾形の棒状の装着軸に、紐掛け用の凹帯が2条後面に彫られたもので、尾張・三河・遠江に分布する。装着面は一般的に半らであるが、柄の装着面とともに段を作り出す7・18も存在する。6は装着軸が細いもので、後期に引き継がれる。19は多歯の又鋤であるが、肩部の削ぎ落としは後期に引き継がれる要素である。

鋤は、一木造りと組合式の2種類があり、後者の例が多い。一木造りのものには挿図4-1のような現用のスコップ状のものと、4のような掘り棒がある。

組合式には、8のような身に2孔をあけて柄の先端を紐結合するものと、2・5～7のように柄と枘孔を作つて枘組する2者があり、後者の例が多い。前者の例は、後期には静岡県内はもとより東海地



挿図3 弥生時代中期の銀



插図4 弥生時代中期の鉤

方においても知られておらず、中期で姿を消していると考えられる。柄組式の鋤身には、5や6のような劍スコップ形のものと、2や7のように先が平らなものと、9のような多歯のものがある。また2・6・7は側面に抉りが入れられたもので、静岡県を中心に分布する。2のような肩部をJ字形に厚くしたり、縦位に隆帯を作り出して補強するやり方は、朝日遺跡に類例があるように、前期から中期に見られる方法である。

組合式の鋤は、後期にはほとんど姿を消す。わずかに又鋤が角江遺跡において1例、知られているに過ぎない。ところが梶子北遺跡（三永地区）で挿図7-2に示す7世紀代の又鋤が出土していることから、多歯鋤においては組合式が細々と残存したのかもしれない。

弥生時代後期の木製農耕具の例は、必ずしも多くない。遠江においては、東遠江の浜岡町南谷遺跡（浜岡町2001）においてまとまって出土している以外は、各遺跡での出土数はわずかである。駿河では当期の木製品が多く出土しているものの、登呂遺跡を除くと古墳時代前期までと言ったように年代的な幅がある。

後期になると鋤は、直柄に変わり曲柄（膝柄）が主体となる。また中期的な幅広の装着軸から、挿図5-4・7・8のような断面半円形の細長い装着軸へと変化し、紐掛けも凹帯から軸頭に突起を作り出すものへと変化する。直柄も少数あり、1・2のように高い舟形隆起をもつものも一部存在する。ただし前述したように、後期後半から古墳時代前期には、撥形の直柄鋤とともに明確なものは減少し、見られなくなる。又鋤は9のような二又鋤が出現し、後期後半以降、古墳時代前期にかけて盛行する。10・11は又鋤で、多歯のものである。11のように歯が長いものは、静岡県内に多いらしい（樋上1994）。12～15は曲柄で、いずれも膝柄であり、台上端部に紐掛け突起が作り出されている。

鋤は、角江遺跡出土の又鋤（多歯鋤）18だけが組合式であり、他は木造りである。後期になると木造りが主流で、ごくわずかに組合式が存在するだけである。

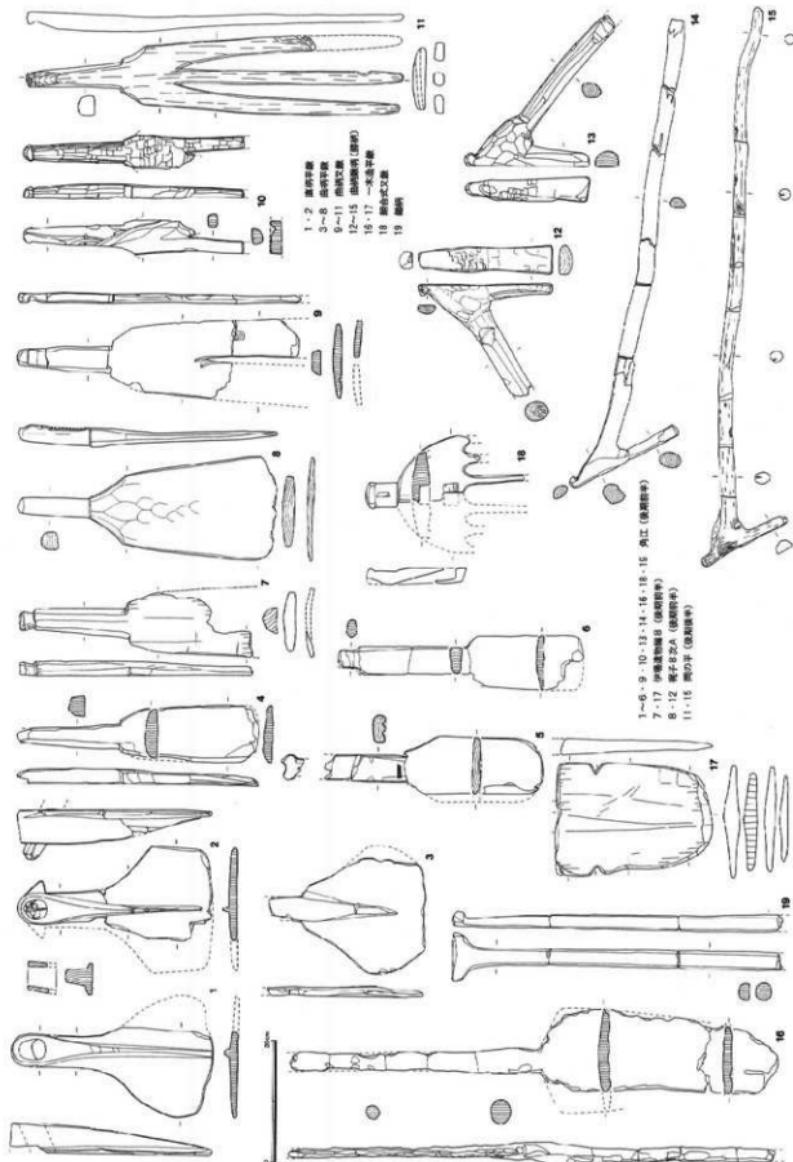
B. 古墳時代

古墳時代前期の例は、西遠江ではほとんど知られていない。東遠江では、御殿二之宮遺跡で又鋤（二又）・4本鋤・平鋤・木造り鋤が出土している。また鎌田・鍬影遺跡と土橋遺跡では、二又鋤が出土している。二又鋤の盛行など、弥生時代後期後半とそれほど変わりない。

これが大きく変化するのは、どうも古墳時代中期中葉のようである。ナスピ形鋤の出現とともに、鋤・鎌の組成は大きく変わる。この時期の木製品は、山ノ花遺跡で、TK73型式の初期須恵器を伴って多くの農耕具が出土した（浜松市1998）。鋤はほとんどが畿内系のナスピ形となり、曲柄は膝柄から全て反柄に変わっている。鋤は二又鋤と平鋤がほぼ半々を占め、平鋤はいずれにも鉄刃が伴う可能性が高い。

樋上氏によって「東海系膝柄鋤」と呼ばれた弥生時代後期から古墳時代前期に盛行した平鋤や又鋤、そして多歯鋤はほとんど見られなくなる。なお山ノ花遺跡では、1例だけ断面半円形の棒状装着軸をもつ平鋤が出土している。また恒武西浦遺跡（静岡文2000）でも同様の多歯鋤が1点出土しているように、完全に消失するのではなく、多少は残存するらしい。

また弓状に湾曲し、内側に三角形もしくは滴形の隆起をもつ直柄諸手鋤が、山ノ花・西浦遺跡、川合遺跡などで出土している。川合遺跡のものは、明確に鉄刃が装着できる作りとなっている。この諸手鋤は、古墳時代中期だけに特徴的に見られるらしい（中山1994）。直柄の柄振（横鋤）は、半円形と



挿図5 弥生時代後期の鍔・鉤

台形のものが山ノ花遺跡で出土している。これはどうも前段階から系譜を引くものではなく、新たに出現したものようである。

鋤は平鋤と又（多齒）鋤があるが、平鋤は鉄刃装着の構造となっている。組合式鋤は、山ノ花・西浦・川合遺跡等、当期の資料を見る限り、存在しない。その他の農具では、大足・鉄刃用鎌柄等の普及は古墳時代中期のようである。

C. 奈良時代

古墳時代後期の様相はほとんど知られていないが、7世紀代になると伊場遺跡の大溝Ⅶ・Ⅷ層において、ある程度の例が出土するようになり、7世紀から8世紀（V・IV層）の状況を推定することができる（挿図6）。平鋤の主体は、古墳時代中期以来の鉄刃装着のナスピ形である。わずかに直柄平鋤10と曲柄又（多齒）鋤9が存在する。鉄刃は、7世紀代には挿図6-2のような円字形のものが出現している。直柄の柄振（横鋤）5や、多齒の柄振6も見られる。また棒状の装着軸をもった狭鋤1・11も少数確認されている。1は、古墳時代後期（6世紀）に遡るものである。

鉄刃装着の一木造り平鋤と又（多齒）鋤の存在は、古墳時代中期と変わりない（挿図7）。なお既述したが、梶子北遺跡（三永地区）において7世紀代の組合式又（多齒）鋤が確認されている。このような鋤は、少數ながら弥生時代から連續と存在していることを示している。

この時期の特徴は、挿図7-3・6に示す馬鋤の出現にある。従来、人力だけに頼ってきた農耕が、牛馬等の畜力を採用することにより省力化され、その分、耕作面積の拡大が図られ、生産力の増加につながったと考えられる。馬鋤と同形態の代孫（挿図6-14～17）の出現は、伊場遺跡での出土例からすれば8世紀となるが、構造から馬鋤と同様に7世紀代に遡る可能性が十分に考えられる。

農耕具において10世紀まで降る資料は、遠江では梶子北遺跡から出土した直柄平鋤の18だけである。駿河では、池谷遺跡から笠部が突起状に変化してしまったナスピ形鋤が出土している。ナスピ形曲柄鋤は、平安時代の内で消失した可能性が高いと考えられる。なお県内における平安時代の資料は乏しく、農耕具の実態はほとんど明らかでない（静岡文1994・樋上1994・中山1994を参考）。

第3節 木甲の復元について

弥生時代の木製短甲（木甲）は、全国的には佐賀県生立ヶ里遺跡（中期前半）、福岡県惣利遺跡（中期前半）、同板付遺跡（後期終末）、同雀居遺跡（後期終末）、長崎県原の辻遺跡（中期後半～後期初頭2点）、岡山県百間川兼基遺跡（中期）、同南方遺跡（中期前半2点）、同鹿田遺跡（中期）、愛媛県阿方遺跡（中期前半）で出土しており、伊場遺跡を含め10遺跡で確認されている（高谷2001）。この内、惣利・雀居・鹿田遺跡から出土したものは、伊場例と同様に彫刻文があり、2例には赤や黒の漆も塗られていた。惣利の木甲には、ゴホウラ形の渦巻文・縦位の波状文、雀居例には三角繋文・細い鋸歯文・連弧文・弧帶文、鹿田例には多条沈線文・同心円もしくは蕨手文が彫かれている。近年、安城市下懸遺跡で発見された古墳時代前期の木甲も、直線文を組み合わせた彫刻があり、赤黒二色の漆が塗られたものである。弥生時代から古墳時代前期の削抜式の木甲は、概して装飾豊かなものである。

弥生時代の木甲で現在確認されている例は、派手な彫刻文が施され、彩色されたものが多い。しかし、当然機能面だけを重視した、白木のままもしくは地味なものが存在していたと推定される。白木

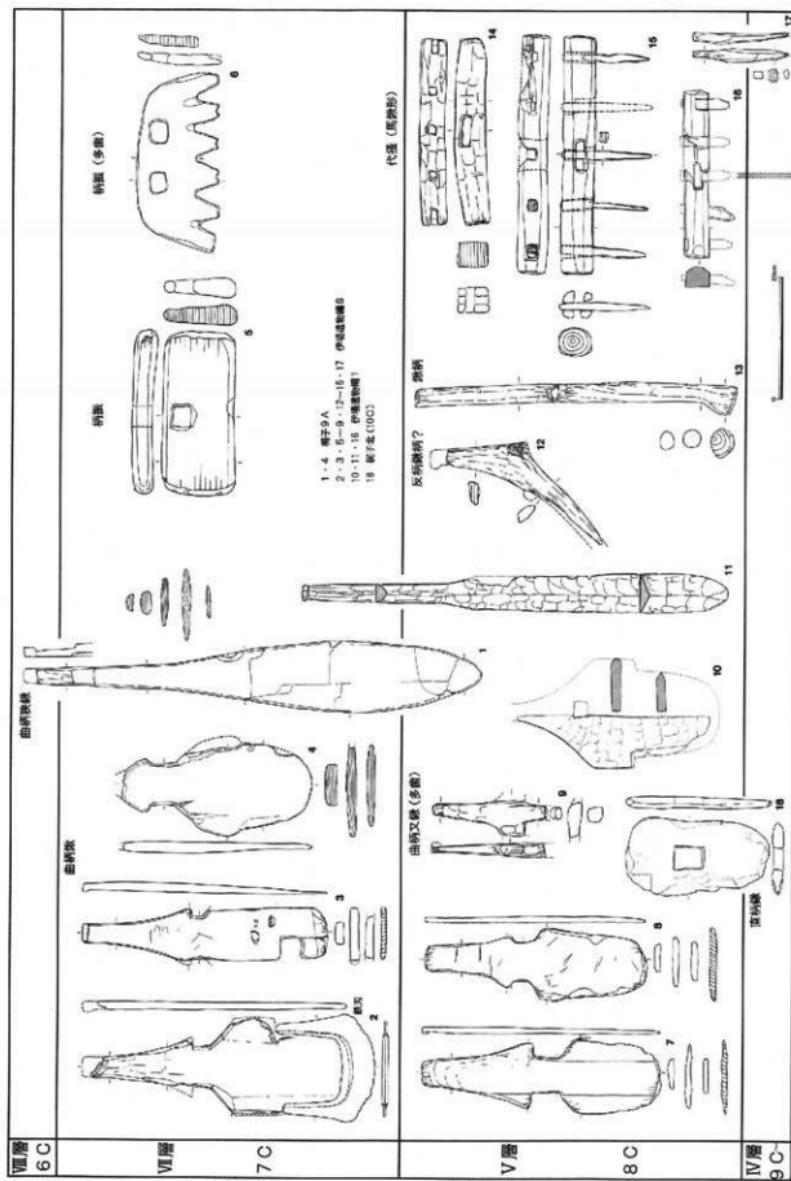
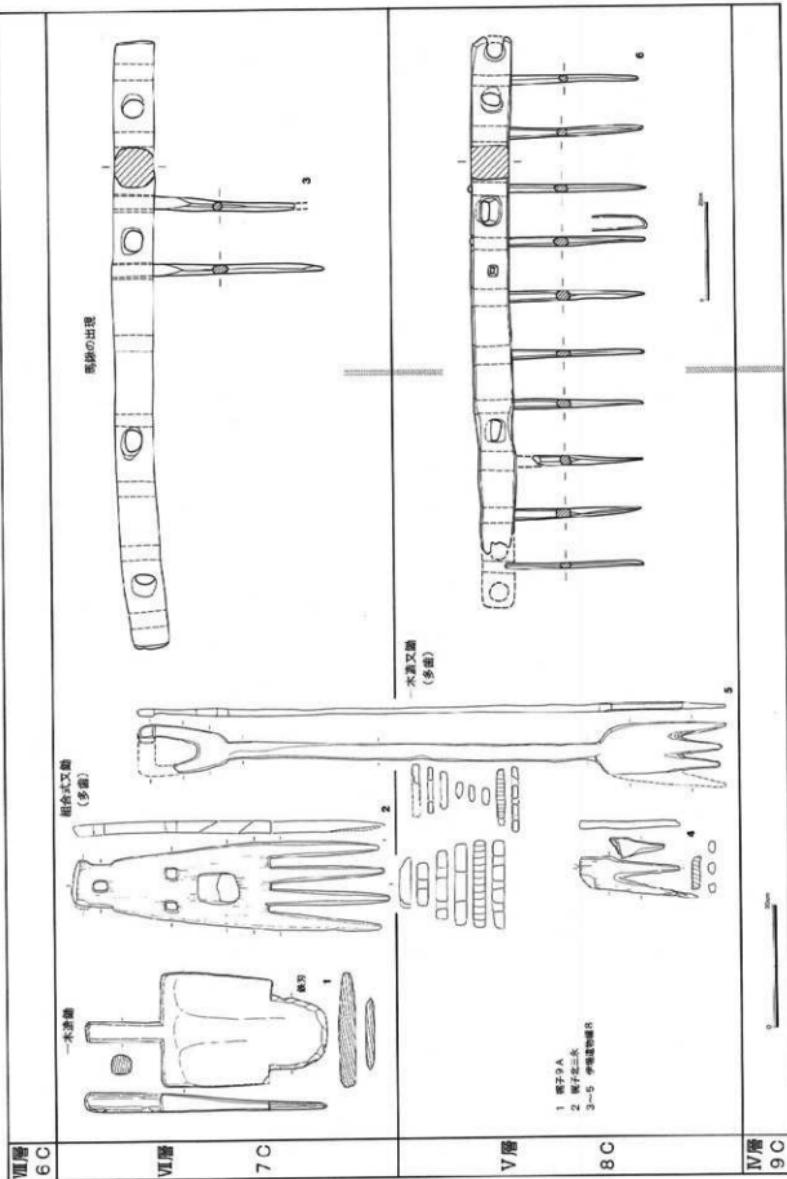
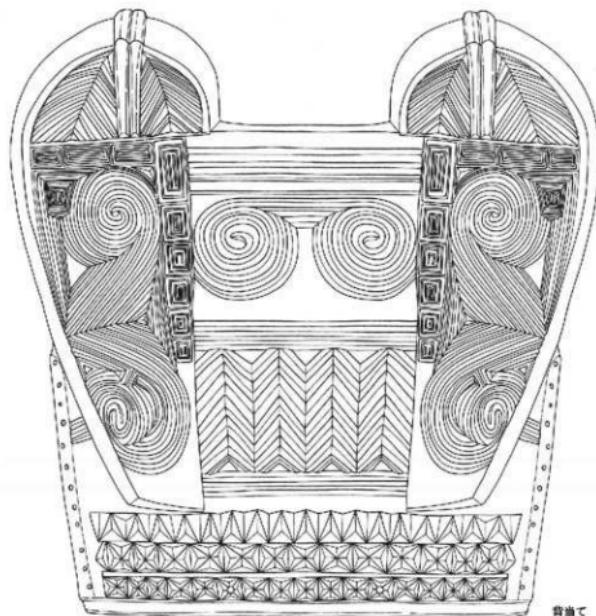


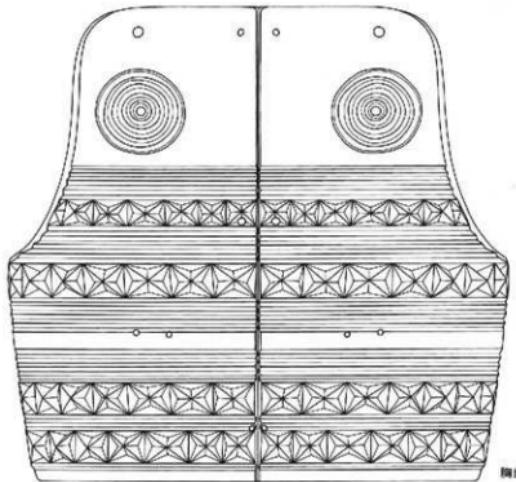
図6 伊場遺跡出土銛・柄振・代鏃



插図7 伊場遺跡出土鋤・馬鋤



背面



胸當

挿図8 木甲復元図 (S=約1/4)

の木甲では破片になってしまふと目立たないために、識別が難しくなっているのではないかと想像される。また革製品など有機質の短甲も存在し、それらが弥生時代では主流であったと考えられている。武具としての甲が普及していたこと、防禦的な環濠の存在、殺傷された痕跡のある人骨等が各地で発見されていることから、弥生時代は戦闘が日常的に存在した戦乱の時代であったことが分かる。

過美とも言える装飾は、祭祀的な色彩が強い反面、相手を威嚇する目的があったとも考えられている（岩永1998）。後者の考えに立つのであれば、特に伊場木甲などは「自から戦闘に加わらず、親衛隊に護衛されて号令する統率者（首長層）が着用した木甲」と評価される（神谷1990）。装飾の有無については、使用者の階層差を指摘する研究者が多い（橋本1996・岩永1999）。また、優れた木甲の存在を一つの根拠にして寺沢薰氏は、伊場遺跡群において櫛子遺跡を一般的な環濠集落、伊場遺跡を三重の環濠が巡る内郭に相当する首長居館とする（寺沢1998）。

伊場木甲等には、威嚇や権力の誇示と言った実利的な側面があるのも事実であろう。一方、祭祀的な側面での評価では、伊場木甲の背面に付けられた翼状の突起は鳥の羽を表したもので、祭祀に伴う鳥装に用いられたとする考え方がある（春成1989・鈴木1999）。鳥は、相靈や穀靈を運ぶ動物として、また鳥自身が祖靈の化現だと信じられた。神像として表される場合、鳥と人が合体し、翼をもつ人として絵画に描かれる。鳥装をした司祭者を描いた絵画土器は、奈良県清水谷遺跡、同坪井遺跡、同唐古遺跡、佐賀県川寄古原遺跡、鳥取県稻古角田遺跡（いずれも中期後葉）等、広く西日本一帯で出土している。鳥装の司祭者が祭儀を担当する風習は遠く、中国雲南省出土の銅鼓文様にもあるように、広く東アジアに基層的な文化として認められている（金闇1987・中村1987等）。弥生時代における鳥装や鳥靈信仰は、稻作とともに中国大陆や朝鮮半島から伝来したのだろう。春には渡り鳥が運んでくる穀靈を招き、農稼を頼る祭祀が行われ、秋には収穫に感謝し、鳥とともに靈を送る。鳥装した司祭者は、川寄古原遺跡出土の鐸形土器の絵画のように武器をもつものがあり、これを祭祀で行われる「模擬戦」を表したものと解釈している（中村1987）。模擬戦は、農凶を占うために行われる習俗で、農耕社会では広く分布している（金闇1987）。伊場木甲も、鳥装した司祭者が行った模擬戦の存在を示すものと解釈できるのかもしれない。伊場木甲は、鳥装のための装具と武具を兼ね備えたものとして、製作されたのだろうか。

伊場木甲の文様は、土器文様との関連が指摘されている（神谷1990・高谷2001）が、祭祀の性格上、土器文様と考えるよりは、同じ農耕祭祀に用いられた鳴り物としての銅鐸の文様や、木などの有機物製の祭祀遺物との関わりを考えたほうが良いであろう。実際、当地方の弥生土器には、中期の綾杉文や平行線文を除くと、木甲に施された主要な文様は、全く見られない。

以上、伊場木甲は精巧なもので、その遺存状況は全国一と言って良く、美術的にも高く評価されている。この木甲は、弥生社会が戦闘の絶えない緊張状態が続く社会であったことを示しているだけではなく、鳥の翼をつけた祭祀的色彩の強い形態であることから、農耕に関わる祭祀に用いられた可能性の高いものである。この木甲を身に着けた人は司祭者であり、また非常時には統率者となり得た人物で、後に首長に成長した階層と考えることができよう。

さて、最後に木甲の復元図（案）を掲載しておいた。木甲は、輪切りにした木材を3分割して、背当て1枚、胸当て2枚を縦木取りして作られたものである（神谷1990）。背当てには、背面に翼を作り出しているため、本体の曲率は弱く、胸当てよりも扁平である。その分、胸当ての曲率は大きく、縦じ合わせは側面よりも少し背中側となっている。

胸当の上端部は欠損しており、春成秀爾氏が復元し、大阪府弥生文化博物館で展示されている模型のように、同心円文の上に平行文帯があったか否かについては不明である。よって本編では、それが無い状態で図化してみた。正面の合口は、上端部が欠損しているが、位置関係から3ヶ所と推定した。なお、胸当の首辺りは鉄製短甲と同じように平らにし、緒孔は同心円文の上に復元した。

背当てについては、左側半分が残るため、左右を反転し、復元してみた。ただし背中中央部が少し欠損していることから、同心円（渦）文と同心円（渦）文との接ぎ方は、実際には不明である。春成氏は連続渦文としたが、当図では双頭渦巻文としてみた。理由は、単に対称性を重視したからである。

参考文献

- 浜松市教育委員会・遠江考古学研究会 1968『伊場遺跡予備調査の概要』
浜松市教育委員会 1976『伊場遺跡発掘調査報告書第1冊伊場木簡』
浜松市教育委員会 1977『伊場遺跡追拂編』
浜松市教育委員会 1978『伊場遺跡遺物編I』
浜松市遺跡調査会 1983『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第VI次発掘調査概報』
(財)浜松市文化協会 1991『梶子遺跡III』
(財)浜松市文化協会 1994『梶子遺跡IX』
(財)浜松市文化協会 1997『梶子北遺跡木器編』
(財)浜松市文化協会 1998『山ノ花遺跡木器編（図版版）』
雄踏町教育委員会 1978『長者平遺跡・施小路遺跡発掘調査報告書』
浜岡町教育委員会 2001『南谷遺跡遺物編（木製品版版）』
静岡県教育委員会 1968『清水市石川遺跡発掘調査概報』『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989『大谷川IV』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『古代における農具の変遷－稻作技術史を農具から見る－』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996『角江遺跡II出土物編2（木製品）』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000『押武西宮・西浦遺跡』
奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録近畿古代篇』
奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録近畿原始篇』
國學院大學 1953『伊場遺跡 西遠地方に於ける低地性遺跡の研究』
岩水省三 1999「戦いのための道具 武器形木器について」『季刊考古学』第47号 雄山閣
上原真人 1993『木器集成図録近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
金闇 惣 1987「続論」「祭と墓と装い」『弥生文化の研究8』雄山閣
神谷正弘 1990「日本出土の木製短甲」「考古学論集III」考古学を学ぶ会
鈴木一有 1999「鳥装の武人」「国家形成期の考古学-大阪大学考古学研究室10周年記念論集」大阪大学考古学研究室
高谷和生 2001『柳町遺跡I』熊本県教育委員会
寺沢 薫 1998「集落から都市へ」「古代国家はこうして生まれた」角川書店
中村友博 1987「武器形祭器」「祭と墓と装い」『弥生文化の研究8』雄山閣
中山正典 1994「静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具」「瀬名遺跡III（遺物編I）」(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
橋本達也 1996「古墳時代前期甲冑の技術と系譜」「雪野山古墳の研究」八日市市教育委員会
春成秀爾 1989「弥生時代の木製司祭服」「歴博」37 国立歴史民俗博物館
機上 昇 1994「木製農耕具の地域色について－ナスピ形鋤を中心にして－」「古代における農具の変遷－稻作技術史を農具から見る－」(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
植上 昇 2001「整理通報 下懸遺跡」「まいぶん愛知」no.66 愛知県埋蔵文化財センター
向坂銅二 1985「古代における貢納織布生産の形態」「論集日本原始」吉川弘文館
鈴木敏則 1999「遠江における原始・古代の紡織具」「浜松市博物館報」第12号 浜松市博物館

伊勢治山木製品(第1~95回)

回数	番号	山川地圖一括	名前	性別	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木	木	木	木	木	木	木	
1	1	A10-V7-V-6	木原(男)	男	34.1	21.1	1.7	カシ	○	?	PED	片、原葉吹(1才)			
2	2-563	C11-V10-V-6	木原(男)	男	48.9	18.7	0.4	ヤマモ	○	?	PED	片、原葉吹(2才)			
3	1	A15-V-6	鏡舟(平野)	男	41.5	15.2	0.3	カシ	○	E	PED	6・7次葉吹に近			
3	-2	A15-V-6	鏡舟(辰巳)	男	16.3	17.5	0.9	(無)	-	-	PED	?	1971		
4	4	A16-V-6	鏡舟(辰巳)	男	28.9	12.1	1.1	カシ	○	E	PED	茎、吸葉あり			
5	6	A16-V-6	鏡舟(平野)	男	36.2	11.6	1.1	カシ	○	E	PED	7次葉吹			
6	6	A16-V-6	鏡舟(平野)	男	39.3	8.5	1.4	カシ	○	E	PED	片の葉吹鏡舟入換			
7	54-2	木E-V-4	鏡舟	男	26.0	6.6	1.2	カシ	○	E	PED	?			
8	65-2	A18-V-4	鏡舟(又解)	男	19.2	5.6	1.3	カシ	○	E	PED	?	木E-又解?		
9	54-4	D-26-V11-V-6	鏡舟(又解)	男	21.3	16.2	2.1	シラカ	○	E	PED	?			
10	28-3	B10-V11-V-6	鏡舟(又解)	男	25.6	16.3	2.0	シラカ	○	E	PED	鏡舟鏡舟	上のひら 神御人船		
11	28-6	A17-V-6	鏡舟	男	25.5	3.4	1.6	カシ	○	E	PED	6・7次葉鏡舟に通			
12	70-4	V-V-6	大丸(辰巳)	男	43.6	6.6	1.4	コノキ	○	E	PED				
13	75-5	A15-V-6	鏡舟	男	11.7	3.5	1.6	カシ	○	E	PED				
14	70-7	A16-V-6	鏡舟	男	32.2	2.5	2.2	カシ	○	E	PED				
15	73-5	A16-V-6	鏡舟	男	34.4	2.5	2.6	カシ	○	E	PED	?			
16	84-2	A18-V-6	鏡舟	男	27.2	3.5	2.9	カシ	○	E	PED	六葉品?			
17	84-4	A18-V-6	鏡舟	男	27.5	3.7	2.9	カシ	○	E	PED				
18	64-5	A16-V-6	鏡舟	男	14.6	5.2	2.1	カシ	○	E	PED	かから鳴 大瀬島?			
19	64-7	A16-V-6	鏡舟(大瀬島?)	男	54.1	6.4	1.6	シノキ	○	E	PED	更深熟化鏡舟の一部を失火			
20	64-7	A16-V-6	鏡舟(大瀬島?)	男	21.4	2.9	3.0	カシ	○	E	PED	6次葉化			
21	-1	105	C16-V-6	鏡舟	男	106.4	7.6	6.6	ミノキ	○	E	PED			
21	2	105	C16-V-6	鏡舟	男	25.3	2.1	3.3	カシ	○	E	PED			
21	3	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	20.3	2.8	2.2	カシ	○	E	PED			
21	4	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	22.6	2.0	2.2	カシ	○	E	PED			
21	5	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	29.3	3.0	2.1	カシ	○	E	PED			
21	6	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	79.3	3.0	1.6	カシ	○	E	PED			
22	-7	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	34.4	2.8	2.5	カシ	○	E	PED			
23	-8	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	35.6	3.2	2.0	カシ	○	E	PED			
23	-9	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	36.1	3.0	2.0	カシ	○	E	PED			
23	-10	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	32.8	2.7	2.1	カシ	○	E	PED			
23	-11	105	C16-V-6	鏡舟(?)	男	34.2	1.6	1.9	カシ	○	E	PED			
23	-11	111-1	C4-V-6	鏡舟(?)	男	123.3	8.0	10.2	カシ	○	K	PED	4本前の小2段存在		
23	-2	111-1	C4-V-6	鏡舟(?)	男	44.6	4.0	2.1	カシ	○	K	PED			
23	-3	111-1	C4-V-6	鏡舟(?)	男	58.7	3.6	2.0	カシ	○	K	PED			
23	-1	111-2	D-V-6	鏡舟(?)	男	61.8	7.5	6.7	カシ	○	K	PED	10次葉		
23	-2	111-2	D-V-6	鏡舟(?)	男	7.1	2.7	1.9	カシ	○	E	PED			
23	-3	111-2	D-V-6	鏡舟(?)	男	6.5	3.3	1.0	カシ	○	E	PED			
23	-4	111-2	D-V-6	鏡舟(?)	男	4.0	3.0	0.6	カシ	○	E	PED			
24	101B-9	A16-V-6	鏡舟(?)	男	34.7	4.5	2.7	カシ	○	E	PED				
25	101B-10	A16-V-6	鏡舟(?)	男	43.2	3.0	3.3	カシ	○	E	PED				
26	101B-11	A16-V-6	鏡舟(?)	男	39.0	2.9	1.4	カシ	○	E	PED				
27	1	96-8	H2-V-2	鏡舟(?)	男	30.1	5.2	4.7	カシ	○	E	PED	5△角		
27	2	96-8	H2-V-2	鏡舟(?)	男	20.9	1.4	1.3	カシ	○	E	PED	鏡舟		
27	-3	99-8	H2-V-2	鏡舟(?)	男	14.6	1.7	1.4	カシ	○	E	PED	鏡舟		
27	-4	99-8	H2-V-2	鏡舟(?)	男	14.2	1.7	1.4	カシ	○	E	PED	鏡舟		
27	-5	99-8	H2-V-2	鏡舟(?)	男	13.9	1.5	1.5	カシ	○	E	PED	鏡舟		
28	-1	111-3	C6-V-6	鏡舟	男	69.3	6.1	4.1	ナリ	○	E	PED	6次葉 10角鏡舟片		
28	-2	111-3	C6-V-6	鏡舟	男	26.6	4.1	2.9	ナリ	○	E	PED	6次葉 10角鏡舟片		
28	-3	111-3	C6-V-6	鏡舟	男	7.4	0.9	0.9	ナリ	○	E	PED	6次葉 10角鏡舟片		
28	-4	111-3	C6-V-6	鏡舟	男	29.6	4.1	2.2	ナリ	○	E	PED	6次葉 10角鏡舟片		
29	111-1	H2-V-4	鏡舟	男	145.7	25.5	4.5	ナリ	○	E	PED				
30	9-11-hu不引	H2-V-4	鏡舟	男	27.1	26.1	4.1	ナリ	○	E	PED				
31	143-4	A16-V-6	竹百子	女	45.6	6.4	2.8	スギ	○	E	PED	投げ1.2m			
32	143-5	A16-V-6	竹百子	女	45.5	6.2	2.8	スギ	○	E	PED	投げ1.2m			
33	154-2	A16-V-6	竹百子	女	45.6	6.3	2.8	スギ	○	E	PED	投げ1.2m	鏡舟に込み		
34	164-2	A16-V-6	竹百子	女	30.7	4.5	2.5	カシ	○	E	PED	投げ1.2m			
35	164-3	A16-V-6	竹百子	女	46.7	4.3	2.9	カシ	○	E	PED	投げ1.2m			
36	164-3	A16-V-6	竹百子	女	33.7	6.5	2.8	スギ	○	E	PED	投げ1.2m			
37	171-1	A16-V-6	竹百子	女	44.6	6.5	2.8	スギ	○	E	PED	投げ1.2m	画面下部に近		
38	175-2	A15-V-6	竹百子	女	39.4	4.4	2.0	ヒノキ	○	E	PED	投げ1.2m			
39	175-3	A16-V-6	竹百子	女	76.9	6.9	3.9	スギ	○	E	PED	投げ1.2m			
40	175-4	A16-V-6	竹百子	女	51.3	4.4	2.6	スギ	○	E	PED	投げ1.2m	鏡舟に近		
41	175-5	A15-V-6	竹百子	女	43.5	6.9	4.0	二重鏡	○	E	PED	投げ1.2m 10角は後 画面長方形			
42	189-9	H2-V-4	鏡舟(自縫版)	男	20.2	5.3	2.3	カシ	○	E	PED				
43	189-9	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	36.6	3.3	1.4	ヒノキ	○	E	PED				
44	189-10	A16-V-6	鏡舟(自縫版)	男	72.4	4.8	2.7	スギ	○	E	PED	納穴に残存 鉛錠孔?			
45	189-11	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	17.4	3.1	5.0	ヒノキ	○	E	PED				
46	189-12	A16-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.4	5.0	4.7	カシ	○	E	PED	鏡舟形			
47	189-13	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	15.3	4.6	4.0	スギ	○	E	PED	鏡舟形			
48	189-14	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	15.3	9.7	6.3	スギ	○	E	PED	鏡舟形			
49	189-15	H2-V-4	鏡舟(自縫版)	男	15.1	5.4	5.0	ヒノキ	○	E	PED	鏡舟形			
50	189-16	H2-V-4	鏡舟(自縫版)	男	14.6	7.3	5.5	ヒノキ	○	E	PED	鏡舟形			
51	189-7	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.5	6.2	4.5	ヒノキ	○	E	PED	鏡舟形			
52	199-8	A16-V-6	鏡舟(自縫版)	男	13.5	6.5	6.1	ヒノキ	○	E	PED	白髪形			
53	199-10	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	17.6	5.0	6.0	スギ	○	E	PED	白髪形			
54	199-11	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	13.8	4.3	3.9	スギ	○	E	PED	白髪形			
55	199-12	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	12.9	5.4	6.0	スギ	○	E	PED	白髪形			
56	199-13	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	12.9	4.6	3.2	ヒノキ	○	E	PED	白髪形			
57	199A-1	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	12.9	7.0	4.0	カシ	○	E	PED	白髪形			
58	199A-2	A16-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.1	7.6	3.2	ヒノキ	○	E	PED	白髪形			
59	199A-3	A15-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.8	7.0	3.4	カシ	○	E	PED	白髪形			
60	199A-4	A16-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.6	6.4	3.4	白髪形	○	E	PED	白髪形			
61	200-5	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.1	5.4	2.6	カシ	○	E	PED	白髪形			
62	200-6	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	12.2	6.7	2.1	白髪形	○	E	PED	白髪形			
63	200-8	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.9	7.1	3.2	ヒノキ	○	E	PED	白髪形	別題10-10		
64	200-9	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.6	7.7	3.7	白髪形	○	E	PED	白髪形			
65	200-10	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	13.7	8.9	4.5	ヒノキ	○	E	PED	白髪形			
66	200-11	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	12.7	7.0	3.5	スギ	○	E	PED	白髪形			
67	200-12	H2-V-6	鏡舟(自縫版)	男	14.0	7.1	3.0	スギ	○	E	PED	白髪形			

品目番号	植物学名	生長状況-周囲	名 称	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	根 棘	止木 棒	紹 介	備 考	
68	201-14	->V 3	海藻	30.7	6.2	2.9	カシ類	E	PED	水孔腐葉形	
69	203-16	->V 2	海藻	33.0	3.9	3.6	立葉海藻	E	PED	水孔形	
70	21A-1	->V 7	海藻	46.4	5.6	2.6	ビノキ	D	PED	棘毛で長い	
71	21B-4	大潮内	海藻	31.2	5.7	2.7	ビノキ	D	PED	底物が薄い	
72	21B-5	<V 8	海藻	32.9	7.9	2.7	ビノキ	D	PED		
73	21B-6	<->IV	海藻	35.2	6.3	2.7	立葉海藻	E	BA	高い作り 偏光?	
74	22A-1	15a-V 1	海藻類 (紫入科)	80.4	6.2	3.6	カシ類	H	PED		
75	22A-2	15a-V	海藻類 (紫付)	75.0	3.0	1.9	ビノキ	C	PED	有効 46.6cmの間に添枝	
76	22A-3	人魚ノヘ	海藻類 (紫付?) ?	67.9	1.6	1.3	ヒノキ	C	PED	古・断続あり 離れて有効、茎割取扱	
77	22A-4	->V 8a	海藻類 (紫付)	73.2	3.3	1.7	ビノキ	B	PED	底度あり 両は斜めで倒れ	
78	22A-5	<->V	海藻類 (紫付)	16.4	2.5	1.5	ビノキ	B	PED		
79	22B-12	15b-V	秋 (えんじ) ツ	61.9	2.2	2.1	スギ	C	PED	巨樹ヨセ酒香	
80	22B-14	15b-V	海藻類 (紫付) ヤ	74.6	2.5	1.2	ビノキ	C	PED	樹皮T-5	
81	23A-1	15d-V	海藻類 (紫付)	25.0	1.9	1.6	ビノキ	C	PED	生葉甲?	
82	23B-9	大潮内	万子ノヘ	23.0	3.6	0.7	ビノキ	C	PED	水面を干す時に切り込み	
83	23B-10	15f-V	海藻類 小刀野草	17.0	2.7	1.4	立葉海藻	C	PED	刀形に葉を作りませ	
84	24B-1	15c-V	海藻類 (紫入科) 深紅	93.3	9.8	1.0	ビノキ	H	PED		
85	24B-3	<->V	海藻類 (紫入科) 深紅	67.9	19.7	1.1	ビノキ	H	PED		
86	24B-4	<->V	海藻類 (紫入科) 深紅	72.5	19.6	1.3	ビノキ	H	PED		
87	25A-1	15z-V	海藻類 (紫入科) 深紅	64.3	11.8	1.1	ビノキ	H	PED		
88	25A-2	<->V 3	海藻類 (紫入科) 深紅	12.0	1.8	1.0	ビノキ	B	PED	細胞自己分泌	
89	25U-4	<->V 9	海藻類 (紫入科) 深紅	42.3	9.6	1.1	ビノキ	B	PED	浮遊工具	
90	26B-1	15z-V	海藻類 (紫入科) 深紅	62.6	42.0	0.9	ビノキ	B	PED		
91	27H-5	<->V	海藻類 (紫入科) 深紅	35.2	8.6	1.0	ビノキ	B	PED	笠状多孔合子	
92	28A-1	15d-V 4	海藻類 (紫入科) 深紅	49.3	10.7	1.1	ビノキ	B	PED		
93	27B-6	15d-V 2	海藻類 (紫入科) 深紅	29.6	2.3	1.1	ビノキ	B	PED		
94	22B-6	15z-V 1	海藻類 (紫入科) 深紅	19.5	26.6	1.0	ビノキ	B	Pa		
95	28B-3	15z-V 8	海藻類 (紫入科) 深紅	32.0	30.8	1.0	ビノキ	B	Pa	2枚並歩合	
96	28B-3	15z-V 4	海藻類 (紫入科) 深紅	12.4	15.6	0.8	ビノキ	A	PED	6.14.7cm	
97	28B-4	<->V 9	海藻類 (紫入科) 深紅	15.2	11.8	0.5	ビノキ	A	PED		
98	28B-5	<->V 2	海藻類 (紫入科) 深紅	17.2	9.6	0.6	ビノキ	A	Ha		
99	28B-8	<->V 2	海藻類 (紫入科) 深紅	15.9	5.5	0.6	ビノキ	A	PED	6.17.4cm	
100	30D-3	<->V 8-V	海藻類 (紫入科) 深紅	18.3	1.4	1.3	ビノキ	H	PED	西海岸工 砂漠地図	
101	50B-2	15z-V 2	海藻類 (紫入科) 深紅	20.0	11.0	0.6	ビノキ	A	PED		
102	30C-6	<->V 3	海藻類 (紫入科) 深紅	28.5	9.0	1.2	ビノキ	B	PED	±1.2cm 幅和せ合せ	
103	30C-7	15D-V 7	海藻類 (紫入科) 深紅	19.0	10.1	0.8	スギ	B	PED		
104	30B-8	14-V 4	海藻類 (紫入科) 深紅	13.6	3.7	1.3	スギ	B	PED	写真工	
105	30C-9	13-V 9	海藻類 (紫入科) 深紅	24.8	3.8	2.4	スギ	B	PED	樹幹多孔野上	
106	31A-2	15d-V 5	海藻類 (紫入科) 深紅	16.3	12.5	0.7	ビノキ	A	PED	擦印 小石	
107	31A-2	<->V 6	1号形海藻板 (クレゾン)	25.0	12.4	1.2	ビノキ	S	Ha		
108	32A-2	5-V 4	1号形海藻板 (クレゾン)	28.7	10.8	1.1	ビノキ	A	PED		
109	32A-3	15z-V 5	1号形海藻板 (クレゾン)	18.2	7.8	0.7	ビノキ	A	PED		
110	32B-4	15z-V 6	1号形海藻板 (クレゾン)	13.0	6.6	0.7	ビノキ	A	PED		
111	32B-5	15z-V 1	1号形海藻板 (クレゾン)	15.4	6.2	0.6	ビノキ	A	PED		
112	32B-6	15z-V 4	1号形海藻板 (クレゾン)	12.0	6.6	0.6	ビノキ	A	PED		
113	32B-9	<->V	1号形海藻板 (クレゾン)	11.2	3.8	0.6	ビノキ	A	PED	別図15-12	
114	32D-10	<->V 上	1号形海藻板 (クレゾン)	10.6	6.8	0.5	ビノキ	A	PED	虫 取れあわ	
115	33A-2	15c-V 4	1号形海藻板 (クレゾン)	15.1	14.8	0.8	ビノキ	A	PED		
116	33C-10	15c-V 1	1号形海藻板 (クレゾン)	12.5	12.2	0.6	ビノキ	A	PED	側面直筋	
117	34B-2	15c-V 1	1号形海藻板 (クレゾン)	12.3	11.5	0.7	ビノキ	A	PED	側面直筋 3.5cm 側面直筋	
118	35A-4	15z-V 7	海藻類	16.6	6.0	0.6	ビノキ	C	PED		
119	35A-8	15g-V 6	海藻類	23.5	4.8	1.0	スギ	B	PED	身辺酸素高いレンズ状	
120	35G-12	<->V 7-V 2	海藻類	29.0	6.9	2.2	ビノキ	A	Ha	底生半柱近枝叶 高原? 強生葉に鉢入	
121	35H-5	15z-V 9	海藻類	29.3	37.0	7.0	エビヅル	E	PED	引物 先品	
122	35H-6	15z-V 9	アカガサ	37.7	11.8	6.1	ビノキ	B	PED	空場	
123	35H-7	15z-V 9	アカガサ	23.3	8.0	6.1	ビノキ	S	PED	空場	
124	35H-8	15z-V 4	アカガサ	32.2	9.4	3.5	カシ類	E	Ha	空場	
125	35H-9	15z-V 4	アカガサ	30.1	2.6	1.1	ビノキ	C	PED		
126	35H-10	15z-V 8	アカガサ	12.7	3.0	1.1	ビノキ	D	PED		
127	35H-11	15z-V 7-V 2	アカガサ	99.6	6.0	2.0	カシ類	E	PED	15mmに複数生欽前 底生直筋	
128	-1	40A-1	15z-V 1	葉 (天葉)	63.1	11.4	4.1	スギ	B	PED	
129	-2	40A-1	<->V 3	葉 (天葉)	13.7	12.2	2.4	ビノキ	C	PED	
130	-3	40A-1	<->V 5 (天葉)	10.6	10.8	2.0	ビノキ	C	PED		
131	51A-1	15z-V 8	葉 (天葉)	5.2	6.5	0.9	不明	A	PD	葉は6本 1本で木 平場	
132	51A-2	15z-V 8	葉 (天葉)	5.2	4.3	0.9	不明	B	PD	葉は6本で木で木 平場	
133	51A-3	15z-V 8	葉 (天葉)	5.0	4.3	0.9	不明	A	PD	葉は6本で木で木 平場	
134	51A-4	15z-V 8	葉 (天葉)	4.9	4.8	2.0	不明	B	PD	葉は6本で木で木 平場	
135	51B-5	15z-V 3	葉 (天葉)	6.0	8.0	0.8	不明	B	PD	葉は6本で木で木 平場	
136	51B-6	15z-V 3	葉 (天葉)	5.6	2.0	0.5	不明	A	PD	葉は6本で木で木 平場	
137	51B-7	15z-V 3	葉 (天葉)	2.6	7.0	1.0	不明	B	PD	葉は6本で木で木 平場	
138	51B-8	15z-V 8	葉 (天葉)	2.4	1.6	0.8	不明	F	PD	葉は12本で木 平場	
139	51B-9	15z-V 4	葉 (天葉)	18.4	9.2	3.2	立葉海藻	K	PED	西海岸山林、海岸上に多い	
140	56D-3	15z-V 4-V 3	葉 (天葉)	25.7	11.1	2.9	ビノキ	B	PED		
141	56D-4	15z-V 4-V 3	葉 (天葉)	21.3	12.3	1.0	ビノキ	C	PED	枝葉形 6-7木で木に回	
142	56D-5	15z-V 4-V 3	葉 (天葉)	14.9	19.1	3.8	ビノキ	B	PED	見掛けによると 麗葉樹に?	
143	56A-1	15-V 4-V 8	葉 (天葉)	74.4	10.4	9.5	スギ	D	PED	葉端落葉過多 手元付	
144	57A-1	15-V	葉 (天葉)	113.0	7.7	..2	カシ類	E	PED		
145	59A-4	15z-V 4	葉 (天葉)	5.9	2.2	0.5	スギ	A	PED	人字葉面	
146	59A-5	15z-V 4	葉 (天葉)	5.6	1.9	0.7	ビノキ	B	PED	人字葉面	
147	60A-3	15z-V 5	葉 (天葉)	11.1	2.6	0.5	ビノキ	A	PED	下枝葉被に切り込み	
148	60A-4	15z-V 6-V 3	葉 (天葉)	14.1	1.7	0.5	ビノキ	B	PED	葉	
149	60A-5	15z-V 6-V 3	葉 (天葉)	16.1	2.2	0.6	ビノキ	B	PED	下枝葉被 下枝葉被に切り込み	
150	61A-1	15z-V 4-V 3	葉 (天葉)	14.9	3.4	0.5	ビノキ	C	PED	葉端落葉	
151	61A-2	15z-V 4	葉 (天葉)	18.4	2.8	0.5	ビノキ	B	PED	葉端	
152	61A-3	15z-V 3	葉 (天葉)	13.8	2.9	0.7	ビノキ	B	PED	葉端	
153	61A-5	15z-V 3	葉 (天葉)	12.2	2.8	0.8	ビノキ	D	PED	葉端	
154	61A-6	15z-V 6	葉 (天葉)	6.1	1.6	0.4	ビノキ	B	PED	お宅鏡片	
155	61A-7	15z-V	葉 (天葉)	6.6	2.0	0.2	ビノキ	B	PED		
156	61B-9	<->V 8-V 6	葉 (天葉)	23.5	3.2	1.1	スギ	A	PED	木部側では馬刺としている	
157	61B-11	<->V 5	葉 (天葉)	22.9	1.5	0.9	ビノキ	C	PED	2.6~2.8cm位の刺	

植物名	学名	生息地	原产地	品 种	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	山	木 本	附 生	特 性
157	65A.12	25m IV	原野	梅6	25.5	1.6	0.2	ヒノキ	A	PBG	ドリニ小札
158	65A.3	6m-V	原野	梅6	20.0	1.7	0.2	ヒノキ	C	PBG	原生地に見り立ふ
159	65A.6	6m-V	原野	梅6	11.0	2.5	0.2	スギ	B	PBG	
160	65A.4	11m-V-VI	原野	梅6	9.5	2.6	0.6	ヒノキ	A	PBG	
161	65A.1	11m-V-VI	原野	梅6	20.5	6.7	0.2	ヒノキ	C	PBG	風も大樹
162	65D.4	11m-V	原野	梅6	17.0	2.8	0.6	ヒノキ	B	PBG	
163	65D.5	11m-V	原野	梅6	18.0	5.1	1.2	ヒノキ	B	PBG	
164	67A.2	45m-V	原野	梅6	73.1	2.7	1.4	ヒノキ	A	PBG	
165	66A.1	11m-V-V	原野	梅6	21.7	2.6	1.5	ヒノキ	B	PBG	原生地に見り立ふ
166	66A.2	72m-V	原野	梅6	24.1	2.0	1.6	ヒノキ	B	PBG	原生地に見り立つ
167	66A.3	8m-V-V	原野	梅6	22.4	5.3	2.2	スギ	D	PBG	原生地に見り立つ
168	66D.5	7m-V-V	原野	梅6	23.2	2.8	1.1	ヒノキ	S	PBG	内山に見り立つ
169	66D.6	11m-V	原野	梅6	25.2	3.6	1.6	スギ	C	PBG	原生地に見り立つ
170	70A.3	11m-V	原野	梅6	17.0	3.2	1.3	ヒノキ	C	PBG	
171	70E.4	11m-V	原野	梅6	19.1	2.7	1.9	ヒノキ	D	PBG	
172	70E.6	11m-V-VI	原野	梅6	18.1	2.0	1.9	ヒノキ	A	PBG	
173	70E.8	11m-V	原野	梅6	15.9	2.3	1.6	ヒノキ	A	PBG	
174	71A.6	N21-V-IV	森林	梅6	10.1	2.8	1.2	ヒノキ	C	PBG	
175	72A.3	6m-V	森林	梅6	16.5	2.3	1.9	ヒノキ	R	PBG	
176	72B.2	4m-V	森林	梅6	14.4	1.9	0.8	ヒノキ	A	PBG	
177	74A.1	11m-V	森林	梅6	15.5	1.6	1.1	ヒノキ	A	PBG	
178	75A.1	11m-V	森林	梅6	23.7	2.1	0.6	ヒノキ	B	PBG	
179	75B.1	4m-V	森林	梅6	15.2	2.6	0.6	ヒノキ	A	PBG	
180	76A.1	11m-V	森林	梅6	20.4	3.0	1.1	ヒノキ	C	PBG	船宮・御所に朱書き
181	77A.3	11m-V	森林	梅6	23.7	5.9	0.4	ヒノキ	B	PBG	
182	77A.4	11m-V	森林	梅6	22.0	1.6	0.6	スギ	A	PBG	
183	77B.9	11m-V	森林	梅6	15.3	1.3	0.2	ヒノキ	B	PBG	
184	77B.12	H3-V-V2	森林	梅6	23.6	2.0	0.3	ヒノキ	B	PBG	
185	77E.14	6m-V	森林	梅6	25.0	1.8	0.6	ヒノキ	C	PBG	
186	78A.2	11m-V	森林	梅6	16.0	3.0	0.7	ヒノキ	A	PBG	
187	78B.10	11m-V	森林	梅6	8.5	1.6	0.5	ヒノキ	R	PBG	
188	78B.21	H3-V-VI	森林	梅6	7.6	2.2	0.4	ヒノキ	A	PBG	
189	81D.9	11m-V	森林	梅6	17.0	3.1	0.6	ヒノキ	R	PBG	木駒?
190	81D.21	H6-VII	森林	梅6	18.6	2.7	0.5	ヒノキ	A	PBG	
191	82A.2	6m-V	森林	梅6	11.2	1.6	0.2	ヒノキ	B	PBG	
192	82A.3	6m-V	森林	梅6	14.1	1.6	0.3	ヒノキ	B	PBG	
193	82A.11	H3-V	森林	梅6	14.8	1.8	0.2	ヒノキ	B	PBG	
194	82B.17	11m-V-V-S	森林	梅6	20.2	2.6	0.9	ヒノキ	A	PBG	
195	82B.18	11m-V-V	森林	梅6	9.6	1.6	0.5	スギ	C	PBG	
196	84B.16	11m-V	森林	梅6	24.7	8.0	0.2	ドノカ	C	PBG	
197	84B.17	11m-V	森林	梅6	9.0	7.8	2.4	ヒノキ	A	PBG	一葉原物
198	84B.18	11m-V	森林	梅6	28.6	9.4	0.2	スギ	B	PBG	日向原木?
199	85A.1	6m-V	森林	梅6	32.5	6.7	0.2	スギ	B	PBG	日向原木?
200	86A.1	11m-V	森林	梅6	15.8	6.2	0.2	オシロ	H	PBG	御庭ノ木利村414
201	86B.12	6m-V-V3	森林	梅6	47.3	5.7	4.0	オシロ	H	PBG	把子木利村414
202	86B.13	11m-V	森林	梅6	27.1	4.2	3.2	スギ	H	PBG	愛らんと見えし。木製馬?
203	86B.14	6m-V-V6	森林	梅6	21.5	2.5	3.5	ヒノキ	H	PBG	愛らんと見えし。木製馬?
204	86B.15	44m-VES	森林	梅6	18.7	1.6	0.6	ヒノキ	A	PBG	写真ノ木利村414
205	86B.16	6m-V	森林	梅6	19.5	2.4	0.8	スギ	H	PBG	空出地に植地。馬?
206	86B.17	6m-V	森林	梅6	23.6	2.9	0.6	ヒノキ	C	PBG	御庭ノ木利村?
207	86B.18	6m-V	森林	梅6	41.3	2.4	2.1	ヒノキ	C	PBG	御庭ノ木利村?
208	86B.19	6m-V	森林	梅6	47.5	3.2	2.4	ヒノキ	A	PBG	御庭ノ木利村?
209	86B.20	#3-V-V8	森林	梅6	26.8	11.5	3.6	ヒノキ	A	PBG	御庭ノ木利村?
210	99B.14	11m-Va	森林	梅6	20.6	5.8	5.0	ガシ節	3	PBG	
211	100B.2	4m-V	森林	梅6	14.8	1.9	0.6	ヒノキ	3	PB	
212	100B.14	11m-V-V	森林	梅6	8.6	1.3	0.4	ヒノキ	A	PBG	
213	100B.14	11m-V-Va	森林	梅6	5.8	1.5	0.2	ヒノキ	3	PB	
214	100B.16	11m-V	森林	梅6	2.3	8.1	0.6	ドノカ	C	PBG	
215	100B.16	11m-V	森林	梅6	6.6	3.2	0.4	ヒノキ	A	PBG	神田ウ 丁子之作
216	100B.17	11m-V	森林	梅6	6.5	2.6	0.4	ヒノキ	C	PB	
217	100B.18	11m-V	森林	梅6	8.8	2.2	0.2	ヒノキ	C	PB	
218	100B.19	11m-Vb	森林	梅6	11.5	2.6	0.7	スギ	C	PBG	下野原 旗頭
219	99B.8	6m-V-V3	森林	梅6	39.5	3.1	1.2	ヒノキ	C	EA	
220	99B.9	12-L-V-V4-V	森林	梅6	29.0	4.5	0.8	ヒノキ	A	EA	
221	99B.10	11-V-V4-V	森林	梅6	27.1	3.3	1.6	スギ	B	EA	
222	99B.11	H4-V	森林	梅6	40.9	2.3	1.1	ヒノキ	A	EA	
223	99B.12	H6-V	森林	梅6	9.5	2.0	0.5	ヒノキ	B	EA	
224	99B.12	H5-V	森林	梅6	19.5	3.5	1.5	スギ	B	EA	
225	99A.2	H6-V	森林	梅6	25.0	3.5	0.4	ヒノキ	B	EA	
226	99A.4	H6-V-V3	森林	梅6	25.5	3.1	1.3	ヒノキ	C	EA	河岸二
227	99A.5	H6-V	森林	梅6	9.4	2.0	1.7	ヒノキ	B	EA	
228	99A.6	大内門	森林	梅6	23.5	2.9	1.0	ヒノキ	B	EA	
229	99A.7	25 岩	森林	梅6	10.9	1.5	0.9	ムラサキ	E	EA	
230	99A.10	H6-V	森林	梅6	26.9	2.7	0.8	ヒノキ?	A	EA	
231	99A.11	大内門	森林	梅6	41.5	1.7	1.1	ヒノキ	C	EA	
232	101A.1	7m-VI	森林	梅6	33.7	1.8	1.2	ヒノキ	C	PBG	鬼面閣!
233	101A.2	12-V	森林	梅6	33.8	2.5	0.9	ヒノキ	B	PBG	鬼面閣
234	101A.3	11m-V-V	森林	梅6	16.4	2.0	0.5	ヒノキ	B	PBG	
235	101A.7	12-V-V	森林	梅6	33.2	2.4	1.2	ヒノキ	B	PBG	
236	101B.12	2-V-V	森林	梅6	58.3	3.0	2.5	ムラサキ	E	PBG	
237	101B.13	11m-V-V	森林	梅6	32.6	2.6	1.5	ヒノキ	B	PBG	
238	101B.14	11m-V-V	森林	梅6	2.7	2.0	1.5	ヒノキ	C	PBG	
239	101B.15	11m-V-V	森林	梅6	41.3	2.5	0.6	ヒノキ	B	PBG	
240	101B.17	11m-V-V2	森林	梅6	42.1	4.5	2.4	ヒノキ	C	PBG	
241	101B.18	4m-V-V	森林	梅6	39.6	2.6	0.7	スギ	B	PB	青毛?
242	101B.19	2-V-V	森林	梅6	12.7	2.0	0.4	ヒノキ	B	PBG	青毛?
243	101B.21	2-V-V2	森林	梅6	24.1	2.2	0.5	ヒノキ	C	PB	
244	4-206	6m-V	森林	梅6	12.5	3.1	1.0	カシ類?	E	PBG	新屋川
245	4-22	6m-V	森林	梅6	13.0	6.2	3.1	クタ?	E	PBG	新屋川探査、別10.9
246	4-117	A15a. IV	森林	梅6	13.0	6.2	3.9	カツダ?	E	PBG	新屋川探査
247	4-228	H6-V	森林	梅6 (今本)	60.3	8.0	6.0	ヒノキ	A	BS	南山地獄 (カシ)

学名	植物名	地上地名-標位	名 称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	葉 端	花 木	花 開	脚
249 7-21	アサガホ	草原	アサガホ	34.0	6.5	0.5	サカハ	○	エ	PFG
249 7-226	アサガホ	草原	アサガホ	34.0	6.5	0.5	サカハ	○	エ	PFG
250 6-11	アサガホ	人砂原	アサガホ	19.6	1.7	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
251 6-88	アサガホ	人砂原	アサガホ	11.5	1.6	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
252 6-640	アサガホ	毛根林	アサガホ	12.7	3.6	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
253 9-681	アサガホ	人砂原	アサガホ	16.3	9.9	0.5	ヒノキ	○	エ	本属材リ
254 6-96	アサガホ	人砂原	アサガホ	15.1	13.0	1.0	ヒノキ	○	エ	PFG
255 6-2	アサガホ	植物生垣	アサガホ	13.9	6.1	0.5	ヒノキ	○	エ	BS
256 6-179	アサガホ	植物生垣	アサガホ	11.7	3.5	0.5	ヒノキ	○	エ	BS
257 6-5	アサガホ	植物生垣	アサガホ	23.0	3.3	0.6	ヒノキ	○	エ	BS
258 6-105	アサガホ	植物生垣	アサガホ	7.6	3.6	0.6	ヒノキ	○	エ	BS
259 6-182	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	9.7	3.4	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
260 6-203	アサガホ	内形曲輪板(クレゾン)	アサガホ	12.8	5.9	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
261 6-39	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.1	3.4	0.8	ヒノキ	○	エ	PFG
261 6-39	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	11.0	4.1	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
261 6-39	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	6.7	4.7	0.3	ヒノキ	○	エ	PFG
261 6-39	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	5.4	6.2	0.2	ヒノキ	○	エ	PFG
262 6-160	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	67.4	1.2	1.1	ヒノキ	○	エ	BS
263 6-356	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	57.5	3.8	3.3	ヒノキ	○	エ	BS
264 6-82	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	90.6	5.3	5.5	ヒノキ	○	エ	BS
265 6-54	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	48.7	14.6	0.9	ヒノキ	○	エ	BS
266 6-285	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	61.4	6.6	1.0	ヒノキ	○	エ	PFG
267 6-198	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	49.0	7.3	1.2	ヒノキ	○	エ	PFG
268 6-398	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	52.3	7.8	1.2	ヒノキ	○	エ	PFG
269 6-319	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	82.6	6.6	1.2	ヒノキ	○	エ	PFG
270 6-172	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	38.4	7.0	1.1	ヒノキ	○	エ	PFG
271 6-326	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	35.6	14.6	1.1	ヒノキ	○	エ	PFG
272 6-413	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	24.6	10.3	1.0	ヒノキ	○	エ	BS
273 6-420	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	17.3	11.4	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
274 6-409	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	17.2	3.3	1.0	ヒノキ	○	エ	PFG
275 6-304	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	14.3	3.8	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
276 6-191	アサガホ	便付手形曲輪板底版	アサガホ	15.0	3.1	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
277 6-370	アサガホ	内形曲輪板(クレゾン)	アサガホ	16.9	4.4	0.3	ヒノキ	○	エ	PFG
278 6-296	アサガホ	内形曲輪板(クレゾン)	アサガホ	10.1	10.1	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
279 6-239	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	20.3	3.6	0.7	ヒノキ	○	エ	EA
280 6-144	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	35.6	6.3	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
281 6-195	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	36.0	2.1	1.7	スギ	○	エ	PFG
282 6-188	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	5.3	2.6	1.4	スギ	○	エ	PFG
283 6-342	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	16.5	2.6	2.0	スギ	○	エ	PFG
284 6-351	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	14.2	2.7	0.9	スギ	○	エ	PFG
285 6-355	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	9.5	2.2	0.2	ヒノキ	○	エ	BS
286 6-246	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	21.9	10.3	2.2	カシ	○	エ	BS
287 7-117	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.9	7.6	1.5	カシ	○	エ	BS
288 7-556	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.6	1.9	1.2	カシ	○	エ	PFG
289 7-16	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	10.2	2.6	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
290 7-266	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	37.4	6.3	2.0	ヒノキ	○	エ	PFG
291 7-259	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	33.0	6.4	2.0	ヒノキ	○	エ	PFG
292 7-24	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	32.0	6.4	2.0	ヒノキ	○	エ	PFG
293 7-136	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	14.7	7.2	3.5	カシ	○	エ	PFG
294 7-89	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	17.5	6.6	3.7	カシ	○	エ	PFG
295 7-34	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	21.9	10.3	2.2	カシ	○	エ	BS
296 7-113	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	47.6	6.7	0.9	ヒノキ	○	エ	PFG
297 7-187	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	15.0	4.8	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
298 7-134	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.3	7.0	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
299 7-85	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.8	1.7	0.3	ヒノキ	○	エ	PFG
300 6-61	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	77.8	4.8	2.2	ヒノキ	○	エ	PFG
301 6-90	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	33.1	2.6	3.0	スギ	○	エ	PFG
302 6-56	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	35.0	5.3	4.3	ヒノキ	○	エ	PFG
303 6-91	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	30.9	2.2	10.7	カシ	○	エ	PFG
304 6-80	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	26.3	2.8	1.6	カシ	○	エ	PFG
305 6-81	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	5.9	3.2	2.2	カシ	○	エ	PFG
306 6-216	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	38.6	7.2	6.9	ヒノキ	○	エ	PFG
307 6-730	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	36.0	17.8	4.1	カシ	○	エ	PFG
308 6-485	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	31.2	3.7	4.9	カシ	○	エ	PFG
309 6-102	アサガホ	内形曲輪板(丸木)	アサガホ	9.3	1.9	1.0	スギ	○	エ	PFG
310 6-246	アサガホ	内形曲輪板(實) 2	アサガホ	7.7	2.1	0.6	ヒノキ	○	エ	BS
311 6-62	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	42.3	5.1	3.2	ヒノキ	○	エ	BS
312 6-6	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	132.6	2.5	2.5	イヌキ	○	エ	PFG
313 6-143	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	30.2	4.9	4.5	針葉樹	○	エ	PFG
314 6-147	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	6.5	7.3	3.8	针葉樹	○	エ	PFG
315 6-47	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	70.0	7.1	0.9	ヒノキ	○	エ	PFG
316 6-114	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	19.6	19.6	0.6	ヒノキ	○	エ	PFG
317 6-163	アサガホ	内形曲輪板(クレゾン)	アサガホ	17.5	17.8	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
318 6-232	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	35.6	13.0	6.0	カシ	○	エ	PFG
319 6-29	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	27.3	5.6	4.3	针葉樹	○	エ	PFG
320 6-45	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	24.0	2.8	1.7	ヒノキ	○	エ	PFG
321 6-207	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	25.3	3.7	1.7	ヒノキ	○	エ	PFG
322 6-123	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	22.1	3.7	3.3	スギ	○	エ	PFG
323 6-78	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	22.6	1.3	1.3	ヒノキ	○	エ	PFG
324 6-158	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	14.5	3.5	1.1	ヒノキ	○	エ	PFG
325 6-79	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	18.0	2.1	1.6	ヒノキ	○	エ	PFG
326 6-107	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	13.1	1.4	1.8	スギ	○	エ	PFG
327 6-167	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	10.7	2.4	1.1	スギ	○	エ	PFG
328 6-124	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	12.6	2.4	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
329 6-93	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	8.5	6.1	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
330 6-126	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	16.5	6.5	0.5	ヒノキ	○	エ	PFG
331 6-97	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	13.6	2.9	0.7	ヒノキ	○	エ	PFG
332 6-127	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	37.9	9.7	2.4	カシ	○	エ	PFG
333 6-128	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	95.6	6.3	1.3	カシ	○	エ	PFG
334 6-129	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	126.6	3.3	3.3	ヒノキ	○	エ	PFG
335 6-20	アサガホ	内形曲輪板	アサガホ	93.0	23.0	1.2	ヒノキ	○	エ	BS

固有番号	植物名	学名	山地地帯	標高	名	英名	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴	大	高	株	葉	備考
256	11-22	D17-V2	山地	5.4	6.9	0.8	0.5	A	PBG	高さ15cmで木本 樹皮は黒 H-91?					
257	11-01	D17-V3	山地	3.5	7.2	0.5	不開	A	PBG	高さ15cmで木本 平地 H-21?					
258	12-16-不開	D17-V1	山地	4.8	5.5	0.9	不開	A	PBG	高さ15cmで木本 樹皮は黒					
259	11-15	D17-V3	山地	4.7	11.3	4.6	ニノキ	B	PBG	4.6m					
260	11-34	D18-V1	山地	2.3	3.3	2.5	ニノキ	D	HA						
261	11-24	D17-V1	山地	14.6	9.5	2.0	ニノキ	A	PBG						
262	11-31	D18-V1	山地	27.3	3.0	0.9	スギ	B	HA						
263	11-32	D16-V	山地	48.0	2.7	0.9	ニノキ	B	HA	吸盤有無?					
264	11-M8	D17-V2	山地	22.0	1.6	1.4	カシ葉	B	PB	吸刀+棘毛 脱葉後					
265	11-81	D17-V4	山地	23.1	3.9	0.3	ニノキ	B	HA	人手形葉					
266	11-80	D17-V4	山地	13.3	7.3	0.7	ヒノキ	C	HA	第4葉先					
267	11-28	D18-V	山地	105.6	27.6	4.6	ニノキ	B	PBG	9m					
268	11-17	D17-V1	山地	195.7	12.1	6.7	立葉樹	E	PBG	奇木					
269	11-17	山地	年輪付	41.1	0.9	0.9	立葉樹	E	PBG	樹高測定 7.0m					
270	11-17	山地	年輪付	38.6	0.5	0.5	立葉樹	E	HA	技術者?					
271	11-17	山地	年輪付	9.4	4.9	0.4	立葉	G	PBG	樹高測定 4.8m					
272	11-17	山地	年輪付	29.4	5.5	2.6	カシ葉	B	PBG						
273	11-17	山地	年輪付	50.9	5.9	2.9	スギ	B	PBG						
274	11-17	山地	年輪付	19.9	2.2	1.4	カシ葉	E	PB						
275	11-17	山地	年輪付	14.1	1.5	0.5	ニノキ	D	PB						
276	11-17	山地	年輪付	6.5	1.4	0.4	スギ	D	PBG						
277	11-17	山地	年輪付	8.5	0.9	0.5	ニノキ	B	PBG						
278	11-17	山地	年輪付	5.6	0.6	0.2	スギ	B	PBG						
279	11-17	山地	年輪付	10.5	2.5	0.4	ニノキ	C	PB	吸刀?					
280	11-17	山地	年輪付	10.2	4.5	0.5	ニノキ	C	PB	吸刀					
281	11-17	山地	年輪付	18.0	16.9	0.5	カシ葉	A	PBG	4.8-10.3m					
282	11-17	山地	年輪付	20.0	11.7	0.5	ニノキ	A	PB						
283	11-17	山地	年輪付	15.8	8.1	0.5	ニノキ	A	PB						
284	11-17	山地	年輪付	15.7	7.4	0.5	ニノキ	A	PB						
285	11-17	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	A	PB						
286	11-17	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	A	PB						
287	11-17	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	A	PB						
288	11-17	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
289	11-17	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
290	11-17	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
291	11-17	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
292	11-266	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
293	11-324	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
294	11-363	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
295	11-364	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
296	11-365	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
297	11-366	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
298	11-367	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
299	11-368	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
300	11-369	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
301	11-370	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
302	11-371	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
303	11-372	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
304	11-373	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
305	11-374	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
306	11-375	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
307	11-376	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
308	11-377	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
309	11-378	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
310	11-379	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
311	11-380	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
312	11-381	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
313	11-382	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
314	11-383	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
315	11-384	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
316	11-385	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
317	11-386	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
318	11-387	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
319	11-388	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
320	11-389	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
321	11-390	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
322	11-391	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
323	11-392	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
324	11-393	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
325	11-394	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
326	11-395	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
327	11-396	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
328	11-397	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
329	11-398	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
330	11-399	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
331	11-400	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
332	11-401	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
333	11-402	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
334	11-403	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
335	11-404	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PBG	樹高最高点?					
336	11-405	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
337	11-406	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
338	11-407	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
339	11-408	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
340	11-409	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
341	11-410	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
342	11-411	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
343	11-412	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
344	11-413	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PB	樹高最高点?					
345	11-414	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
346	11-415	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
347	11-416	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
348	11-417	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
349	11-418	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
350	11-419	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
351	11-420	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
352	11-421	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
353	11-422	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PB	樹高最高点?					
354	11-423	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
355	11-424	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
356	11-425	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
357	11-426	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
358	11-427	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
359	11-428	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
360	11-429	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
361	11-430	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
362	11-431	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PB	樹高最高点?					
363	11-432	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
364	11-433	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
365	11-434	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
366	11-435	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
367	11-436	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
368	11-437	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
369	11-438	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
370	11-439	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
371	11-440	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PB	樹高最高点?					
372	11-441	山地	年輪付	73.4	4.1	2.3	カシ葉	E	HA	むののうだらが、これで完成か 楽施行在					
373	11-442	山地	年輪付	53.9	4.7	3.0	立葉樹	F	HA	平洋71ca 大輪葉 倍数剪削り?					
374	11-443	山地	年輪付	11.6	3.7	3.4	立葉樹	DR	HA	内陸地 去年は 古木作成					
375	11-444	山地	年輪付	17.9	6.6	0.5	ニノキ	DR	HA	干ばた21.2m					
376	11-445	山地	年輪付	13.2	6.8	0.6	ニノキ	DR	HA	haJ23.3cm 小口に円溝、両面を面取り					
377	11-446	山地	年輪付	24.9	1.2	2.4	スギ	E	HA	緑辺欠損 鮫形がほしい					
378	11-447	山地	年輪付	12.8	2.1	0.2	スギ	C	PBG						
379	11-448	山地	年輪付	24.8	4.9	13.7	カシ葉	E	PBG						
380	11-449	山地	年輪付	46.0	2.3	1.9	ニノキ	B	PB	樹高最高点?					
381	11-450	山地	年輪付	73.4											

規格番号	部品番号	部品名	寸法(ミリ)	長さ(ミリ)	幅(ミリ)	厚さ(ミリ)	組立	工具	材料	備考
427	6-46-L7	966-8	Z3-V	在庫	24.8	6.6	1.8	ビノキ	C	H: 丸棒、E: 長さ、久松の、飛行機の木が2つ
526	6-497	966-11	10-E-V8a	角丸板	24.7	1.7	2.7	ビノキ	C	H: 角丸板内側に材に、幅の2倍
429	6-46-L7	966-6	A15-E-V4	角丸板	40.5	12.4	1.8	ビノキ	B	H: 角丸板の外側の材に、幅の2倍
430	6-46-L7	966-9	E-E-V	角丸板	33.6	10.0	1.9	ビノキ	B	H: 角丸板で複数、重ね合式の外れ えりこみ
431	6-46-L7	966-2	E-E-V	角丸板	30.1	9.8	1.3	ビノキ	B	H: 角丸板で複数、重ね合式の外れ えりこみ
432	6-46-L7	966-3	A16-E-V	丸板	25.2	7.0	0.7	ビノキ	S	H: 角丸板に丸板の外れを重ね
433	6-46-L7	966-4	E-E-V3	丸板	29.4	6.3	1.1	ビノキ	S	H: 角丸板に丸板の外れを重ね
434	6-46-L7	966-6	E-E-V4	丸板	24.6	7.8	0.8	ビノキ	R	H: 角丸板の片、片方の端部を欠損
435	6-46-L7	966-7	Z3-V3	丸板	13.6	4.9	0.9	ビノキ	C	H: 角丸板の片、片方の端部を欠損を欠す
436	6-46-L7	966-8	Z3-V3	丸板	20.6	6.2	1.0	ビノキ	C	H: 角丸板の片方の端部を欠す
437	7-118	977-2	A15-E-V6	鏡板	17.1	8.2	2.2	ビノキ	C	H: 一回で鏡板を割りしらし、中央に刃を差す
438	7-22	977-4	A15-E-V8	鏡板	16.6	7.9	1.2	スギ	C	H: 小刀
439	7-162	977-9	E-E-V1	鏡板	11.6	9.2	0.9	スギ	C	H: 槌、芯のミラ
440	6-118	977-10	E-E-V3	鏡板	13.6	3.6	2.1	ビノキ	A	H: 鏡面
441	7-236	977-1	E-E-V4	鏡板	30.6	5.4	1.6	ビノキ	C	H: 鏡面に丸孔、半穴に使ひ 製造商記
442	7-277	977-2	A15-E-V8	鏡板	46.2	6.9	1.9	スギ	C	H: 両面に丸孔、半穴に使ひ 製造商記
453	6-496	984-4	10-E-V	鏡板(木)	36.2	7.6	4.4	ビノキ	J	H: 木製鏡、ではそれを底面 内孔と丸孔
134	6-不可	984-6	A15-E-V	鏡板(木)	19.4	9.5	7.0	ビノキ	C	H: 鏡面に丸孔、6.4×6.2×2.5mm に裏面の底面
443	6-98	984-10	10-E-V3	鏡板(木)	26.4	7.0	1.7	カシ類	R	H: 鏡面で裏面、鏡板
496	6-53	984-9	A16-E-V8	鏡板(木)	21.4	3.1	2.5	カシ類	E	H: 鏡面に丸孔
447	6-111	984-12	A16-E-V	鏡板(木)	9.9	6.1	2.3	ビノキ	C	H: 鏡面の鏡面(鏡面) (木の鏡子) 方孔1つ
448	6-169	1024-2	A13-E-V	鏡板(木)	15.9	2.1	1.8	ビノキ	D	H: 光沢を2回から3回 握り
449	7-770	1024-3	A12-E-V4	鏡板(木)	30.7	6.6	1.6	ビノキ	C	H: 鏡面、小間を、裏面に
450	6-183?	1024-5	A16-E-V	鏡板(木)	34.7	2.1	2.4	ビノキ	B	H: 光沢にらする(ハサウエ) 今回に光る
451	6-184	1024-12	A16-E-V	鏡板(木)	17.6	1.2	0.7	スギ	B	H: 鏡面 少し、底面
452	6-647	1025-15	10-E-V	鏡板(木)	9.6	1.7	0.7	スギ	S	H: 鏡面の先端を削り内に尖らせる
453	7-42	1025-18	A16-E-V4	鏡板(木)	16.6	1.5	0.4	ビノキ	C	H: 鏡面の先端を削り内に尖らせる
454	6-501	1025-29	10-E-V8a	鏡板(木)	10.3	2.0	0.7	スギ	A	H: 鏡面の先端を削り内に尖らせる
455	4-299	1026-29	G-E-V	鏡板(木)	30.3	1.6	0.4	ビノキ	R	H: 鏡面の先端を削り内に尖らせる
456	6-441	1026-24	10-E-V3	鏡板(木)	16.3	2.0	0.6	ビノキ	B	H: 鏡面の先端を削り内に尖らせる
457	5-746	1026-1	B15-E-V3	鏡板(木)	27.3	2.3	2.4	ウツリワタ	B	H: 一端を尖らす 介地?
458	測定尺不完全	1026-3	A16-E-V3	鏡板(木)	7.1	4.6	0.3	カシ類	E	H: 一端を尖らす 介地? 付録30-11
459	6-84	1026-5	A16-E-V	鏡板(木)	8.6	4.4	0.3	カシ類	DC	H: 表面の内、一本削る 無理して彫刻
460	6-955	1026-13	10-E-V	鏡板(木)	41.6	4.4	0.4	ビノキ	D	H: 表面の底面 削る
462	7-84-1	1026-4	C11-E-V7	鏡板(木)	30.9	9.7	3.7	スギ	B	H: 鏡面を欠く 小木
452	6-454	1026-5	A16-E-V4	鏡板(木)	17.0	2.4	0.4	ビノキ	D	H: 鏡面及び鏡面(鏡面) トモホ 丸木
463	7-115	1026-7	A16-E-V9	鏡板(木)	70.1	5.8	4.0	スギ	C	H: 鏡面 大洋の外寸
464	7-172	1026-9	E-E-V	鏡板(木)	42.0	0.9	3.7	ランク	C	H: 丸木 付録20-4
465	4-8-74	1026-10	E-E-V4	鏡板(木)	35.1	2.3	2.1	ビノキ	D	H: 丸木 内に曲り 隠す
466	7-212	1024-14	10-E-V8a	鏡板(木)	19.1	9.9	3.1	必要品	E	H: 丸木 内に曲り 隠す
467	7-277	1024-16	C12-E-V8a	鏡板(木)	22.5	3.2	2.2	ビノキ	B	H: 丸木 内に曲り 隠す
918	7-216	1024-17	C12-E-V7	鏡板(木)	15.2	2.7	2.7	ビノキ	D	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
-089	4-不可	1-27	鏡面		15.5	4.6	3.8	スギ	DE	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
470	4-960	1024-1	鏡面		11.6	1.6	1.0	ビノキ	B	H: 表面削る
471	4-32	1024-1	E-V	鏡面(木)	17.3	5.0	1.8	成松板	DE	H: 表面削る
472	4-278	1024-10	VN	鏡面(木)	(24.6)	4.5	1.8	成松板	DE	H: 表面削る
473	4-394	1024-10	V-S	鏡面(木)	20.2	3.1	3.0	クロマツ	D	H: 表面削る
474	6-73	1024-11	V-E	鏡面(木)	23.2	3.3	2.4	成松板	DE	H: 表面削る
475	6-693	1024-12	V-E	鏡面(木)	31.3	6.2	3.4	スギ	D	H: 表面削る
476	4-171(候)	1024-13	V-E-V5	鏡面(木)	28.4	4.3	2.6	成松板	DC	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
477	4-668	1024-15	V-E-V3	鏡面(木)	26.6	4.3	2.1	成松板	D	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
478	4-672	1024-16	V-E-V2	鏡面(木)	17.6	4.0	0.4	イヌマキ	D	H: 丸木を丸く彫り山木
479	4-21	1024-17	V-E-V	鏡面(木)	16.7	4.4	3.7	成松板	DE	H: 丸木を丸く彫り山木
480	4-299	1024-17	V-E-V	鏡面(木)	28.8	4.1	1.0	ビノキ	A	H: 丸木を丸く彫り山木 付録15-3
481	4-390	1024-18	V-E-VN	鏡面(木)	27.2	4.7	0.9	ビノキ	S	H: 丸木を丸く彫り山木
482	4-623	1024-19	V-E-V1	鏡面(木)	35.6	6.6	1.0	ビノキ	H	H: 丸木を丸く彫り山木
483	4-6	1024-20	V-E-V	鏡面(木)	26.4	5.6	0.6	ビノキ	H	H: 丸木を丸く彫り山木
484	1-301	1024-21	B16-E-V	鏡面(木)	19.6	6.6	1.0	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
485	4-522	1024-22	A15-E-V1	鏡面(木)	22.2	3.0	1.5	ビノキ	C	H: 丸木を丸く彫り山木 錫筒山あり
486	4-622	1024-23	V-E-V	鏡面(木)	19.7	2.4	0.9	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木 付録15-2
487	4-545	1024-24	V-E-V	鏡面(木)	19.3	4.6	0.7	ビノキ	C	H: 丸木を丸く彫り山木
488	4-591	1024-25	V-E-V2	鏡面(木)	7.1	2.3	0.5	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木
489	4-58	1024-26	V-E-V	鏡面(木)	124.0	0	1.5	ビノキ	T	H: 丸木を丸く彫り山木
490	4-183	1024-27	V-E-V	鏡面(木)	(119.4)	0	1.5	ビノキ	F	H: 丸木を丸く彫り山木
491	4-593	1024-28	V-E-V	鏡面(木)	44.6	6.4	0.6	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木
492	4-196	1024-29	V-E-V	鏡面(木)	49.6	3.2	0.6	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木
493	4-195	1024-30	V-E-V	鏡面(木)	31.9	3.5	0.5	ビノキ	C	H: 丸木を丸く彫り山木
494	4-190	1024-31	V-E-V	鏡面(木)	35.3	3.5	0.4	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木
495	4-198	1024-32	V-E-V	鏡面(木)	5.1	2.5	0.5	ビノキ	B	H: 丸木を丸く彫り山木
496	4-192	1024-33	V-E-V	鏡面(木)	16.8	3.8	0.2	ビノキ	T	H: 丸木を丸く彫り山木
497	4-192	1024-34	V-E-V	鏡面(木)	15.7	4.2	0.5	ビノキ	S	H: 丸木を丸く彫り山木
498	4-194	1024-35	V-E-V2	鏡面(木)	16.2	4.7	0.4	ビノキ	H	H: 丸木を丸く彫り山木
499	4-229	1024-36	V-E-V1	鏡面(木)	12.2	3.0	0.4	ビノキ	S	H: 丸木を丸く彫り山木
500	4-55	1024-37	V-E-V	鏡面(木)	19.1	6.0	0.4	ビノキ	T	H: 丸木を丸く彫り山木
501	4-570	1024-38	A15-E-V3	鏡面(木)	20.1	4.0	2.0	成松板	DE	H: 丸木を丸く彫り山木 アカモキの可能性あり
502	4-689	1024-39	V-E-V3	鏡面(木)	21.7	9.0	0.5	ビノキ	C	H: 丸木を丸く彫り山木
503	4-630	1024-40	V-E-V	鏡面(木)	8.9	3.7	0.5	ビノキ	S	H: 丸木を丸く彫り山木
504	4-189	1024-41	V-E-V	鏡面(木)	35.8	6.1	1.6	ビノキ	C	H: 丸木を丸く彫り山木
505	4-254	1024-42	V-E-V3	鏡面(木)	36.6	3.8	1.4	ビノキ	L	H: 丸木を丸く彫り山木
506	4-62	1024-43	V-E-V	鏡面(木)	7.5	6.6	1.3	ビノキ	R	H: 鏡面の凹凸
507	1-258	1024-44	V-E-V2	鏡面(木)	6.3	6.5	1.2	ビノキ	A	H: 鏡面の凹凸
508	4-213	1024-45	V-E-V2	鏡面(木)	5.8	3.4	1.1	ビノキ	S	H: 鏡面の凹凸
509	4-403	1024-46	V-E-V	鏡面(木)	40.6	2.4	1.2	ビノキ	B	H: 鏡面の凹凸
510	4-721	1024-47	V-E-V	鏡面(木)	55.7	2.7	1.1	ビノキ	A	H: 鏡面の凹凸
511	3-7.0	1024-48	V-E-V	鏡面(木)	45.2	6.1	3	スギ	A	H: 鏡面の凹凸
512	4-69	1024-49	V-E-V	鏡面(木)	31.7	1.3	1.1	ビノキ	C	H: 鏡面の凹凸
513	4-397	1024-50	V-E-V	鏡面(木)	27.6	6.1	1.1	スギ	C	H: 鏡面の凹凸
514	4-100	1024-51	V-E-V	鏡面(木)	93.4	1.5	1.2	ビノキ	O	H: 鏡面の凹凸
515	4-256-552	1024-52	V-E-V	鏡面(木)	27.7	6.1	1.1	スギ	C	H: 鏡面の凹凸
516	4-206	1024-53	V-E-V	鏡面(木)	14.4	6.9	0.9	不明	C	H: 鏡面の凹凸
517	4-633	1024-54	V-E-V	鏡面(木)	7.8	6.8	0.8	ビノキ	C	H: 鏡面の凹凸

登録番号	品種名	原産地	主要品目	高さ(cm)	輪郭(cm)	幅(cm)	根株	山木	木質	特徴	備考
214 4-409	A15d-V2	赤松		17.2	1.7	1.5	ヒノキ	C	EA		
219 4-630	A15d-V	赤松		17.0	1.7	0.9	ヒノキ	C	EA		
220 4-441	A15c-V3	赤松		10.6	3.1	1.9	ヒノキ	C	EA	心材に2~3%の樹脂	
221 4-651-628	A15c-V3	赤松(?)		14.8	1.7	3.4	ヒノキ	C	BA		
222 4-369	A15c-V1	赤松(?)		15.3	2.6	0.7	ヒノキ	B	W		
223 4-273	17-V	ベニチ付		17.1	1.7	0.9	ヒノキ	A	W		
224 4-674	16d-V	木質材		14.3	1.5	0.6	ヒノキ	H	W		
225 4-174	24-V	木質材		13.6	1.9	0.3	ヒノキ	H	W		
226 4-567	26d-V2	吉田ウ		12.0	2.0	0.7	ヒノキ	H	W		
227 4-674	A15c-V3	黄柏		13.6	1.9	0.5	ヒノキ	B	W		
228 4-555	A15c-V	木質材		12.3	2.0	0.7	ヒノキ	A	W		
229 4-687 1033-V8	B16d-V3	赤松(?)		12.7	1.9	0.4	ヒノキ	S	W	翌年10月14日採集	
230 4-661	A15c-V	赤松(?)		9.6	2.2	0.5	ヒノキ	A	W		
231 4-674	12d-V	赤松(?)		10.7	2.7	0.2	ヒノキ	A	W		
232 4-110	16-V	光葉松(薄板)		9.1	2.1	0.6	ヒノキ	C	W		
233 4-637	A15c-V2	赤松(?)		8.0	3.1	0.4	ヒノキ	A	W		
234 4-132	19-V	吉田ウ		7.0	1.6	0.4	ヒノキ	A	W		
235 4-509	A15c-V3	赤松(?)		6.7	1.6	0.4	ヒノキ	H	W		
236 4-620	12d-V	赤松(?)		6.8	1.7	0.4	ヒノキ	B	W		
237 4-618	12d-V	赤松(?)		6.1	1.7	0.2	ヒノキ	A	W		
238 4-621	12d-V	赤松(?)		5.6	1.7	0.2	ヒノキ	A	W		
239 4-78	14d-V	椿		34.7	34.4	6.6	ガシラ	E	DA	植物、堅いが美しい	
240 4-521	14-V	椿		28.1	5.8	5.0	ヒノキ	D	DA	手触り	
241 4-728	A15c-V	椿		25.0	6.0	1.5	ヒノキ	C	DA	上端に季節変形の跡有	
242 4-598	A15c-V	椿		24.0	6.0	0.9	ヒノキ	B	DA	見方四つ	
243 4-599	15-V	椿		22.0	6.0	2.7	ヒノキ	H	DA	見方四つ	
244 4-249	B16d-V	ヒツボク		67.0	9.4	2.7	ヒノキ	H	DA	同上に弓形の跡有 大根	
245 4-597	14-V	椿		37.1	2.7	2.9	ヒノキ	C	DA	葉部に棘あり	
246 4-310	16d-V	椿		30.4	5.6	2.6	ヒノキ	C	DA		
247 4-429	16d-V2	椿(?)		36.1	4.2	2.2	ヒノキ	A	DA	「ひら」 植物あり	
248 4-285	16d-V	椿(?)		24.7	4.6	1.8	ヒノキ	C	DA	「ひら」 植物あり	
249 4-746	16d-V	椿(?)		18.0	5.6	3.4	ヒノキ	C	DA	根穴二つ	
250 4-218	A15c-V	椿(?)		6.8	2.3	1.9	ヒノキ	D	DA	根穴二つ	
251 4-581	16c-V2	木質材		17.9	9.5	2.8	ヒノキ	C	DA	根穴二つ	
252 4-582	16d-V	木質材		25.0	5.7	1.2	ヒノキ	C	DA	根穴二つ	
253 4-249	B16d-V	ヒツボク		36.2	7.1	0.9	ヒノキ	S	DA		
254 4-597	14-V	椿		37.1	2.7	2.9	ヒノキ	C	DA		
255 4-310	16d-V	椿		30.4	5.6	2.6	ヒノキ	C	DA		
256 4-429	16d-V2	椿(?)		36.1	4.2	2.2	ヒノキ	A	DA	「ひら」 植物あり	
257 4-285	16d-V	椿(?)		24.7	4.6	1.8	ヒノキ	C	DA	「ひら」 植物あり	
258 4-638	16d-V	川原曲脚版(クレゾン)		10.3	2.9	0.3	ヒノキ	B	DA	少しあれ	
259 4-238	16d-V	川原曲脚版(クレゾン)		11.8	4.0	1.0	カシ	F	DA	根穴で空洞	
260 4-306	16d-V	赤松		14.0	9.0	1.5	ヒノキ	F	DA	根穴で空洞	
261 6-127	A15c-V	赤松(?)		11.8	1.6	0.6	ヒノキ	B	EA		
262 6-163	A15c-V	赤松(?)		11.8	1.5	0.2	ヒノキ	B	EA		
263 6-193	A15c-V	赤松(?)		10.6	1.4	0.2	ヒノキ	C	EA		
264 6-32	A15c-V	赤松(?)		7.5	1.6	0.6	ヒノキ	C	EA		
265 6-202	A15c-V	赤松(?)		7.9	1.3	0.6	ヒノキ	B	EA		
266 6-215	A15c-V	赤松(?)		13.0	3.9	0.6	ヒノキ	DC	W		
267 6-118	A15c-V	巴納角筋		35.4	3.0	1.6	ヒノキ	A	W		
268 6-119	A15d-V	巴納角筋		30.3	1.9	1.6	ヒノキ	A	W		
269 6-177	A15d-V	巴納角筋		23.0	2.1	2.0	ヒノキ	B	W		
270 6-70	16d-V	内形单孔物版底		36.0	1.8	1.4	ヒノキ	C	DA	絶縁して変形	
271 6-275	16d-V	内形单孔物版底		63.1	14.2	1.0	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
272 6-478	16d-V	巴納角筋		18.3	7.1	1.0	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
273 6-126	A15c-V	巴納角筋		16.1	2.9	0.4	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
274 6-417	16d-V	巴納角筋		13.6	3.6	2.5	ヒノキ	D	DA	内形单孔物版底	
275 6-37	A15c-V	巴納角筋		13.5	3.3	1.0	カシ	F	DA	内形单孔物版底	
276 6-141 7	A15c-V	巴納角筋		14.9	4.2	1.7	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
277 6-475	16d-V	巴納角筋		12.1	4.5	0.7	カシ	C	DA	内形单孔物版底	
278 6-31	A15c-V	巴納角筋		16.4	5.0	0.5	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
279 6-19	A15c-V	巴納角筋		19.7	3.3	0.6	ヒノキ	A	DA	内形单孔物版底	
280 6-609	A15c-V	巴納角筋		16.1	2.9	0.4	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
281 6-153	A15c-V	巴納角筋		22.5	5.6	1.6	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
282 6-455 9	16d-V	巴納角筋		21.1	3.8	1.6	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
283 6-38	16d-V	巴納角筋		5.9	2.6	2.3	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
284 7-46	A15c-V	巴納角筋		10.1	7.0	2.0	カシ	S	DA	内形单孔物版底	
285 7-46 不明	A15c-V	巴納角筋		14.2	8.2	1.2	カシ	S	DA	内形单孔物版底	
286 7-26	16d-V	巴納角筋(全体)		18.9	4.6	0.9	カシ	S	DA	内形单孔物版底	
287 7-21	A15c-V	巴納角筋		16.1	9.8	3.9	カシ	DA	内形单孔物版底		
288 7-29	A15c-V	巴納角筋		13.7	6.1	3.0	ヒノキ	DA	内形单孔物版底		
289 7-186	16d-V	巴納角筋		10.7	6.3	2.7	ヒノキ	DA	内形单孔物版底		
290 7-129	A15c-V	巴納角筋		28.6	4.4	4.0	イヌタキ	D	DA	内形单孔物版底	
291 7-66	A16d-V	カバナ(?)		7.5	4.9	1.7	スギ	B	DA	内形单孔物版底	
292 7-12	A15c-V	巴納角筋		26.6	4.2	0.6	ヒノキ	DC	DA	内形单孔物版底	
293 7-16 不明	16d-V	巴納角筋		17.6	3.4	3.2	ヒノキ	D	DA	内形单孔物版底	
294 7-34	A15c-V	巴納角筋		12.1	4.8	0.4	ヒノキ	DE	DA	内形单孔物版底	
295 7-26 不明	A15c-V	巴納角筋		40.5	5.7	1.5	カシ	E	EA	軽度して変形	
296 7-249	16d-V	巴納角筋		13.7	6.7	7.5	ヒノキ	A	W	内形单孔物版底	
297 7-128	16d-V	内形单孔物版底		22.3	6.2	0.8	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
298 7-191	16d-V	内形单孔物版底		29.6	9.0	1.3	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
299 7-187	16d-V	内形单孔物版底(クレゾン)		29.9	13.9	0.9	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
300 7-115	A15c-V	内形单孔物版底(クレゾン)		29.8	4.2	0.6	ヒノキ	B	DA	内形单孔物版底	
301 7-181	16d-V	巴納角筋		14.9	2.8	0.5	ヒノキ	C	DA	内形单孔物版底	
302 7-14	A15c-V	巴納角筋		24.9	1.9	0.4	ヒノキ	C	W	内形单孔物版底	
303 7-66	16d-V	巴納角筋(薄板)		22.2	1.7	0.7	ヒノキ	A	W	内形单孔物版底	
304 7-95	A15c-V	巴納角筋		9.4	1.2	0.4	ヒノキ	C	W	内形单孔物版底	
305 7-79	A16d-V	巴納角筋		10.1	0.8	0.3	ヒノキ	D	W	内形单孔物版底	
306 7-57	A15c-V	巴納角筋		21.1	3.5	1.0	ヒノキ	H	W	内形单孔物版底	
307 7-76	A15c-V	巴納角筋		15.0	1.3	1.1	ヒノキ	H	W	内形单孔物版底	
308 7-107	A15c-V	巴納角筋		21.6	1.8	1.3	ヒノキ	D	DA	内形单孔物版底	

規格番号	部品名	規格番号	主な用途・部位	名	所	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	考	種	本	新	の	備	序
509 7-62				45-V-18	工具柄	12.1	1.6	1.3	ヒノキ	3	HA	光触面			
510 7-235				43-V	把手板	15.4	3.9	1.4	ヒノキ	4	HA				
611 7-278				41-V-(枝葉)	剪丸板	11.0	3.5	1.4	ヒノキ	8	HA				
612 7-316				A1515-V-4	有柄鋸	31.0	6.1	3.5	ヒノキ	0	HA				
613 7-188				P32-V-2	有柄鋸	32.9	6.8	1.8	ヒノキ	0	HA	触感に枝が残る			
614 7-67				A1515-V-6C	有柄鋸	14.1	6.2	1.4	ヒノキ	0	HA				
615 7-106				A110-A156-V	有柄鋸	16.3	6.2	1.4	ヒノキ	0	HA				
616 7-166				HE3-V	右端錐	32.3	6.3	2.2	庄筋切削	DE	V	定期欠欠			
617 7-985				45-V-18	加工材	33.9	5.0	3.4	ヒノキ	D	HA				
618 7-47				A1535-V	鈍六角	48.0	9.4	1.8	ヒノキ	C	HA	曲面板紙を再構成			
619 7-8				A1515-V-4	剪葉(枝)	16.1	11.6	1.4	カシラ木	DE	V	柄穴加工材			
620 9-34a 不要				42-V	嵌入(又は脱)	18.8	5.7	2.4	カシラ木	E	HA	9-207-2:9			
621 9-34a 不要				T15-V	嵌入(側)	20.0	3.6	1.8	ヒノキ	X	HA				
622 9-110				T16c-V	大差(裏板)	30.3	8.1	0.8	ヒノキ	S	ND	尚田樹脂板			
623 9-9				T12c-V	大差(側)	36.6	6.7	1.3	スピラ	S	HA				
624 9-35				45-V	大差(側)	29.0	9.4	0.6	ヒノキ	C	ND	被傷して歪む			
625 9-244				41c-V	大差(側)	14.1	10.3	2.4	ヒノキ	B	HA				
626 9-96				T15c-V	木柄部分	33.8	4.0	3.8	ヒノキ	D	HA				
627 9-229				V10d-V	木柄部分	16.4	4.2	2.2	ヒノキ	D	HA				
628 9-83				V15-V	木柄部分	14.6	4.0	3.9	木柄	D	HA				
629 9-375				V16-V	木柄部分	16.0	3.4	3.7	ヒノキ	D	HA				
630 9-227	145-2			V16-V	端脚	37.6	2.9	8.1	芯板	DC	HA				
631 9-192				V16-V	端脚	36.0	3.9	1.6	カシラ木	E	HA				
632 9-193				V16-V	カセカセ(又は大)	37.9	1.0	1.1	ヒノキ	B	HA				
633 9-922				X16-V	内筒	21.2	5.2	4.4	ヒノキ	D	HA	被3.8×2.8×2.9cm			
634 9-215				Y16c-V	内筒	11.2	3.9	2.9	ヒノキ	D	HA	被削れ			
635 9-220				U16c-V	内筒	30.3	4.0	2.9	ヒノキ	D	HA	被削れ			
636 9-227				U16c-V	内筒	16.6	3.9	3.0	ヒノキ	J	HA	削り			
637 9-121				U16c-V	(P2-正面)	44.0	11.0	4.5	ヒノキ	S	ND	例物して歪む、刃物による凹り有り			
638 9-104				U16c-V	厚	44.3	4.9	1.8	ヒノキ	R	HA	例物			
639 9-242				U16c-V	カタクチ	33.6	5.0	2.8	ヒノキ	C	HA	例物			
640 9-51				U15c-V	内筒用曲面板	36.9	12.4	1.0	ヒノキ	C	DC				
641 9-144				U16a-V	内筒用曲面板	39.2	10.9	1.2	ヒノキ	C	HA				
642 9-135				U16c-V	内筒用曲面板	43.7	5.9	1.3	ヒノキ	B	HA				
643 9-115				U16c-V	内筒用曲面板	42.6	3.7	1.0	ヒノキ	C	HA				
644 9-226				U16c-V	内筒用曲面板	41.6	8.7	1.2	ヒノキ	B	HA				
645 9-276				U16c-V	内筒用曲面板	11.3	13.5	1.3	ヒノキ	C	HA	把元			
646 9-6 不要				T16-V	前部物	16.4	3.5	0.9	ヒノキ	F	HA				
647 9-162				T15c-V	前部物	36.4	8.7	1.0	ヒノキ	C	HA	φ53.6cm			
648 9-243				X16c-V	前部物	39.7	5.2	1.1	ヒノキ	C	HA				
649 9-222				Y16c-V3	内筒用曲面板	36.6	2.2	0.9	ヒノキ	R	HA				
650 9-238				Y16c-V4	曲面板	44.1	4.9	1.0	ヒノキ	B	HA				
651 9-223				Y16c-V3	曲面板	21.3	12.0	0.9	ヒノキ	F	HA				
652 9-1				Y15c-V	内筒用曲面板	17.6	2.0	0.8	ヒノキ	C	HA	φ18.9cm			
653 9-4 不要				X16c-IVc3	内筒用曲面板	14.6	6.0	0.7	ヒノキ	A	W	φ22.3cm			
654 9-212?				X16c-V3	内筒用曲面板	16.2	7.4	0.6	ヒノキ	B	HA	φ25.1cm × 207~2.9			
655 9-247				X15-V1	内筒用曲面板	17.7	7.5	1.1	ヒノキ	R	HA				
656 9-58				T15c-V3	液体側	36.7	6.8	0.8	ヒノキ	C	HA				
657 9-196				K16c-V3	曲面板	15.4	4.3	1.0	スピラ	R	HA				
658 9-53				V16c-V1	内筒用物	32.4	4.6	0.6	ヒノキ	S	HA				
659 9-17				X16d-V1	内筒用物	17.6	4.6	0.7	ヒノキ	S	HA	φ18.9cm			
660 9-194				X16c-V1	内筒用物	17.6	8.0	0.9	ヒノキ	B	HA				
661 9-6 不要				X16c-IVc3	内筒用物	17.1	11.7	0.7	ヒノキ	A	W				
662 9-233				V16c-V4	前部物	81.8	11.2	0.6	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
663 9-233				V16c-V4	曲面板まわしの側板	33.3	2.4	0.1	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
664 9-233				V16c-V4	曲面板まわしの側板	12.8	2.7	0.2	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
665 9-233				V16c-V4	内筒立ちの側板	9.9	2.3	0.2	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
666 9-233				V16c-V4	内筒まわしの側板	10.0	2.5	0.2	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
667 9-233				V16c-V4	曲面板まわしの側板	17.5	2.0	0.2	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
668 9-233				V16c-V4	曲面板まわしの側板	17.7	2.8	0.2	ヒノキ	F	ND	乾燥して使用			
669 9-233				V16c-V4	曲面板まわしの側板	20.0	2.0	0.1	ヒノキ	S	ND	乾燥して使用			
670 7-76				T15c-V2	貯藏庫	9.3	2.6	0.1	ヒノキ	A	ND	乾燥して使用			
671 9-119				T16c-V1	油槽	11.4	1.8	0.4	ヒノキ	A	ND	乾燥して使用			
672 9-142				X16c-V1	エア	19.6	2.2	1.1	ヒノキ	A	ND	乾燥して使用			
673 9-117				Y16c-V	人形	14.6	2.4	0.3	ヒノキ	R	ND	乾燥して変形			
674 9-216				Y15-2S	荷物	30.1	2.2	0.5	ヒノキ	R	ND				
675 9-50				Y16c-V1	サホ	10.7	1.3	0.6	ヒノキ	B	HA				
676 9-50				V16c-V1	油槽	7.6	1.6	0.3	ヒノキ	C	HA				
677 9-130				V16c-V1	蓋	7.6	1.9	0.2	ヒノキ	C	HA				
678 9-17				V15-V3	人差し	12.1	1.8	0.4	ヒノキ	B	HA				
679 9-197				X16c-V1	蓋	19.5	2.4	0.8	ヒノキ	S	ND				
680 9-236				V16c-V4	蓋	10.9	1.5	0.5	ヒノキ	A	ND	乾燥して使用			
681 9-133				V16c-V1	蓋	(7.9)	1.9	0.2	ヒノキ	C	HA				
682 9-3				V15-V	蓋	7.7	1.0	0.8	ヒノキ	S	HA				
683 9-134				V16c-V1	蓋	6.8	0.9	0.6	ヒノキ	A	HA				
684 9-232				V16c-V4	油槽	45.2	2.1	1.8	ヒノキ	C	HA				
685 9-125				V16c-V1	油槽	52.1	1.0	0.9	ヒノキ	B	HA				
686 9-199				V16c-V3	油槽	30.0	1.7	1.5	ヒノキ	C	HA				
687 9-200				V16c-V3	油槽	28.8	1.3	1.4	ヒノキ	C	HA				
688 9-205				V16c-V3	油槽	25.0	1.7	1.6	ヒノキ	C	HA				
689 9-44				V15-V3	油槽	16.1	2.0	1.8	ヒノキ	S	HA				
690 9-30				V15-V	油槽	15.5	1.3	1.2	ヒノキ	S	HA				
691 9-69				V15-V2	油槽せ付け	11.5	1.1	0.6	ヒノキ	B	HA	3列4点 601-602区 傷跡			
692 9-69				V15-V2	油槽せ付け	9.3	1.6	0.4	ヒノキ	B	HA				
693 9-69				V12c-V2	油槽せ付け	8.6	1.4	0.5	ヒノキ	B	HA				
694 9-11				T15c-V	上・下履	4.3	3.9	0.4	ヒノキ	C	HA				
695 9-141				X16c-V1	桿	11.6	4.6	0.6	ヒノキ	C	PA				
696 9-155				X16c-V1	桿	6.4	2.8	1.4	ヒノキ	A	HA	両端加工			
697 9-292				X16c-V2	桿	16.3	1.2	0.7	ヒノキ	A	HA				
698 9-47				V15b-V2	把手	20.6	2.8	1.0	ヒノキ	C	HA	手取れ			
699 9-99				V16c-V	把手	14.0	4.2	0.9	ヒノキ	B	HA	17.78			

品目番号	被服番号	出土地点	埋没	系 統	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	組 合	山 形	本 革	地 理	備 考
700 2-698	E16d V	大内城	木の棒		25.5	6.7	2.0	ヒノキ	C	IA	高の湯駅? 6月27日	
701 9-Na小刀		大内城	骨孔刀		24.7	6.8	1.0	ヒノキ	C	IA	御村	
702 9-524	X16d V2	大内城	骨の棒		25.5	2.9	1.4	ヒノキ	D	IA		
703 9-32	V16e V	大内城			36.9	3.7	0.8	ヒノキ	B	NA		
704 9-234	V15e-V1	大内城	骨の棒		62.2	20.2	1.1	ヒノキ	H	KA	横引部2つあり	
705 11-23	D17e-V2	大内城(高砂)			56.4	10.5	1.6	ヒノキ	H	KA		
706 11-144	H13e-VB	大内城(高砂)			15.9	5.7	2.0	ヒノキ	H	KA		
707 11-32	P16e-IV	大内城			31.3	2.1	1.7	ヒノキ	F	KA		
708 11-24	J17e-IVc	大内城			41.1	6.7	1.6	ヒノキ	D	KA		
709 11-48?	D17e-IVc2	大内城			38.5	6.5	1.6	カシ類?	G	KA		
710 11-78	D17c-V3	被服			37.4	3.9	3.2	カシ類	E/F	BA	小帶ぬ 被服して金形	
711 11-161	D17b-VB	被服			14.6	6.6	4.8	ヒノキ	D	KA	背もたれ	
712 11-95?	D17c-IV	被服			6.2	6.9	0.9	カシ類?	E/F	?		
713 11-75	E16a-VB	(支友木)			34.1	3.5	2.4	ヒノキ	B	KA		
714 11-35	Z16e-VB	木の棒			14.9	1.6	4.7	ヒノキ?	H	KA		
715 11-54	Z16a-VB	木の棒			13.1	4.4	4.2	ヒノキ?	H	KA		
716 11-Na不明	D17n-V2	木の棒			13.2	4.2	4.2	ヒノキ	H	KA		
717 11-155	E17a-VB	木の棒			16.6	4.5	5.2	ヒノキ	J	KA		
718 11-48	D17e-V2	木の棒			10.6	3.6	2.6	ヒノキ?	H	KA		
719 11-Na不5	不明	木の棒			11.5	3.5	2.2	イヌマキ?	D	KA	白駒あり(木の棒)	
720 11-14	H17a-V1	骨の棒(骨頭)			29.1	5.5	5.1	ヒノキ?	C	IA	内浦: なぜげる?	
721 11-93	H17e-VB	骨の棒(骨頭?)			17.6	4.5	1.7	ヒノキ?	D	IA	松江: 5.5×2.2.4cm	
722 11-62	H17e-V	骨の棒			42.7	0.5	1.7	ヒノキ?	D	IA	松江: 5.5×2.2.4cm	
723 11-Na不明	H17e-V2	骨の棒			41.9	5.9	4.2	ヒノキ?	D	IA	内浦: 小内筒を2つづつ	
724 11-60	E17a-V2	骨の棒			21.7	4.2	2.0	ヒノキ?	D	KA	E229.5×2.5cm	
725 11-32	E18a-IVc	骨の棒			58.1	2.2	6.0	ヒノキ?	D	IA	E229.0×4.2.4cm	
726 11-58-59	D17c-VI	骨の棒(骨頭)			59.9	6.0	1.2	ヒノキ?	D	KA		
727 11-106	D17c-VI	骨の棒			40.7	14.3	1.1	ヒノキ?	B	KA		
728 11-02	D17c-IVc2	骨の棒(骨頭)山形版?			37.4	13.9	1.7	ヒノキ?	B	KA	西加工	
729 11-27	D18c-Va	骨の棒(骨頭)			31.4	6.3	0.7	ヒノキ?	C	KA	燃焼して変形	
730 11-47	D17c-V	骨の棒			37.2	10.4	1.2	ヒノキ?	H	KA	内浦: 小内筒を2つづつ	
731 11-107	H17e-V1	骨の棒			46.7	5.0	0.8	ヒノキ?	H	KA		
732 11-73	H17e-V2	骨の棒(骨頭)			37.8	3.4	1.1	ヒノキ?	C	KA		
733 11-27	H17e-IVc	骨の棒(骨頭)			35.7	7.2	1.2	ヒノキ?	C	KA		
734 11-91	H17e-IV	骨の棒(骨頭)			19.0	18.0	1.0	ヒノキ?	C	KA	中型	
735 11-00	J17f-VIc2	円筒曲物板			16.2	14.7	0.9	ヒノキ?	C	KA	内浦: 丸形	
736 11-12	H17e-VI	円筒曲物板			23.7	7.7	0.8	ヒノキ?	C	KA	△2.2.2m 周囲に縫が作られてない	
737 11-108	D17e-V1	円筒曲物板			17.5	6.0	0.8	ヒノキ?	B	IA	△19.2cm	
738 11-102/110	H17e-V2/V3	円筒曲物板			12.6	6.0	0.8	ヒノキ?	A	W	△15.6cm	
739 11-46?	E17g-IVc	骨の棒(骨頭)			12.9	4.3	0.6	ヒノキ?	C	KA		
740 11-26	E18a-IVc	骨の棒(骨頭)			12.0	4.0	0.6	ヒノキ?	C	KA		
741 11-59	D17i-V	骨の棒			14.6	6.2	1.1	ヒノキ?	C	KA		
742 11-92	D17c-V1	[?骨の棒]骨頭			18.2	2.6	0.9	ヒノキ?	B	KA	内浦あり	
743 11-28	L17d-VI	[?骨の棒]骨頭			18.9	8.0	0.6	ヒノキ?	A	KA		
744 11-129	E18a-IVc2	[?骨の棒]骨頭			17.1	7.6	0.9	ヒノキ?	C	KA		
745 11-73	D18c-V2	[?骨の棒]骨頭			14.7	7.4	0.6	ヒノキ?	C	KA	内浦: 骨丸?	
746 11-56	H17g-IVc	[?骨の棒]骨頭			30.9	14.2	1.0	ヒノキ?	B	KA		
747 11-41	D-7-IV	[?骨の棒]骨頭			39.6	26.3	1.2	ヒノキ?	B	KA		
748 11-Ka-3H	骨の棒				32.6	2.7	1.5	ヒノキ?	H	KA	動物皮筋輪	
749 11-Na不明	骨の棒				25.9	2.2	0.9	ヒノキ?	C	KA	D17c/E18a: 用途未定&?	
750 11-97	D17e-IVc2	円筒曲物板			26.3	7.6	0.8	ヒノキ?	C	KA	丸丸丸	
751 11-Na不明	D18c-Va	骨の棒(骨頭)			15.7	4.1	0.5	ヒノキ?	C	KA	燃焼して変形	
752 11-Na不明	D18c-V1	骨の棒(骨頭)			13.5	4.5	0.7	ヒノキ?	A	KA	燃焼して変形	
753 11-109	D17f-V2	円筒曲物板			12.6	3.6	0.5	ヒノキ?	B	KA		
754 11-48	H17g-IVc	骨の棒(骨頭)			14.7	4.5	0.6	ヒノキ?	A	KA	内浦: 骨丸?	
755 11-Na不明	D17t-IVc	骨の棒(骨頭)			6.6	1.3	0.3	ヒノキ?	C	KA		
756 11-Na不明	E17g-IVc	骨の棒(骨頭)			9.3	5.5	1.1	スギ?	A	KA		
757 11-Na不明	D17t-VI	骨の棒(骨頭)			29.3	5.2	1.0	ヒノキ?	C	KA		
758 11-Na不明	D17h-V2	内筒			14.5	9.8	0.7	ヒノキ?	A	KA		
759 11-68	D17t-V	内筒			13.5	10.2	0.6	ヒノキ?	B	KA		
760 11-Na不明	D17l-IVc	骨の棒			9.8	4.0	0.6	ヒノキ?	B	KA	▲山形 周囲に決りあり	
761 11-Na-3H	D17t-V1	骨の棒(骨頭)			11.8	1.7	0.4	ヒノキ?	T	KA		
762 11-Na-3H	D17t-Vc	骨の棒(骨頭)			17.3	3.4	0.6	ヒノキ?	C	KA	3.3	
763 11-Na-3H	D17t-IV	骨の棒(骨頭)			22.6	2.6	0.8	ヒノキ?	S	KA		
764 11-99	D17o-IVc2	人骨?			28.1	4.7	1.1	ヒノキ?	C	KA	人型	
765 11-121	D17c-V	人骨?			25.0	1.9	1.2	ヒノキ?	C	KA		
766 11-67	E17a-V1	人骨?			15.9	5.6	1.2	ヒノキ?	H	KA		
767 11-105	D17e-IVc	人骨?			16.3	3.9	0.8	ヒノキ?	C	KA		
768 11-18?	D17c-V	角骨			31.6	5.5	1.5	ヒノキ?	DE	KA	今崎島: ほんのくび?	
769 11-Na不明	D17t-IVc2	人骨?			26.9	2.2	0.2	ヒノキ?	C	KA	大学引附	
770 11-17	H17c-VI	人骨?			18.1	1.9	0.6	ヒノキ?	B	KA		
771 11-Na不明	骨?				11.2	2.1	0.6	ヒノキ?	C	KA		
772 11-Na不明	骨?				8.2	1.5	0.1	ヒノキ?	B	KA		
773 11-Na不明	骨?				11.1	6.1	4.3	ヒノキ?	B	KA		
774 11-136	E17a-V	下鉢			25.0	1.9	1.2	ヒノキ?	H	KA		
775 11-Na不明	D17t-V1?	尖端部			34.0	2.6	1.4	ヒノキ?	C	KA	2斤	
776 11-Na不明	D17t-V3	尖端部			33.0	1.7	0.9	ヒノキ?	B	KA	成施して変形	
777 11-96-94	D17e-IVc2	尖端部(工具)			32.7	1.9	1.5	ヒノキ?	A	KA		
778 11-Na不明	D17t-V	尖端部			22.0	0.9	0.8	ヒノキ?	B	KA		
779 11-Na不明	骨?				10.9	0.7	ヒノキ?		B	KA		
780 11-Na不明	D17c-V2	尖端部(骨頭)			15.0	2.7	0.8	ヒノキ?	B	KA		
781 11-Na不明	D17c-V2	尖端部(骨頭)			15.0	4.2	0.8	ヒノキ?	B	KA		
782 11-113	E17c-V1	有孔瓶			4.7	2.3	0.6	ヒノキ?	A	KA	小壺口、中央に二孔と側面	
783 11-90	D17c-V2	有孔瓶			14.1	1.8	0.3	ヒノキ?	A	KA	穴付? 斜形?	
784 11-124	D17b-V	有孔瓶(刀持)?			34.8	4.5	2.1	カシ類?	E	KA		
785 11-54	L17a-Vc	有孔瓶			31.4	9.0	2.0	ヒノキ?	B	KA	4斤: 物置板?	
786 11-118	E17o-V1	火薬?			50.4	4.2	2.9	ヒノキ?	A	KA		
787 11-Na-3H	骨?				17.5	6.0	0.7	ヒノキ?	A	KA		
788 11-50	D17t-V	骨?			11.4	7.5	0.3	ヒノキ?	H	KA	袖高?	
789 11-65	D17t-V2	骨?			13.7	4.5	0.6	ヒノキ?	C	KA	双孔?	
790 11-45	E17c-Vc?	有孔瓶			19.0	1.2	0.7	ヒノキ?	C	KA		

品目番号	商品番号	生産地	種別	名 称	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	原 料	中	大 取	小 取	規 格	備 注
781	11-81-9	DI-7-V2	丸洗為替		7.3	4.9	3.1	ヒノキ	B	BA			
792	11-12	DI-7-V	洗材		25.5	3.5	0.9	ヒノキ	B	BA			
793	11-14-8	小舟	木製箱		4.0	3.1		云雲舟	D	W	ND	2025	
794	11-14-9	DI-7-V2	第二次		11.9	2.9	0.5	トノキ	A	BA			
795	11-14-10	DI-7-Vc	代地(櫛)		19.6	2.4	1.0	ヒノキ	DE	BA			
796	11-104	DI-7-Vc	紙身(又頭)?		24.3	6.2	2.0	カシ節	B	BA			
797	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形		20.4	9.4	1.6	ヒノキ	C	BA			
798	4-6-7	K-6-V	舟形		15.4	6.1	2.5	ヒノキ	B	BA		有縫合状態認定?	
799	3-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟中?	21.7	2.8	0.6	ヒノキ	B	BA			
800	4-7-6 不明	DI-7-V	舟中?		14.9	1.6	0.6	ヒノキ	C	BA			
801	4-7-6 不明	DI-7-V	舟中?		7.7	2.3	0.3	ヒノキ	A	BA			
802	4-7-6 不明	DI-7-V	舟中?		8.8	1.6	0.3	ヒノキ	A	BA			
803	4-7-6 不明	DI-7-V	舟中?		33.1	4.5	5.9	不明	D	BA			
804	4-7-6 不明	DI-7-V	舟中?		27.8	3.1	5.5	不明	D	BA		枝6.2X1.5X1.0cm	
805	12-10	DI-7-V1	円筒形或略板		33.6	3.8	0.6	ヒノキ	F	BA			
806	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	大(原木)?	13.4	4.6	1.7	ヒノキ	B	BA		(2-4-5 V487 7-271)?	
807	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	大舟(原木)?	9.5	3.6	1.9	カシ節	E	BA			
808	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	圓筒	6.3	1.5	1.1	ハニカム	A	BS	密着し崩落		
809	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	夢?	10.3	0.7	0.6	ヒノキ	A	BA			
810	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	圓筒	14.1	1.1	0.8	ヒノキ	C	BA		5.5cm29-13	
811	圓筒小舟	DI-7-V	舟形	舟頭部	44.6	4.0	3.8	不明	D	BA		圓筒 舟頭部?	
812	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	12.7	2.8		ヒノキ	DE	BA			
813	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	7.5	6.3		ヒノキ	D	BA		全頭部?	
814	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	9.4	6.6		ヒノキ	DE	BA			
815	2-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	31.6	3.9	1.8	ヒノキ	C	BA			
816	2-7-6 不明	DI-7-V	舟形	圓筒形	40.3	6.10.5		ヒノキ	B	BA		凸凹丸太材	
817	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	20.2	9.0	2.0	ヒノキ	EP	BA			
818	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	圓筒形或略板	14.2	4.4	0.4	ヒノキ	B	BA			
819	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	15.6	8.3	1.7	ヒノキ	C	BA		4.2cm6.5.15.2	
820	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	15.1	17.5	1.9	ヒノキ	C	BA		圓筒頭部?	
821	4-7-6 不明	DI-7-V	舟形	舟頭部	25.6	4.0	0.6	ヒノキ	B	BA			
822	圓筒小舟の舟頭部	不明	舟頭部		38.6	20.7	7.1	ヒノキ	C	ND	木製圓筒且木222と821の木製頭部		
823	圓筒小舟の舟頭部	不明	舟頭部		33.4	13.3	7.6	ヒノキ	C	ND			

複数頭部6次に木製品(第98~114回)

分類番号	商品番号	上品化区分	名 称	木 材	幅	厚	規 格	原 料	山	大 在	小 在	規 格	備 注
1	42	DI-7-V	船身(平底)		38.6	9.3	2.3	カシ	C	E	PE	船身	
2	42	DI-7-V	船身(平底)		44.2	10.9	2.1	タカモ	C	E	PE		
3	42	DI-7-V	船身(平底)		26.7	11.1	2.6	カシ	C	PE	山野		
4	42	12-10x10	DI-7-V	船身(平底)	26.3	6.0	6.2	カシ	C	PE	丘野		
5	42	DI-7-V	船身		18.5	13.7	2.1	カヌマ	C	PE	山野		
6	42	DI-7-V	船身(平底)		54.4	13.0	2.0	カシ	C	E	250	1本曲	
7	42	DI-7-V	船身(平底)		33.4	17.9	1.9	カシ	C	PE	船身		
8	42	DI-7-V	船身(平底)		37.8	7.0	3.0	タヌキ	C	E	PE	船身	
9	42	DI-7-V	船身(平底)		3.0	14.2	6.8	ヤクシ	C	PE			
10	42	DI-7-V	船身(平底)		35.3	19.0	1.9	スピル	C	3	BA		
11	42	DI-7-V	船身(平底)		25.4	10.5	0.3	カシ	C	PE	底面		
12	42	DI-7-V	船身(平底)		23.2	7.3	1.4	カシラ	C	B	PE	記述	
13	42	DI-7-V	船身(六脚舟)		14.9	9.9	2.5	カシ	C	PE			
14	42	DI-7-V	船身(札下)		14.6	8.8	1.2	カシ	C	E	VA		
15	42/28	船身(札下)	正彌		16.6	9.3	8.8	ヤクシ	C	PE			
16	42/14	船身(札下)	セイミ		31.6	15.5	6.2	ツラ	C	PE			
17	42/14	船身(札下)	セイミ		18.6	12.9	5.9	ヤクシ	C	PE			
18	42/14	船身(札下)	丸舟		56.2	1.8	1.0	イヌマツ	C	D	PE		
19	42/14	船身(札下)	丸舟		45.6	2.8	2.4	イヌマツ	C	D	PE		
20	42/14	船身(札下)	丸舟		56.8	2.3	1.3	トネ	D	BA			
21	42/7	船身(札下)	丸舟		15.5	1.9	1.4	イヌマツ	C	E	PE		
22	42/10	船身(札下)	丸舟		35.2	#2.9		イヌマツ	C	D	PE		
23	42/2	船身(札下)	丸舟		16.4	2.5	1.6	リリバク	C	PE	和番		
24	42/11	船身(札下)	丸舟		17.2	2.8	2.2	ツリバク	C	PE	和番		
25	42/17	船身(札下)	丸舟		18.6	12.9	5.9	ヤクシ	C	PE			
26	42/19	船身(札下)	丸舟(桶)		15.5	4.0	6.3	ツリバク	C	PE			
27	42/20	船身(札下)	丸舟		24.8	6.6	4.7	庄屋型?	E	PE			
28	42/25	42/22	船身(札下)		36.3	12.4	3.9	ヤクシ	C	E	PE		
29	42/41	船身(札下)	丸舟		14.7	6.7	3.0	ヤクシ	C	E	BA		
30	42/115	船身(札下)	丸舟		36.5	8.3	2.3	ヒノキ	B	BA			
31	42	船身(札下)	丸舟		31.0	6.7	4.8	ヒノキ	C	BA		船身は削りてある	
32	42	船身(札下)	丸舟		99.1	3.2	3.0	ヒノキ	C	BA		戸板96	
33	42/5	船身(札下)	丸舟		102.4	9.3	5.5	イヌマツ	C	BA		舟底317	
34	42/5	船身(札下)	丸舟		94.0	5.2	2.5	ツラ	C	BA		内側933	
35	42/4	船身(札下)	丸舟		66.5	6.5	5.0	ツラ	C	BA		内側934	
36	42/5	船身(札下)	丸舟		69.4	5.1	2.7	ヒノキ	C	BA		内側935	
37	42/4	船身(札下)	丸舟		68.2	2.6	1.3	ヤクシ	C	BA		内側936	
38	42/4	船身(札下)	丸舟		32.2	6.5	3.0	ヤクシ	C	BA			
39	42/25	船身(札下)	丸舟(桶)		42.0	2.0	2.9	ヒノキ	D	BA		台輪110	
40	42/41	船身(札下)	丸舟(桶)		59.3	2.6	2.4	イヌマツ	C	BA		柱脚143	
41	42/51	船身(札下)	丸舟(桶)		24.5	2.8	0.6	ツラ	C	BA			
42	42	船身(札下)	丸舟		17.9	1.6	1.0	ヒノキ	C	BA			
43	42	4-7-V	丸舟		16.2	15.5	13.0	云雲舟	E	BA			
44	42	4-7-V	丸舟		21.7	9.5	16.7	庄屋型?	E	BA		穴穴	
45	42/7	船身(札下)	丸舟		16.7	8.1	2.4	ヤクシ	C	PE		70cm	
46	42/7	42/1	丸舟		27.5	8.7	2.6	ヤクシ	C	PE		70cm	
47	42/76	42/107	丸舟		12.0	6.8	1.0	ツラ	C	BA		舟身45	
48	42/10	4-7-V	丸舟		29.2	22.9	3.5	ヤクシ	C	B	PE	引物	
49	42/10	4-7-V	丸舟		67.2	17.7	8.0	ヒノキ	C	BA		穴穴の腰?	
50	42/10	4-7-V	丸舟		94.0	22.7	7.2	クリ	C	PE		PE	
51	42/27	42/10	丸舟		61.0	15.3	12.1	シイ	C	S	PE		
52	42/12	42/10	丸舟		61.6	6.4	2.6	イヌマツ	C	BA		軒梁140	
53	42/10	4-7-V	丸舟		62.0	4.6	2.6	ヤクシ	C	BA		軒梁42	
54	42/22	4-7-V	丸舟		47.6	6.5	2.5	イヌマツ	C	BA		軒梁129	
55	42/18	42/10	丸舟		29.2	0.3.5		ヒノキ	C	BA		軒梁98	

試験番号	試験品名	試験場所	二二地区	層位	名 称	高さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	材種	山木	老木	地質	記 号
56	瓦136	内沢川	内沢	内沢	内沢	62.8	7.0	4.0	スギ	○	A	TNG	
57	瓦121	B4-B5	内沢	内沢	内沢	50.1	5.0	2.8	シラカバ	○	H	RA	367
58	瓦136	内沢川-00	内沢	内沢	内沢	32.9	5.6	2.7	スギ	○	B	RA	瓦緑193
59	瓦129	B-00	内沢	内沢	内沢	53.4	8.7	2.8	ニコキ	○	C	RA	瓦緑146
60	木144	内沢川-00	内沢	内沢	内沢	50.1	7.9	2.1	スギ	○	C	RA	瓦緑518
61	木143	内沢川-00	内沢	内沢	内沢	58.9	8.9	3.4	ニコキ	○	C	PEC	
62	木126	内沢川-00	内沢	内沢	内沢	32.8	7.3	1.4	スギ	○	C	PEC	
63	木145	内沢川-00	内沢	内沢	内沢	32.6	13.4	2.7	シオノ	○	C	P	瓦緑518
64	木123	A7-B7	内沢	内沢	内沢	81.3	9.2	1.2	シスノキ	○	B	RA	瓦緑130 錆筆耐候材?
65	木125	B4-B7	内沢	内沢	内沢	44.4	7.9	1.4	シラカバ	○	E	RA	瓦緑136
66	木98	木	育木	育木	育木	63.5	20.4	6.0	シノキツ	○	H	RA	
67	木79	B-00	育木	育木	育木	25.3	9.0	5.6	スギ	○	A	RA	芦緑32壁裏更 乾燥
68	木132	B-00	育木	育木	育木	66.6	12.9	2.1	セミ	○	H	RA	内緑5-49
69	木139	内沢川-00	育木	育木	育木	100.5	14.9	8.1	ヤクサ	○	Z	RA	瓦緑211
70	木42	B4-B7	帽子	帽子	帽子	156.2	17.7	9.0	タリ	○	DE	Y	瓦緑22
71	伊豆松-43	B6-B7	帽子	帽子	帽子	217.5	6.4	5.4	ニコキ	○	D	Y	瓦木材
72	木99	木99	保育材(深木)	保育材(深木)	保育材(深木)	144.6	12.0	7.0	ヒノキ	○	Z	育木	
73	木99	木99	保育材(浅木)	保育材(浅木)	保育材(浅木)	129.9	13.0	5.4	カシ	○	DE	Y	瓦木材
74	木99	木99	保育材	保育材	保育材	96.3	12.1	5.4	ヒノキツ	○	Z	Y	ヒノキ丸太
75	木155	B6-B7	保育	保育	保育	29.1	5.9	1.5	カシツ	○	RA	ヒ緑丸太	
76	木151	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	47.1	7.1	1.5	ヒノキ	○	RA	ヒ緑11	
77	木153	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	53.7	3.7	2.6	カシツ	○	PEC	内緑16 日下脚	
78	木153	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	20.2	2.9	2.6	ヒノキ	○	PEC	内緑16 日下脚	
79	木151	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	20.0	2.2	0.6	ヒノキ	○	PEC	a. 脚	
80	木142	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	27.2	2.5	0.6	ヒノキ	○	A	ヒ緑16 黒上漆	
81	木142	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	26.1	2.6	0.6	ヒノキ	○	PEC		
82	木143	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	15.3	2.6	0.6	ヒノキ	○	PEC		
83	木143	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	7.3	1.6	0.6	ヒノキ	○	PEC		
84	木145	B4-B7	大足(豆板)	大足(豆板)	大足(豆板)	4.6	2.3	0.6	ヒノキ	○	PEC		
85	木151-14	B4-B7	上盤	上盤	上盤	22.0	8.9	1.6	ヒノキ	○	PEC	白木口	
86	木156	B5-B7	伊豆松円筒形柱頭と底板	伊豆松円筒形柱頭と底板	伊豆松円筒形柱頭と底板	31.0	8.1	0.6	ヒノキ	○	PEC		
87	木151	B4-B7	伊豆松	伊豆松	伊豆松	24.1	7.9	1.2	ヒノキ	○	PEC	トレンチ豆脚	
88	木151-2	B4-B7	伊豆松	伊豆松	伊豆松	13.6	8.0	1.2	ヒノキ	○	PEC	ヒノキ	
89	木151-3	B4-B7	伊豆松	伊豆松	伊豆松	11.7	7.2	0.6	ヒノキ	○	A	ヒ緑16 油付	
90	木98	木98	油付	油付	油付	14.4	4.5	0.6	ヒノキ	○	A	ヒ緑山木	木98
91	木150	B5	木	木	木	21.3	5.2	0.6	ヒノキ	○	PEC	a. 木	
92	木150	B5	木	木	木	8.6	1.5	0.7	木98	○	A	木98	
93	木151	B7	木	木	木	7.2	3.1	1.2	ヒノキ	○	PEC	日付	
94	木143	B4-B7	木	木	木	38.5	4.7	1.2	ヒメキ	○	C	木98	木98
95	木154	V7	(3.5木鉢)	(3.5木鉢)	(3.5木鉢)	17.1	5.1	0.7	ヒノキ	○	PEC	竹山山田小屋	
96	木154	V7	(3.5木鉢)	(3.5木鉢)	(3.5木鉢)	15.6	2.4	0.6	ヒノキ	○	A	PEC	差一月方木 屋は油付
97	木154	V7	(2.5木鉢)	(2.5木鉢)	(2.5木鉢)	18.1	2.3	0.6	ヒノキ	○	A	PEC	dトド... 錆筆具二... 屋は油付
98	木154	V7	(2.5木鉢)	(2.5木鉢)	(2.5木鉢)	9.0	2.8	0.6	ヒノキ	○	B	PEC	cトド...
99	木154	V7	(木生)	(木生)	(木生)	31.7	3.9	1.0	ヒノキ	○	D	PEC	笠生調査 生木は油付
100	木154	V7	(木生)	(木生)	(木生)	18.7	8.0	2.0	木98	○	C	PEC	笠生

二和町 清瀬山上木製品(第115回)

試験番号	試験品名	試験場所	二二地区	層位	名 称	径	幅	厚	材種	山木	老木	地質	記 号
1			原	原	原	52.4	12.6	3.7	灰岩	L	TNG	木98時代毛削削半	
2			原	原	原	12.7	5.0	2.7	灰岩	K	TNG	木98時代毛削削半	
3			内沢	内沢	内沢	30.5	7.6	4.1	スギ	L	TNG	雁ヶ原村付近 木98時代毛削削半	
4			白物斜板	白物斜板	白物斜板	54.3	33.7	1.0	ヒノキ	N	-	二和井井戸 10世紀	

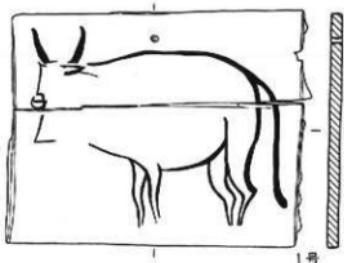
市外の檍洲町土木製品(第116・117回)

試験番号	試験品名	試験場所	二二地区	層位	名 称	径	幅	厚	材種	山木	老木	地質	記 号
1			圓ノ木	圓ノ木	圓ノ木	60.7	11.3	2.6	カシ類	F	PEC	柳谷地気候葉脈半	
2			圓ノ木	圓ノ木	圓ノ木	124.0	19.6	2.3	カシ類	C	PEC	柳谷地気候葉脈半	
3			圓ノ木	圓ノ木	圓ノ木	39.1	20.5	1.6	カシ類	E	PEC	柳谷地気候葉脈半	
4			圓ノ木	圓ノ木	圓ノ木	30.0	19.8	6.1	カシ類	L	PEC	柳谷地気候葉脈半	
5			圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	24.6	6.6	1.6	ヒノキ	A	PEC	柳谷地気候葉脈半	
6			圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	36.0	6.0	1.0	ヒノキ	B	PEC	柳谷地気候葉脈半	
7			圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	19.7	3.4	2.0	スギ	A	PEC	柳谷地気候葉脈半	
8			圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	33.0	15.2	4.2	カシ類	L	PEC	一木造り 柳谷地気候葉脈半	
9			圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	圓木柱16-IV	27.7	16.0	0.9	カシ類	F	PEC	柳谷地気候葉脈半 桧造柱 桧造柱 柳谷地気候葉脈半	

伊藤波路川上流域の骨格類(第96-97回)

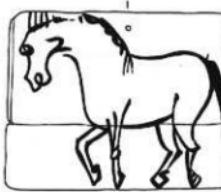
回数	年月日	水文	名 称	度 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	材 质	考
1	4-24	7A 3 86. VV	度	12.0	4.3			鉄	木柄付 鋼ひば大判取り上り手引 本漆地合 木柄附付
2	3-890	7A- 8160-50下	度	16.0	2.6	0.15	76.5	鉄	木柄付 條ひば茎葉
3	4-26	14- V3	度	12.0	2.8	0.15	33.4	鉄	度
4	4-218	14-IV3器	度	16.0	2.9	0.2	59.0	鉄	度
5	6-16	14- V5	度	12.0	4.2	0.2	54.0	鉄	度
6	3-264	14-IV-VI	度	13.0	2.55	0.2	36.0	鉄	度のみ又度、ヨリ度
7	6-37	14-IV-VI	度	15.0	2.6	0.26	24.6	鉄	刀刃を大きく久持
8	4-224	416-14- I	鉄	6.45	1.6	0.15	6.9	鉄	
9	11-192	8111-14- IV	鉄	4.5	2.9	0.15	16.4	鉄	度
10	8P-567	AMe-×大判IV-V	鉄	11.0	2.4	2.5	17.4	鉄	度
11	國-552	AMe-又-度V度	鉄	(6.0)	2.1	2.0	(3.0)	鉄	條のみ又度、ヨリ度
12	3-851	230-6 8160-50	刀子	21.25	11.95	3.65	26.5	鉄	木柄付 今度は刀を含む 刃込の茎葉
13	4-212	230-7 45- VVA	刀子	19.75	7.0	0.3	32.0	鉄	木柄付 今度は刀を含む 刃込の茎葉
14	4-213	230-8 45- VVA	刀子	22.0	7.7	0.3	32.2	鉄	木柄付 今度は刀を含む 刃込の茎葉
15	11-186	8171- V2	刀子	16.0	1.4	0.2	23.5	鉄	木柄付 木柄端目録付の1件
16	3-212	8171- V2	刀子	14.0	1.3	0.2	14.0	鉄	木柄付 3次無頭に追 本柄付
17	3-658	8160-54	刀子	12.0	1.3	0.2	2.6	14.0	鉄
18	4-219	8160-54	刀子	16.0	1.3	0.2	20.0	鉄	
19	4-27	8160-54	刀子	12.0	0.8	0.3	4.2	鉄	
20	4-29	45- V-	刀子	16.7	1.2	0.3	20.5	鉄	
21	1-49	14- V2	刀子	12.1	1.0	0.3	8.7	鉄	
22	5-119	8160-54	刀子	16.0	1.0	0.3	9.8	鉄	
23	4-95	8160-54	刀子	16.0	1.2	0.3	9.5	鉄	
24	5-122	AMe- S3	刀子	12.0	0.6	0.3	1.0	鉄	
25	11-143	8160- V2	刀子	12.0	1.2	0.2	12.0	鉄	
26	11-155	8171- V2	刀子	10.5	1.1	0.4	8.5	鉄	
27	度合不規則	AMe-度合度	刀子	9.0	1.0	0.2	4.5	鉄	研究名不規
28	6-13	8160- V	刀子	12.0	1.4	0.3	7.0	鉄	
29	4-22	8160- S8	刀子	12.0	1.3	0.4	8.4	鉄	
30	9-730	8160- V8	刀子	7.0	1.1	0.3	2.9	鉄	
31	5-756	8160-6 V1	刀子	4.5	0.5	0.1	1.0	鉄	
32	7-415	8160- V4	刀子	6.0	0.6	0.3	1.0	鉄	
33	6-705, 8-705	SR	刀子?	2.5	0.9	0.2	1	鉄	
34	2-214	AMe- q-IV	刀子?	5.0	1.5	0.4	1.1	鉄	小刀基部ノリ
35	9-83	8160- V1	鉄頭	14.0	3.1	0.4	3.0	鉄	表上脚二脚脚
36	4-23	Y- V	鉄頭	9.0	3.0	0.3	9.0	鉄	
37	11-196	14- V- V1	鉄頭	19.0	2.5	0.3	13.0	鉄	
38	2-252	8160- V1	鉄頭	13.0	4.1	2.3	14.0	鉄	
39	2-266	8160- V	鉄頭	4.0	0.7	0.3	3.0	鉄	度
40	5-130	AMe- E 上	鉄頭?	6.0	0.9	0.4	4.5	鉄	度
41	HE-201	A地頭区 V厚	鉄頭	9.0	2.1	0.6	7.2	鉄	度ノリ度ノリ度
42	5-206	8160- V厚	鉄頭	6.0	11.0	2.0	107.0	鉄	
43	5-195	8160- V4	鉄頭	7.0	2.7	1.0	1.0	鉄	木柄付木名 木漆頭正元708
44	4-193	8160- V15	鉄頭	4.0	2.8	0.8	25.4	鉄	
45	国-229	AMe-度合山山	鉄頭	8.0	3.6	0.4	22.0	鉄	度了邊頭口次
46	11-181	8160- V23	手鍬	3.0	1.2	0.1	1.1	鉄	
47	11-197	8171- V3	手鍬	14.0	1.7	0.9	27.0	鉄	
48	10-3	8160- V	手鍬	4.0	1.0		5.5	鉄	度ノリ度ノリ度
49	4-63	AMe- I	手鍬	6.0	12.4	3.0	3.4	鉄	中性ノリ
50	4-677	AMe-度合度	手鍬?	5.2	2.4	0.1	3.2	鉄	度ノリ度ノリ度
51	4-163	C- I- II 上	手鍬	6.0	4.5	0.9	29.0	鉄	船と船頭分析では、御前半高頭の船
52	2-215	AMe- V4	手鍬	3.0	1.0	0.2	5.7	鉄	
53	8P-964	8160-2	手鍬頭	2.0	3.2	2.6	7.5	鉄	被子頭頭 7度AMe木土2
54	2-110	AMe- V	手鍬	5.0	1.6	0.4	2.2	鉄	
55	2-208	AMe- IV	手鍬	2.0	0.8	0.4	2.0	鉄	
56	9-993	AMe- V	手鍬	5.0	2.0	0.2	3.0	鉄	度了邊頭 7度AMe木土2
57	5-704	AMe-度合	手鍬	2.0	1.1	0.5	3.5	鉄	度ノリ度ノリ度
58	4-227	8160- V	手鍬	2.0	0.8	0.1	5.5	鉄	
59	5-111	8160- V25	手鍬	10.0	1.1	1.1	3.0	鉄	6-7度表面に削迹
60	4-196	AMe- S2	手鍬	7.0	1.4	1.0	14.0	鉄	
61	4-172	8160- S2	手鍬	7.0	1.4	1.0	16.1	鉄	
62	4-192	AMe- S2	手鍬?	7.0	1.5	1.2	16.4	鉄	木頭頭?
63	4-192	AMe- V25	手鍬	6.0	0.8	0.2	3.7	鉄	
64	4-234	AMe- V2	手鍬	6.0	0.8	0.2	2.7	鉄	
65	4-260, 下限	AMe- V	手鍬	6.0	0.8	0.4	5.0	鉄	
66	1-152	'4- V5- I	手鍬	4.0	2.0	0.4	5.0	鉄	
67	4-16- 701	SR	小刀の柄?	15.0	1.8	1.5	18.2	鉄	
68	3-809	8160-5	細い手鍬?	6.0	1.1		13.0	鉄	度部分
69	4-206	AMe- V	トロ	11.0	2.0	0.2	2.0	鉄	SHP
70	4-126	AMe- V	トロ	14.0	1.3	0.6	6.0	金	SHP
71	4-226	AMe- V	トロ	6.0	1.8	0.3	2.1	金	SHP
72	4-126	AMe- V	トロ	5.0	1.2	0.2	1.7	金	SHP
73	4-226	AMe- V	トロ	2.0	1.65	0.1	1	金	SHP
74	6-337	8160-25	右筒	3.5	2.8	0.6	16.0	金	度部分
75	6-42	8160- V	左筒	2.5	1.4	0.6	4.0	金	九頭 大底西頭
76	P-43	116g- V1	左筒等	1.0	2.2	0.1	1.5	金	度部分

実測図版

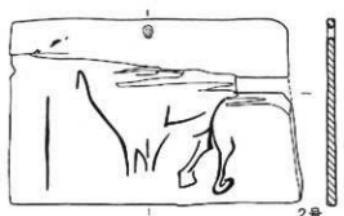


1号

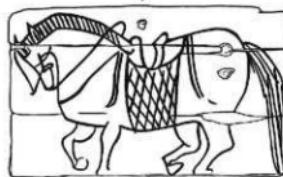
絵馬集成



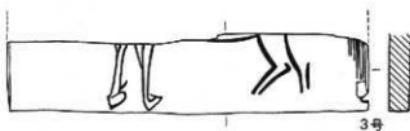
5号



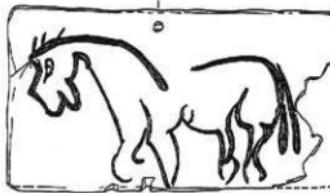
2号



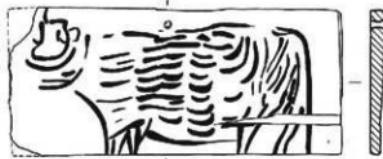
6号



3号

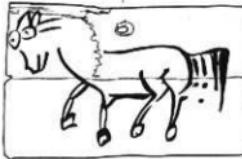


7号
馬は棲っていない



4号

S=1/2



桝子北

実測図版目次

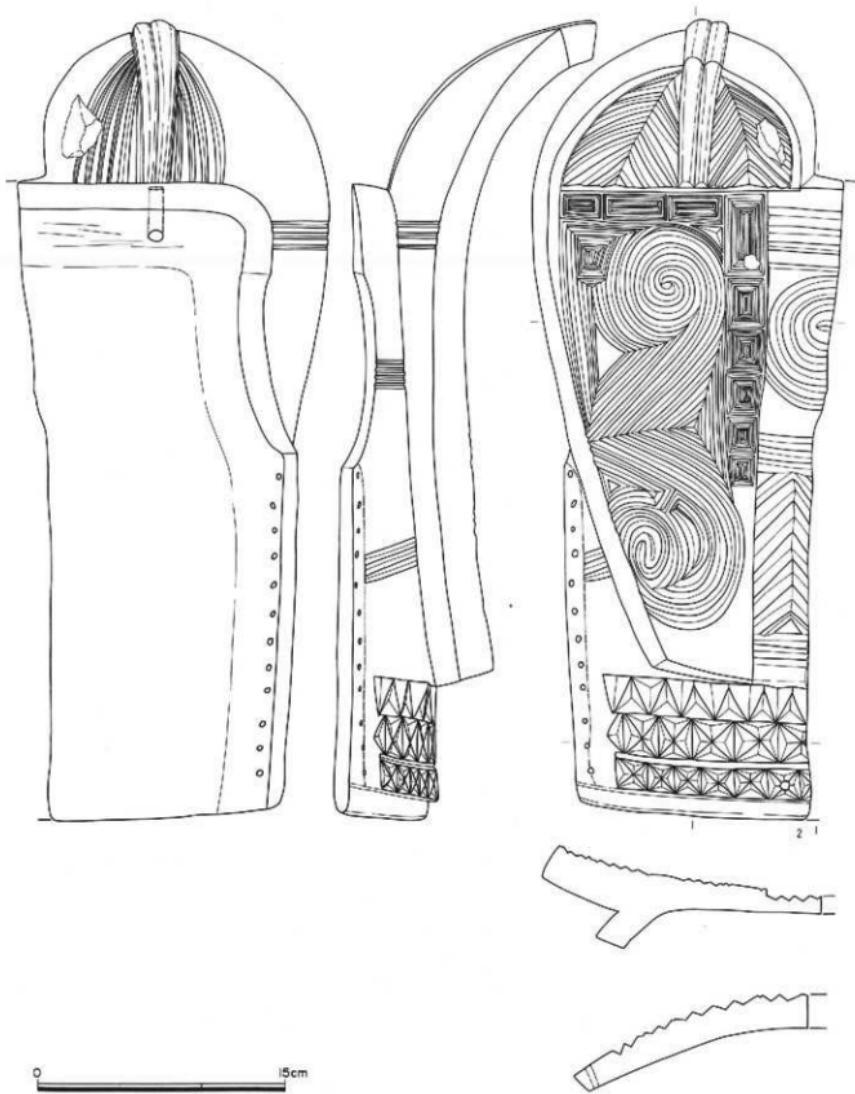
伊場遺跡出土木製品（1次整理）

- 第1回 木甲(骨当て)
- 第2回 木甲(胸当て)
- 第3回 木甲(胸当て・背当て)
- 第4回 頭・顎
- 第5回 骨・柄板・大足・螺鈿・斧柄・手斧柄
- 第6回 馬歛(竹木)
- 第7回 馬歛(荷・櫻)
- 第8回 代絆・笠・掛網
- 第9回 背負子
- 第10回 背負子
- 第11回 櫛台・櫛絆
- 第12回 櫛絆・櫛筋
- 第13回 魔除具・刀子柄他
- 第14回 曲物底板
- 第15回 曲物底板
- 第16回 曲物底板
- 第17回 曲物底板
- 第18回 曲物底板
- 第19回 曲物底板
- 第20回 曲物底板
- 第21回 曲物底板・箸・杓文字・挽物盤
- 第22回 約板・アカキキ・櫻
- 第23回 火燭臼・杵・灰
- 第24回 櫛絆
- 第25回 下駄・鼠返し・齒鉗
- 第26回 洗濯板・柳子・櫻
- 第27回 人形・刀形・物持・梳刷・馬形
- 第28回 肩形
- 第29回 肩形
- 第30回 箕形・人形
- 第31回 衛鏡・本柄・四ツ手鏡
- 第32回 出納材・柄板・袋縫・刀形・木柄材・琴柱・撥・加工板・印判
- 第33回 かせかけ・有孔板
- 第34回 有頭棒・加工板・杭・卓卓
- 第35回 武・福鉾・馬歛・背負子・舟形・人形・木柄材・加工板
- 第36回 曲物底板・曲物側板・柄杓・有頭棒・杭
- 第37回 曲物底板
- 第38回 曲物底板
- 第39回 櫛絆・背負子・有孔棒・木柄・簡状木製品・曲物まわしの側板
- 第40回 旗・刀子柄・印判・背負子
- 第41回 福鉾・曲物底板・卓卓
- 第42回 大足・代絆・螺鈿・櫻絆・アカキキ
- 第43回 手斧柄・櫻絆・丸・丸木・出納材・下駄・曲物底板
- 第44回 曲物底板・曲物側板・櫻絆
- 第45回 肩形・卓卓・人形・馬形
- 第46回 旗・天秤棒・曲物底板・櫻絆
- 第47回 柄・木柄・四ツ手鏡・かせかけ・出納棒・刀子・清舟・梳刷
- 第48回 建築部材
- 第49回 背負子・木柄・火鍵口・刀子柄・卓卓・木柄材・有孔板
- 第50回 曲物底板・舟形・有頭棒木製品・有頭棒

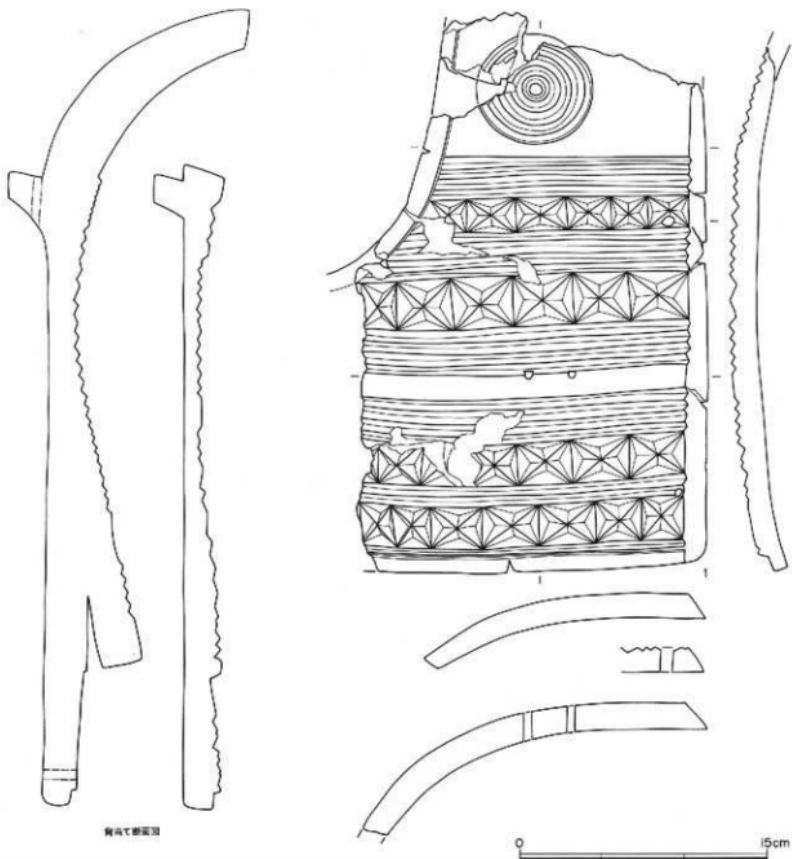
伊場遺跡出土木製品（2次整理）

- 第51回 融柄・蓋柄・木柄・福鉾・タクリ・曲物まわしの側板・挽物盤
- 第52回 建築部材
- 第53回 櫛・鼠返し・加工角材
- 第54回 肩形・卓卓・木柄材
- 第55回 球・木柄
- 第56回 出納棒・柄物側板・有孔板・曲物底板・有頭棒木製品
- 第57回 有孔板
- 第58回 約板・有孔板・加工板・曲物底板・刀鍼・機織具・柄杓
- 第59回 木板・機織具・加工材・卓卓・有頭棒木製品・櫻絆状木製品
- 第60回 有頭棒
- 第61回 櫛絆・かせかけ・四ツ手鏡・木柄・背負子
- 第62回 曲物底板・挽物盤

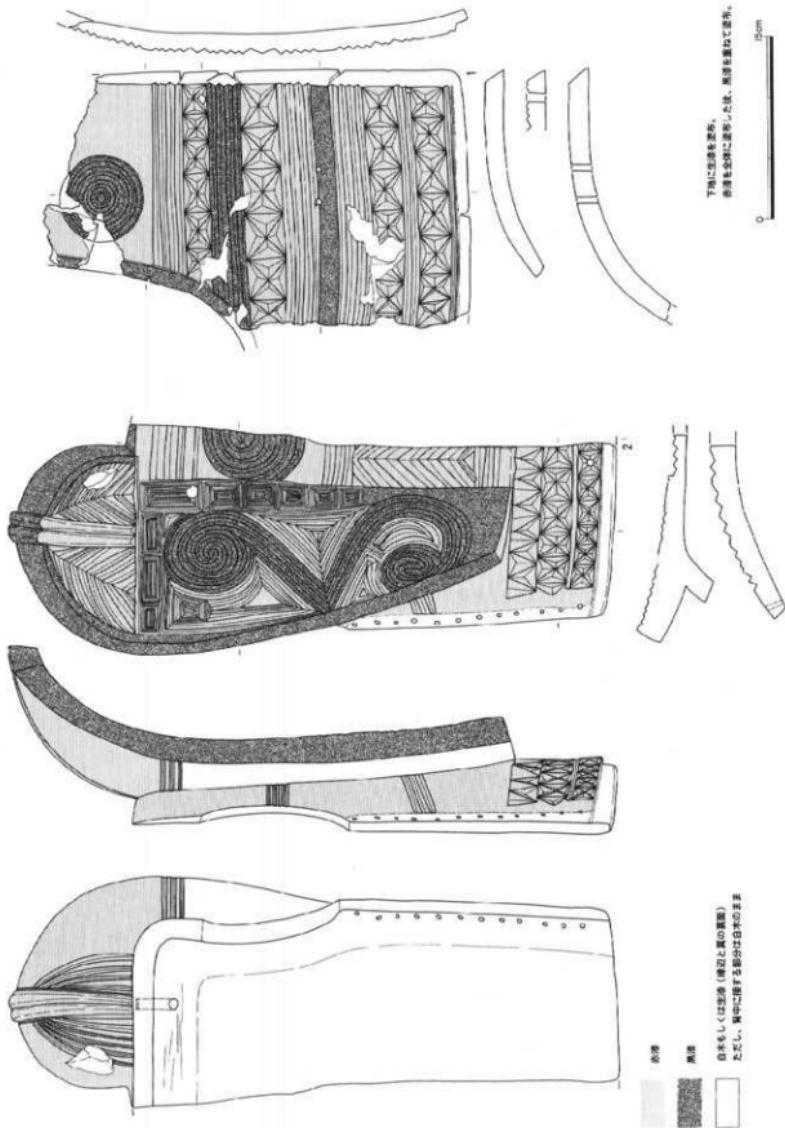
- 第63回 曲物側板・曲物まわしの側板
 - 第64回 檜・有孔板・山柵板・加工材
 - 第65回 舟形・卓卓・木柄材・櫻
 - 第66回 角棒・皿・材・有孔板
 - 第67回 融柄・本柄・櫻・曲物底板・挽物盤
 - 第68回 蓋板・先端加工・薄板・有頭棒・山柵角棒
 - 第69回 有孔材・納穴丸棒・櫻・機械状木製品・大足・鑑柄
 - 第70回 櫛・手斧柄・櫻絆・かせかけ・背負子・櫻・櫻
 - 第71回 曲物底板・馬形・卓卓・刀形・有頭棒・尖頭棒・加工板
 - 第72回 有頭棒・加工材・建築部材
 - 第73回 舟・大足・木柄・樵鉾・櫻
 - 第74回 かせかけ・背負子・櫻・アカキキ
 - 第75回 曲物底版
 - 第76回 曲物底版
 - 第77回 曲物底板・曲物側板・曲物まわしの側板
 - 第78回 舟形・人形・卓卓・箸・加工棒
 - 第79回 組合せ材・加工底板・有孔板・杓文字・山柵板・有頭棒
 - 第80回 大足・加工棒・櫻・竹・福鉾・櫻・材
 - 第81回 小柄・春種角状木製品・幡合
 - 第82回 背負子
 - 第83回 曲物底板
 - 第84回 曲物底板
 - 第85回 曲物底板・挽物盤
 - 第86回 曲物底板・山柵板・先端加工板
 - 第87回 曲物底板・挽物底板・曲物まわしの側板・有孔板
 - 第88回 人形・舟形・木柄材・卓卓・下駄
 - 第89回 尖頭棒・先端加工棒・箸・筒状木製品・有孔板・機織具・大足
 - 第90回 有孔板・加工板・代絆・櫻
 - 第91回 舟形・卓卓・背負子・曲物底板・大足・出納棒・背
 - 第92回 尖頭棒・有頭棒・建築部材・納穴材・曲物まわしの側板・
 - 曲物側板・加工板
 - 第93回 蔵板(建塗部材)
 - 伊場遺跡出土金属器・骨角器
 - 第94回 鉄鍬
 - 第95回 鉄製刀子
 - 第96回 鉄鍬・斧柄・丁鍬・鉄釘・鉄鋸・草鉄・刀・鉄錐・
 - 銅坪拂耳・耳環
 - 第97回 銅外・擬針針・紡錘車・小刀柄・劍状製品・ト骨・石器・
 - 銅製巻金具
- 横子遺跡 6次出土木製品（弥生時代中期）
- 第98回 旗・柄板・櫻
 - 第99回 鋸・櫛板・櫻
 - 第100回 旗・櫛・櫛・櫛・そり
 - 第101回 丸木弓・加工棒
 - 第102回 錠柄・櫻絆・櫻・櫻
 - 第103回 有頭棒
 - 第104回 機織具・有頭棒・口底・建築部材
 - 第105回 櫻・片口鉢・自然遺物
 - 第106回 丸木舟
 - 第107回 納材
 - 第108回 有孔板
 - 第109回 有孔板
 - 第110回 有孔板・櫻子
- 横子遺跡 6次出土木製品（奈良時代）
- 第111回 建築部材
 - 第112回 舟身・大足・馬歛・舟形・馬形・卓卓・木柄材・下駄他
 - 第113回 曲物底板・杓文字・有孔板・有孔板・出納棒
 - 第114回 木柄・舟形・下駄
- 三和町遺跡出土木製品
- 第115回 錠柄・納穴板・曲物側板
 - 岡ノ平・鹿小路・石川遺跡出土木製品
 - 第116回 三本歛・銀鉾・斧柄
 - 第117回 尚杯・アカキキ・火鍵臼・櫻・銀
 - 第118回 上骨参考資料



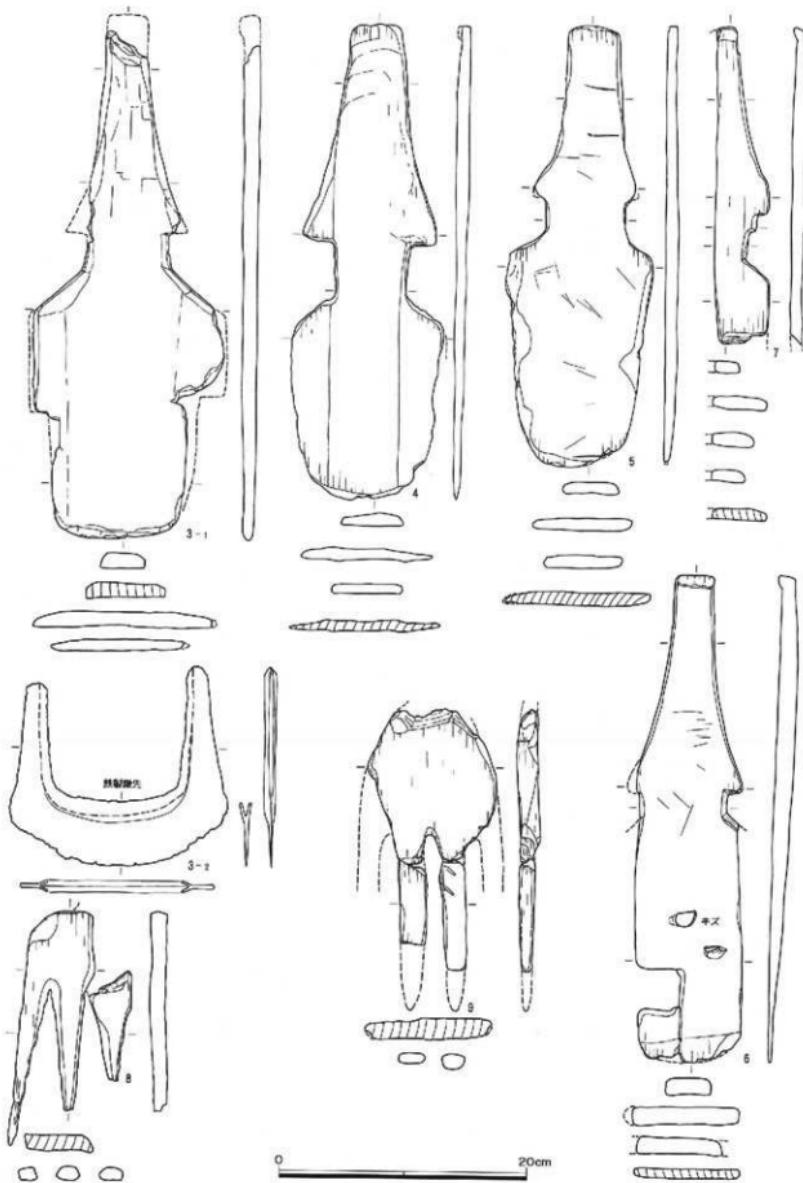
第1図 木甲（背当て）



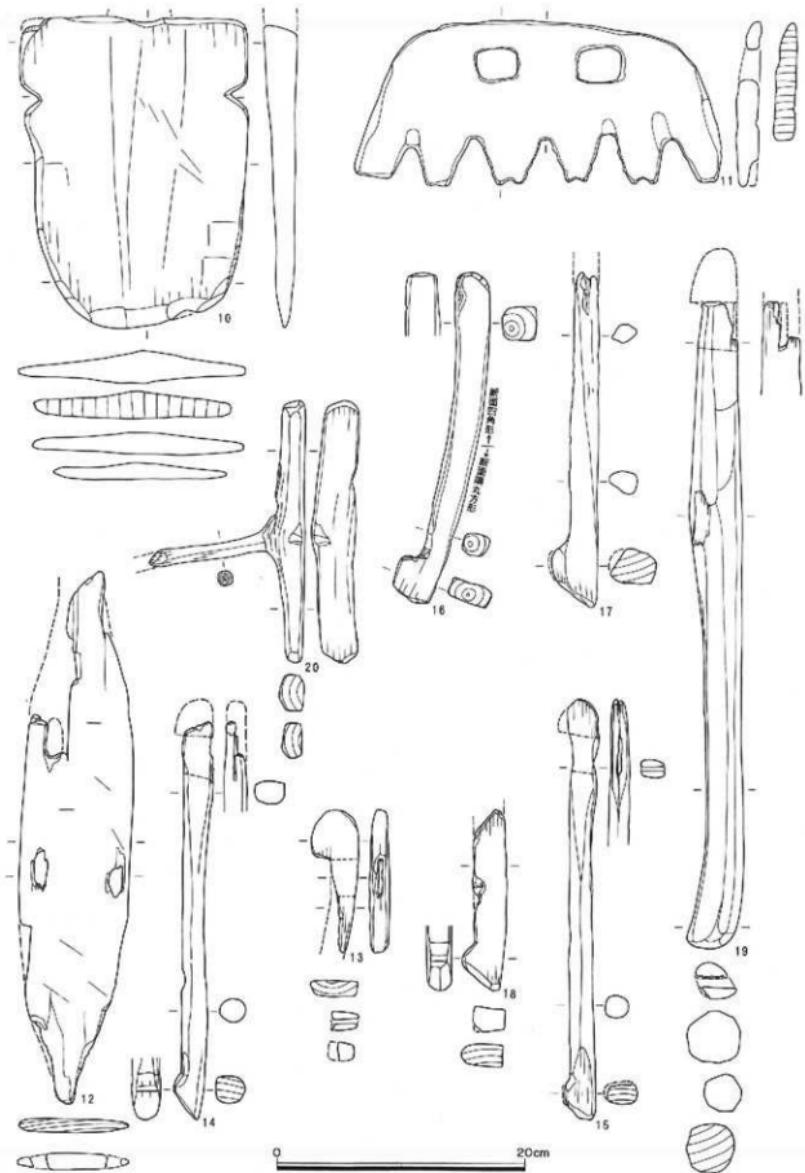
第2図 木甲（胸当て）



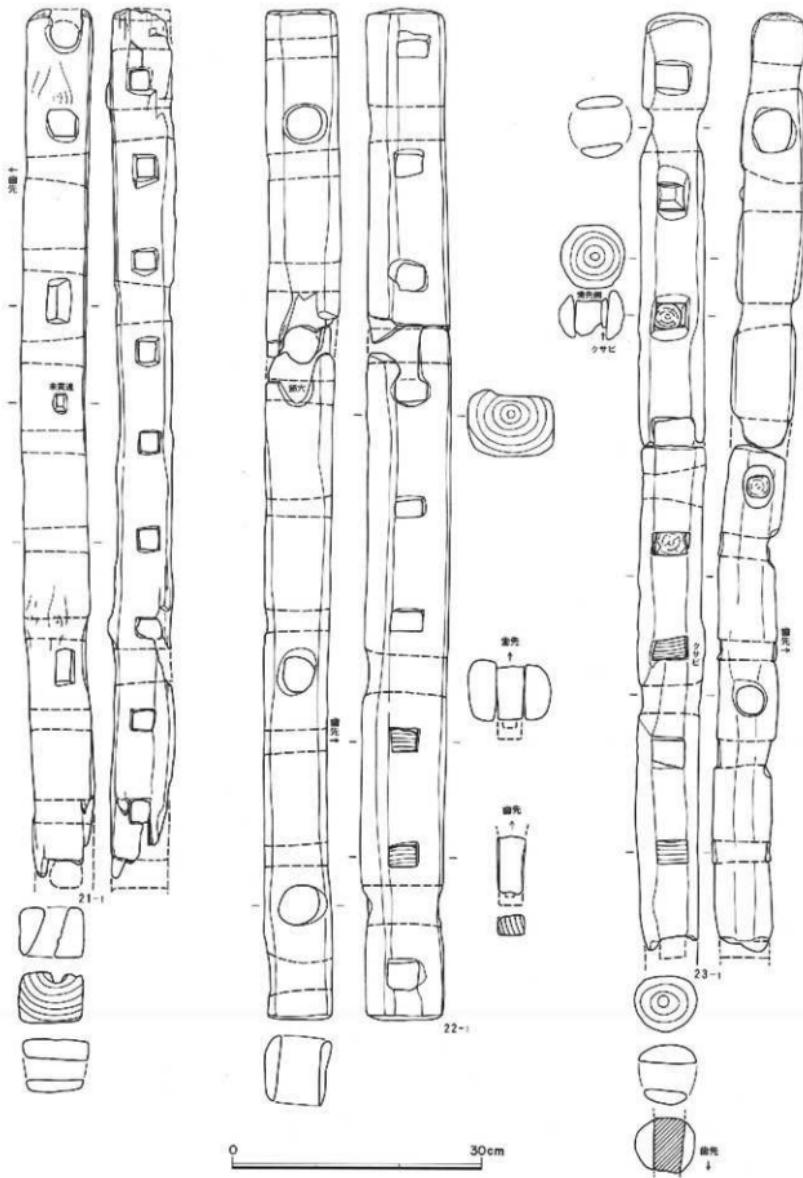
第3図 木甲（胸当て・背当て）



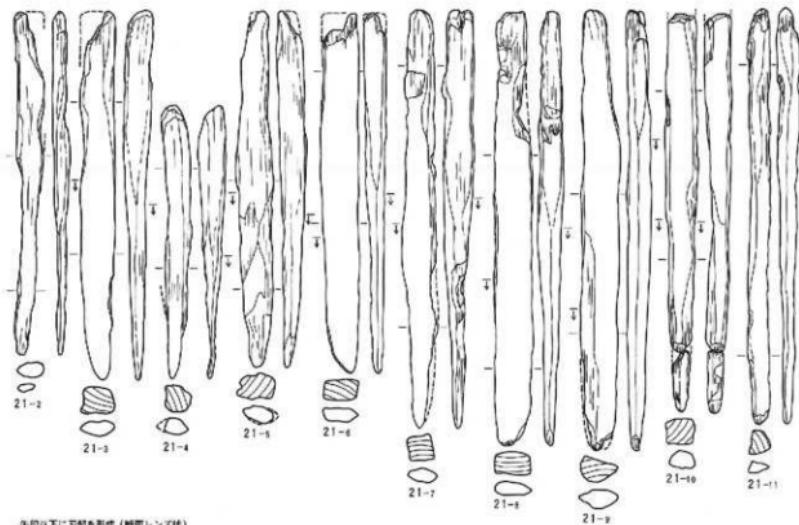
第4図 鋏・鎚



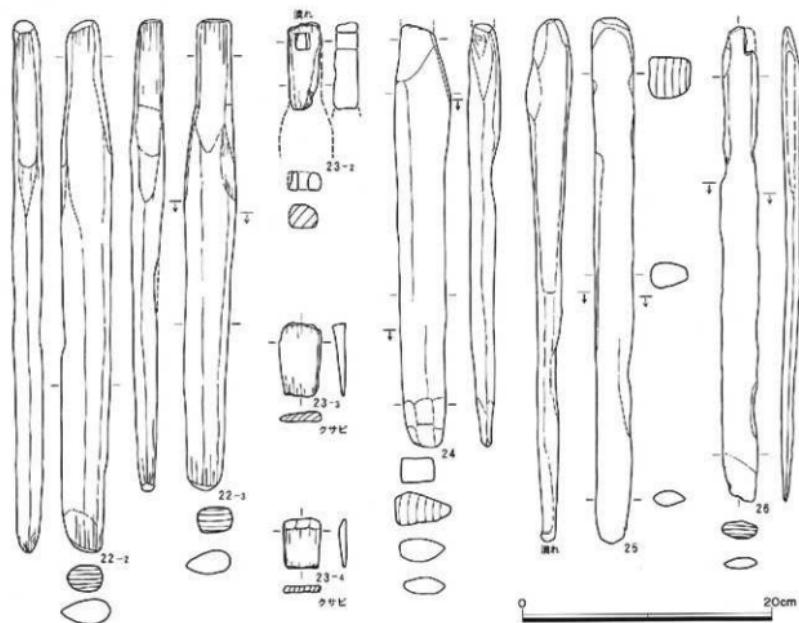
第5図 鐘・柄振・大足・鎌柄・斧柄・手斧柄



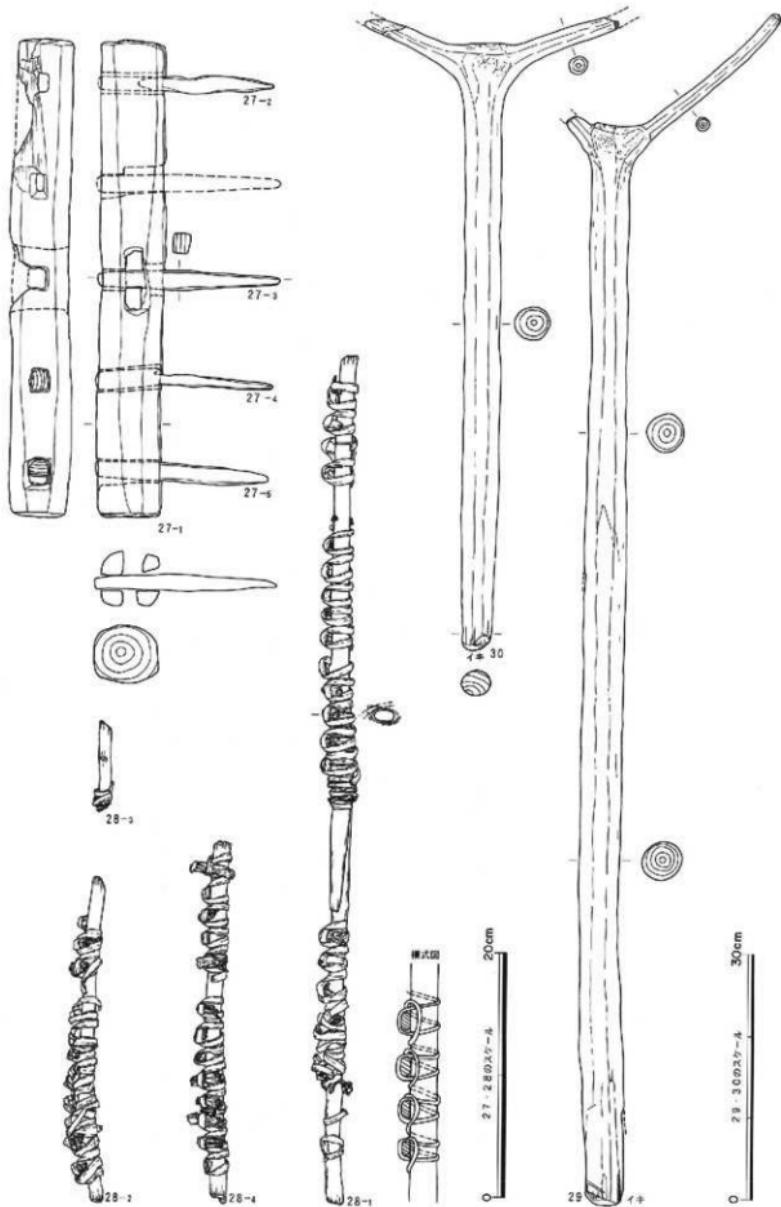
第6図 馬鍤(台木)



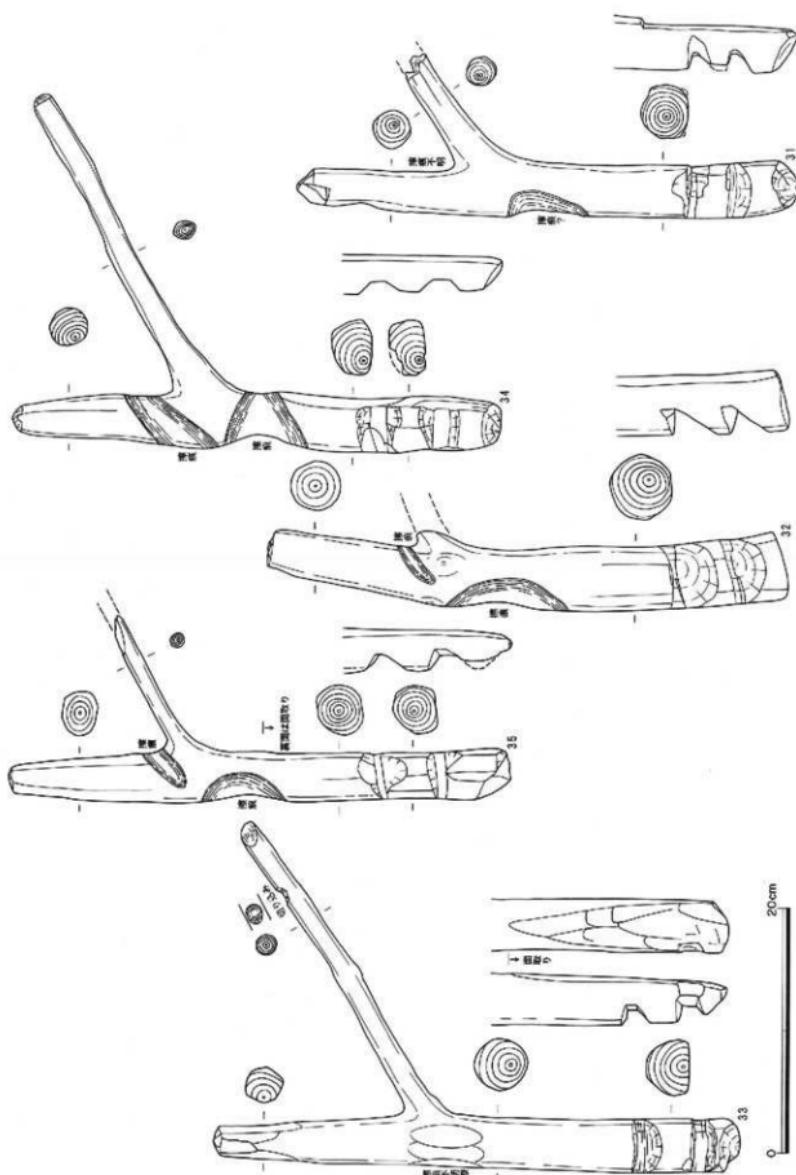
矢印以下に刃部を形成（横面レンズ状）
基部は断面四角形



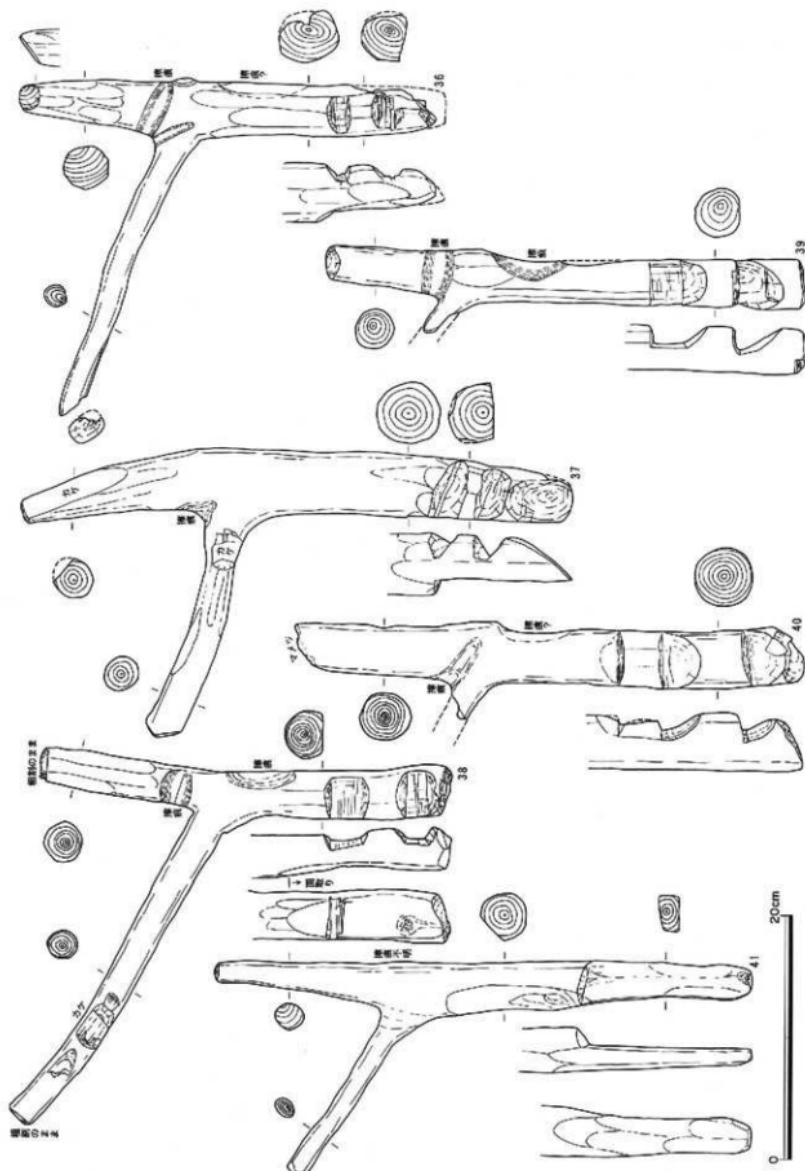
第7図 馬歯（歯・根）



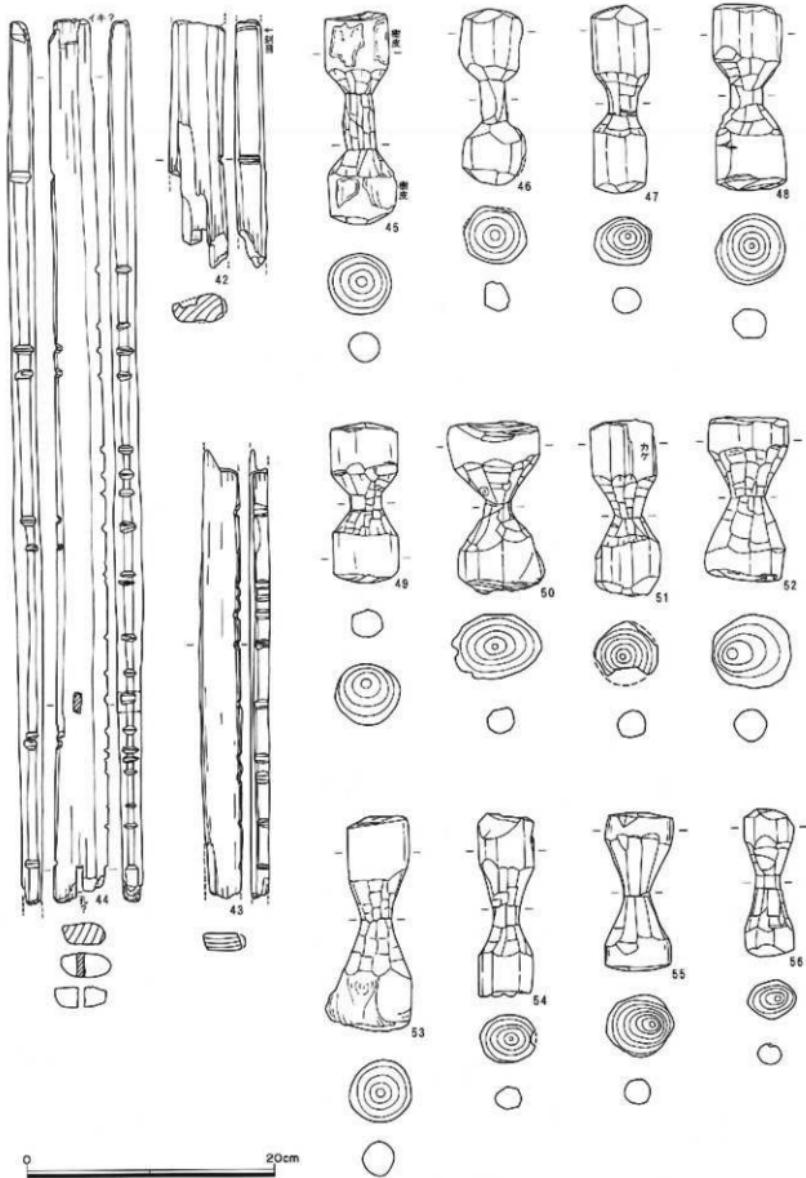
第8図 代搔・筌・搔網



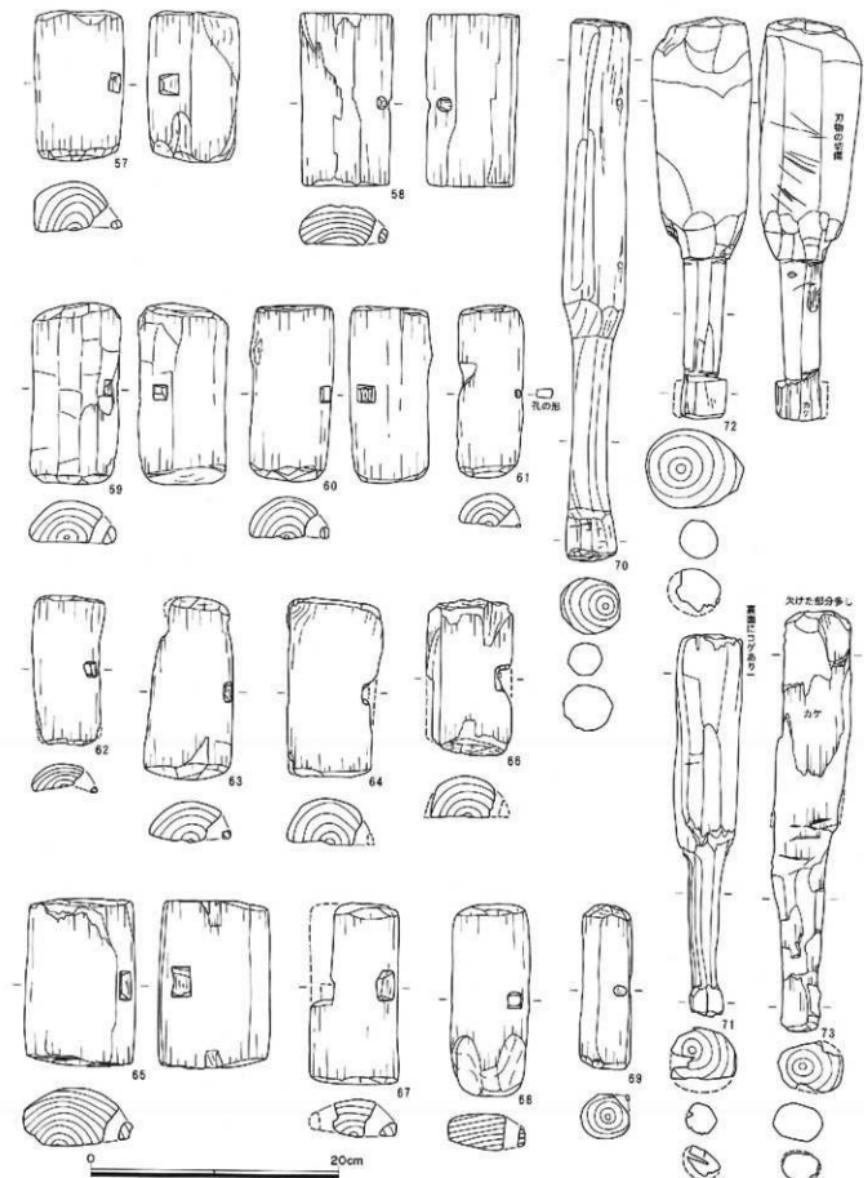
第9図 背負子



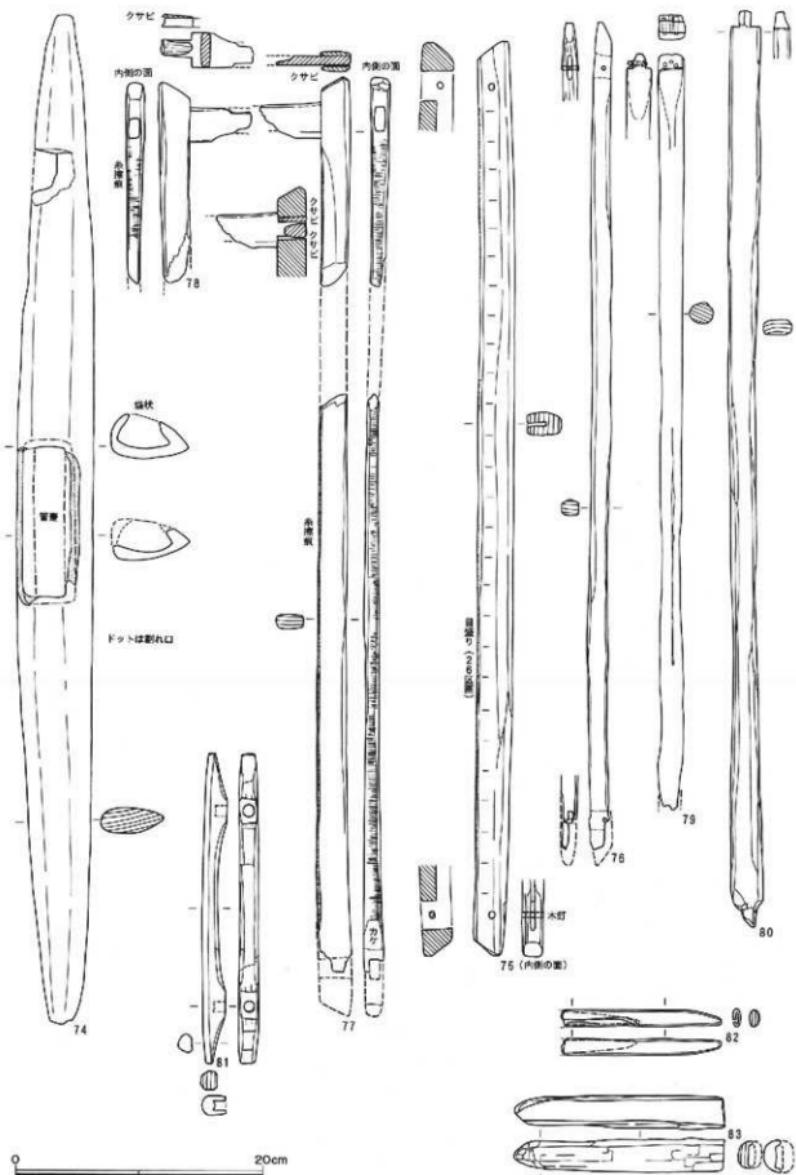
第10図 背負子



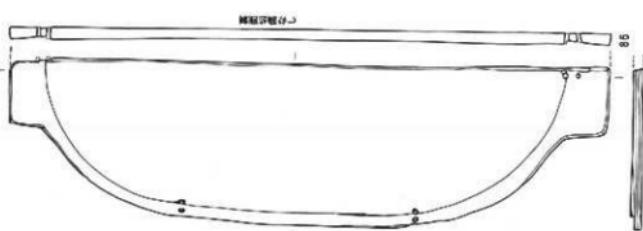
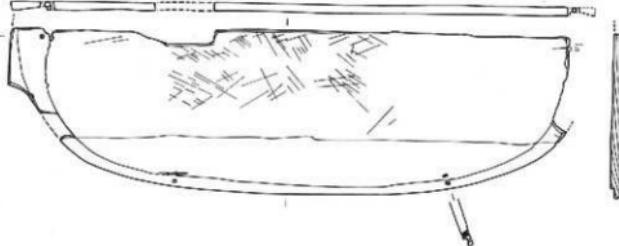
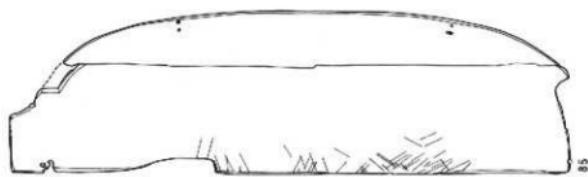
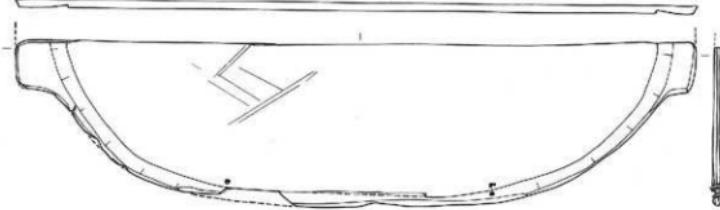
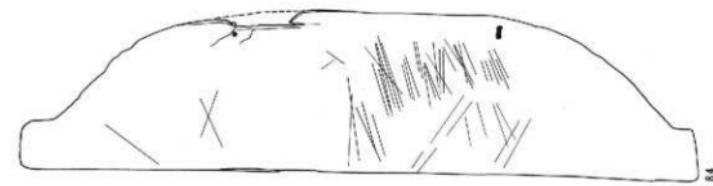
第11図 編台・編錘



第12図 編錘・横槌

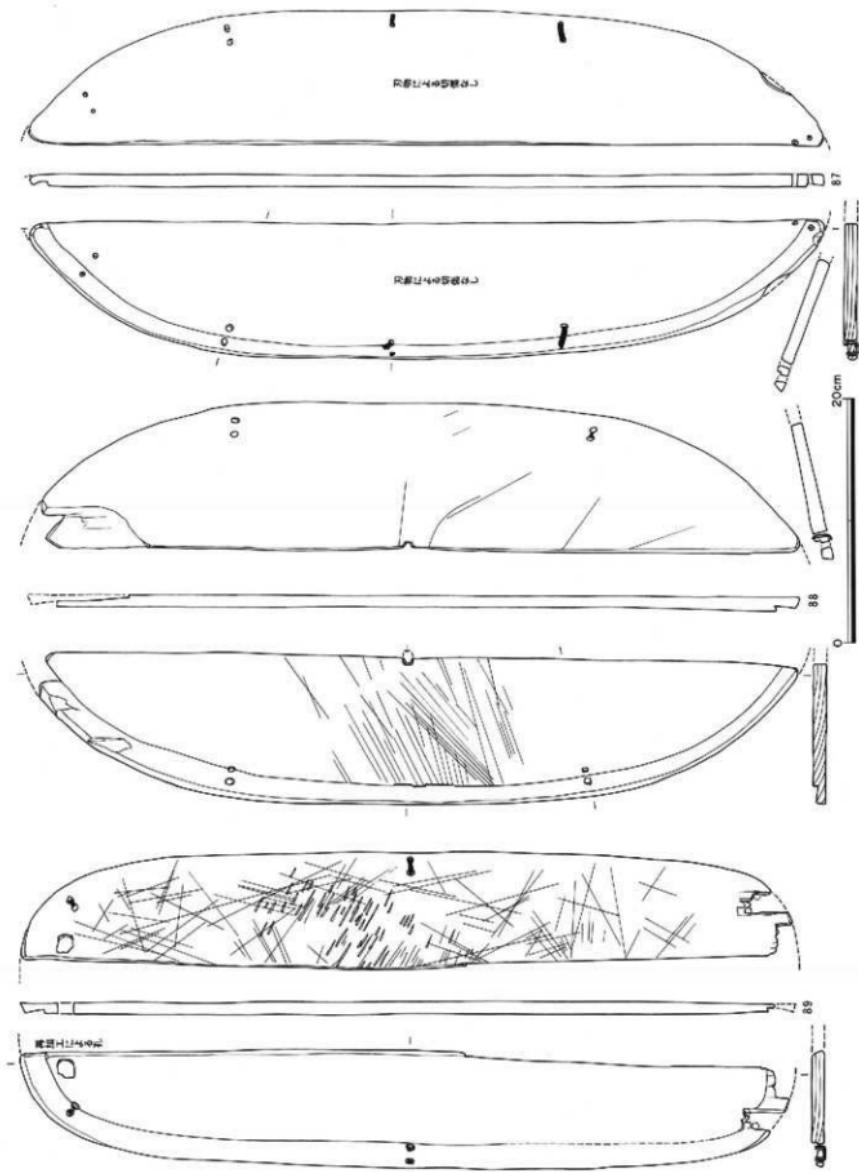


第13図 機織具・刀子柄他

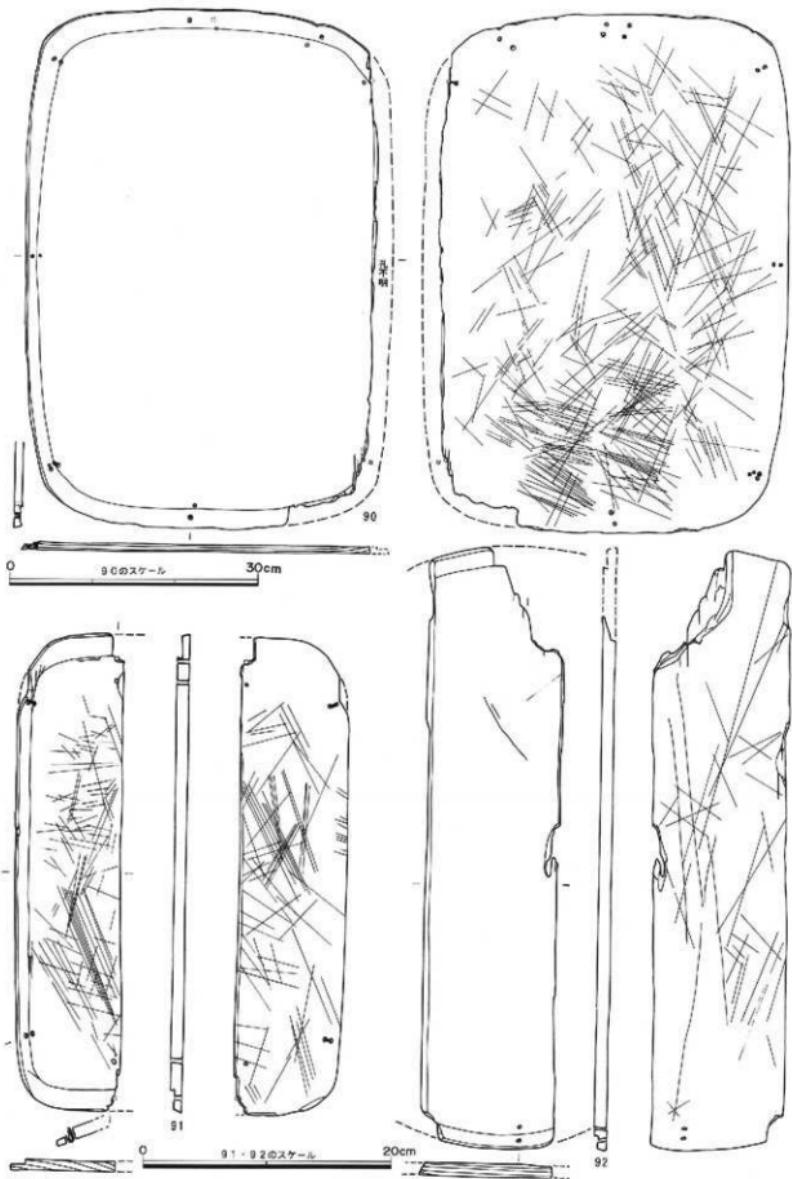


30cm

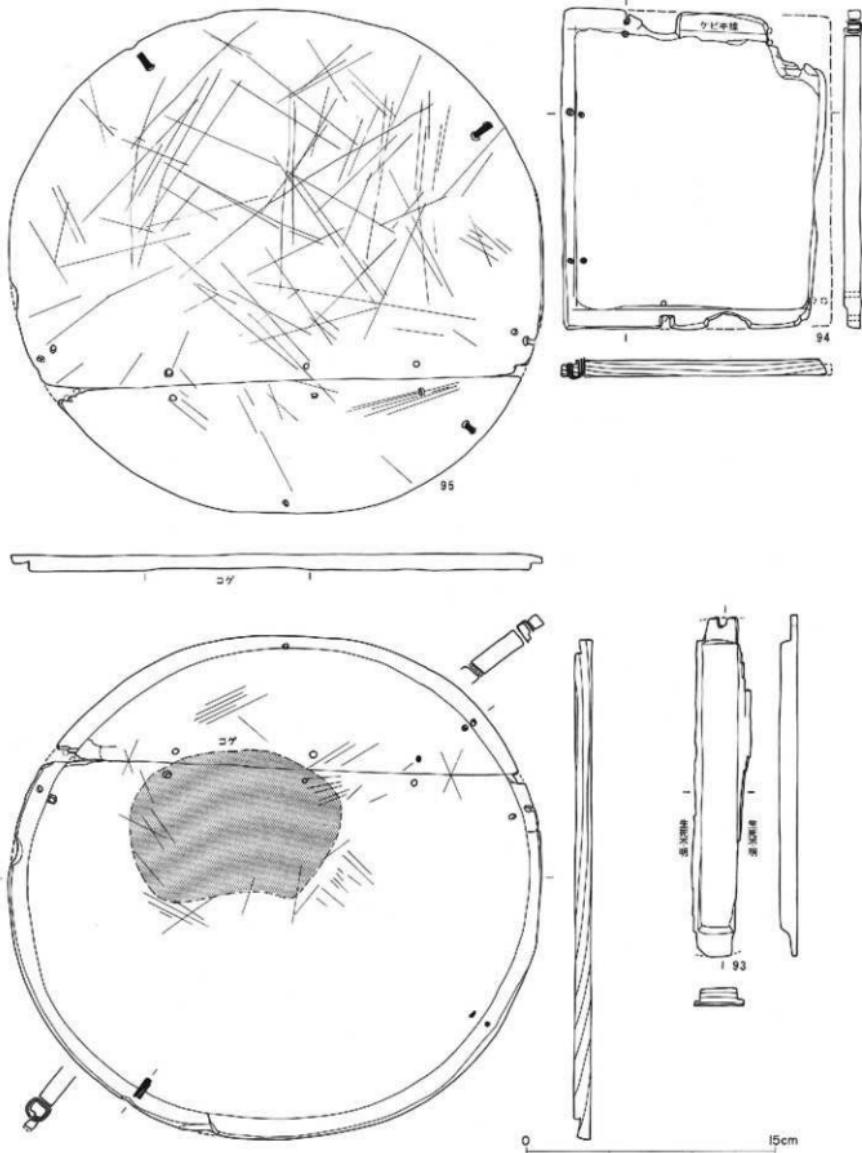
第14図 曲物底板



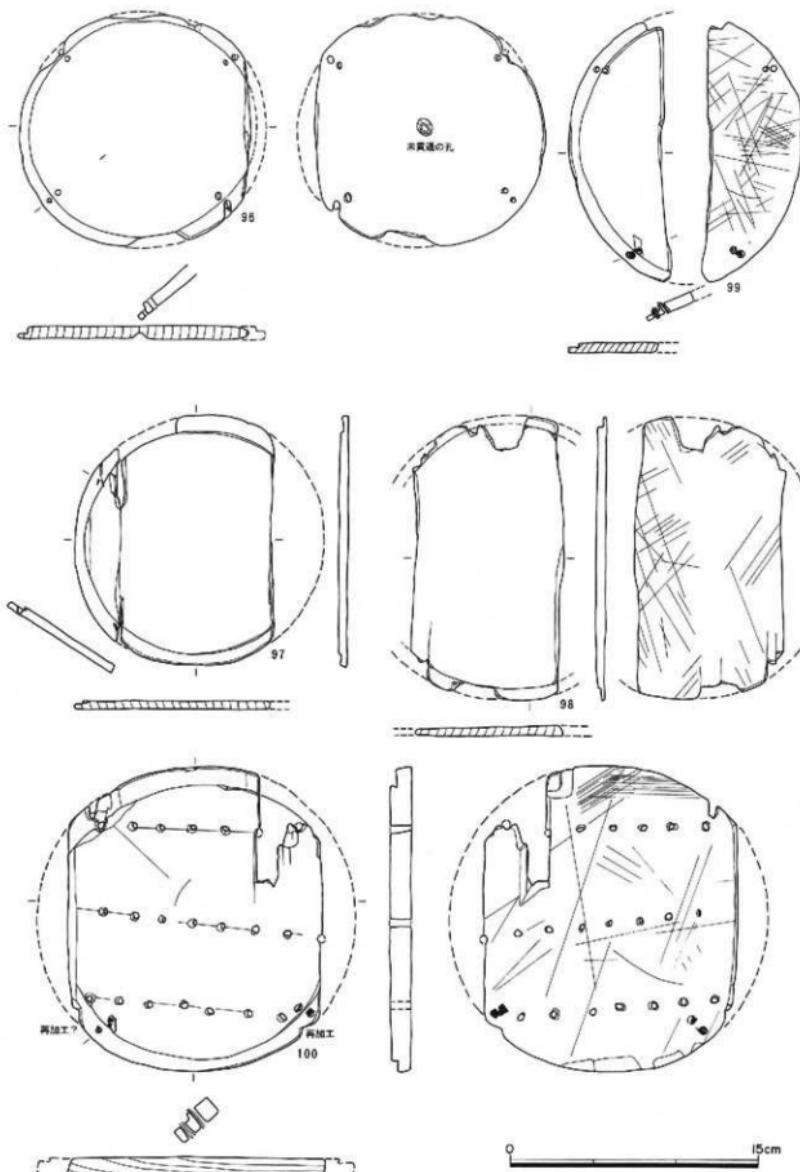
第15図 曲物底板



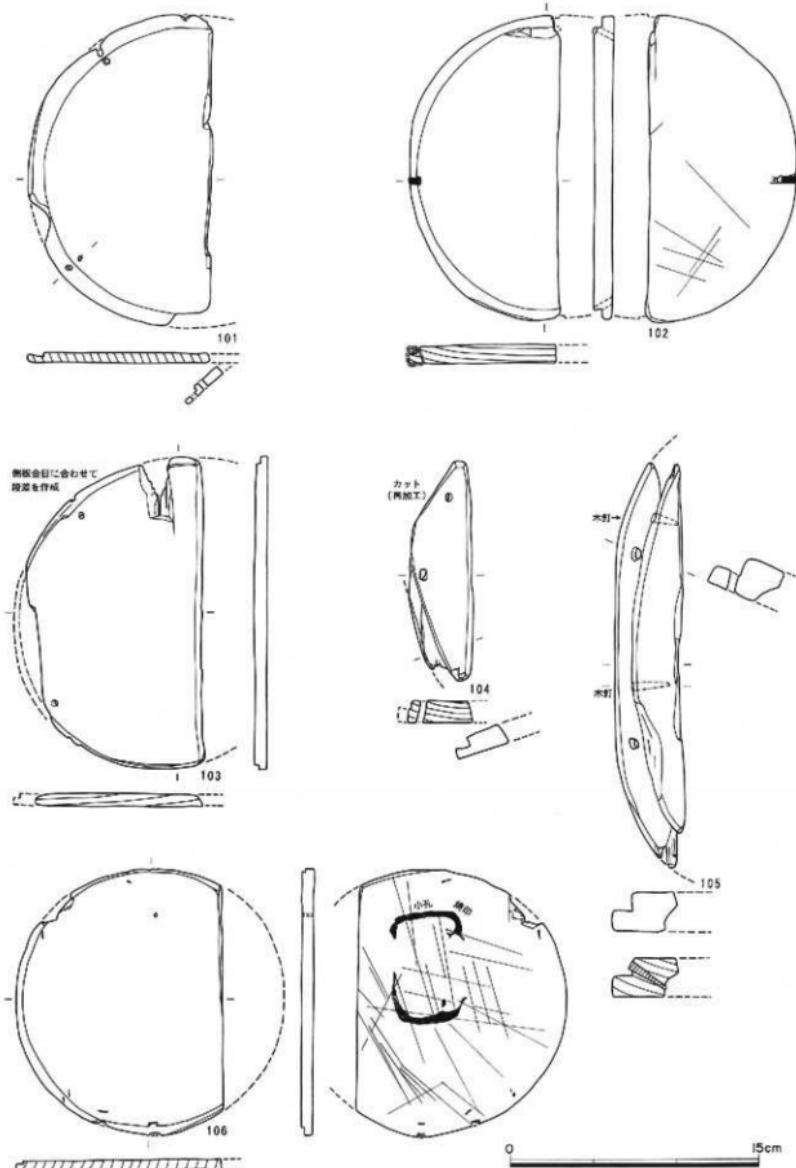
第16図 曲物底板



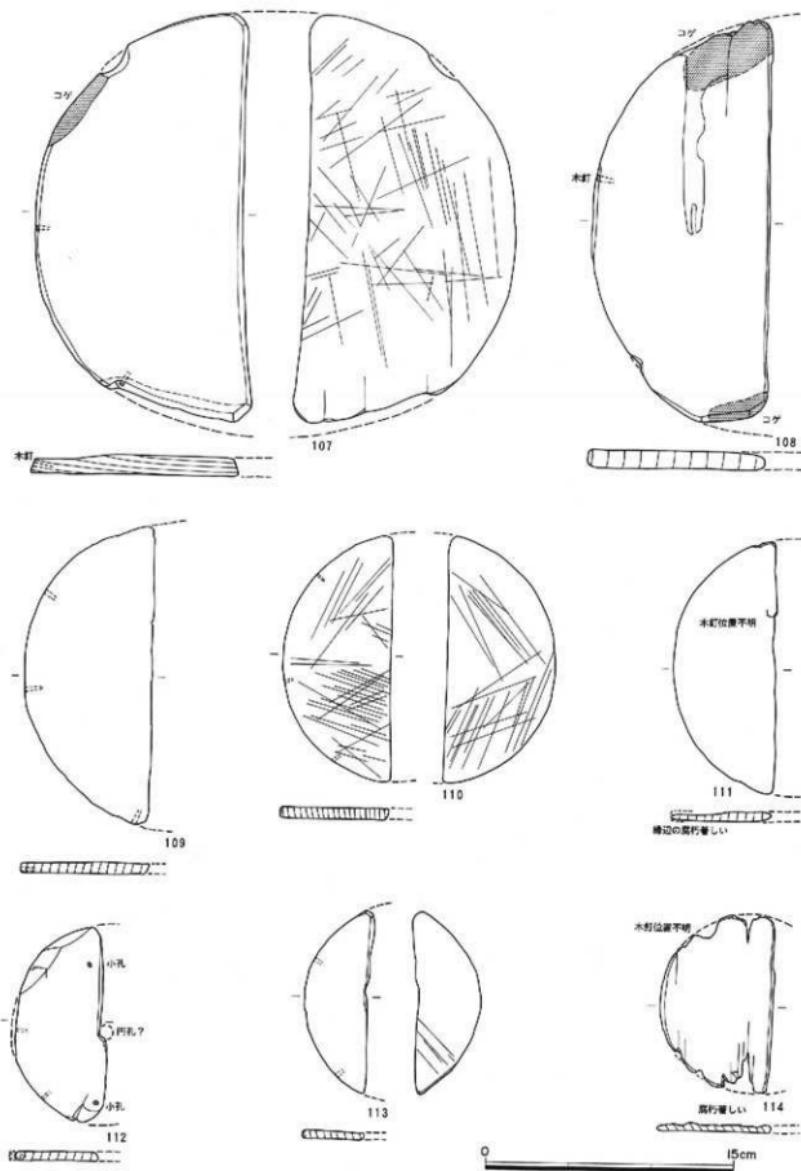
第17図 曲物底板



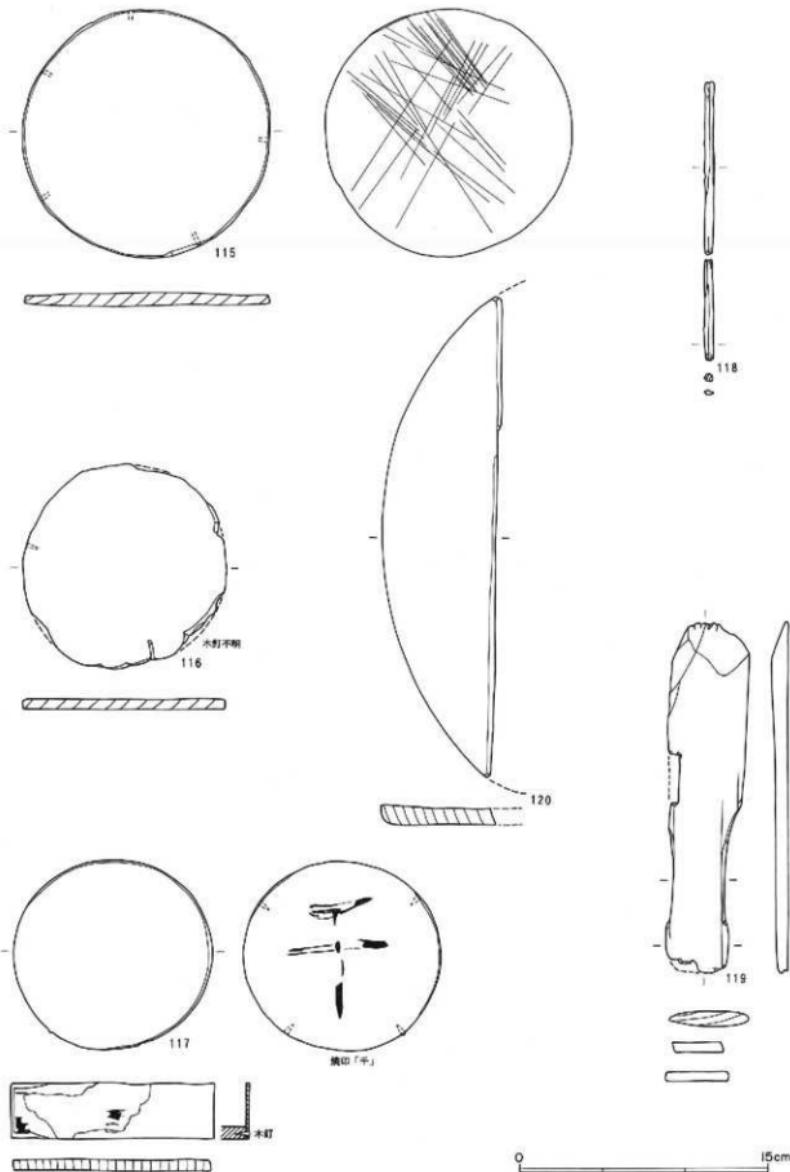
第18図 曲物底板



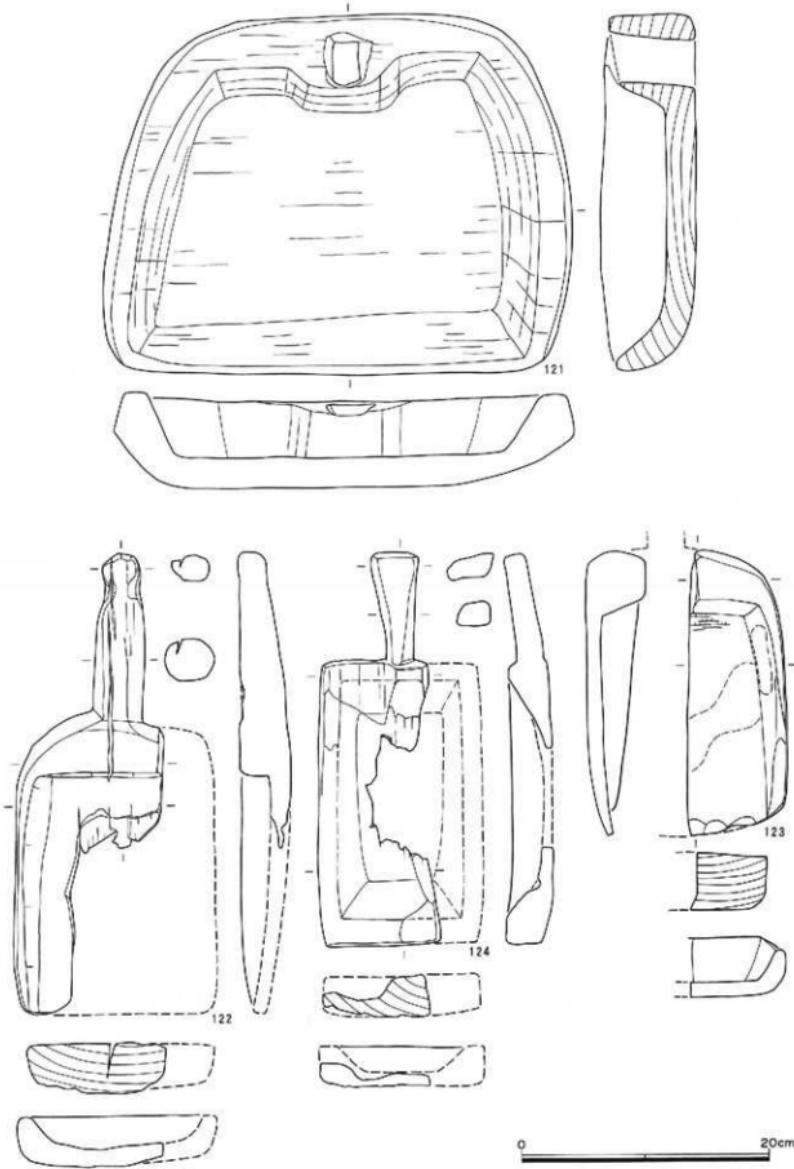
第19図 曲物底板



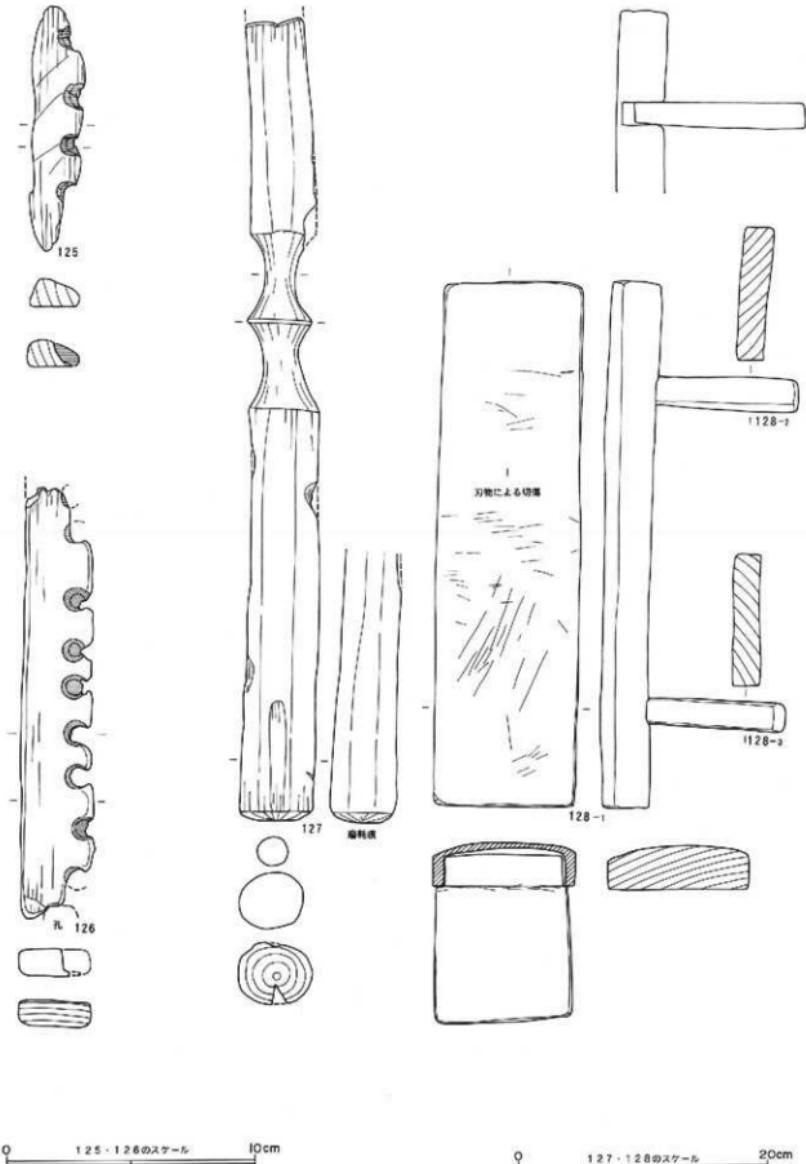
第20図 曲物底板



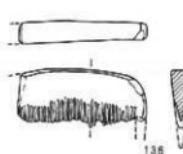
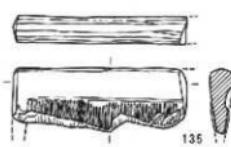
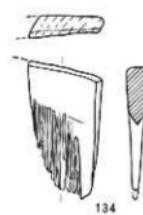
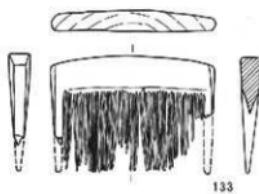
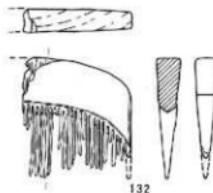
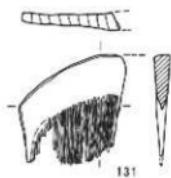
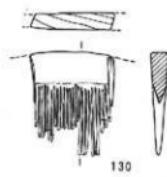
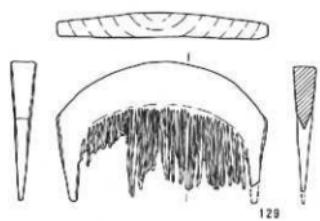
第21図 曲物底板・箸・杓文字・挽物盤



第22図 釣瓶・アカカキ・槽

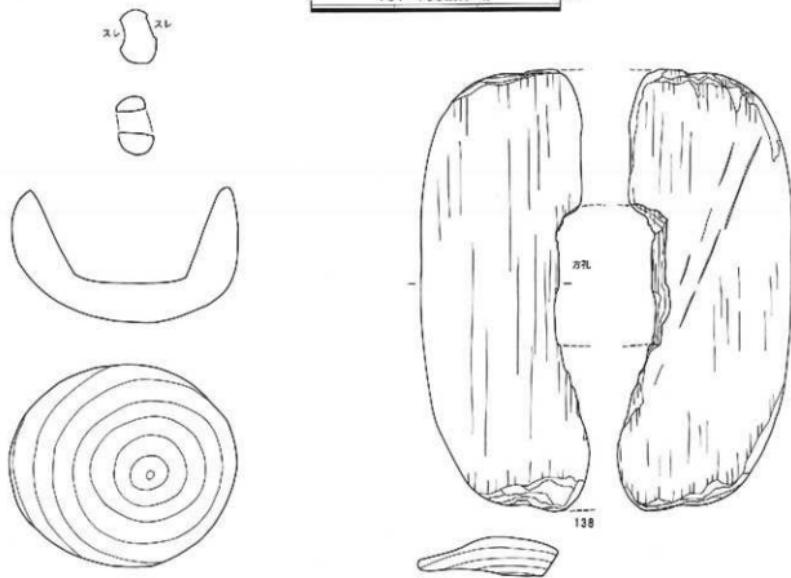
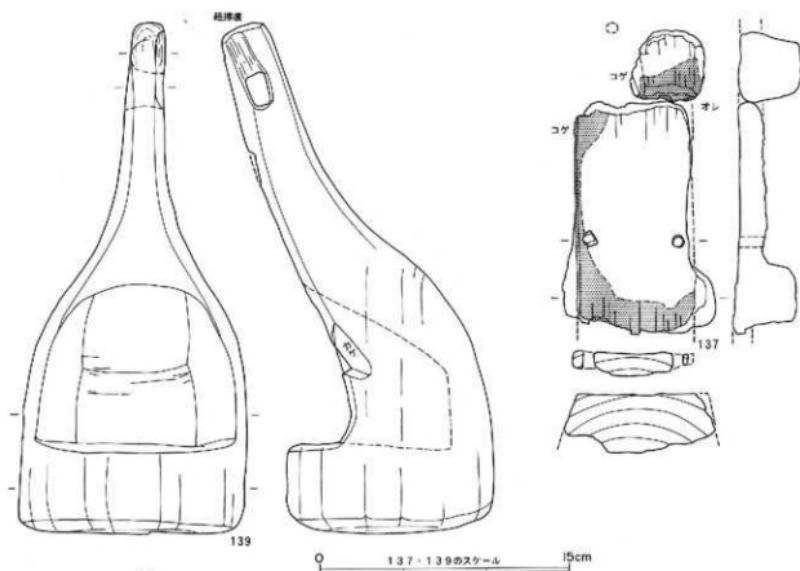


第23図 火鑽臼・杵・壺

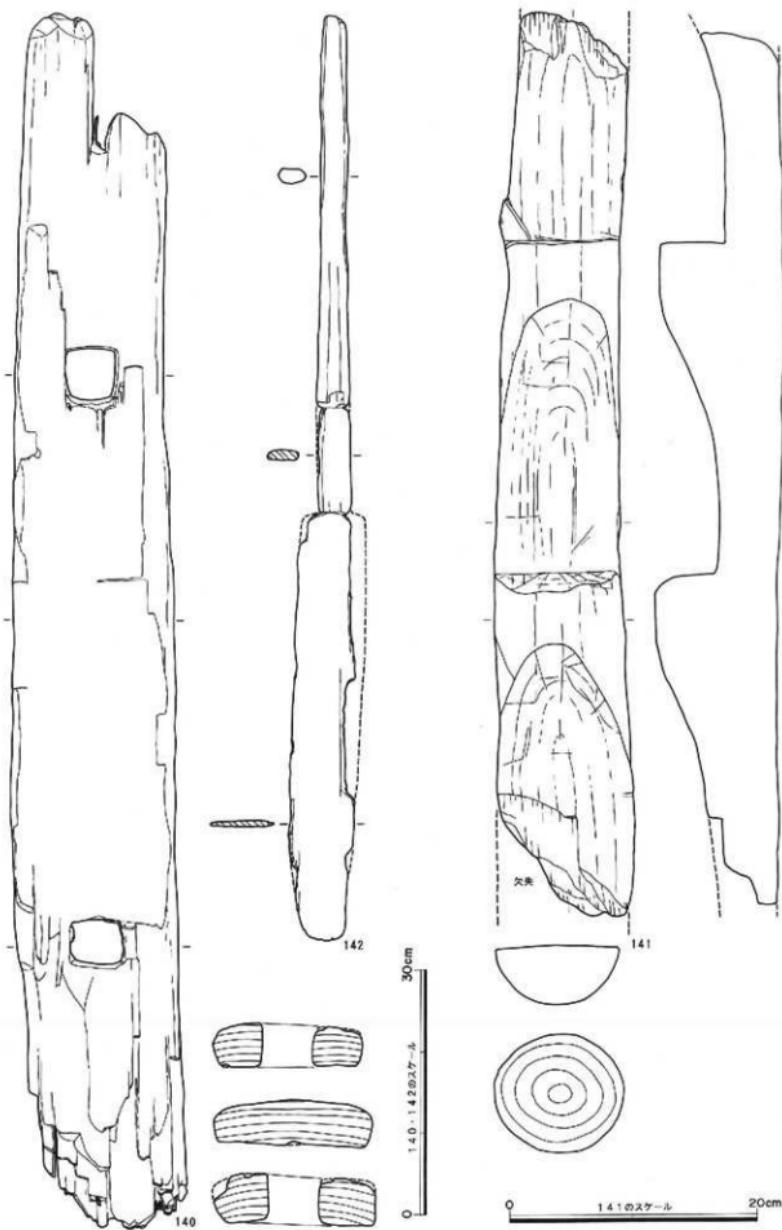


0 10cm

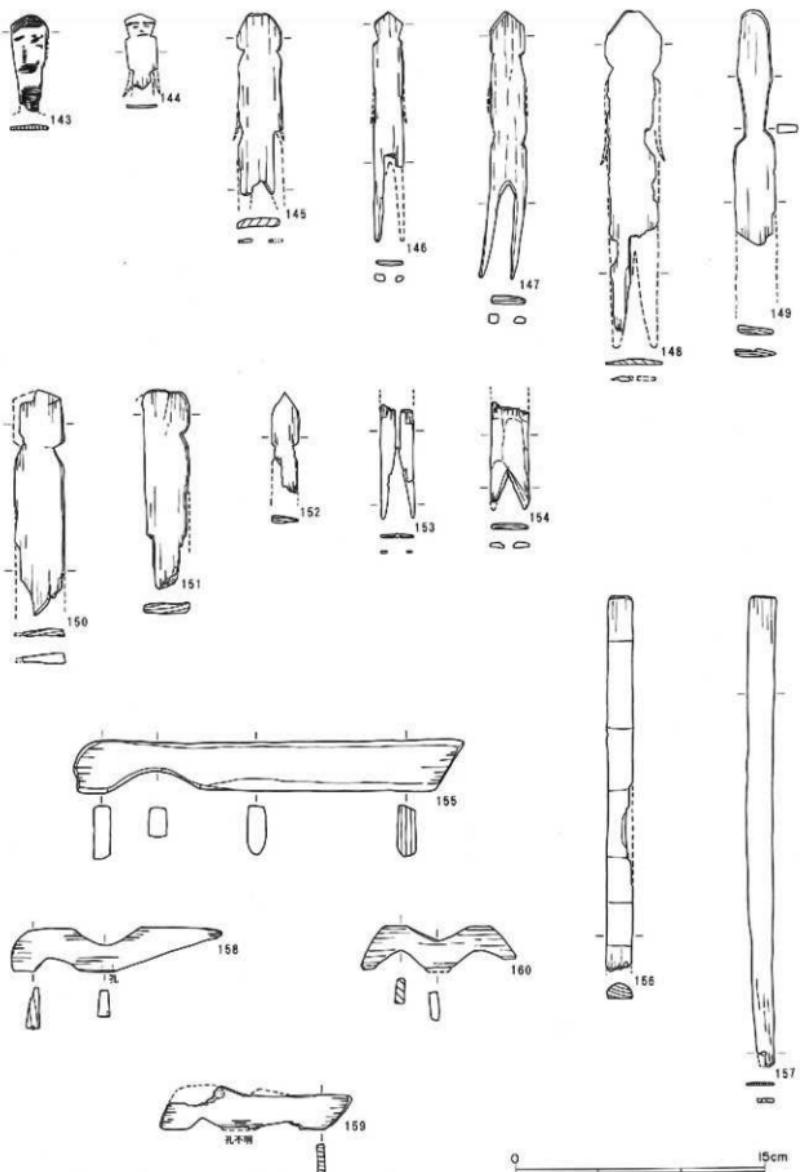
第24図 横櫛



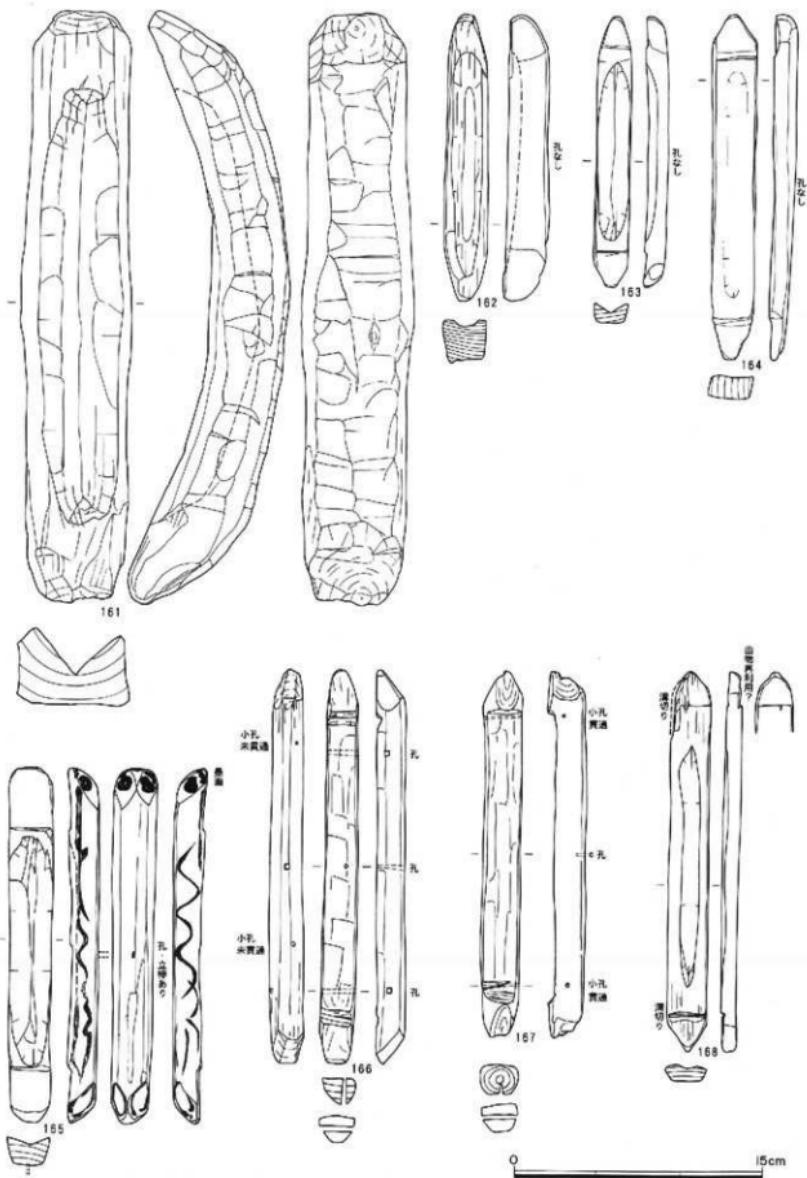
第25図 下駄・鼠返し・壺鏡



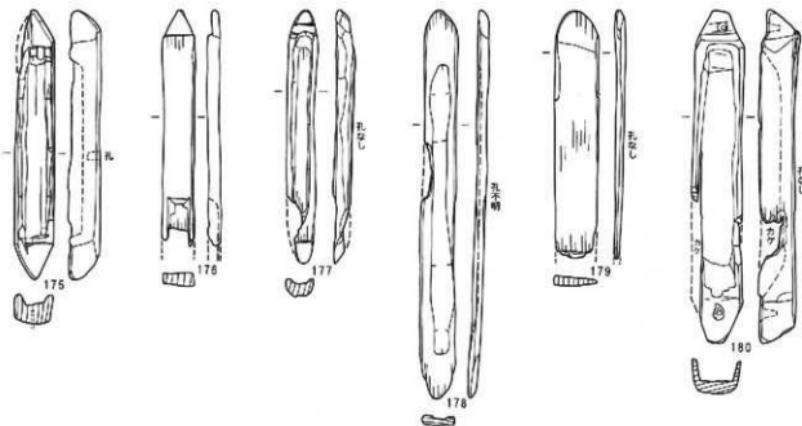
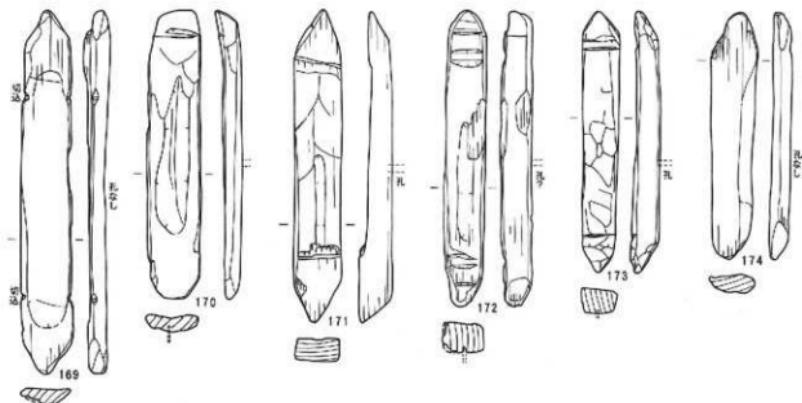
第26図 洗濯板・梯子・欄



第27図 人形・刀形・物指・松扇・馬形

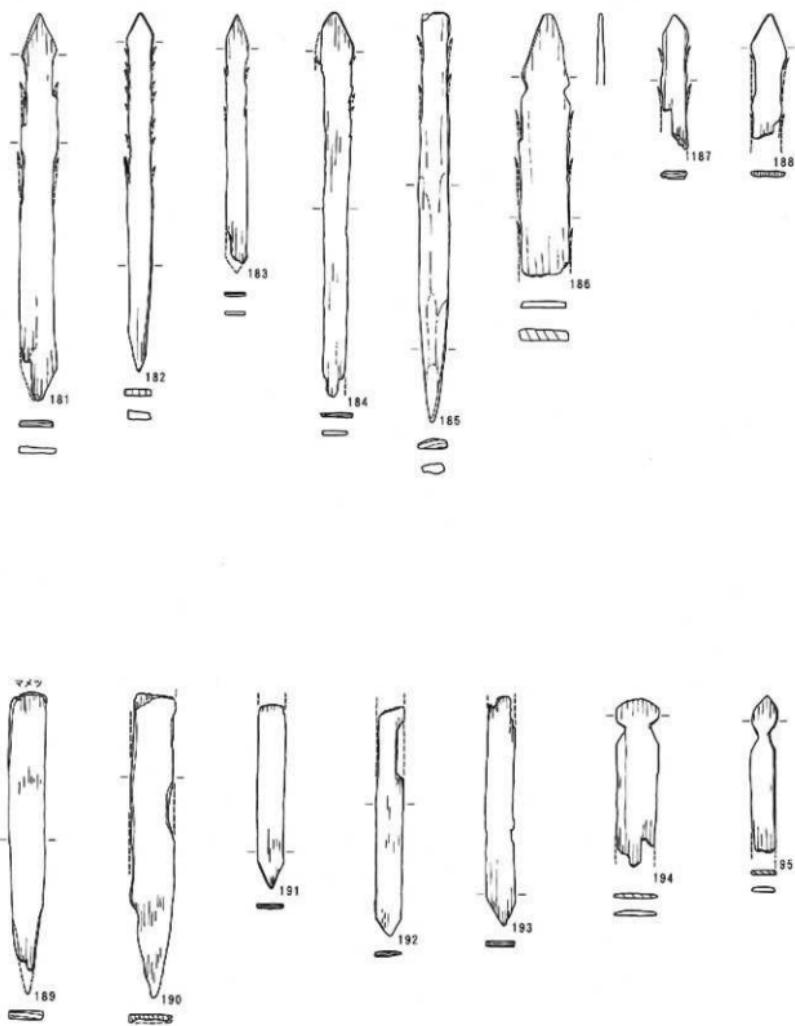


第28図 舟形

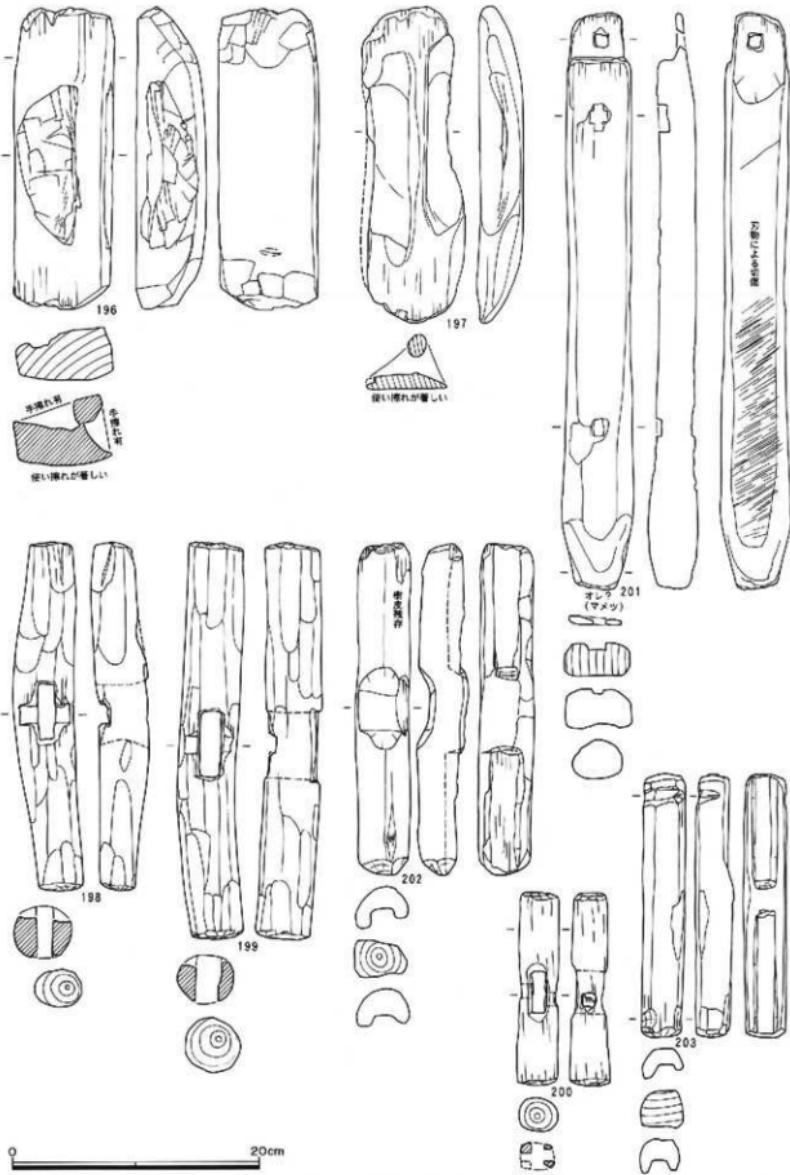


0 15cm

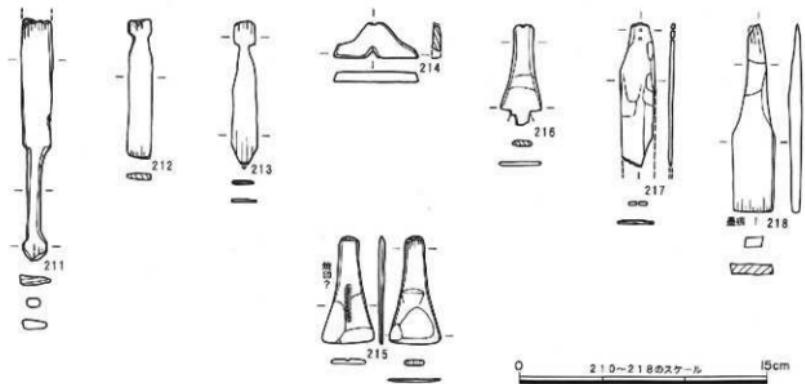
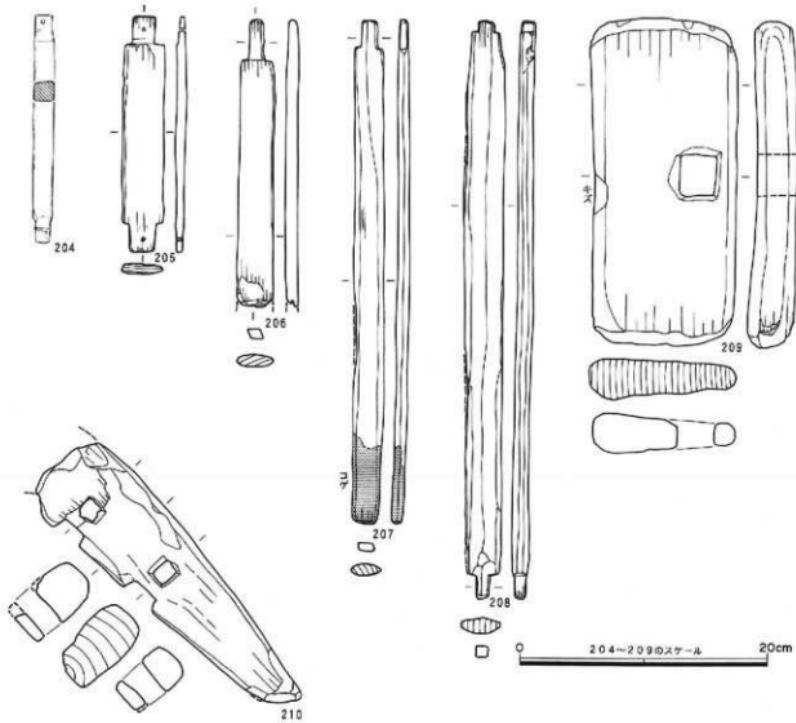
第29図 舟形



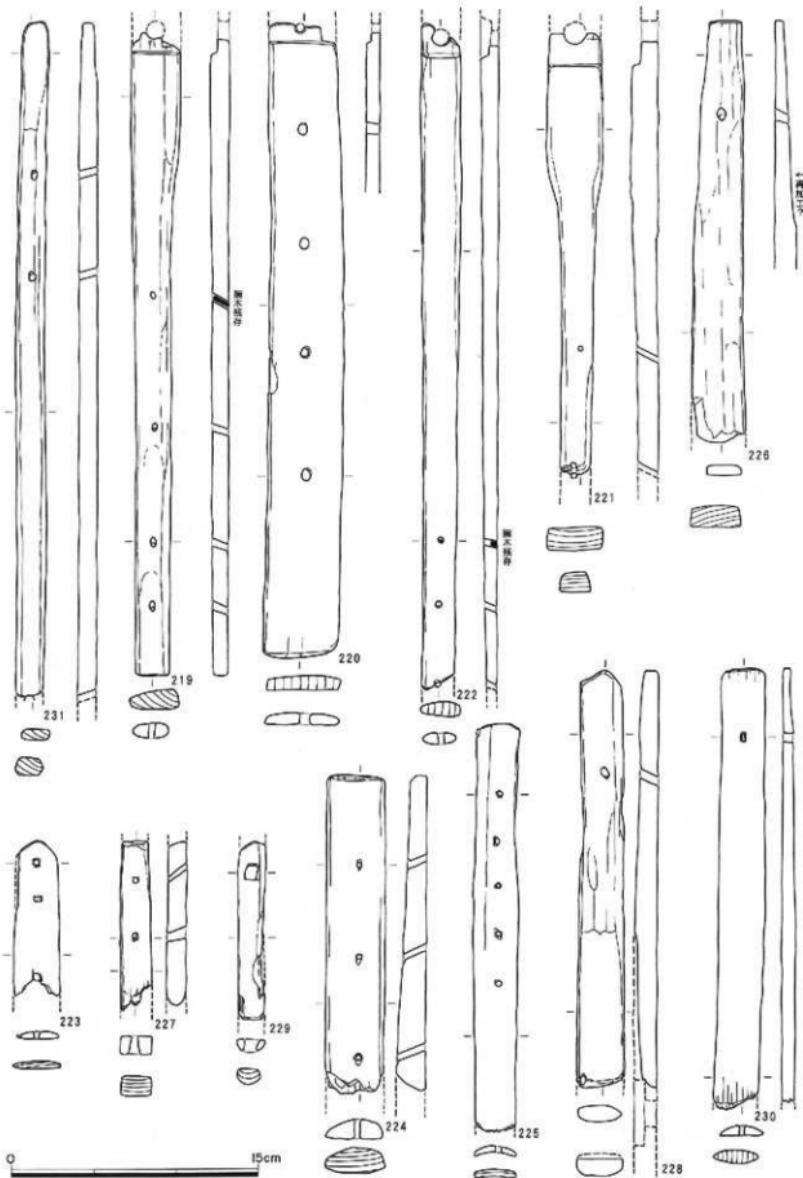
第30図 斎串・人形



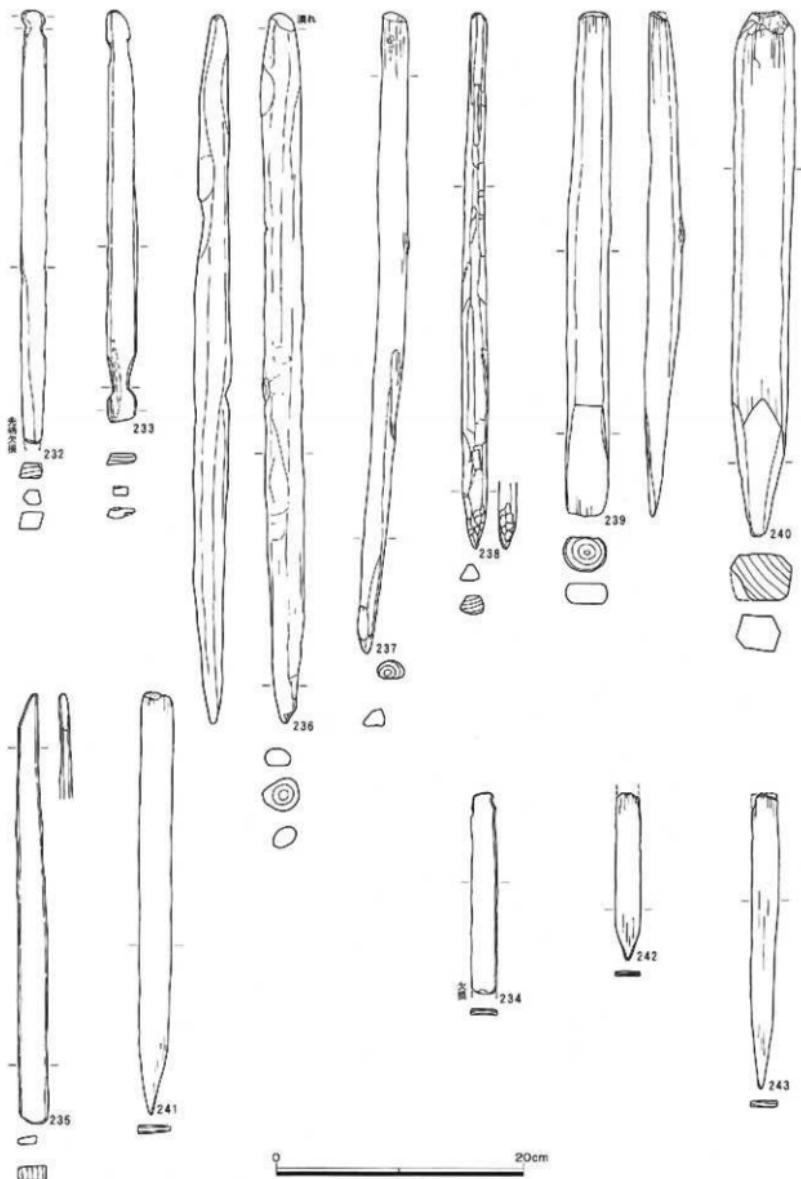
第31図 塗鍛・木柄・四ツ手網



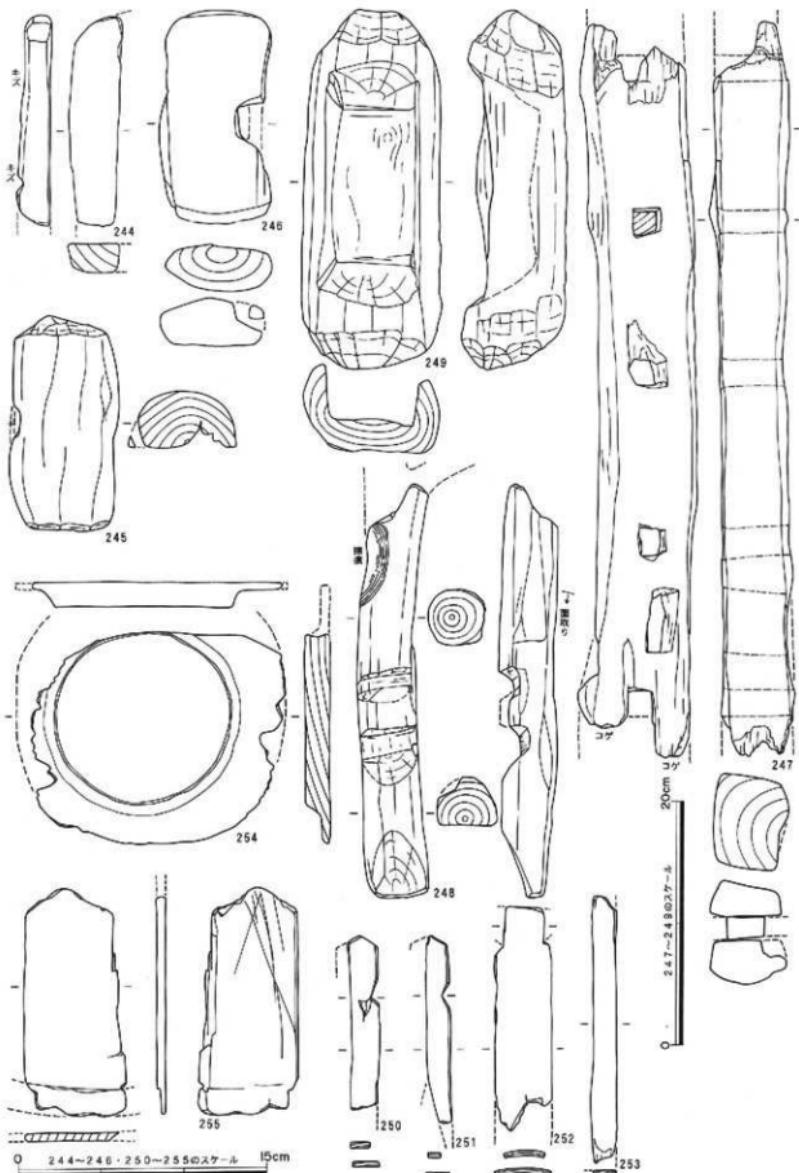
第32図 出納材・柄振・鞍橋・刀形・木筒材・琴柱・撥・加工板・印判



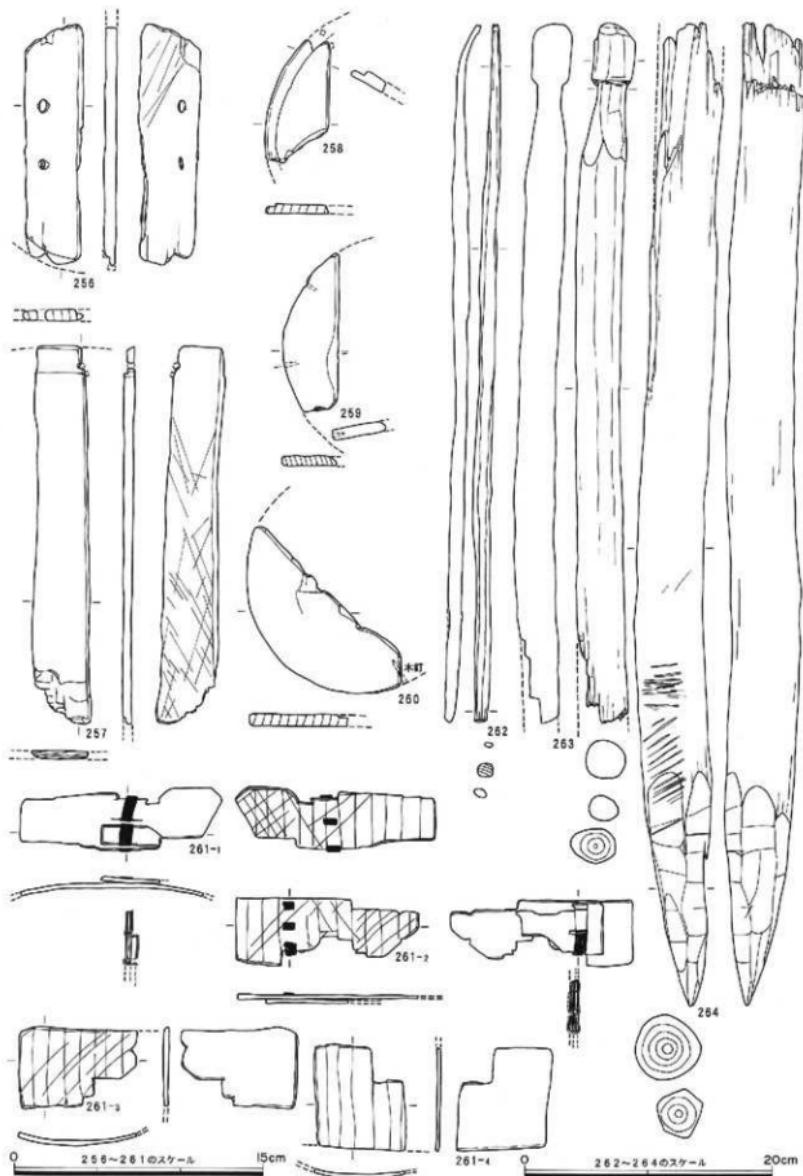
第33図 かせかけ・有孔板



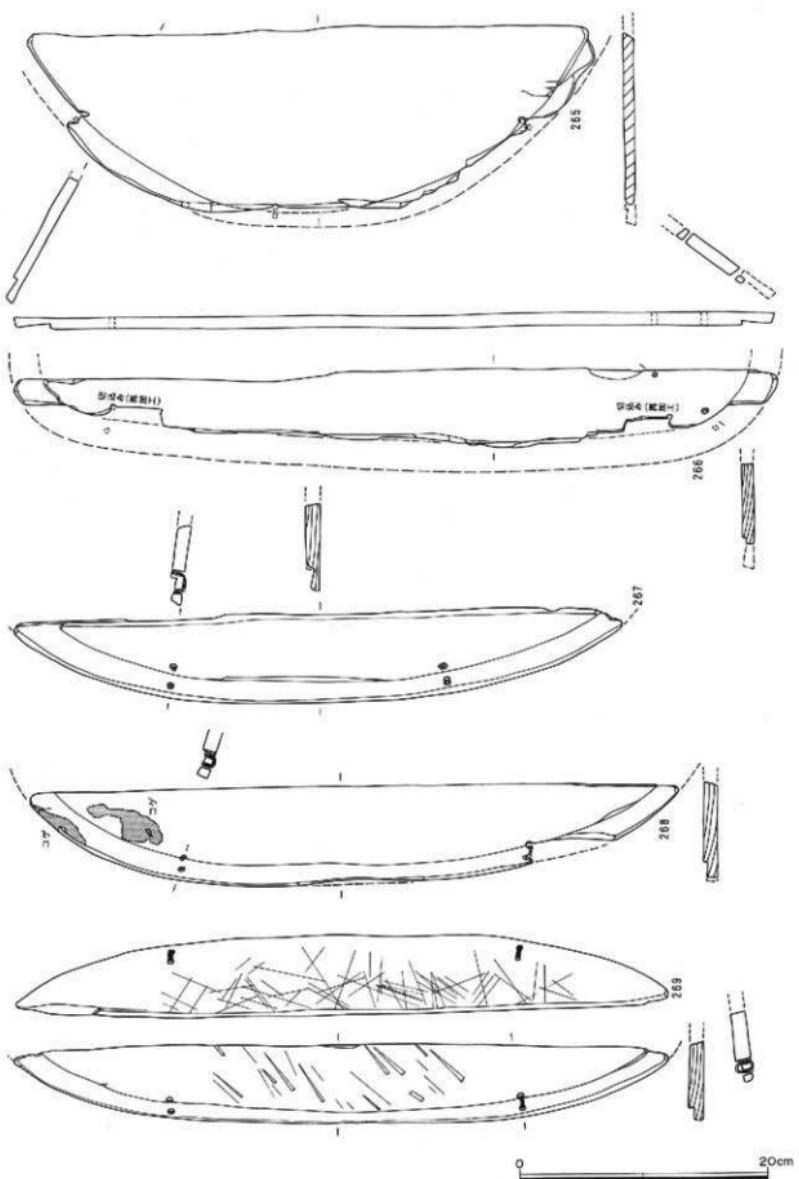
第34図 有頭棒・加工板・杭・斎串



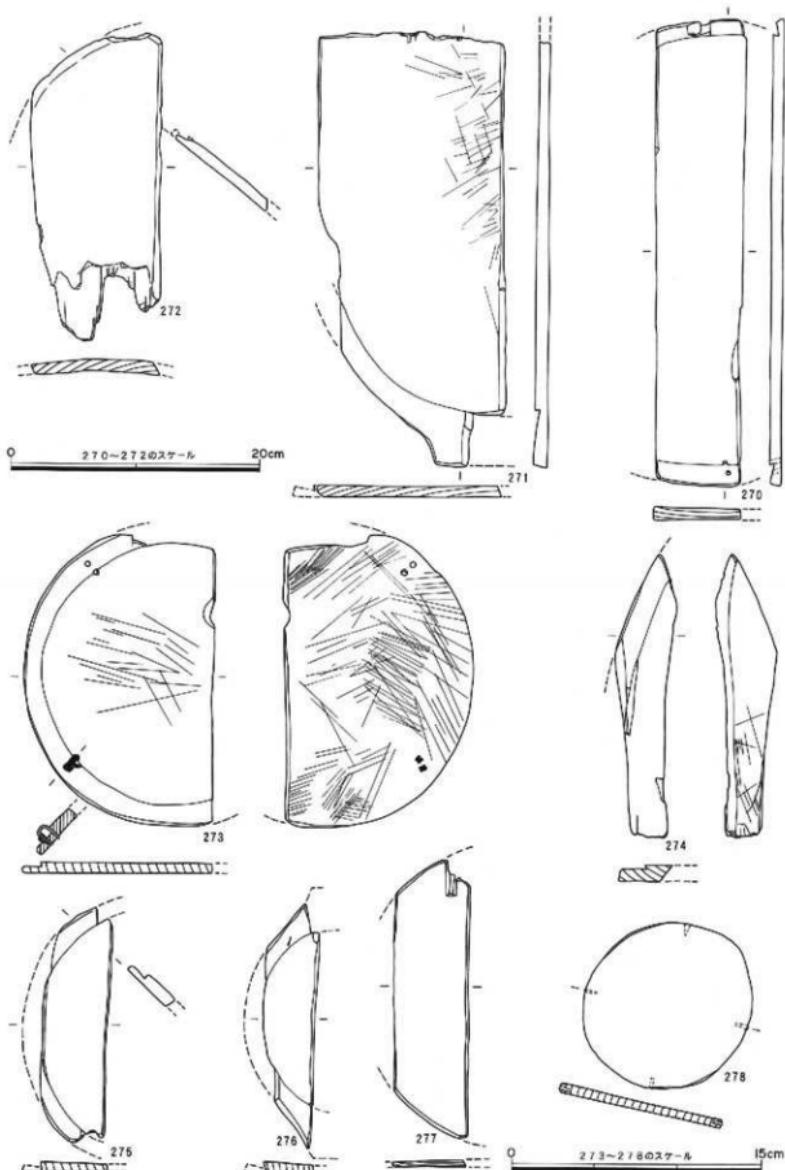
第35図 鍬・編錘・馬鍬・背負子・舟形・人形・木筒材・加工板



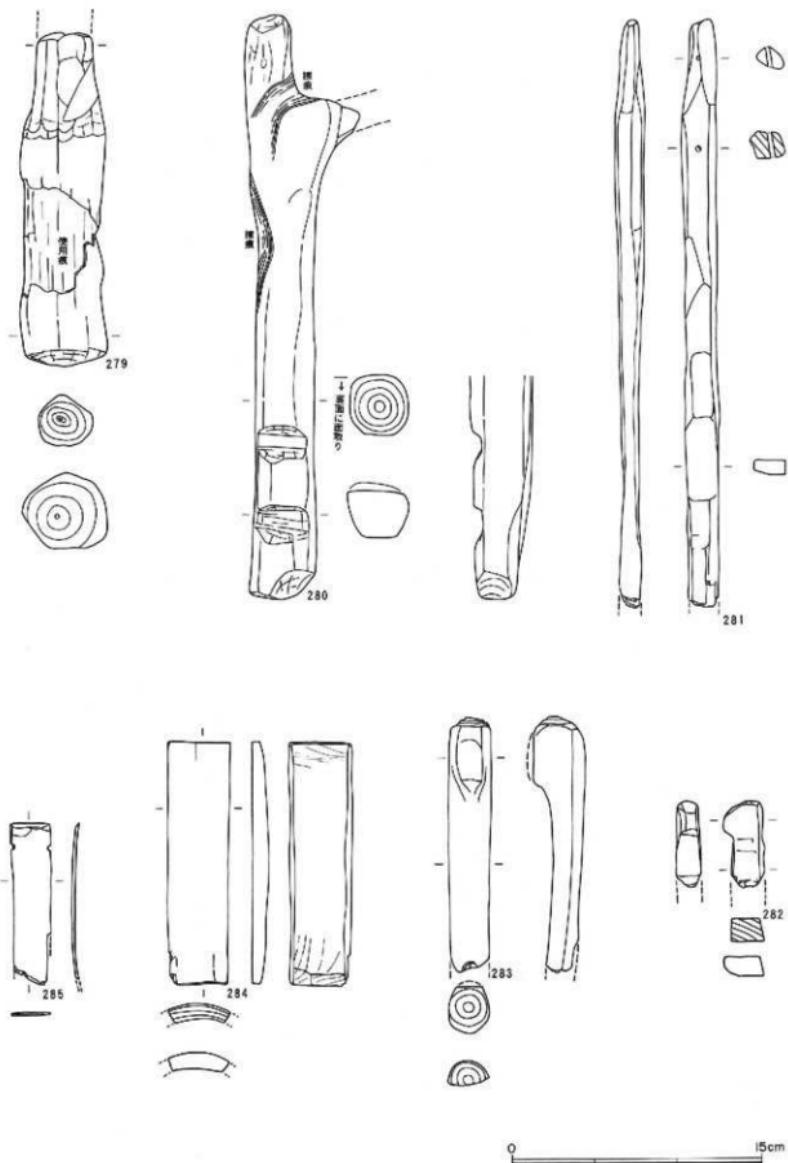
第36図 曲物底板・曲物側板・柄杓柄・有頭棒・杭



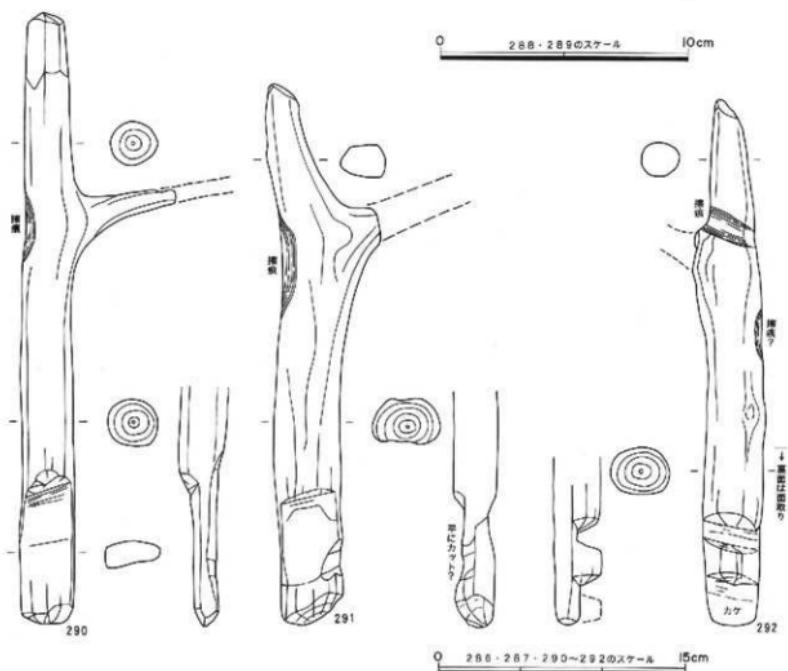
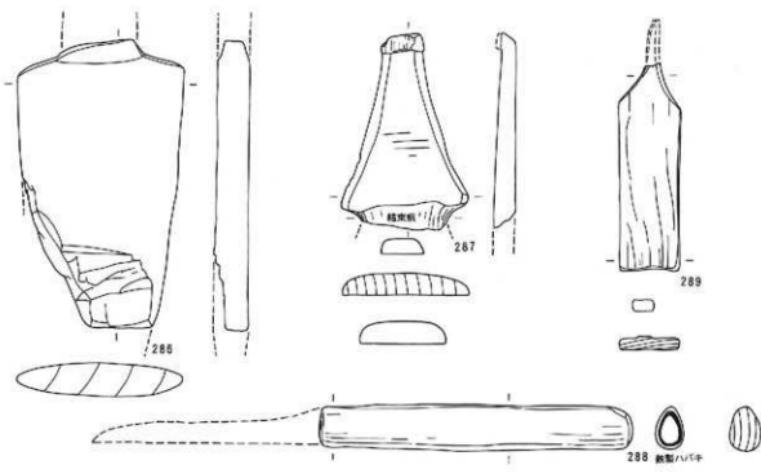
第37図 曲物底板



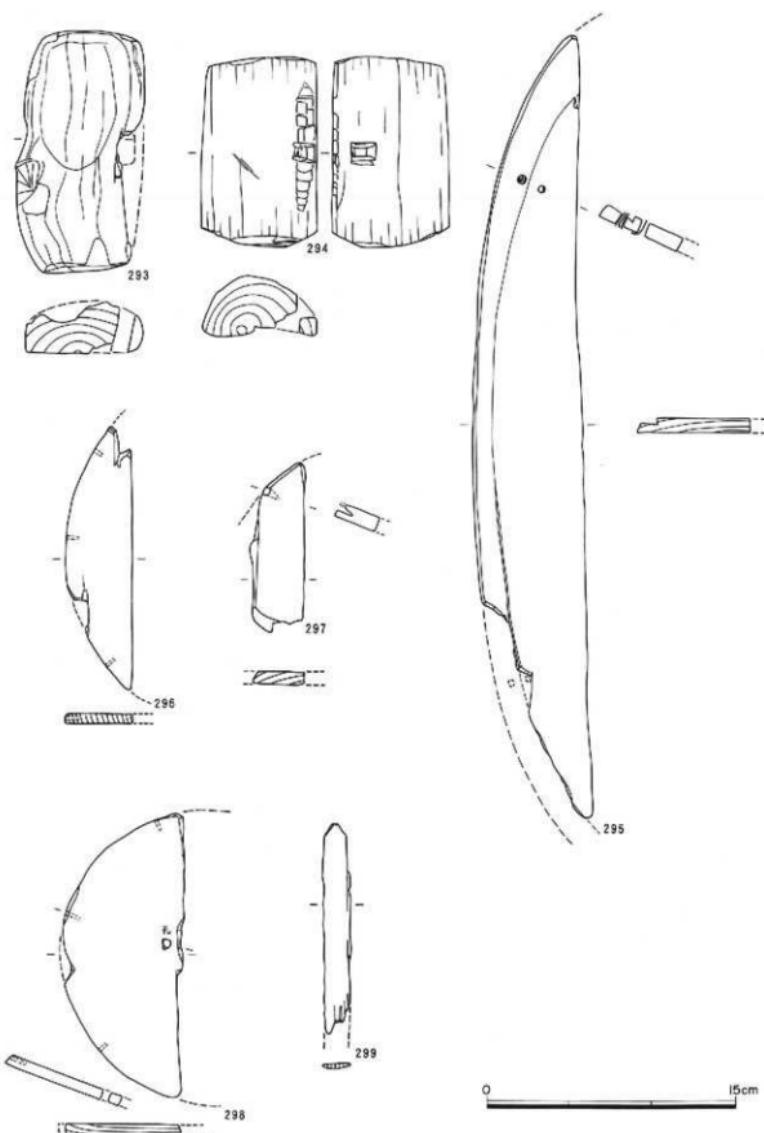
第38図 曲物底板



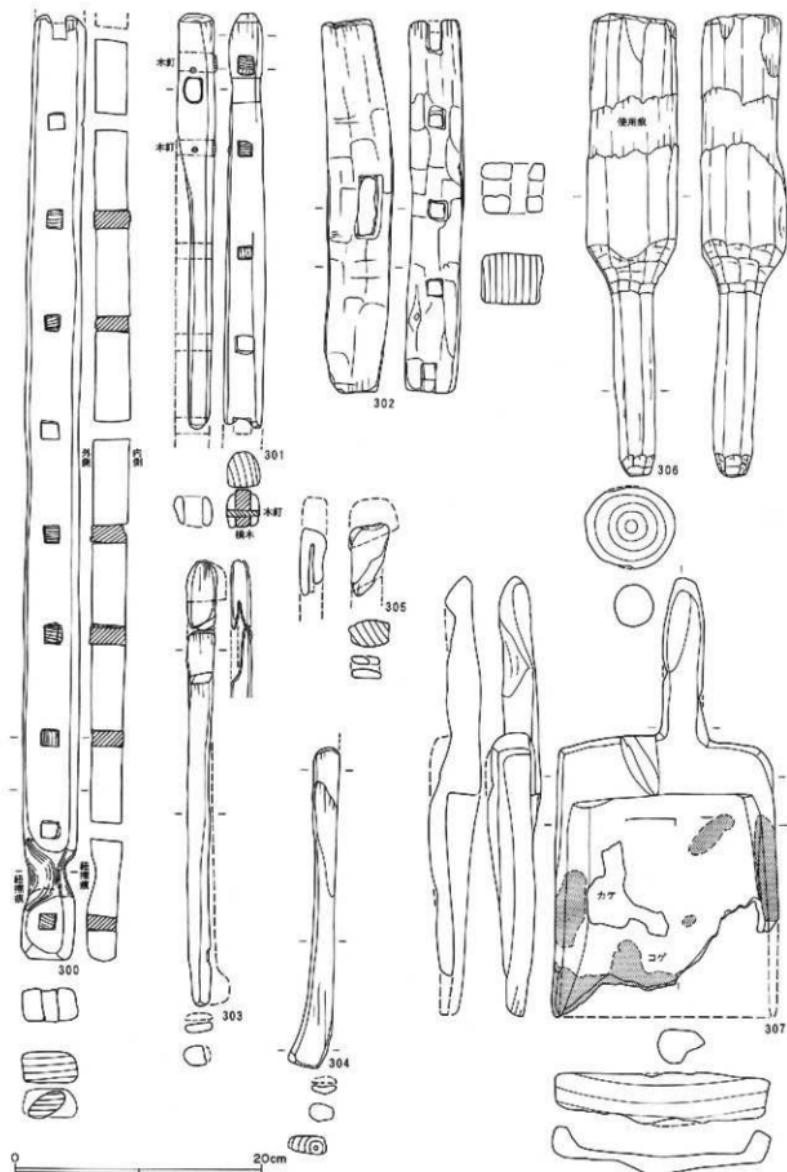
第39図 横槌・背負子・有孔棒・木柄・筒状木製品・曲物まわしの側板



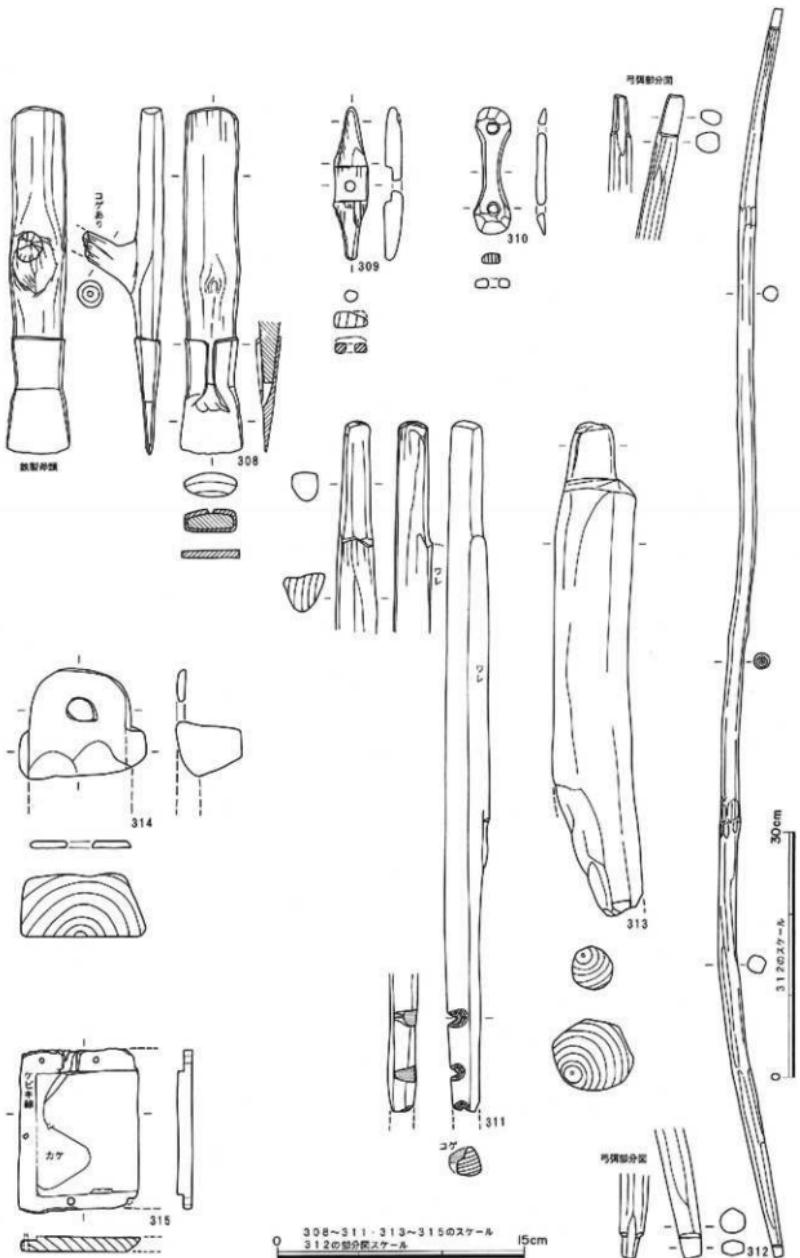
第40図 鍔・刀子柄・印判・背負子



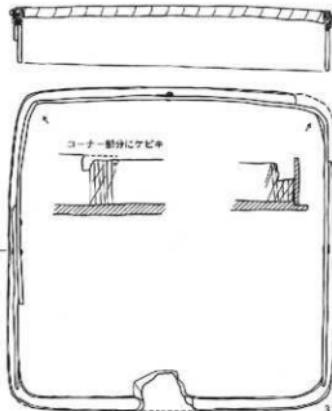
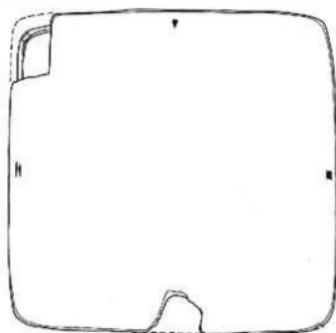
第41図 編錘・曲物底板・壺串



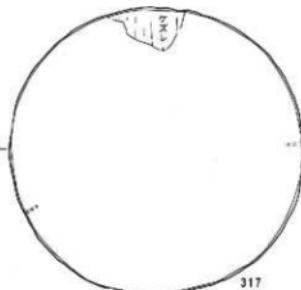
第42図 大足・代揃・鎌柄・横槌・アカカキ



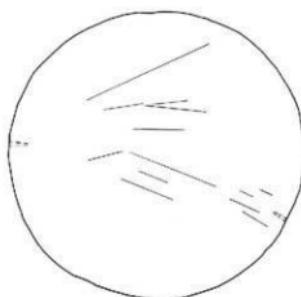
第43図 手斧柄・機織具・火鑓臼・丸木弓・出柾材・下駄・箱物底板



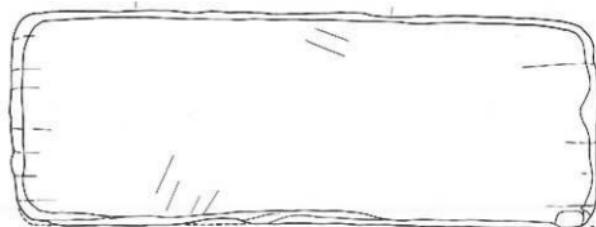
316



317



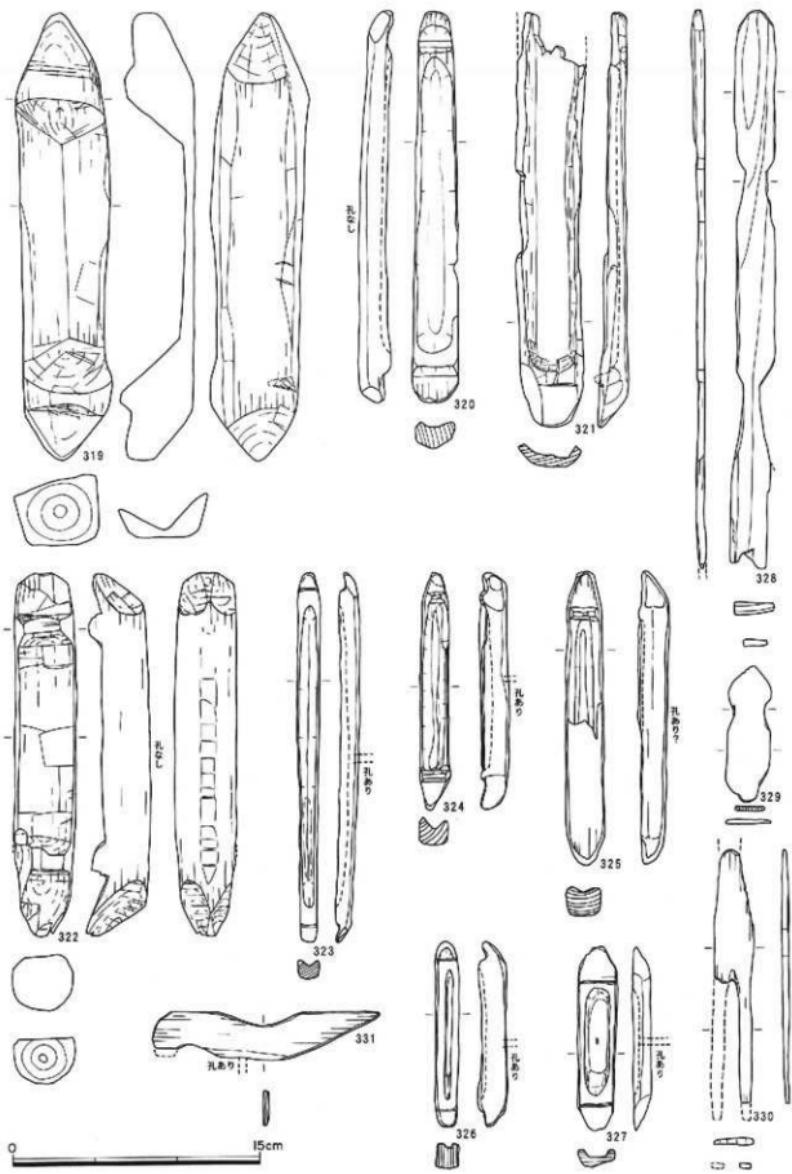
0 15cm



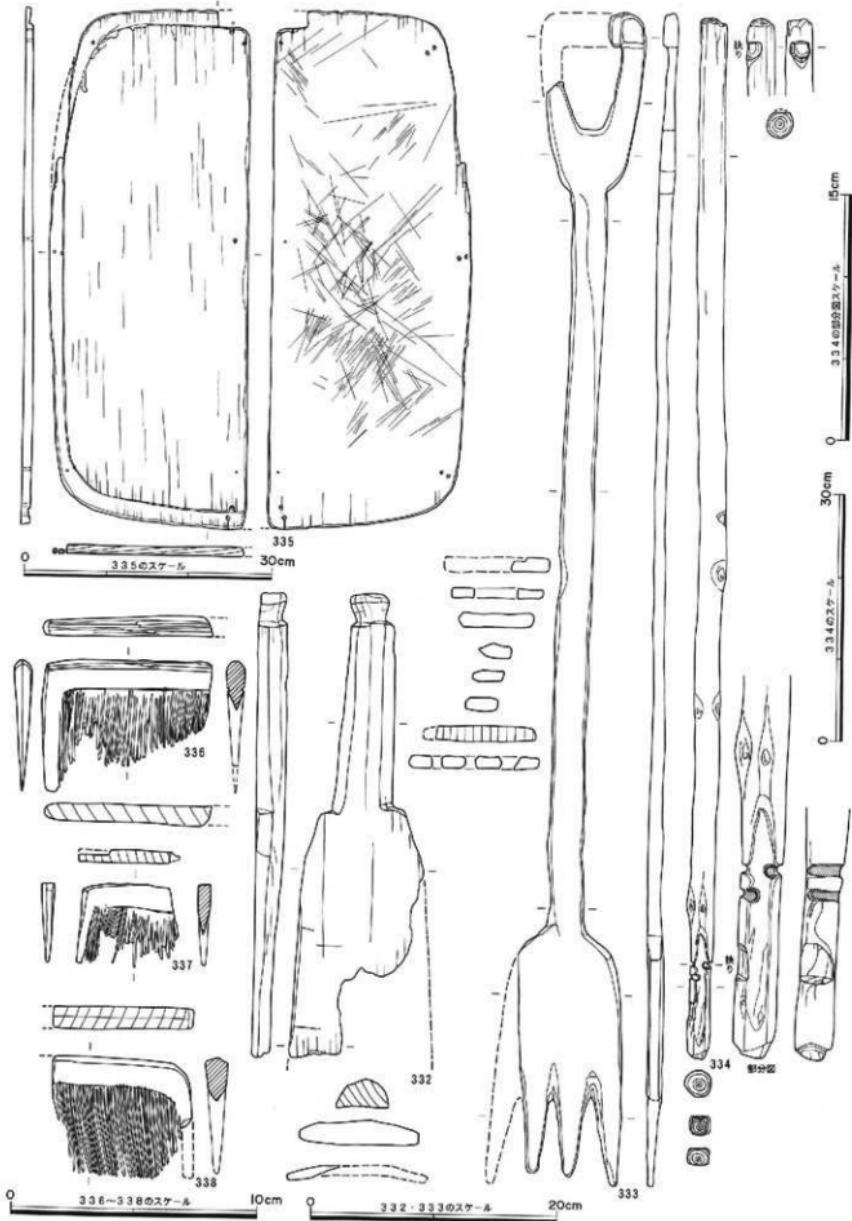
318



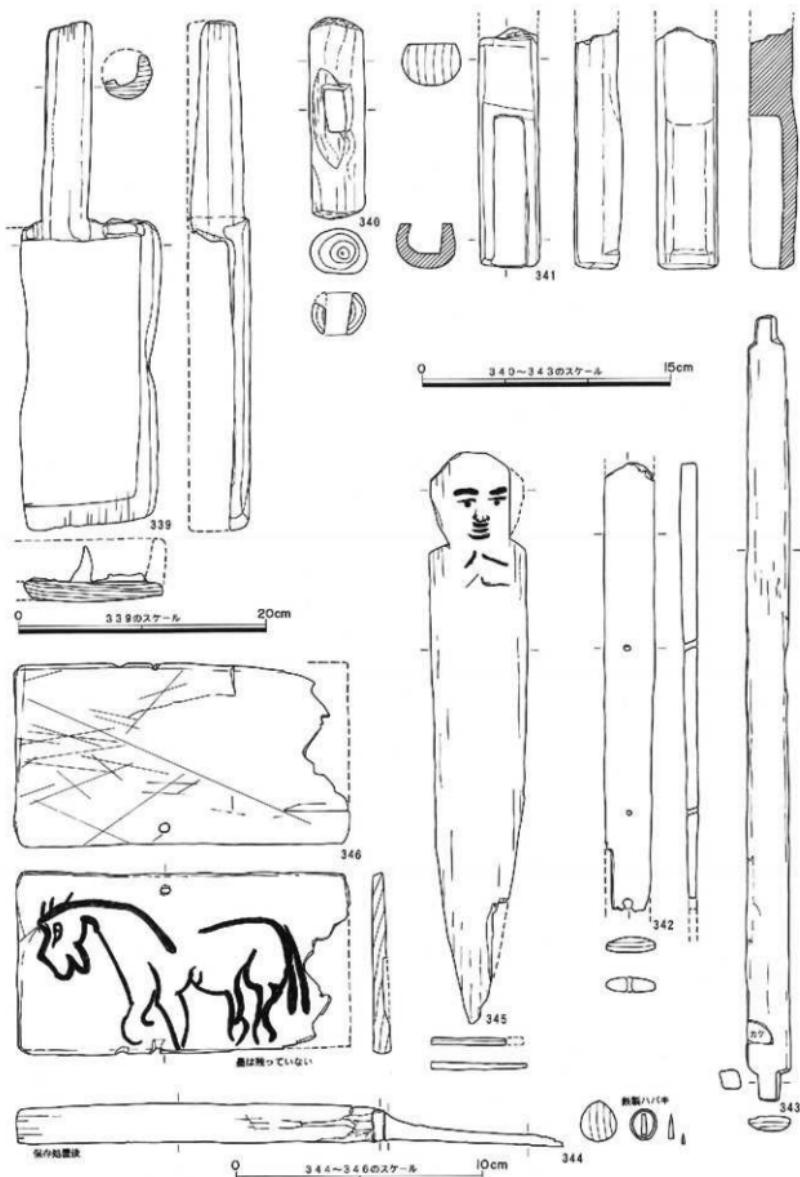
第44図 曲物底板・曲物側板・腰掛



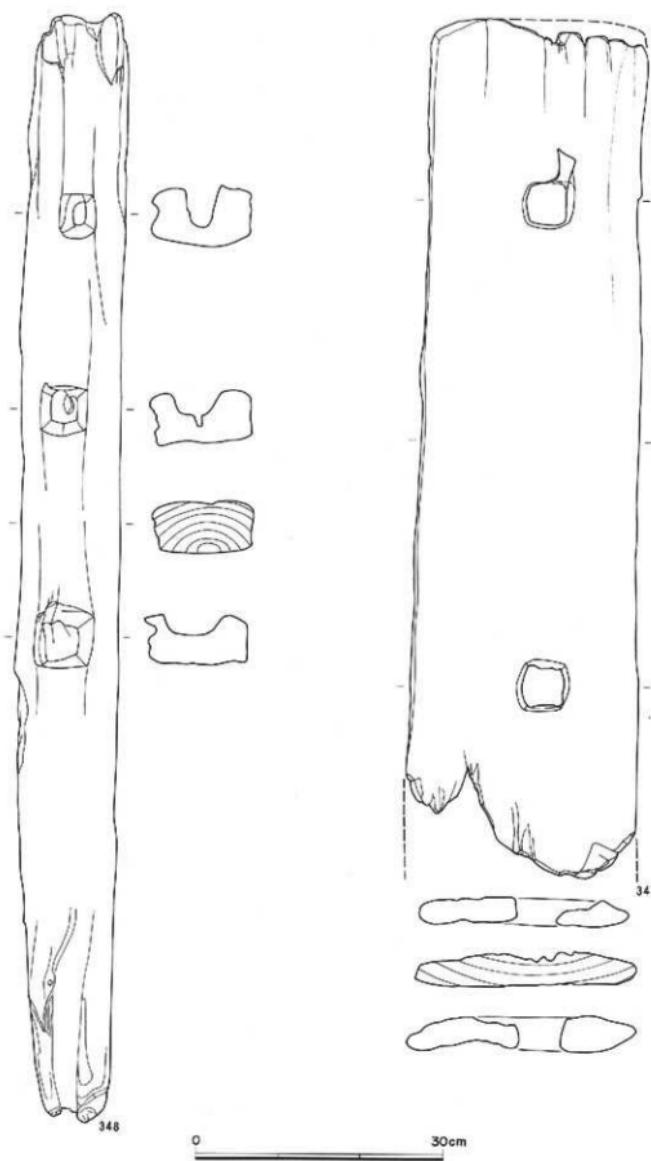
第45図 舟形・人形・馬形



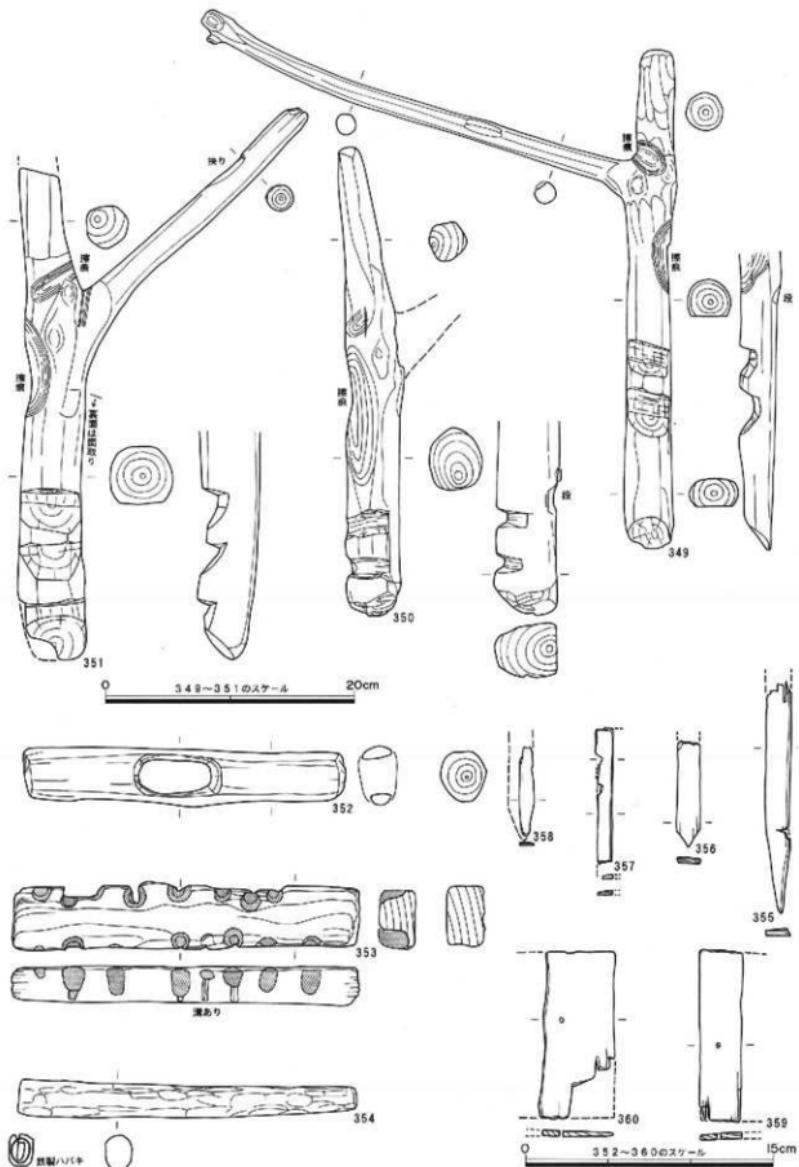
第46図 鐵・天秤棒・曲物底板・横櫛



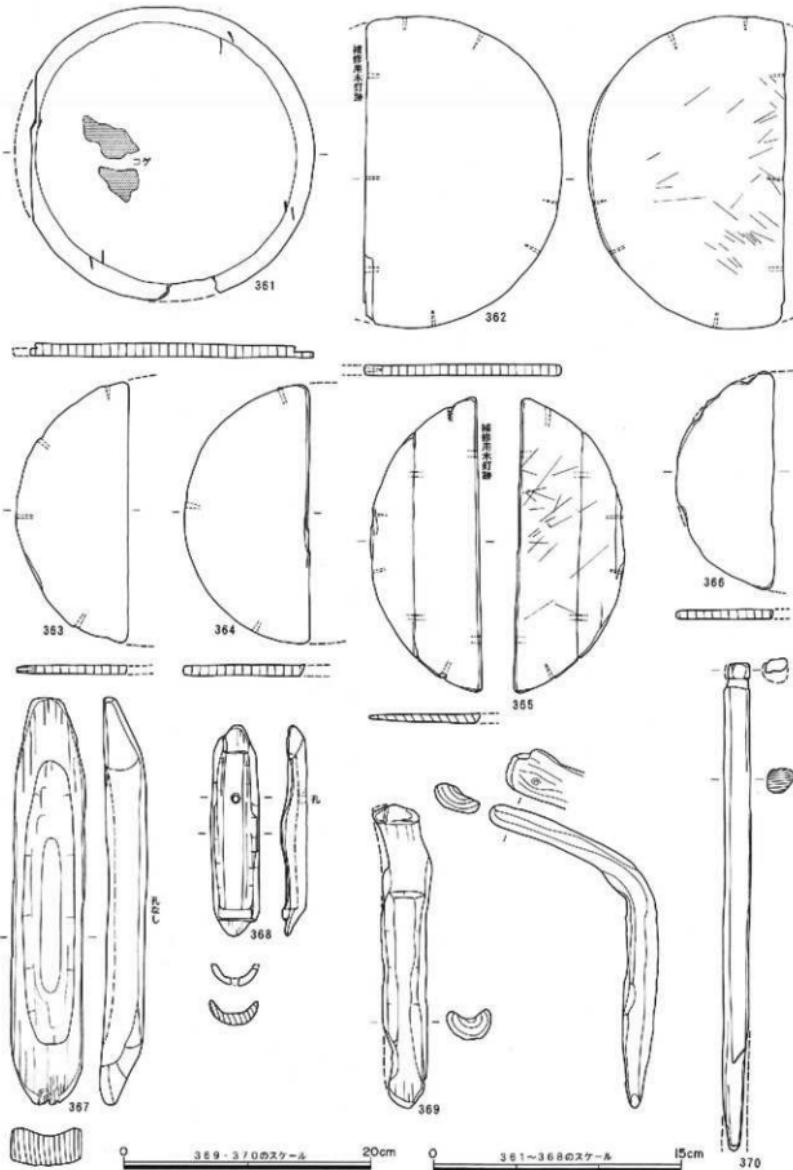
第47図 槽・木柄・四ツ手網・かせかけ・出納棒・刀子・斎串・絵馬



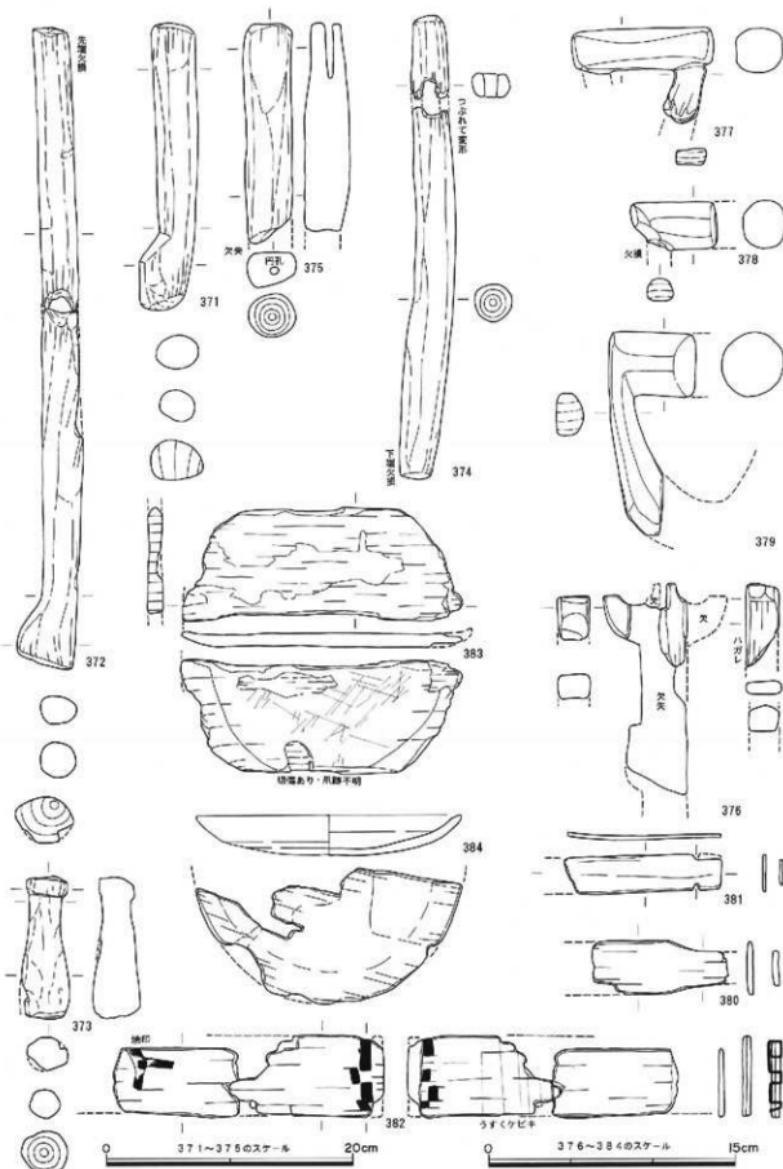
第48図 建築部材



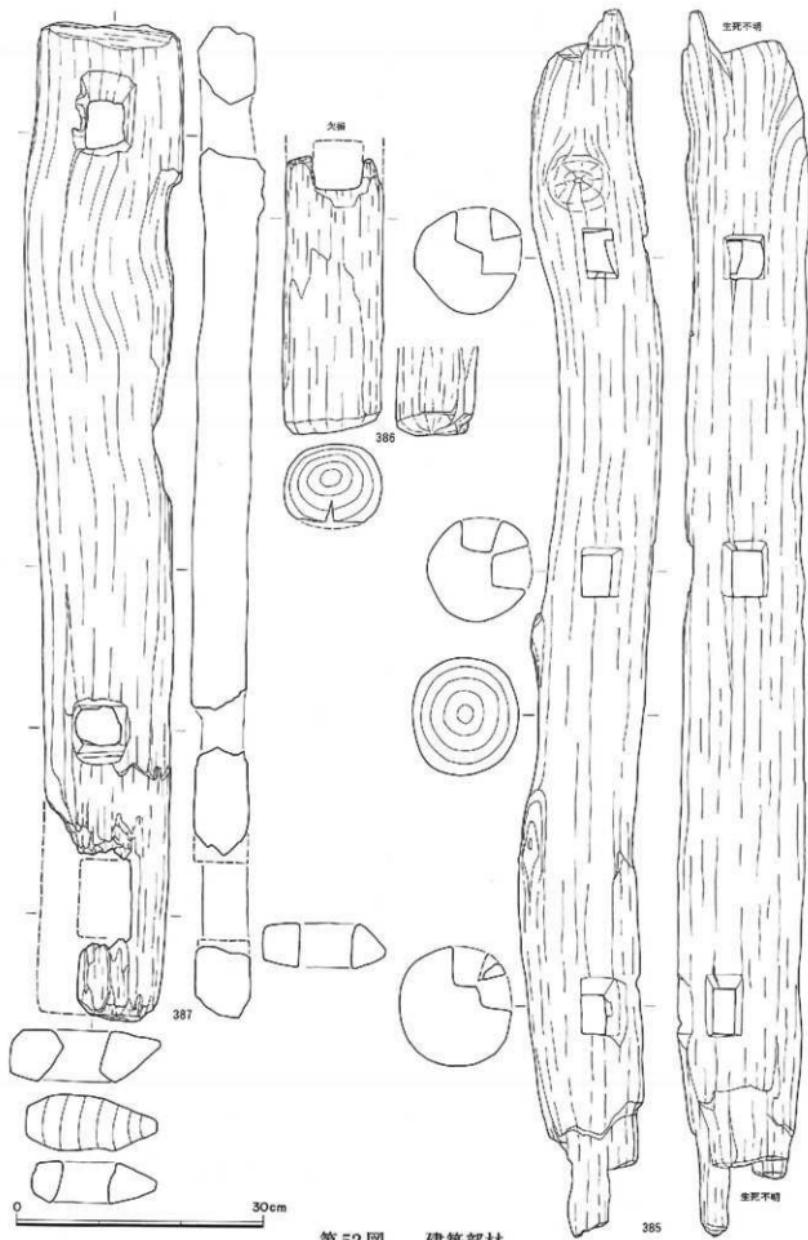
第49図 背負子・木柄・火鑓白・刀子柄・簀串・木簡材・有孔板



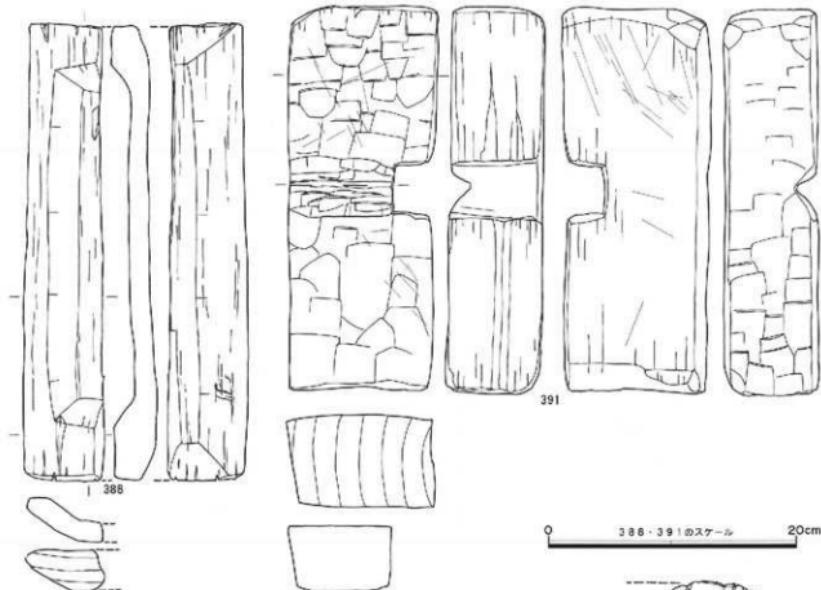
第50図 曲物底板・舟形・有柾木製品・有頭棒



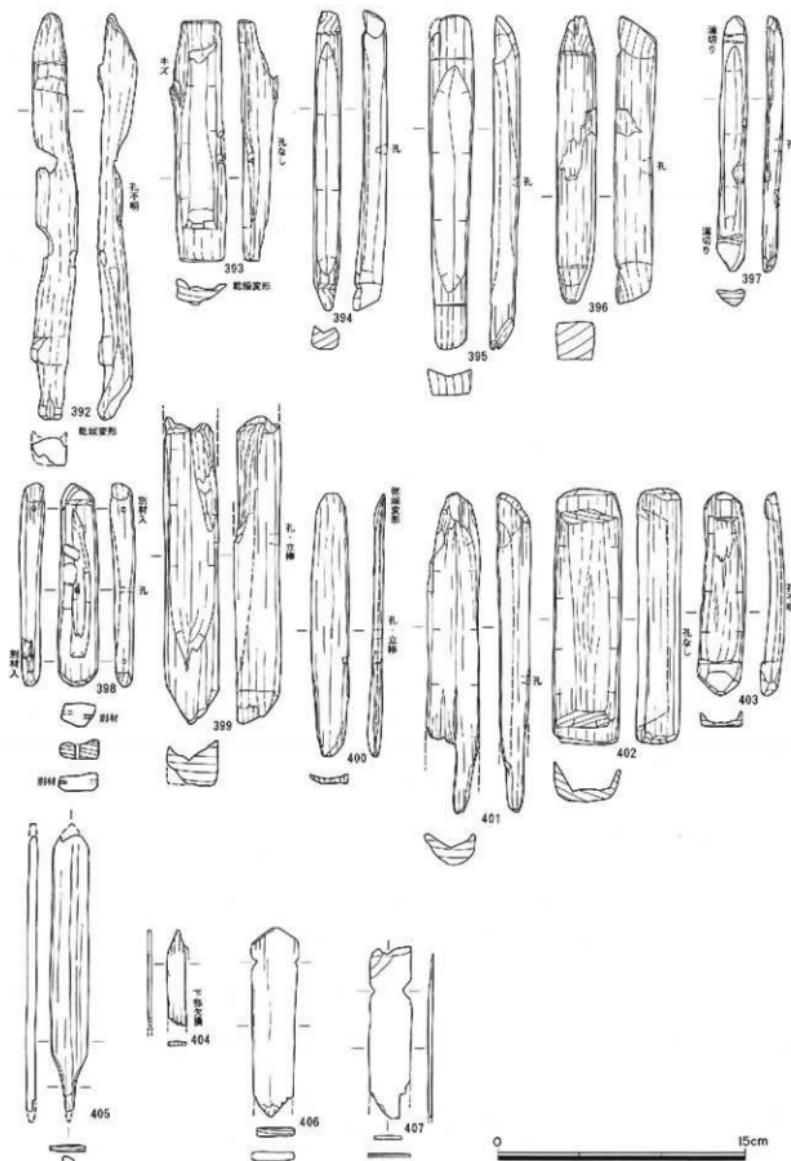
第51図 錫柄・鉄柄・木柄・編錘・タタリ・曲物まわしの側板・挽物盤



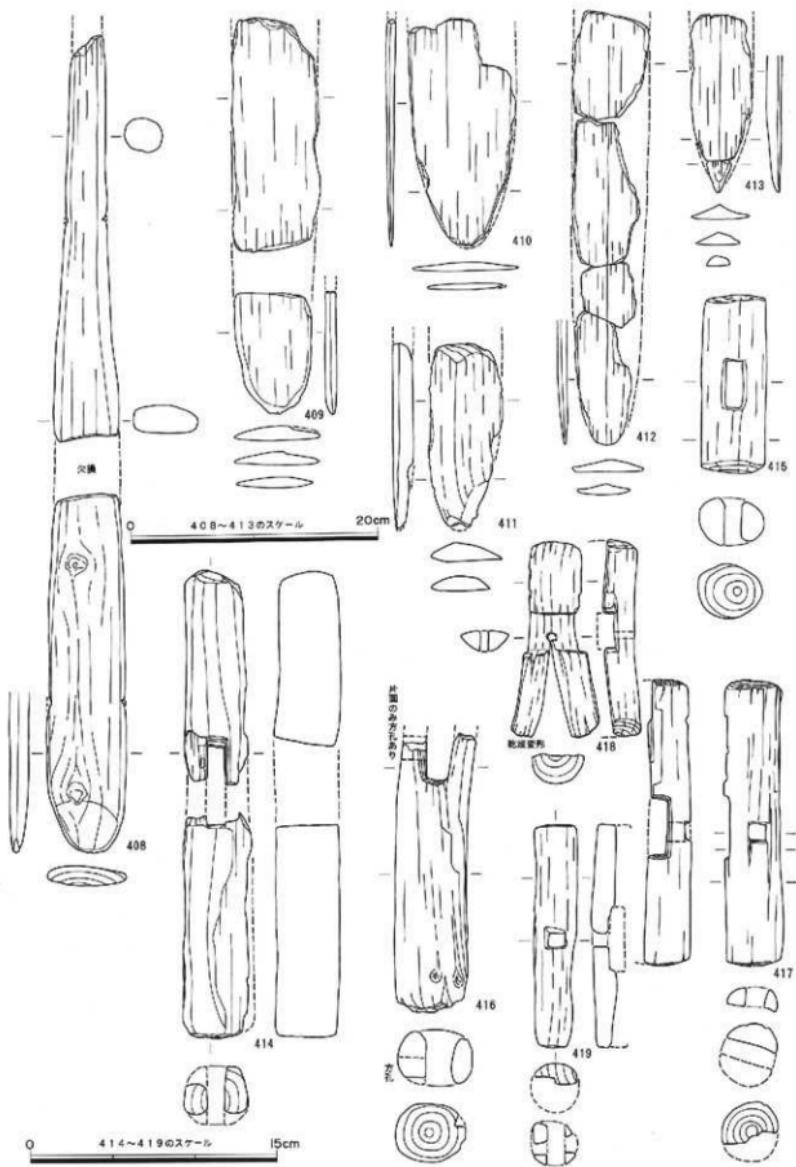
第52図 建築部材



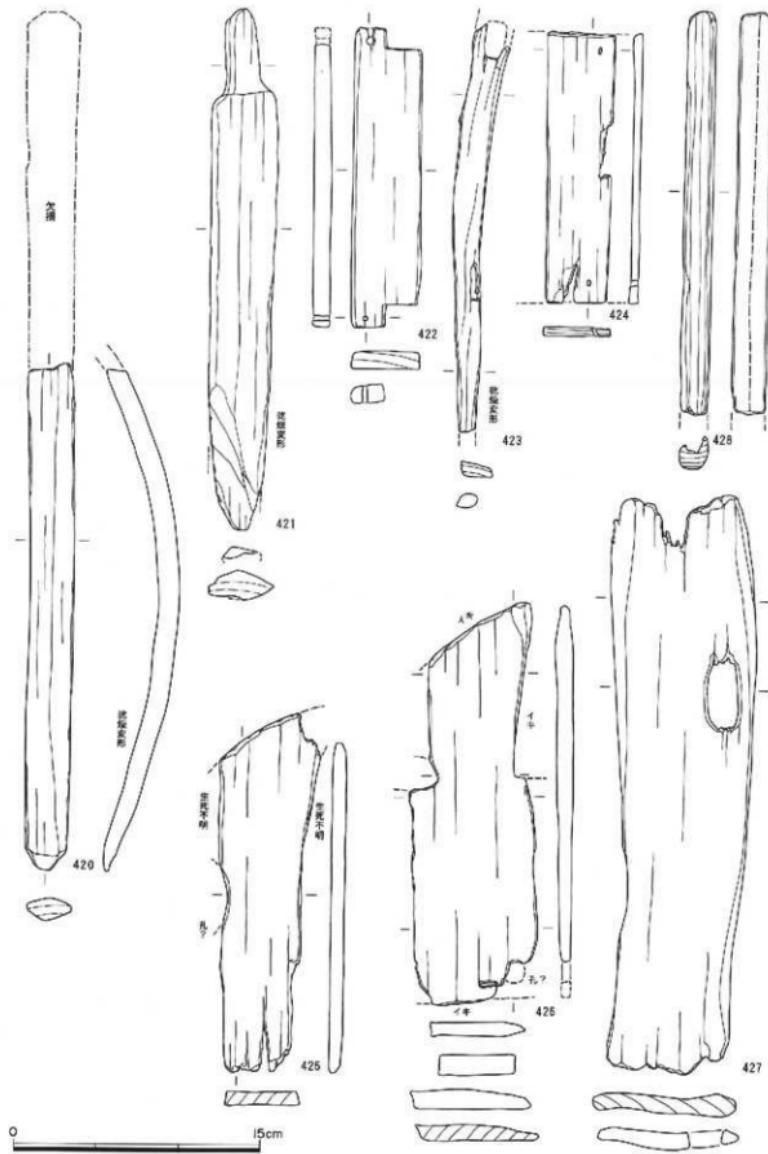
第53図 槽・鼠返し・加工角材



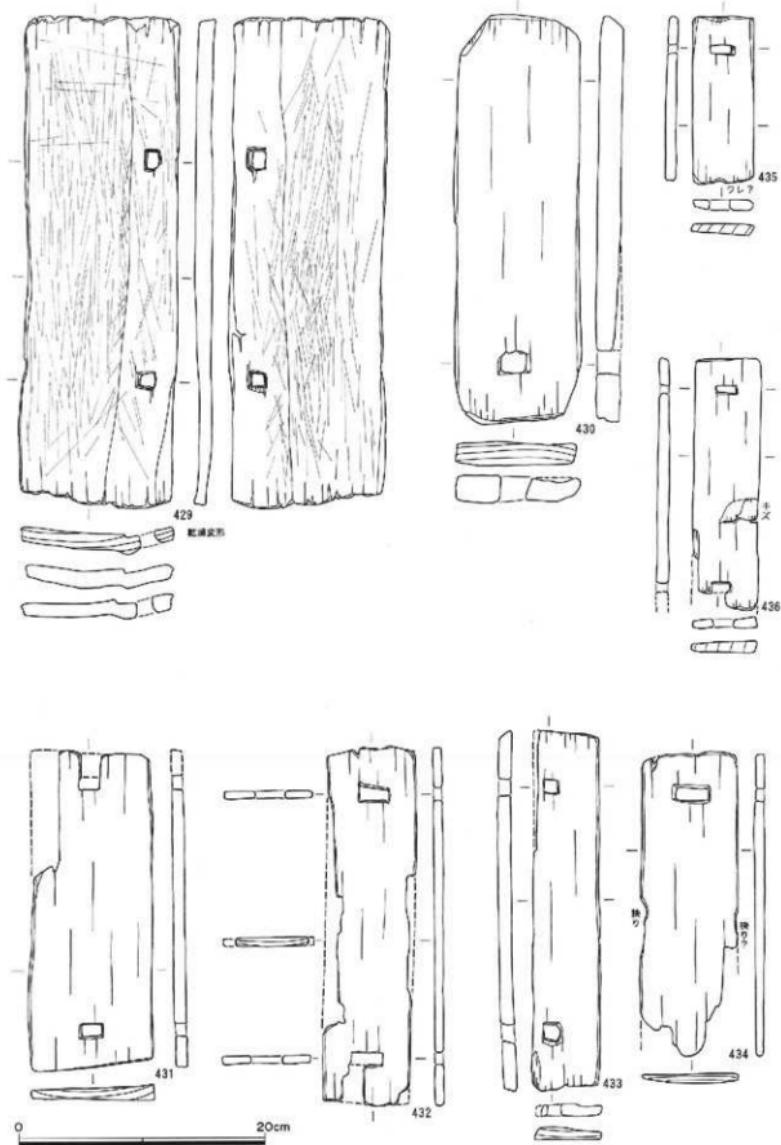
第54図 舟形・竿串・木筒材



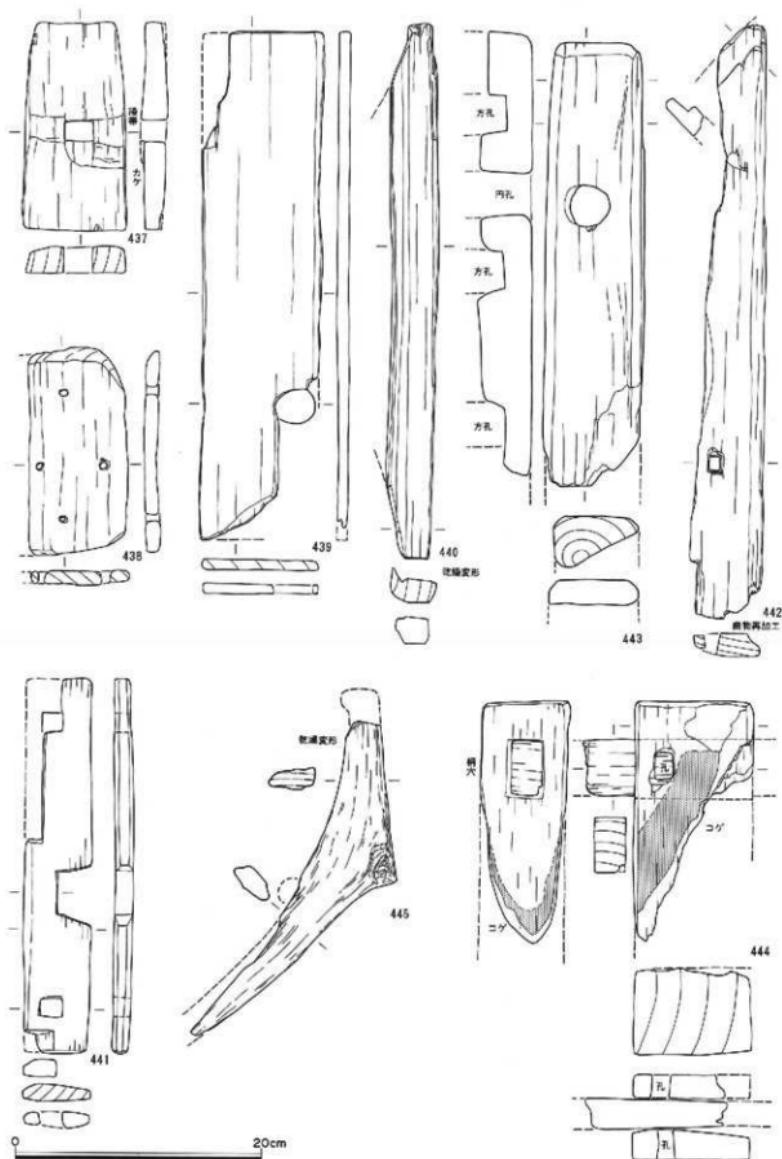
第55図 権・木柄



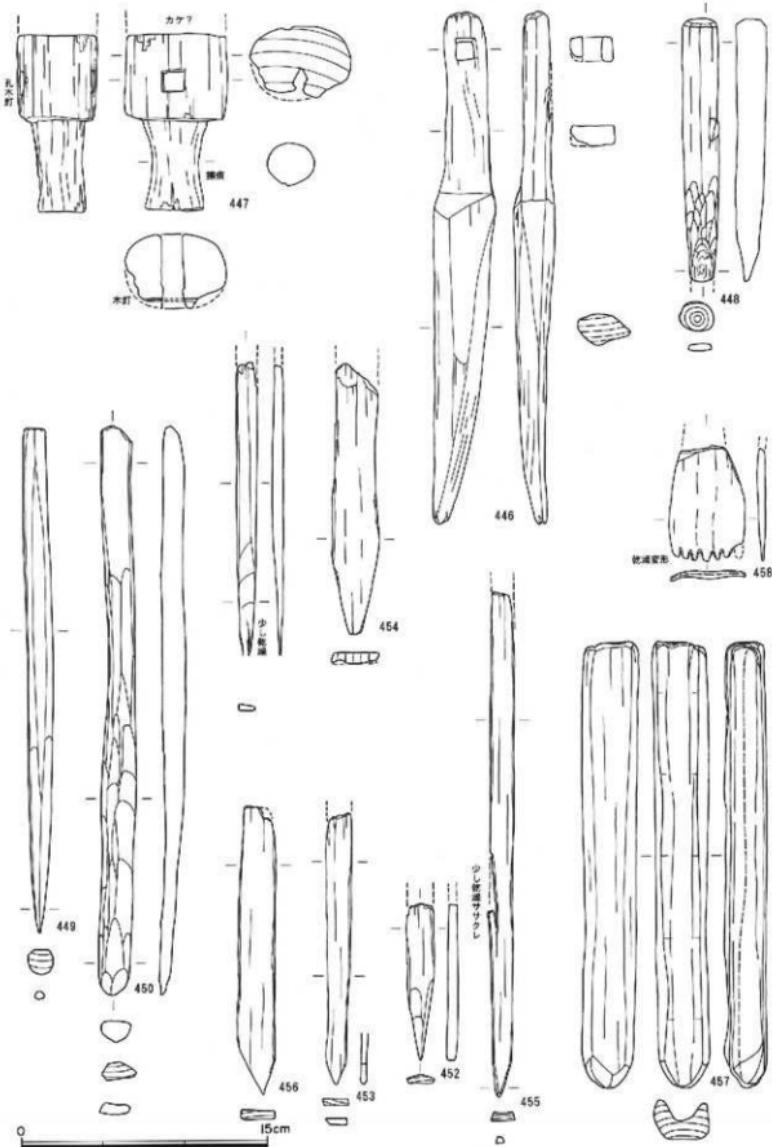
第56図 出納棒・箱物側板・有孔板・曲物底板・有樋木製品



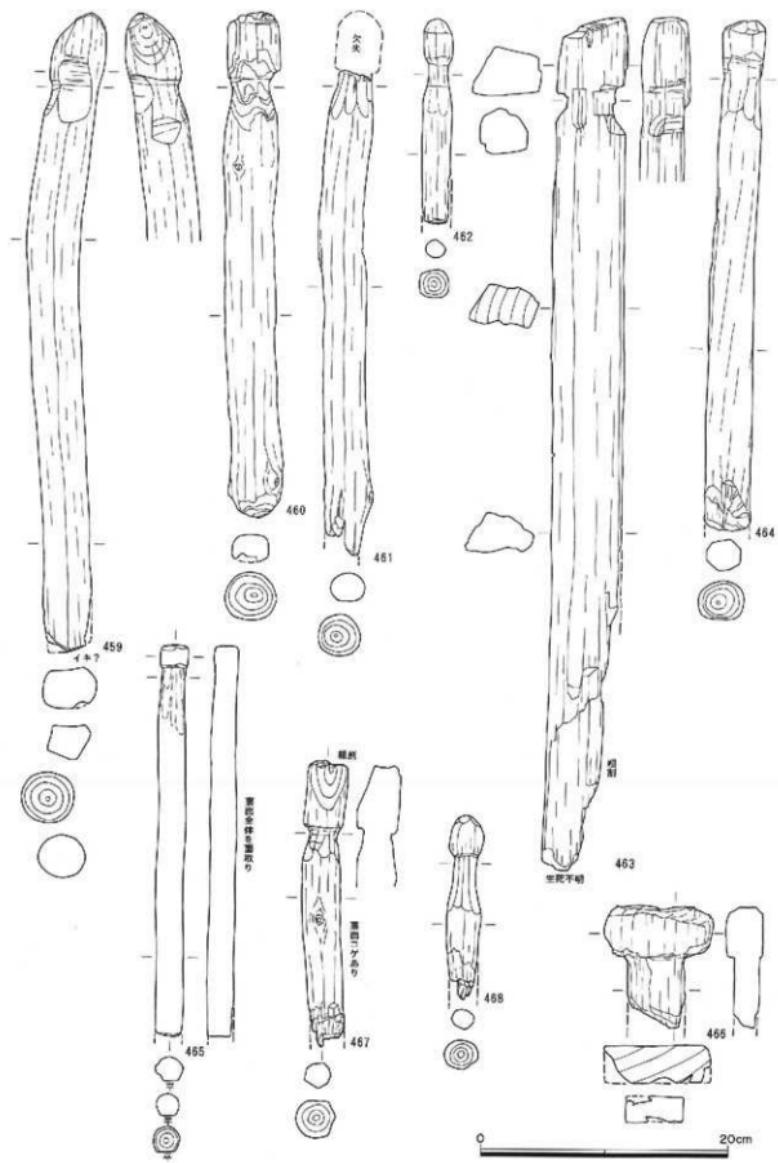
第57図 有孔板



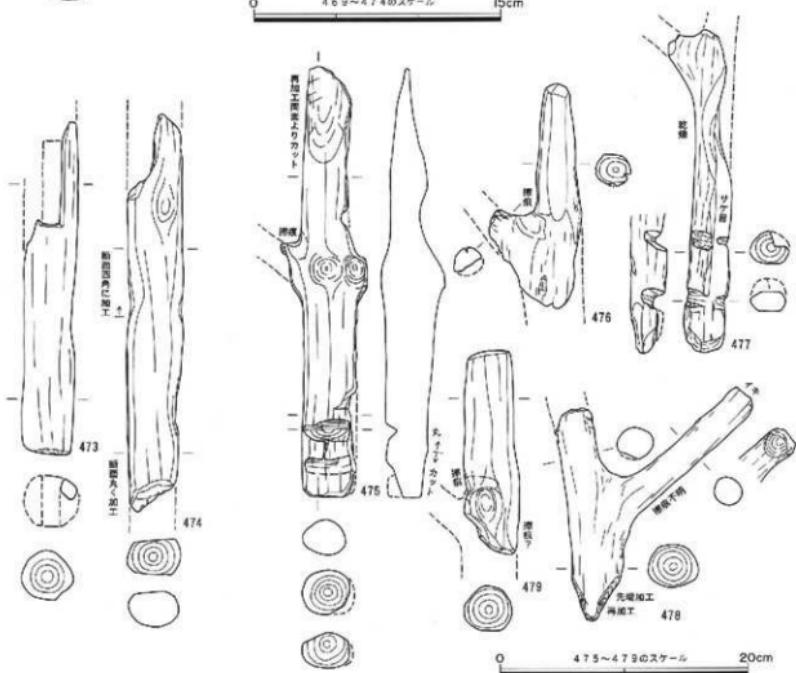
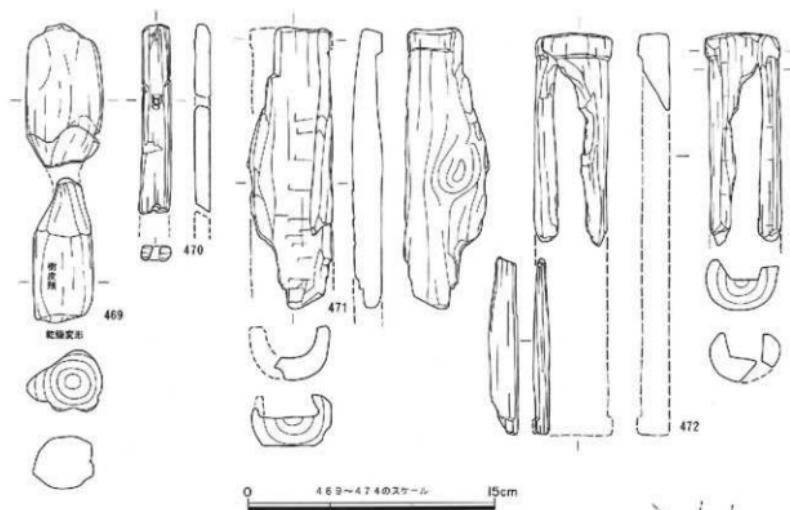
第58図 柄振・有孔板・加工板・曲物底板・馬鍬・機織具・鍬柄



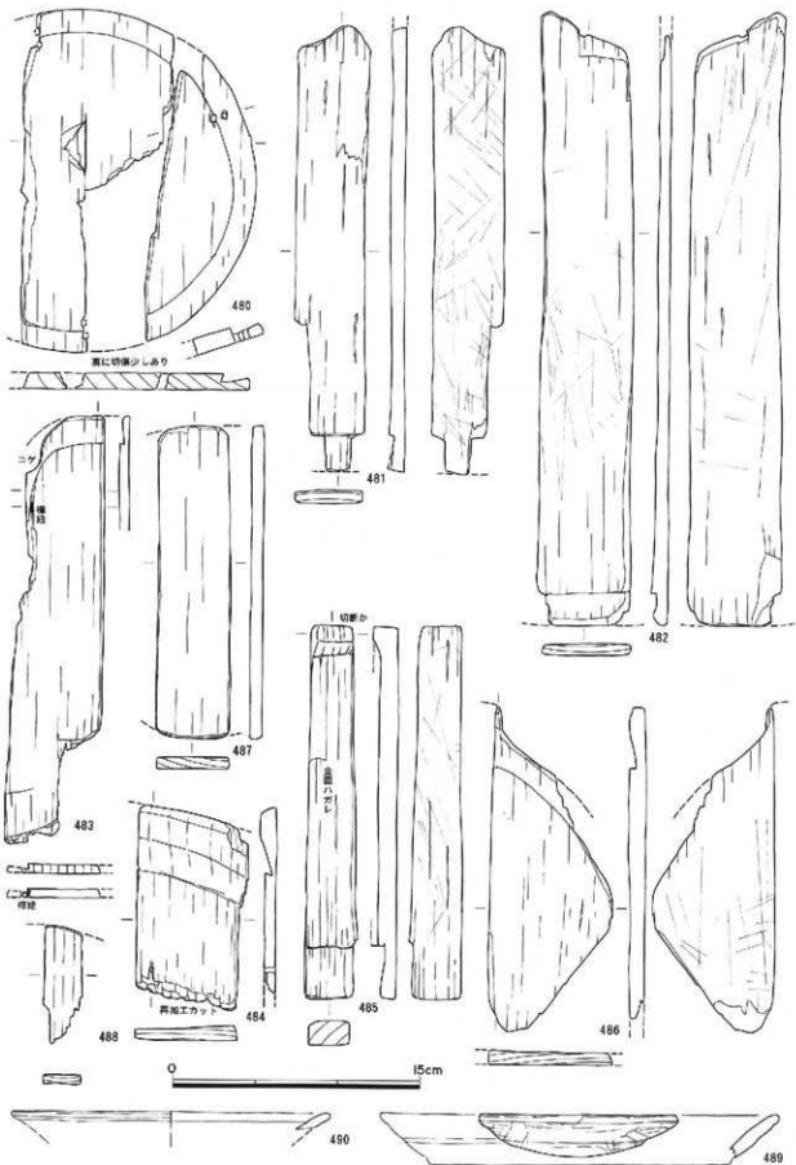
第59図 馬鍬・機織具・加工材・斎串・有柄木製品・櫛状木製品



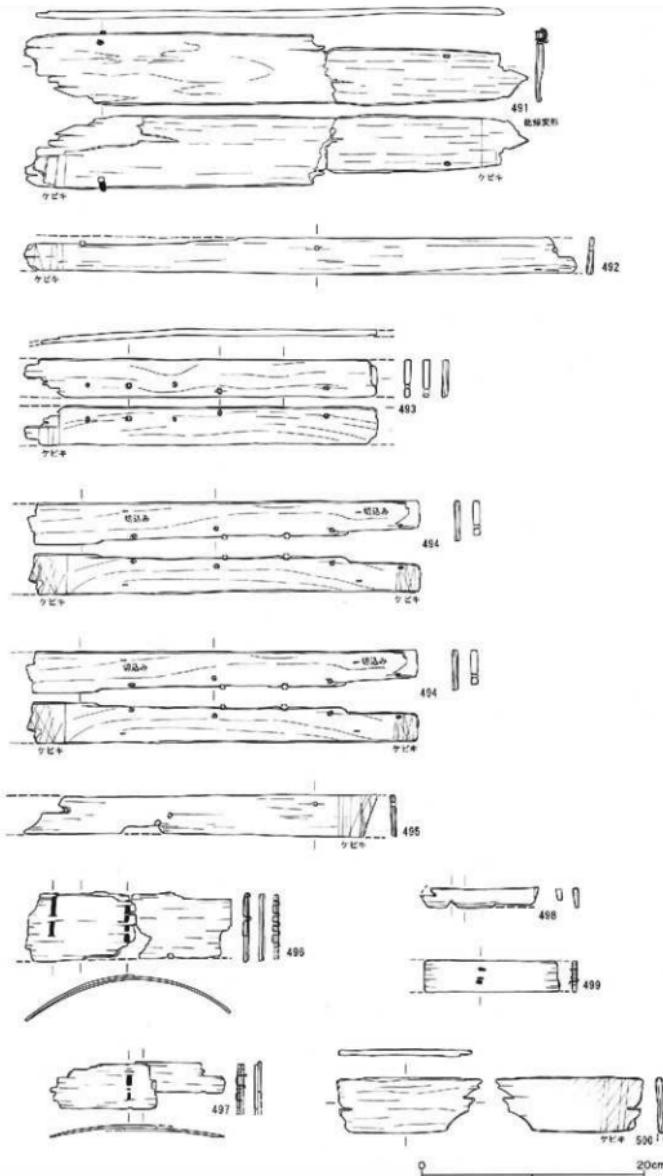
第60図 有頭棒



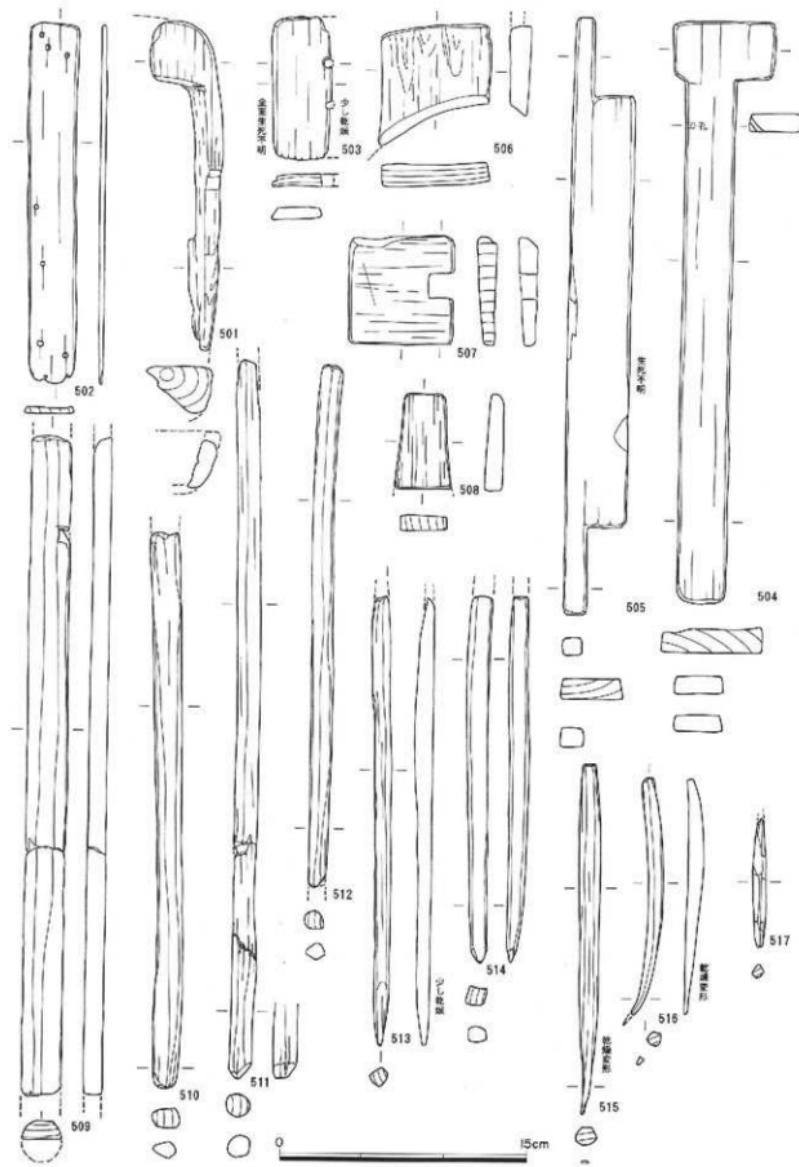
第61図 編錐・かせかけ・四ツ手網・木柄・背負子



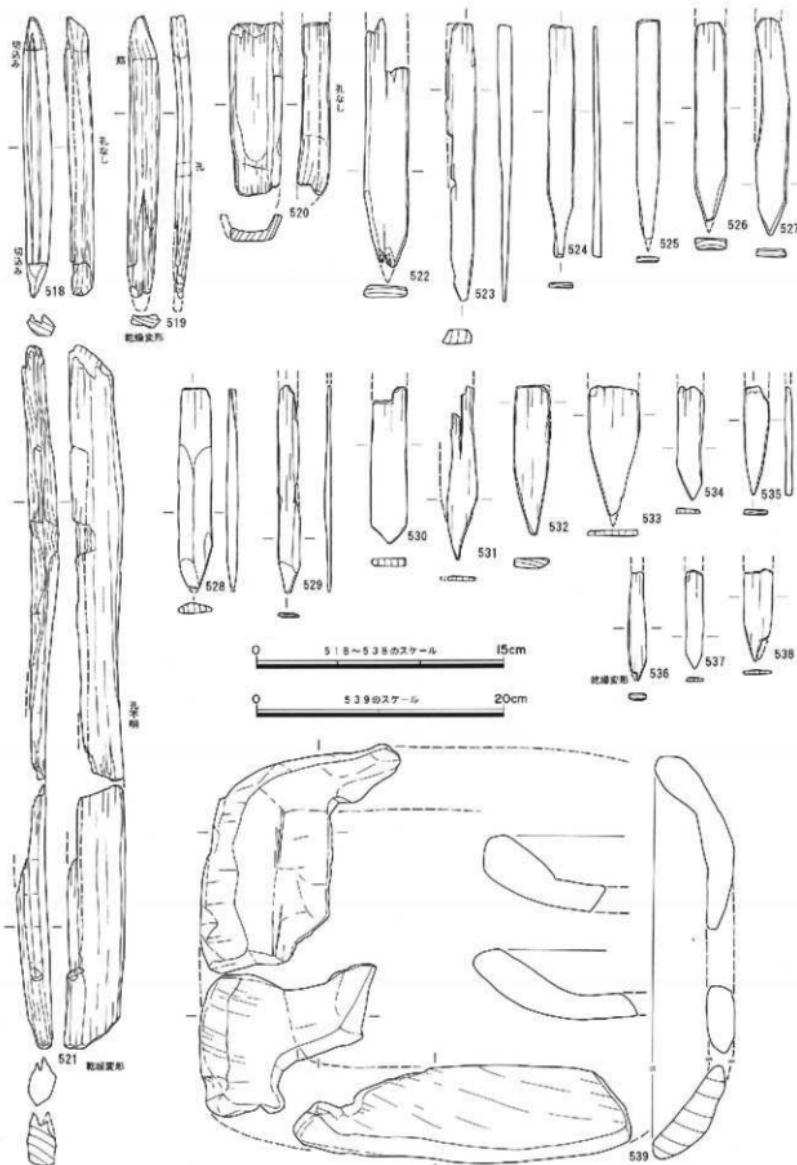
第62図 曲物底板・挽物盤



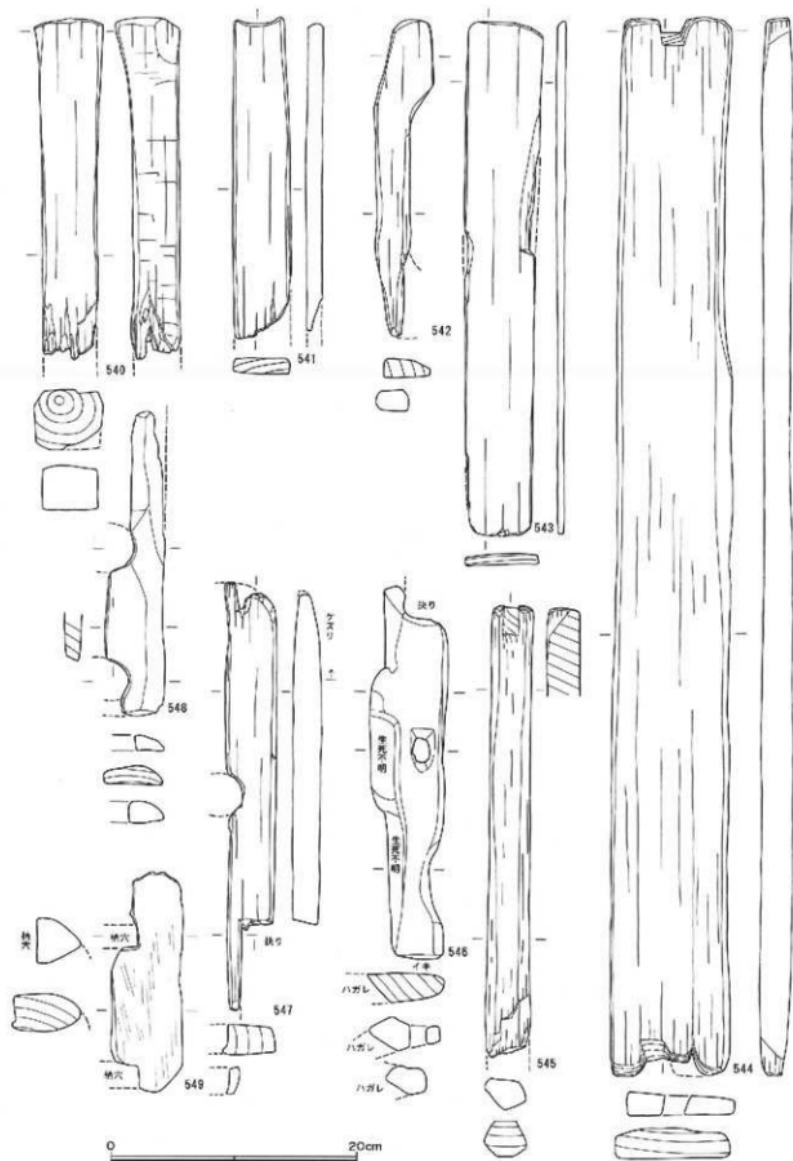
第63図 曲物側板・曲物まわしの側板



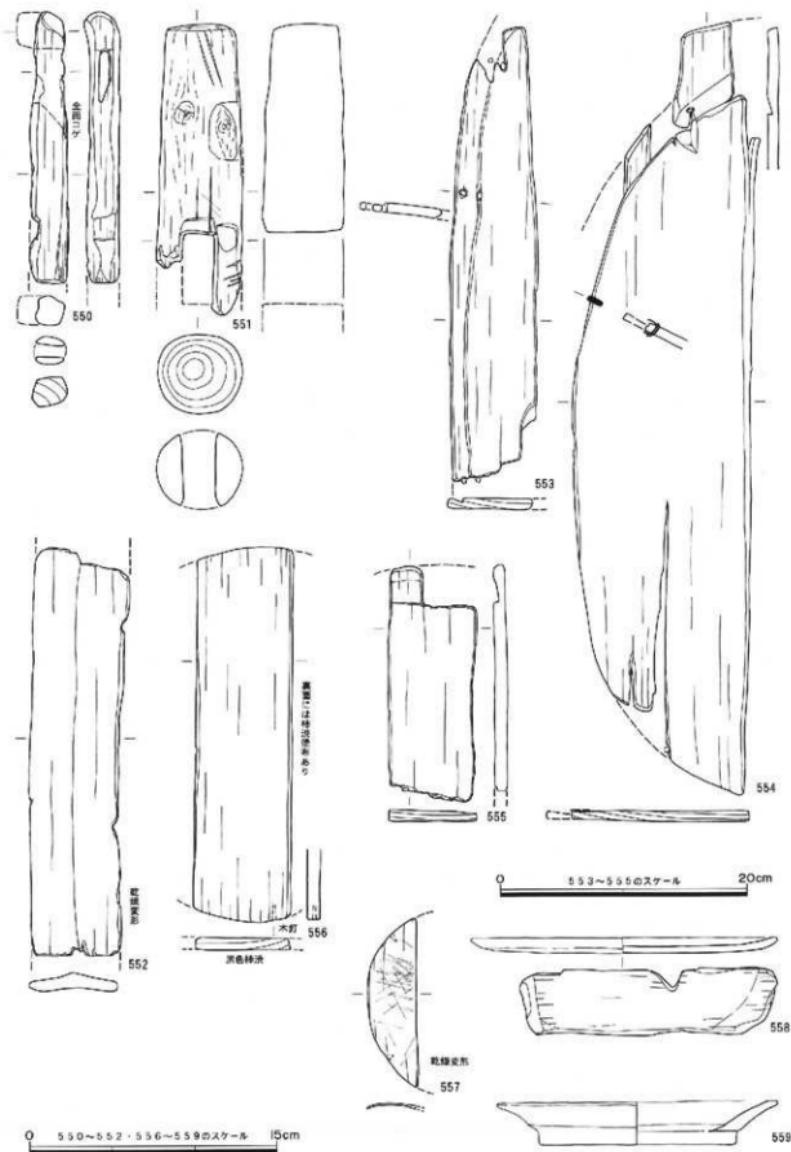
第64図 槽・有孔板・出納板・加工材



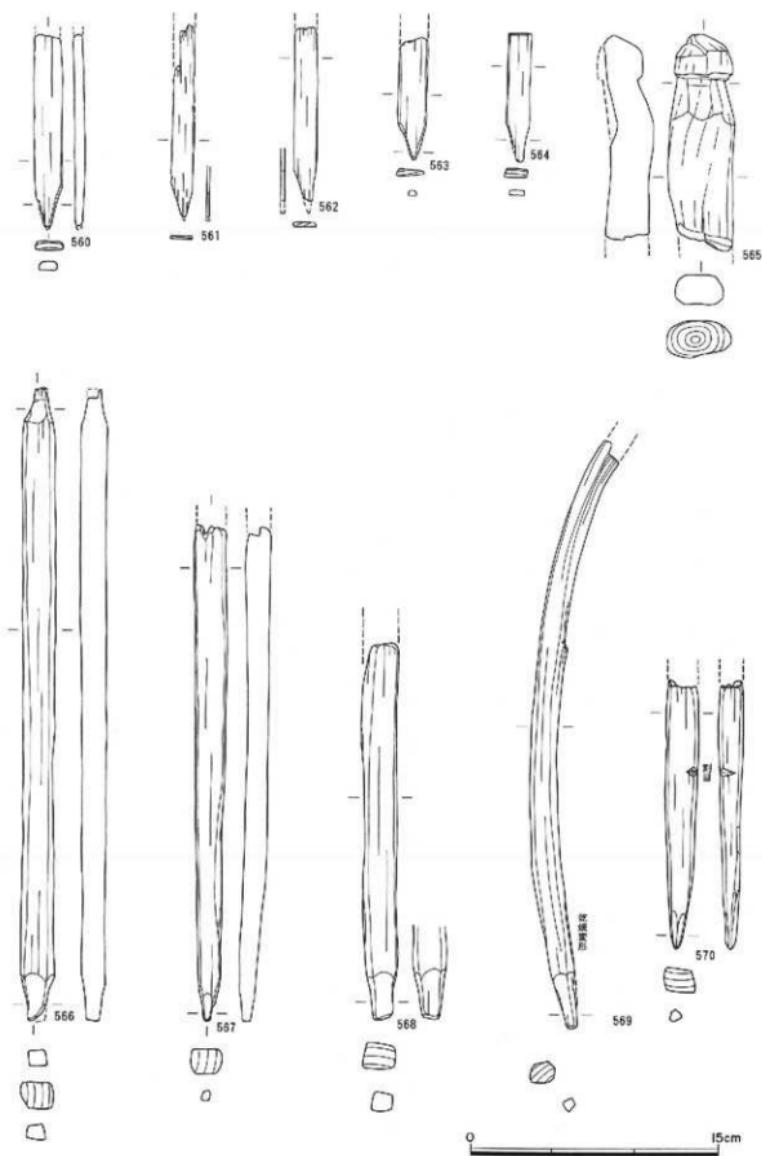
第65図 舟形・丸筒・木筒材・槽



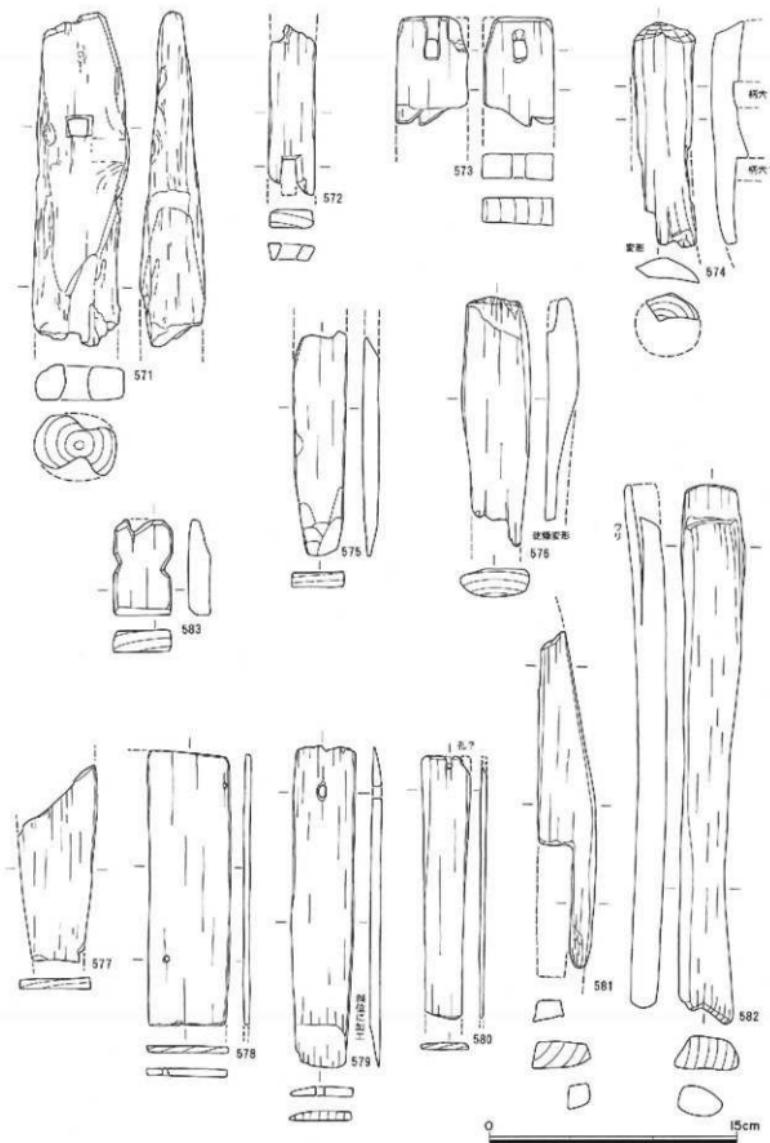
第66図 角棒・加工材・有孔材



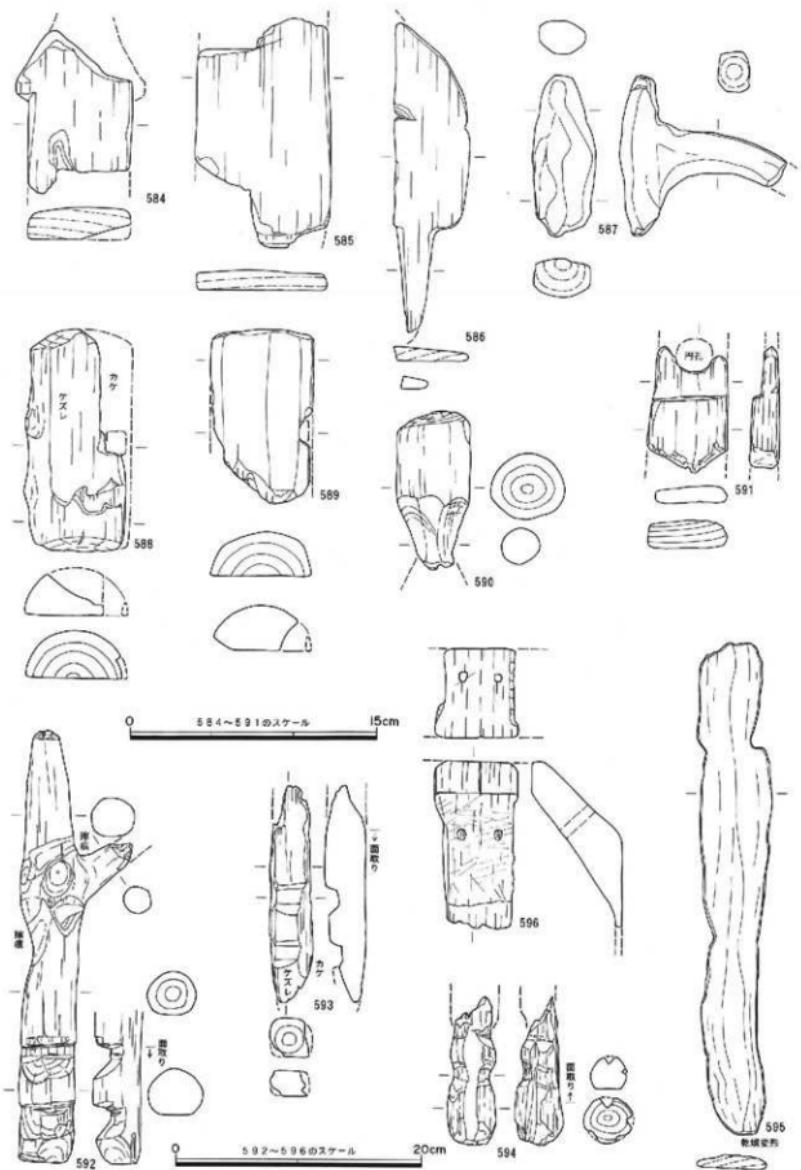
第67図 鎌柄・木柄・櫂・曲物底板・挽物盤



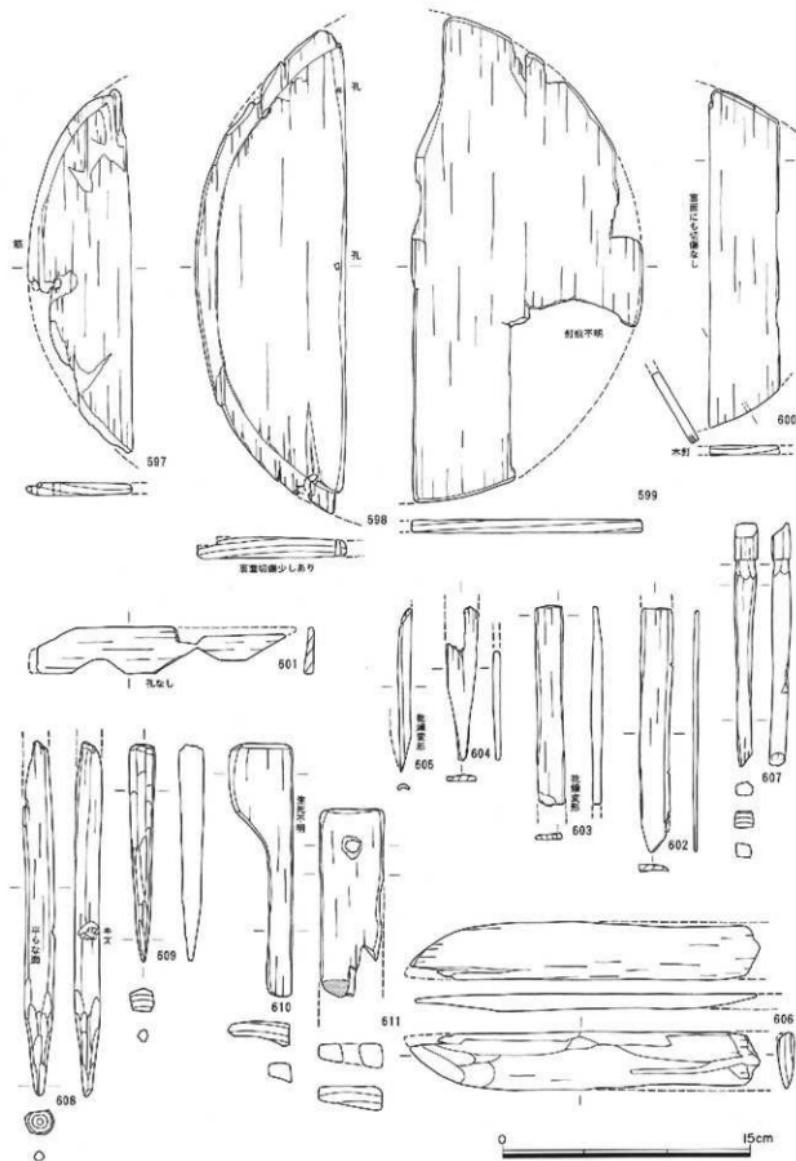
第68図 竹串・先端加工薄板・有頭棒・出柄角棒



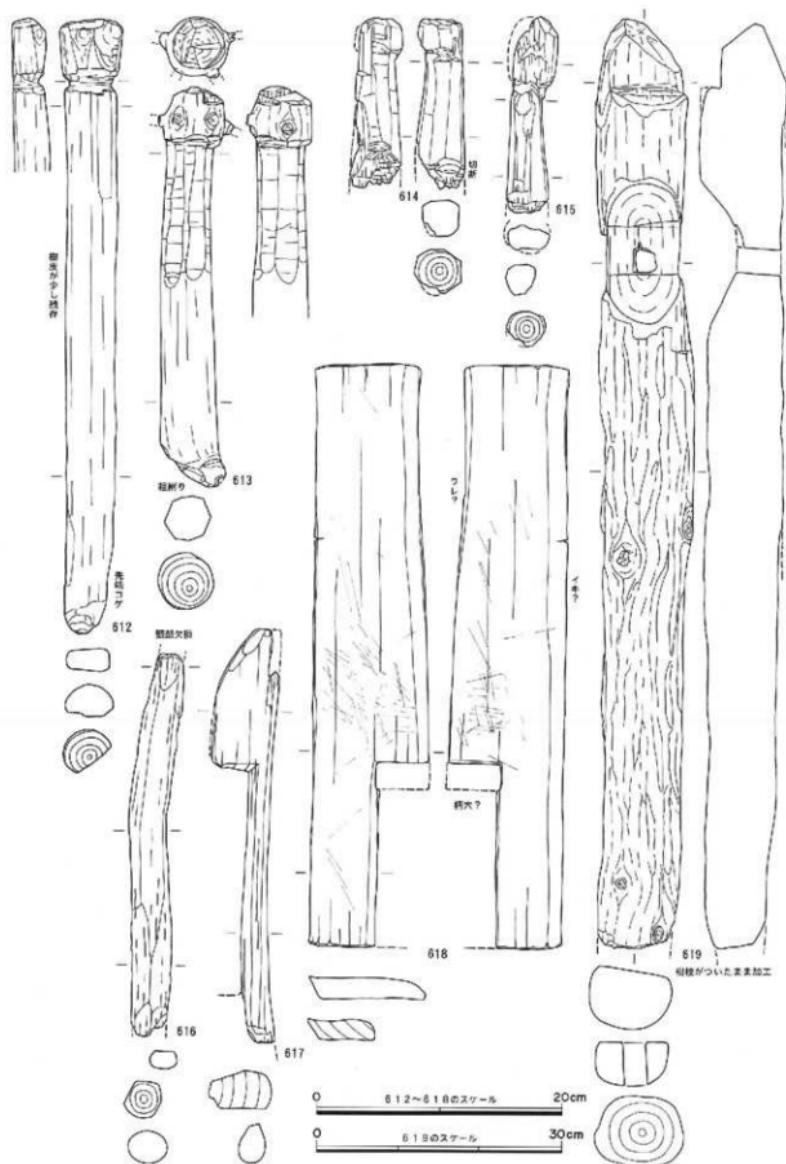
第69図 有孔材・枘穴丸棒・鍔・楔状木製品・大足・鎌柄



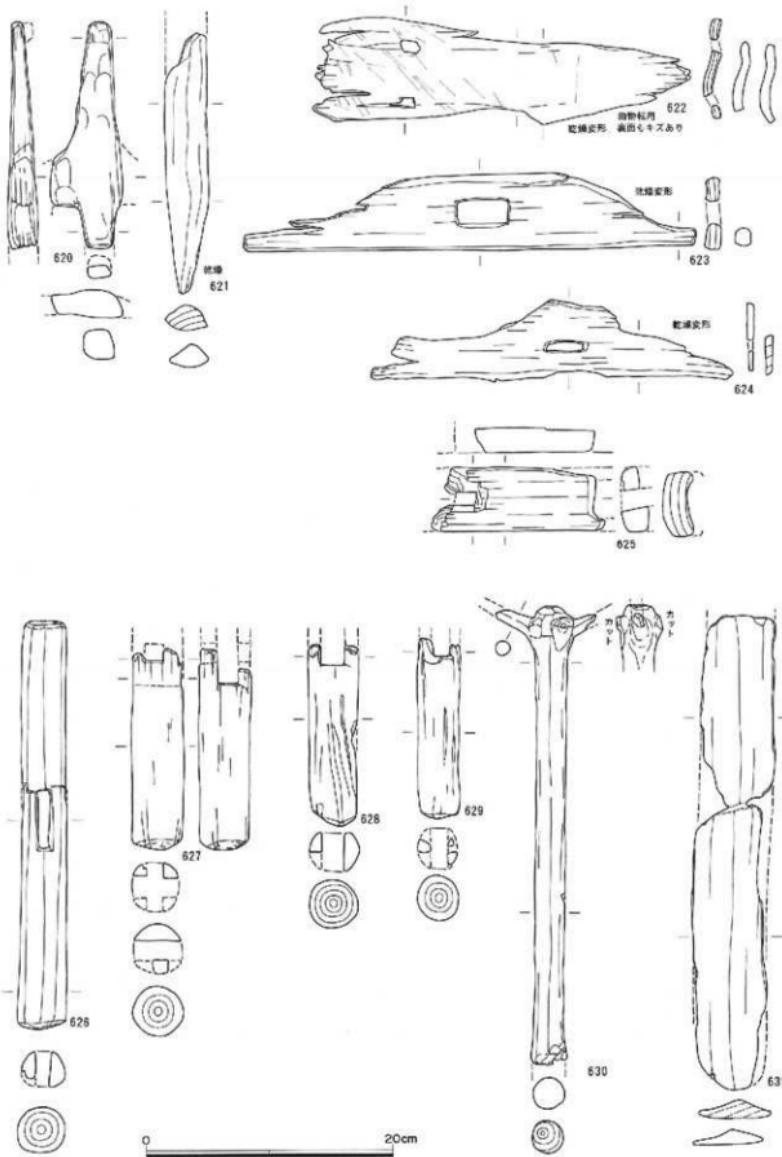
第70図 鍬・手斧柄・編錐・かせかけ・背負子・櫂・槽



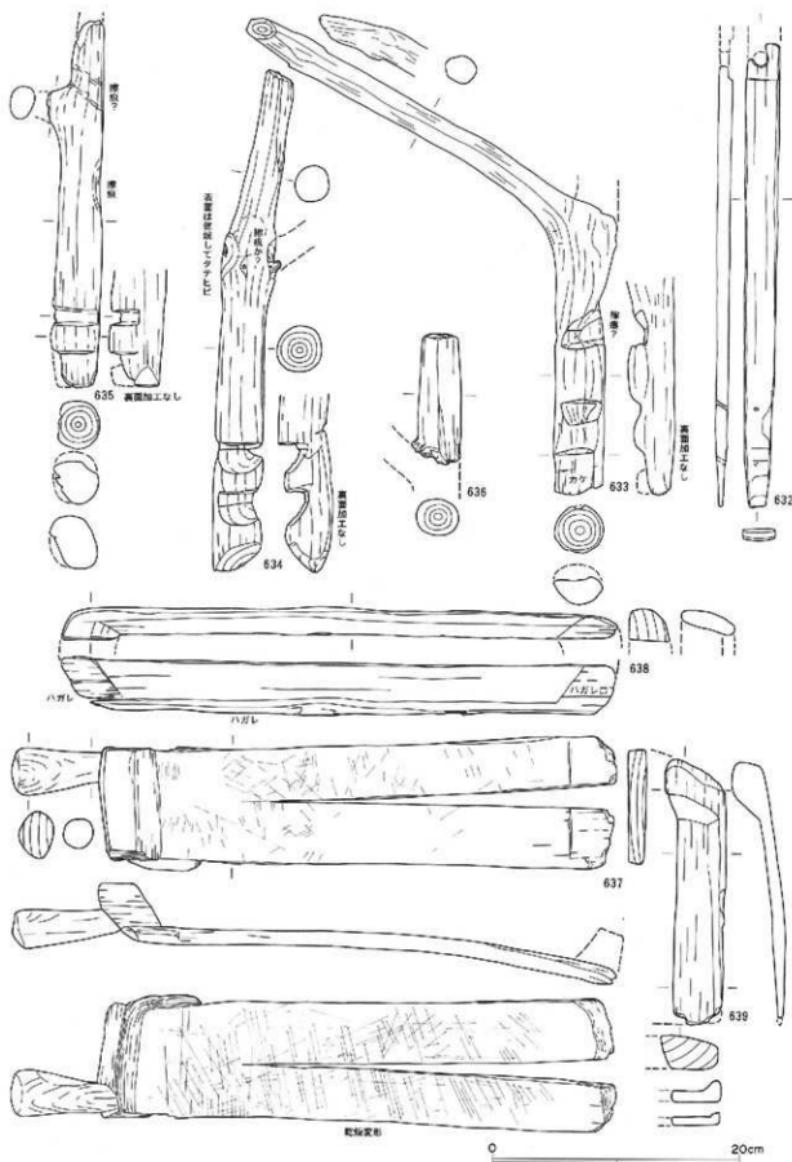
第71図 曲物底板・馬形・斎串・刀形・有頭棒・尖頭棒・加工板



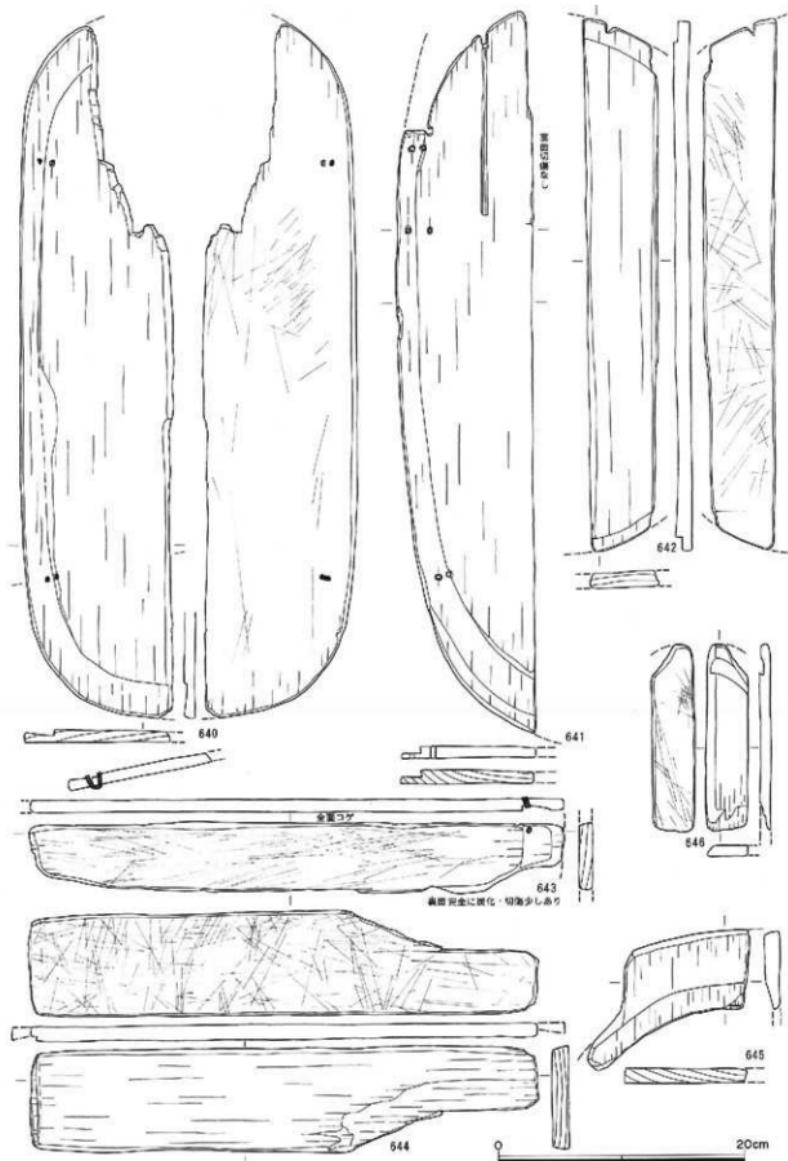
第72図 有頭棒・加工材・建築部材



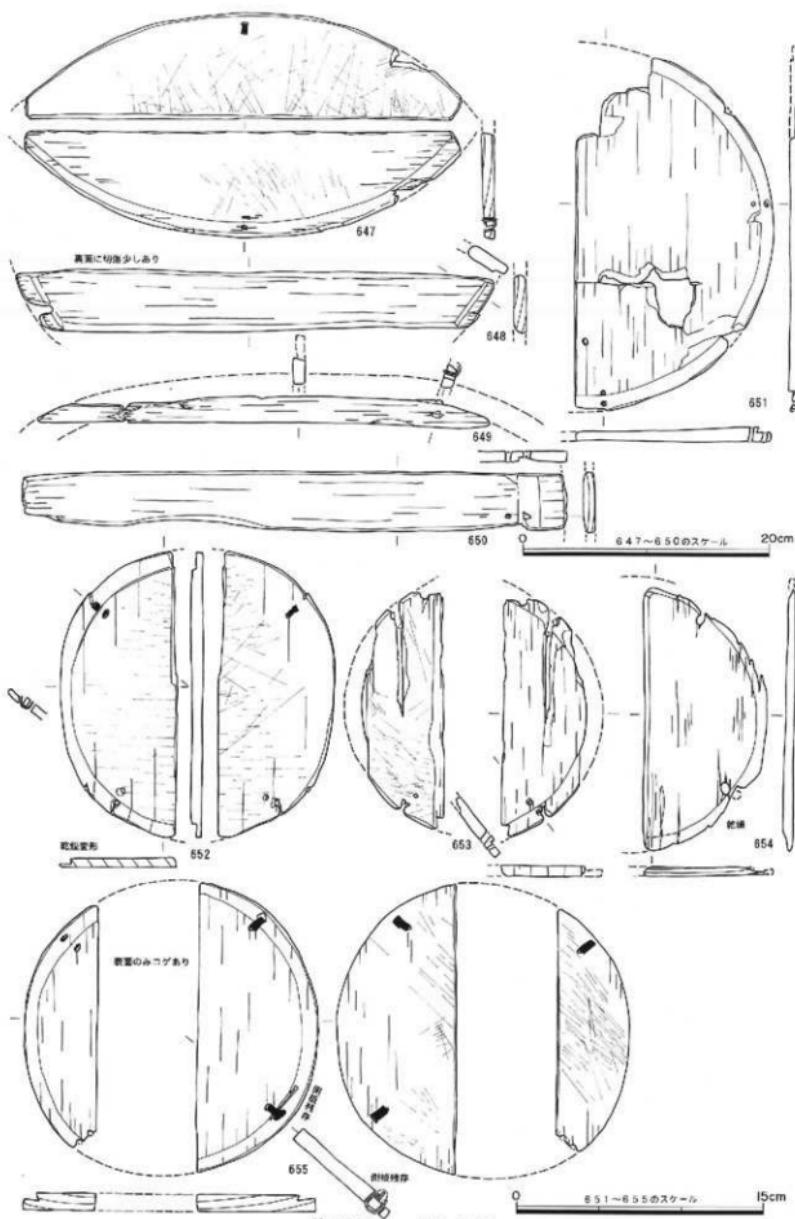
第73図 錫・大足・木柄・擣網・櫂



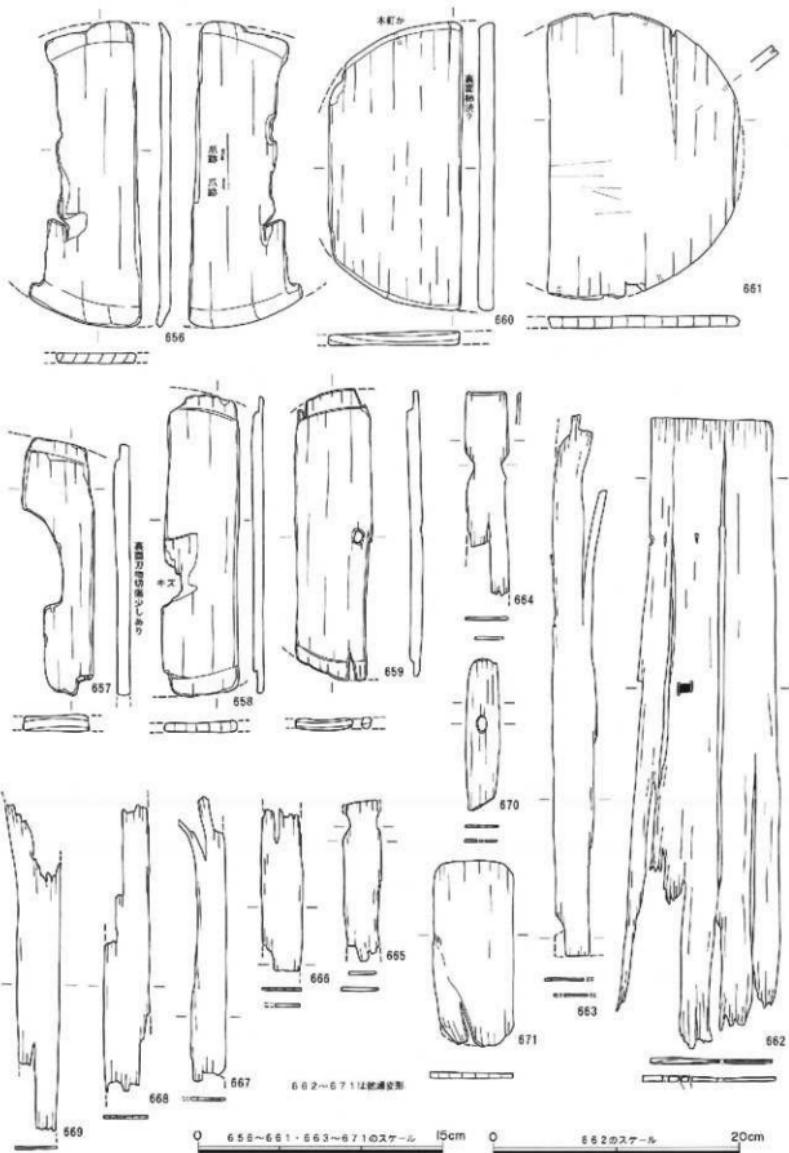
第74図 かせかけ・背負子・槽・アカカキ



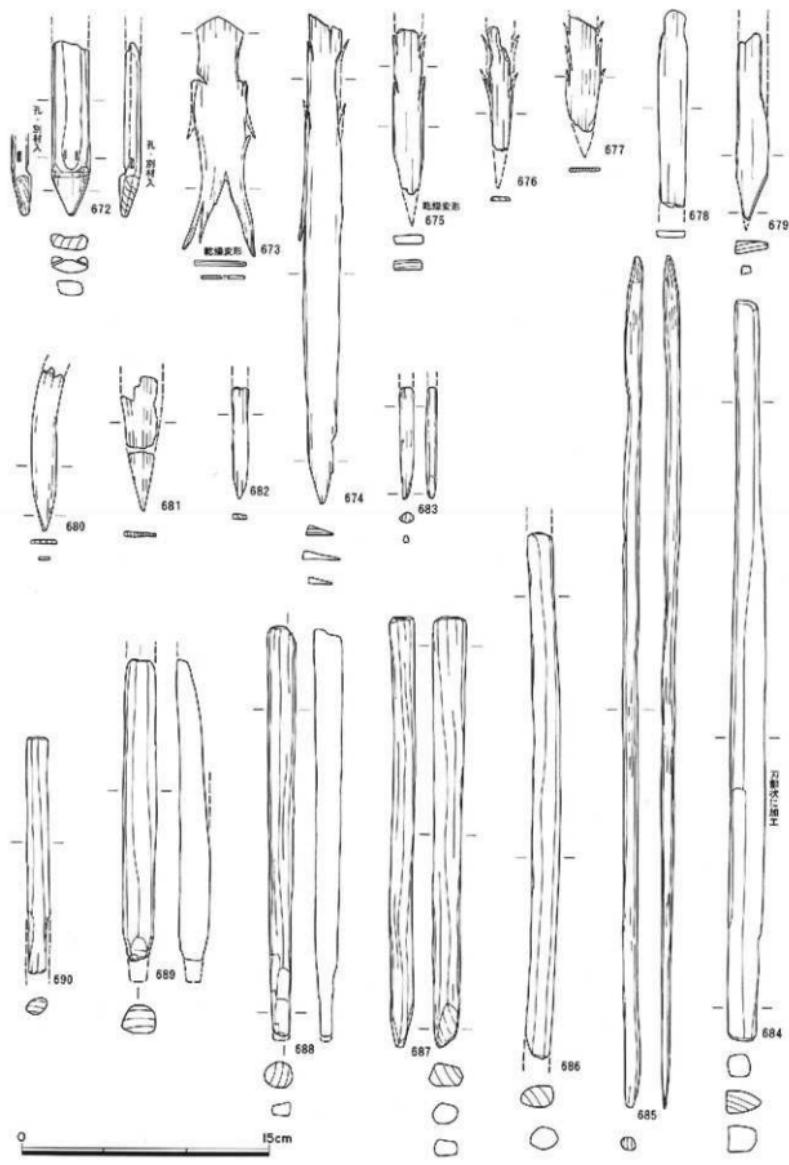
第75図 曲物底板



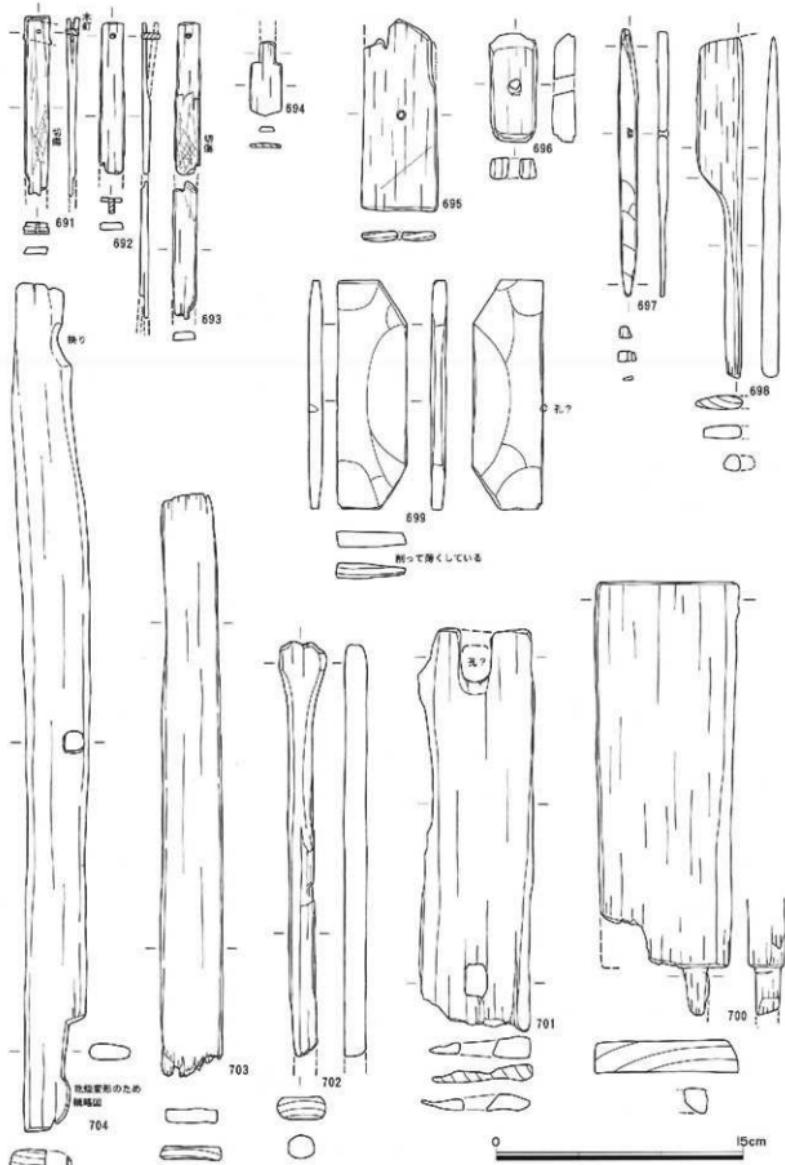
第76図 曲物底板



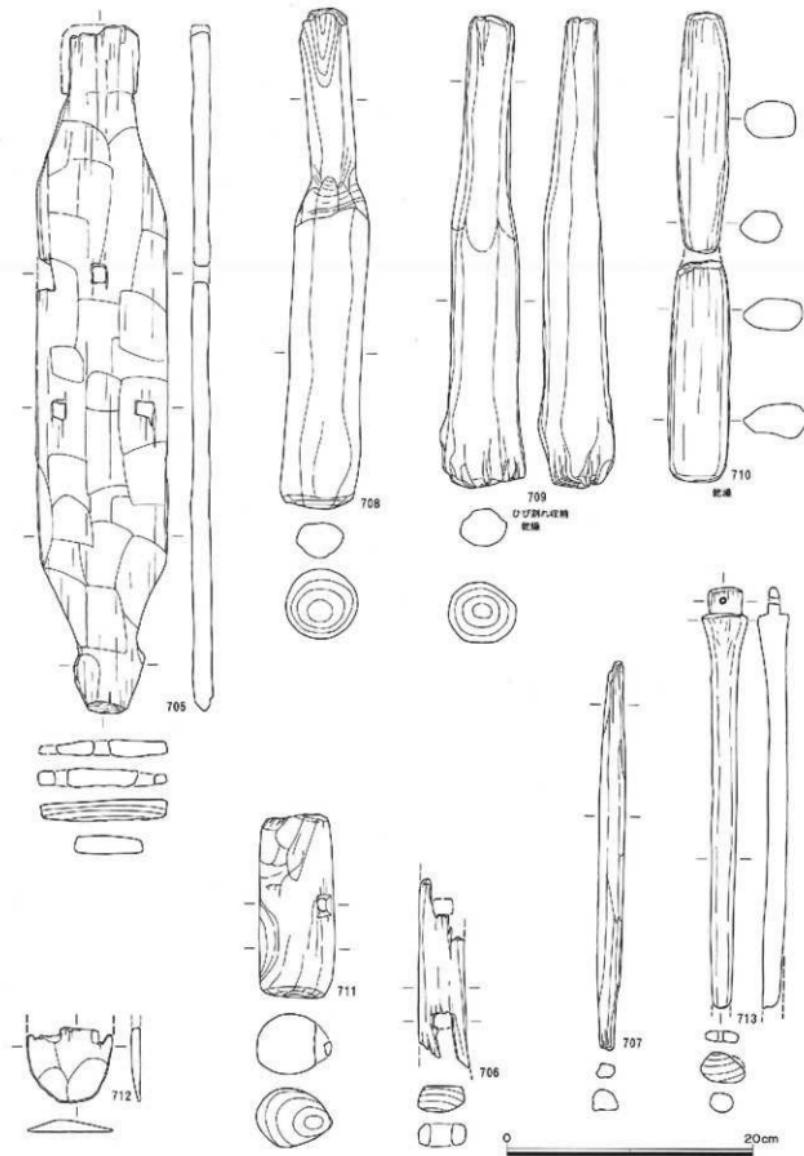
第77図 曲物底板・曲物側板・曲物まわしの側板



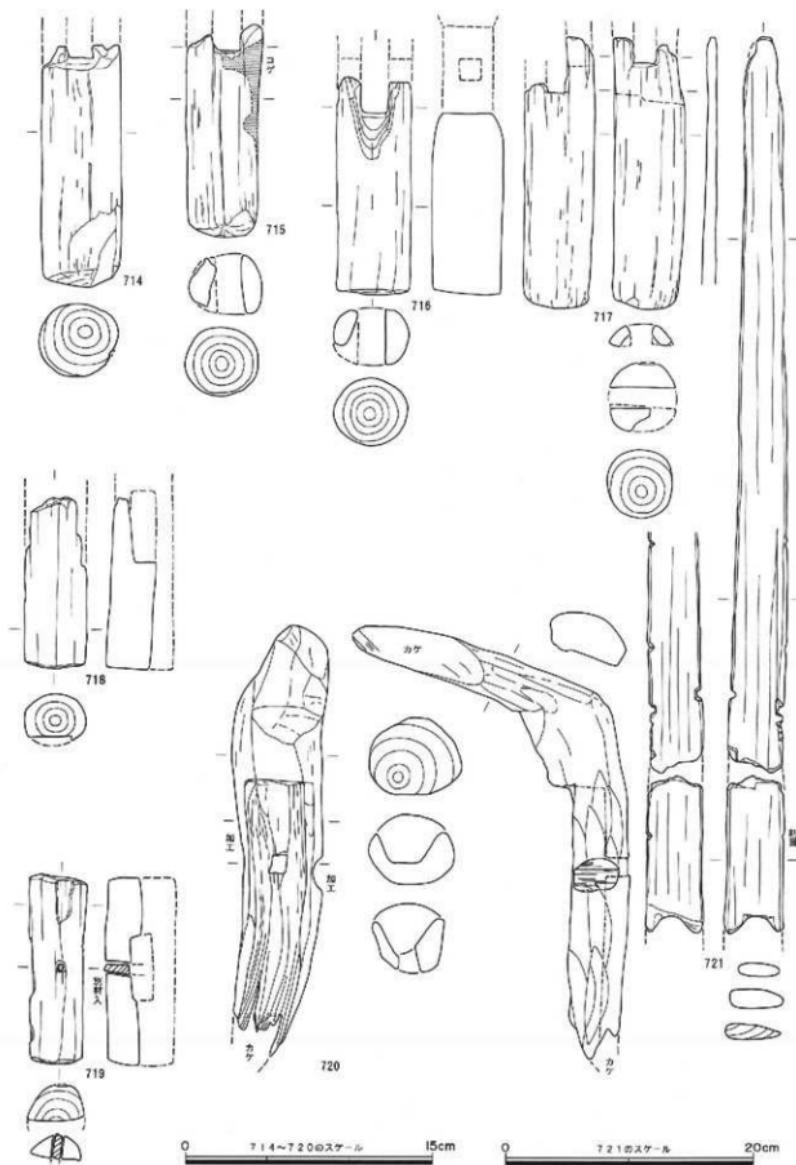
第78図 舟形・人形・梳・箸・加工棒



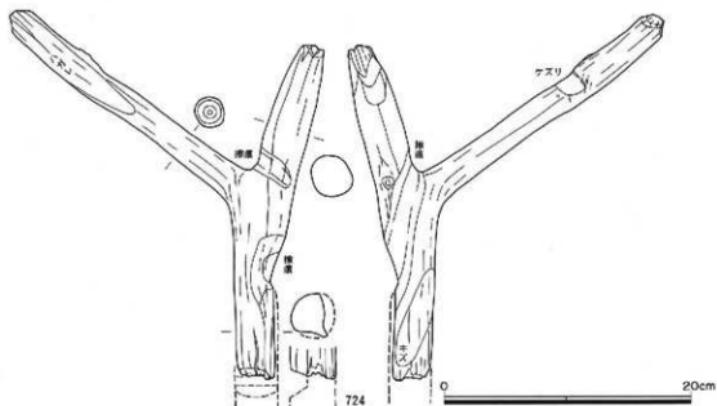
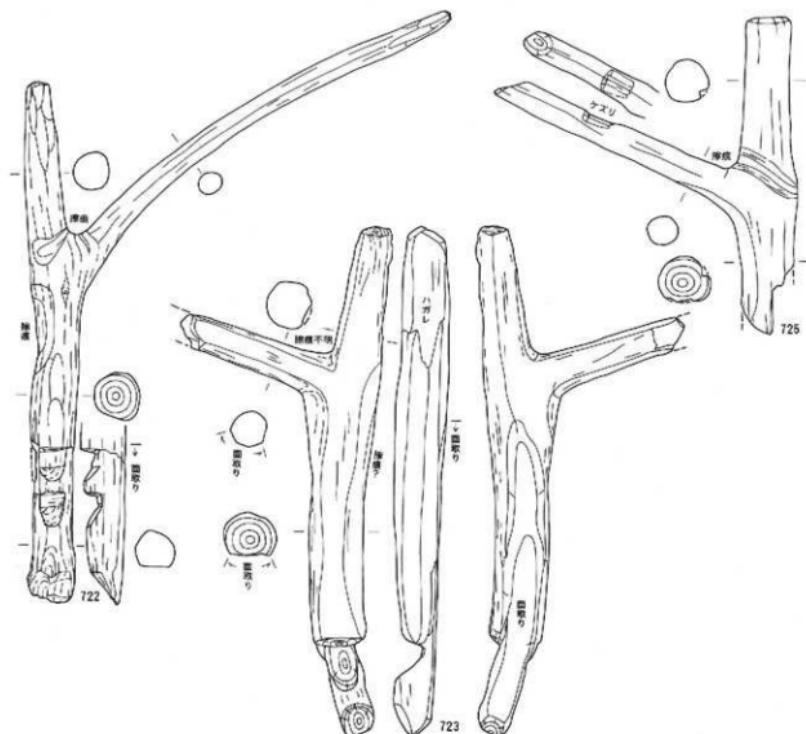
第79図 組合せ材・加工薄板・有孔板・杓文字・出納板・有頭棒



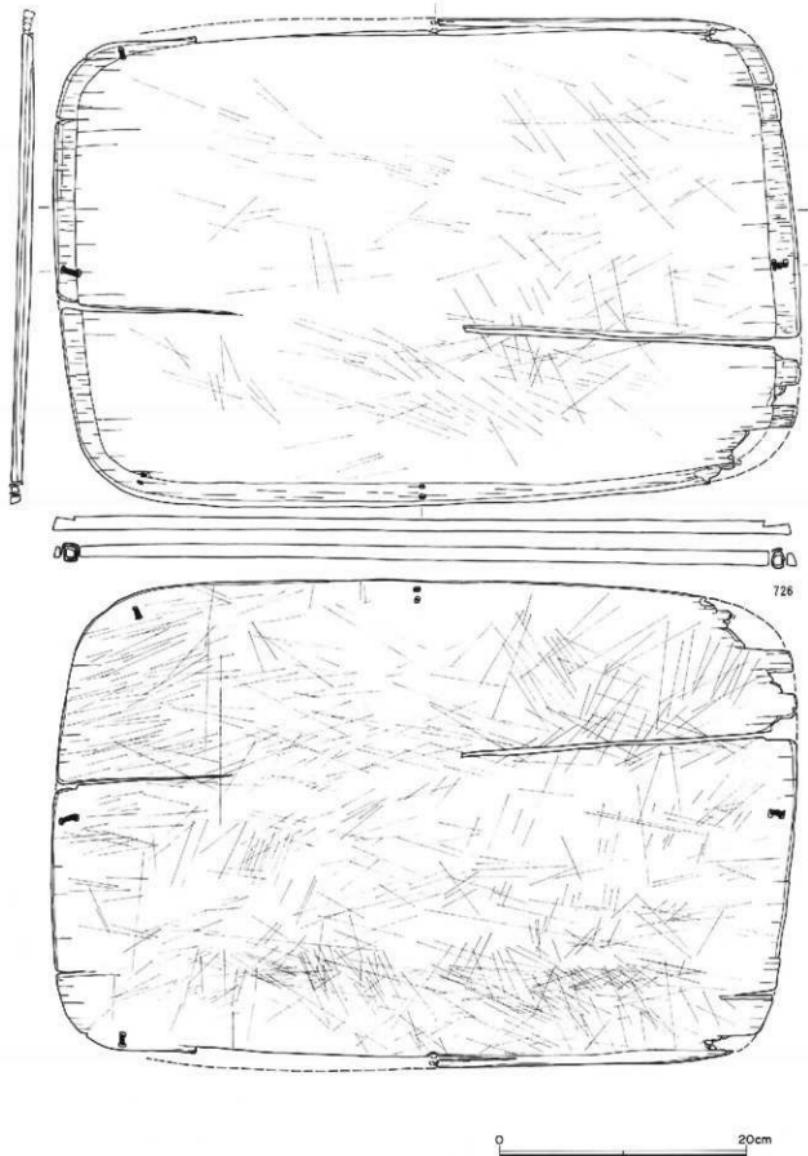
第80図 大足・加工棒・横槌・杵・編錘・櫛・棒



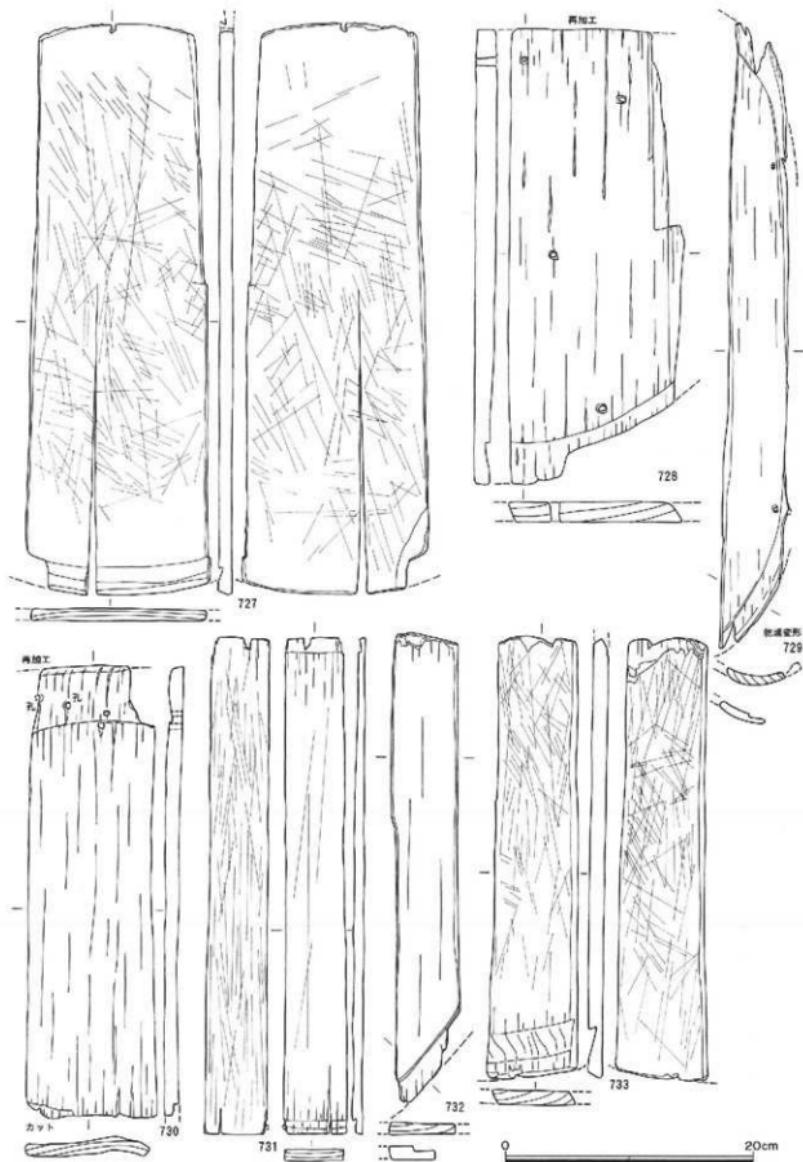
第81図 木柄・有柄角状木製品・編台



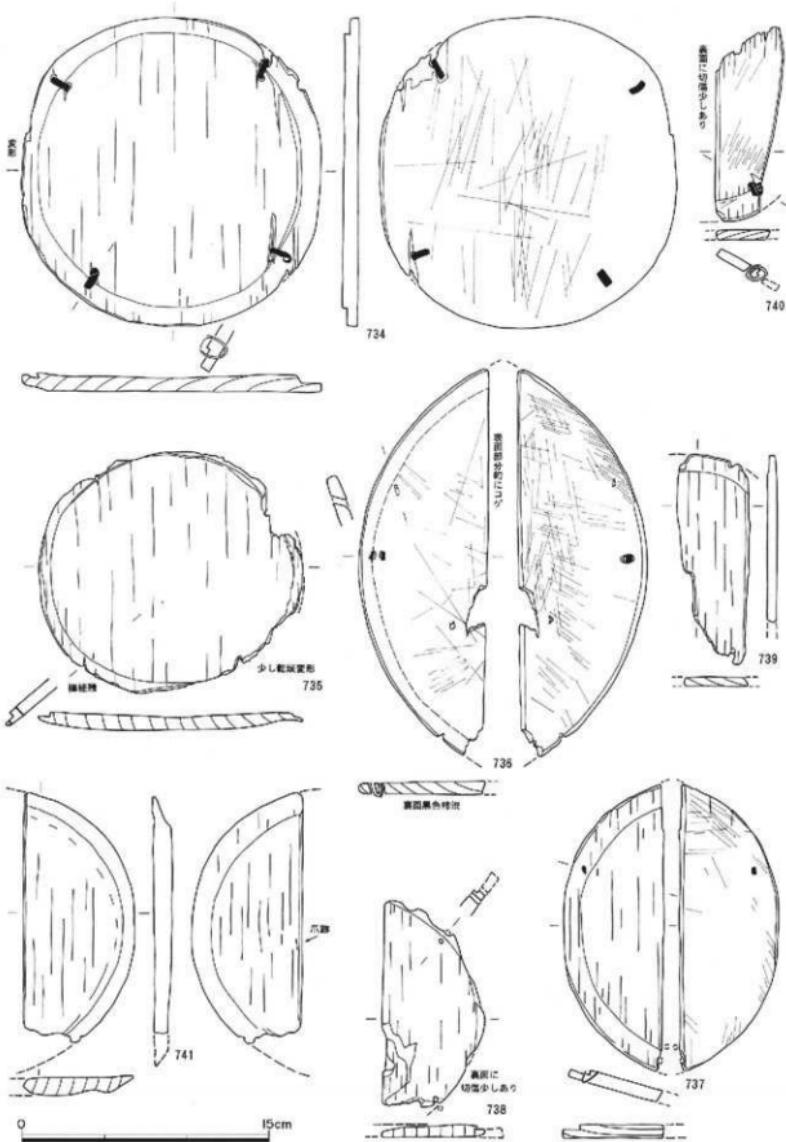
第82図 背負子



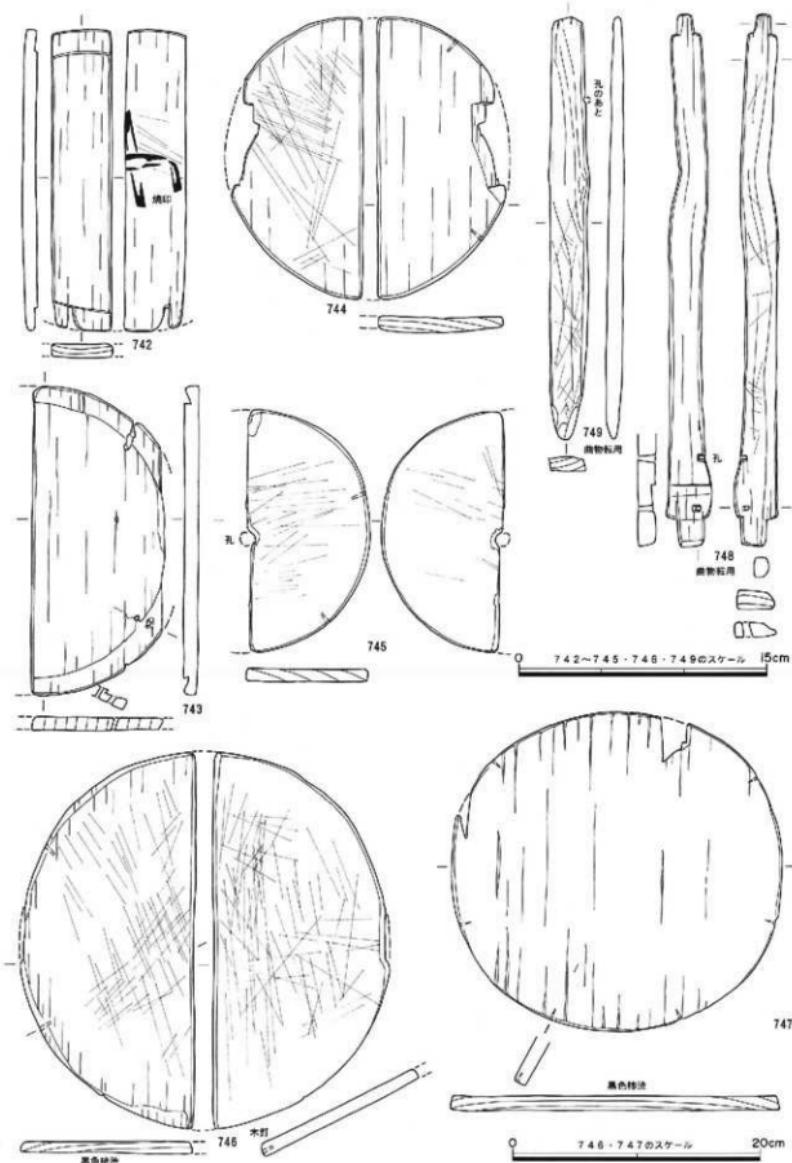
第83図 曲物底板



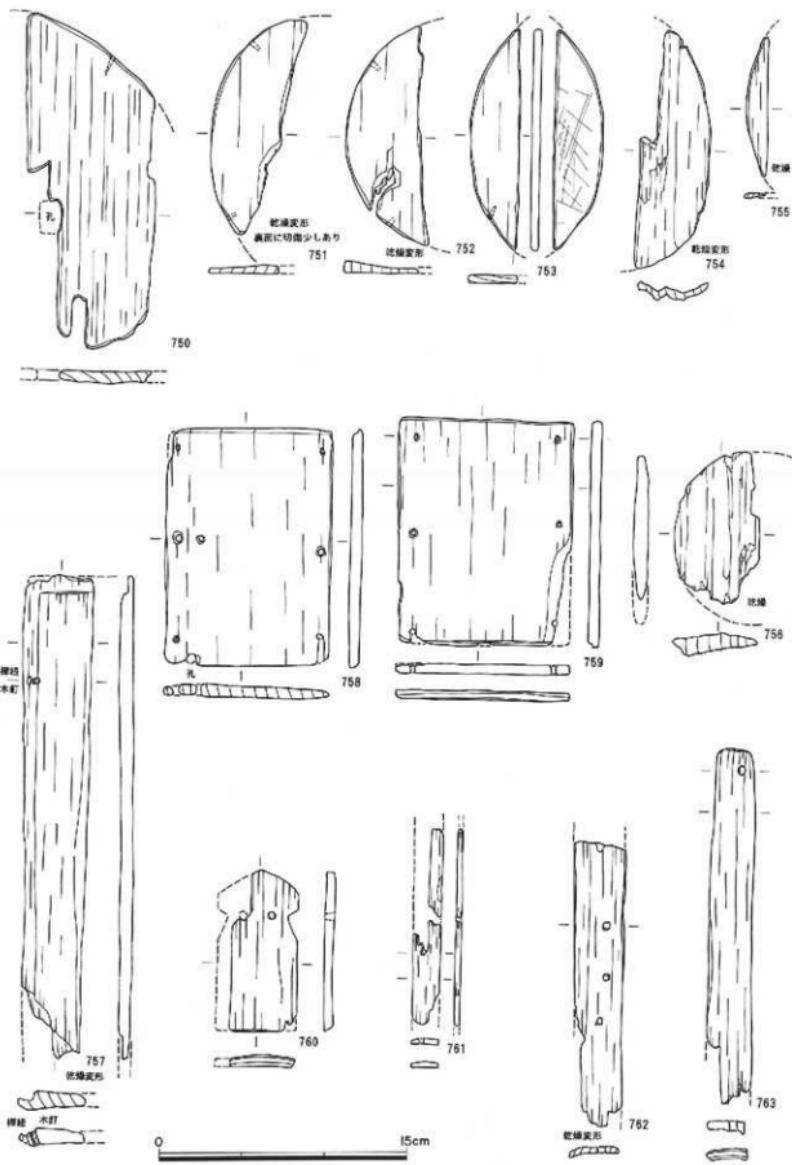
第84図 曲物底板



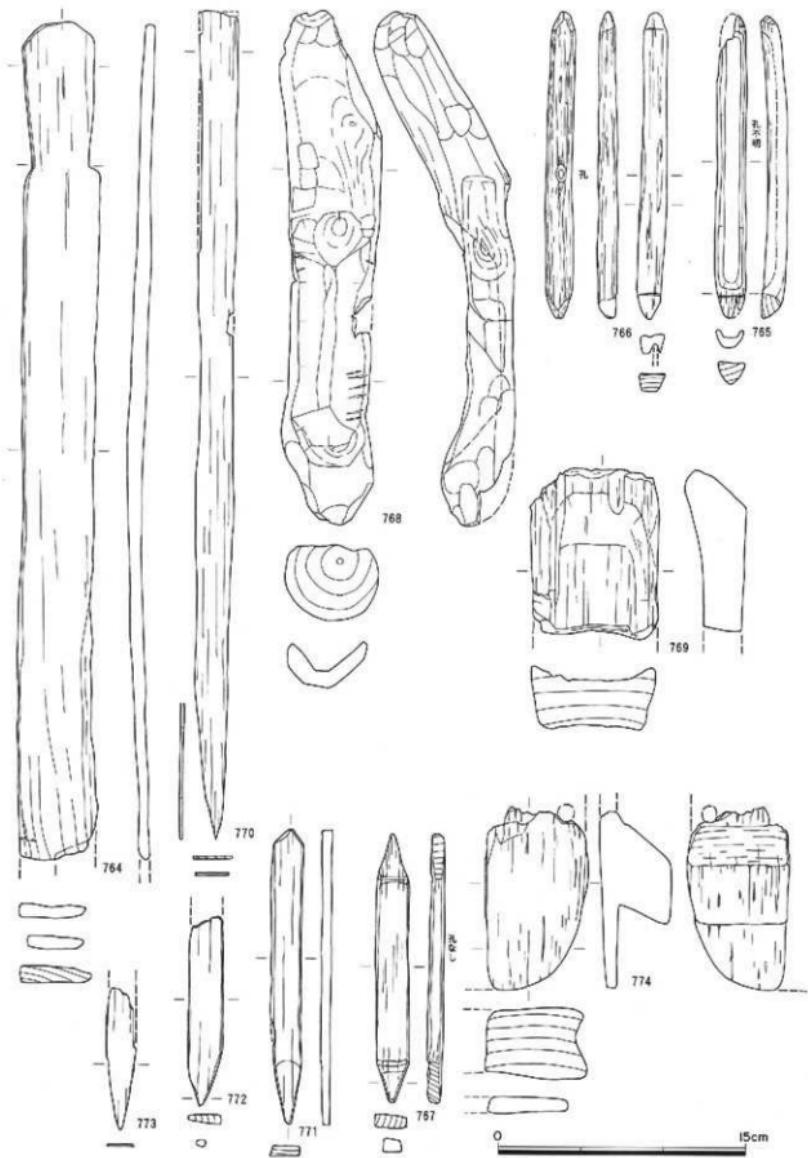
第85図 曲物底板・挽物盤



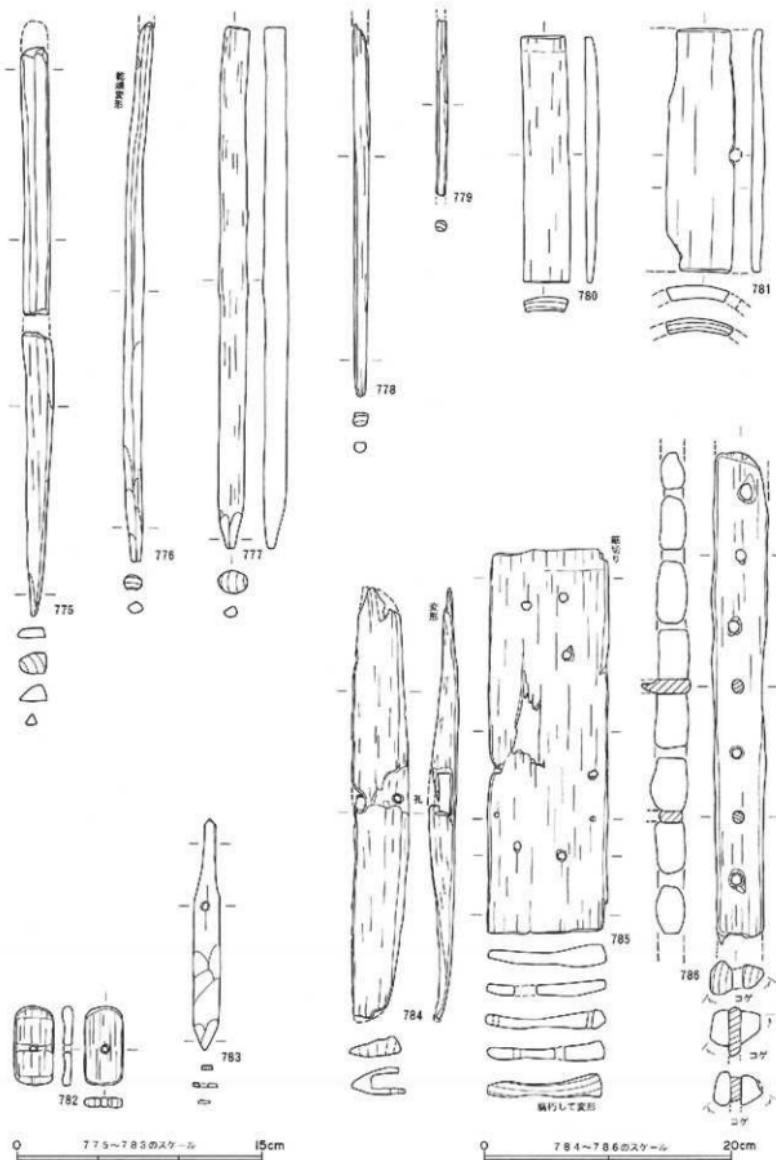
第 86 図 曲物底板・出納板・先端加工板



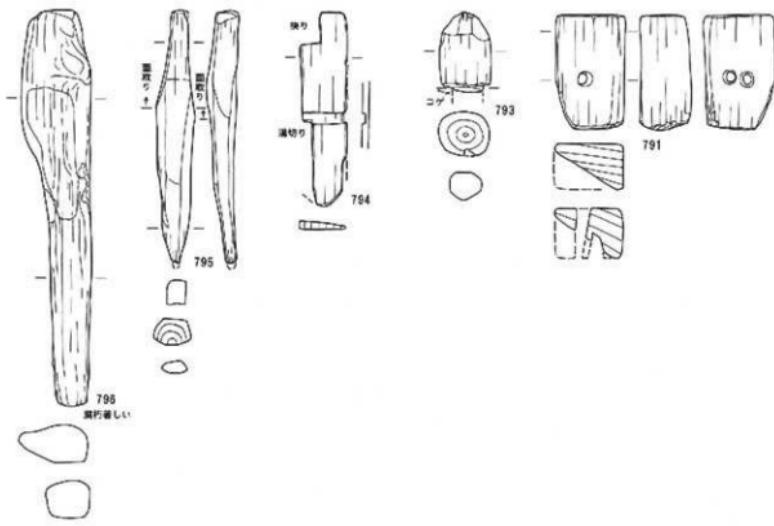
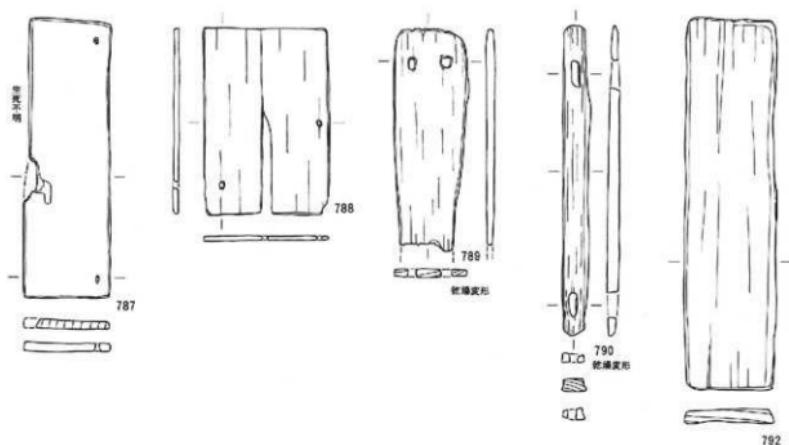
第87図 曲物底板・箱物底板・曲物まわしの側板・有孔板



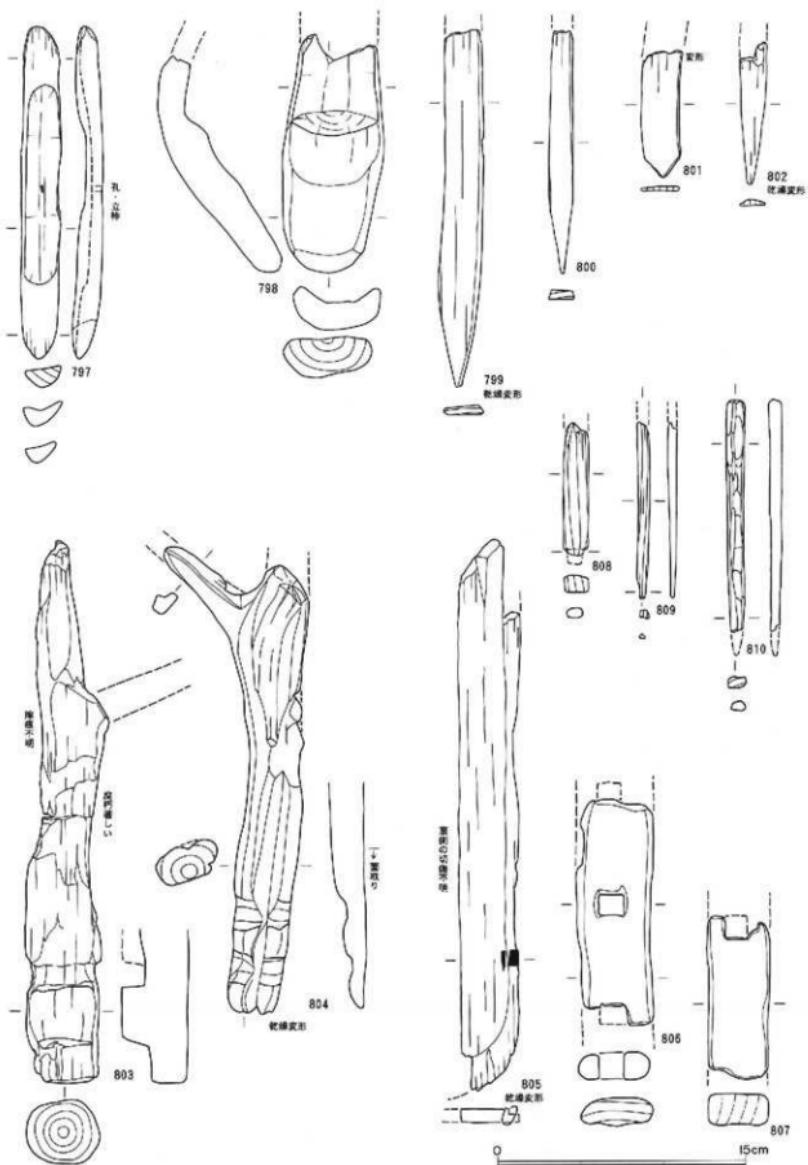
第88図 人形・舟形・木筒材・斎串・下駄



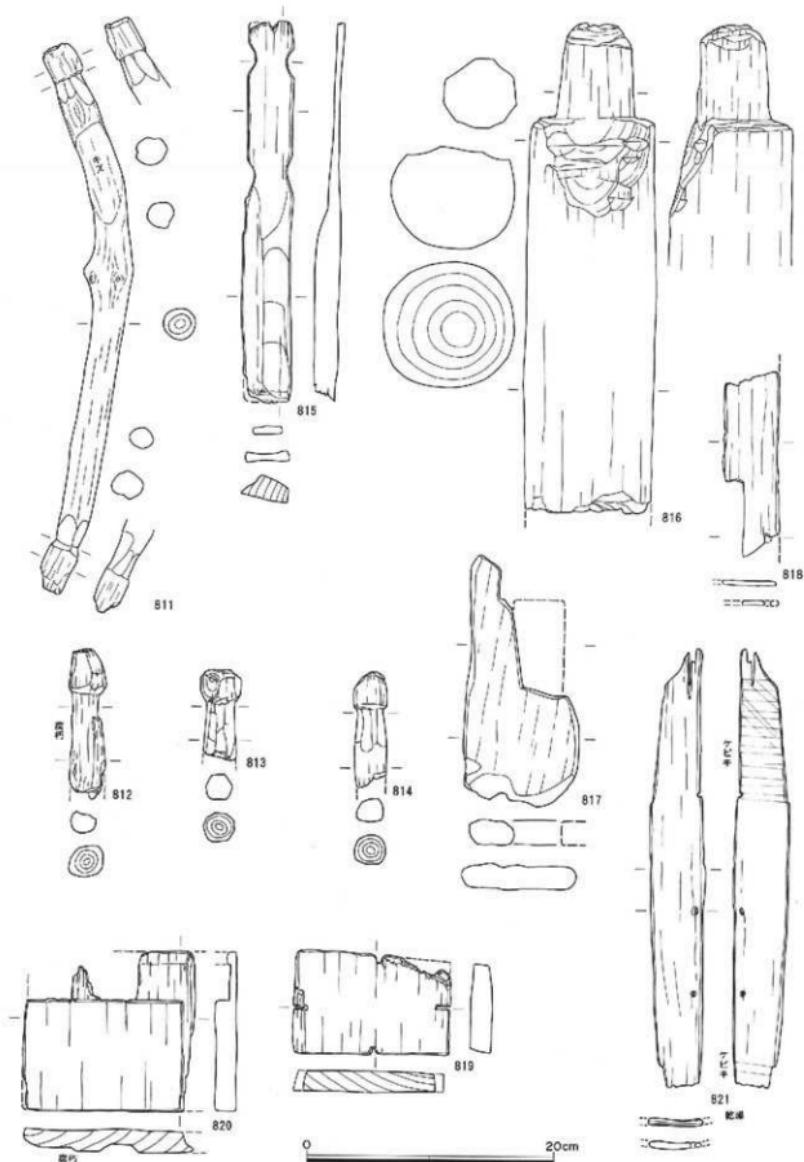
第89図 尖頭棒・先端加工棒・箸・筒状木製品・有孔板・機織具・大足



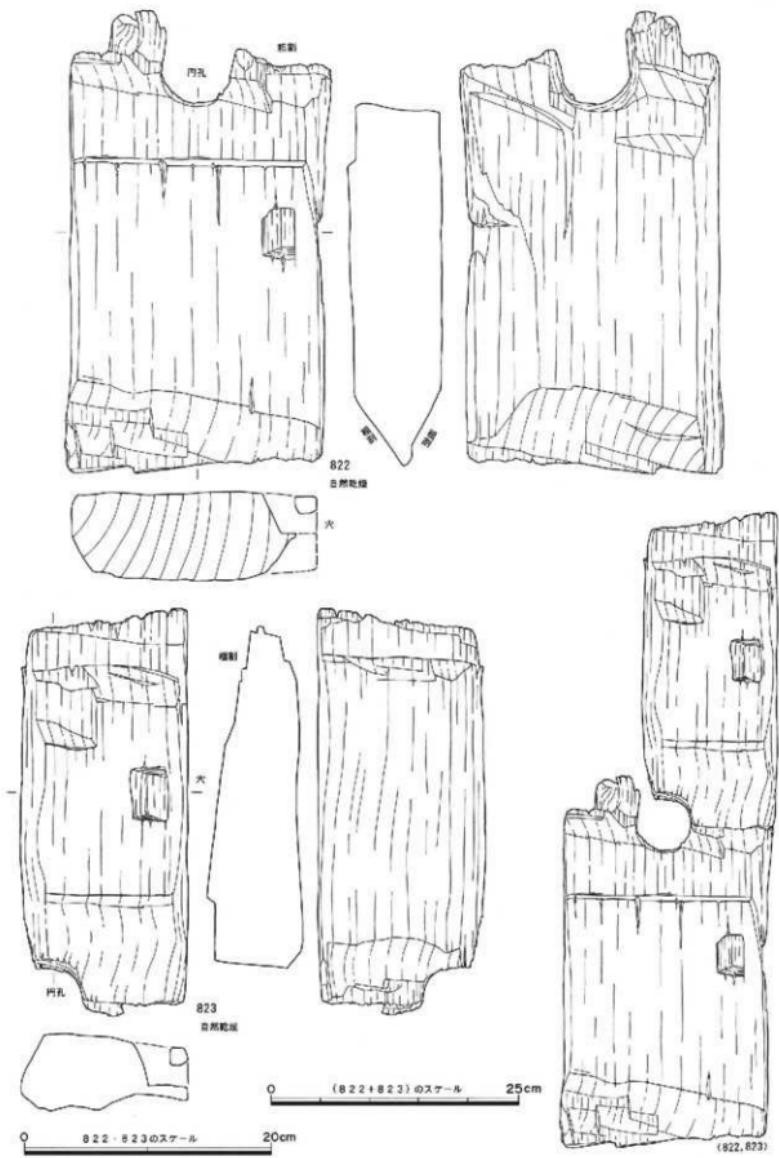
第90図 有孔板・加工板・代搔・鍬



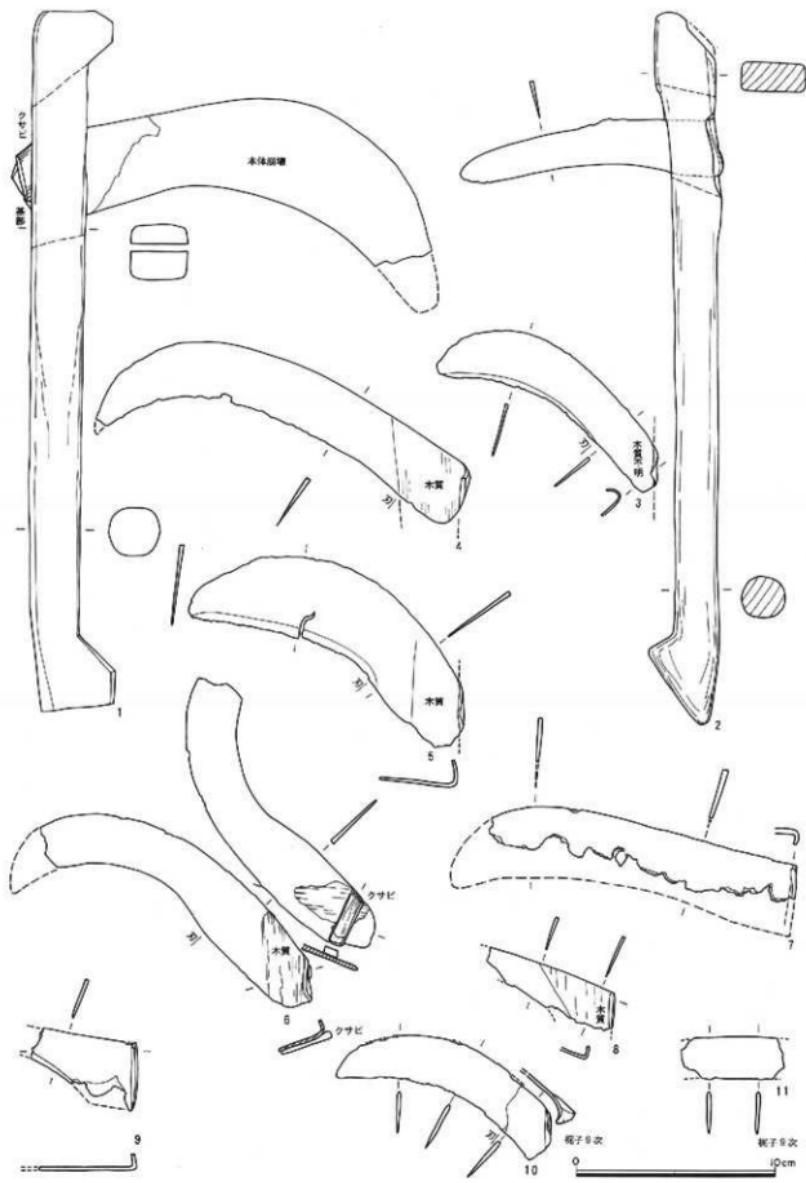
第91図 舟形・簾串・背負子・曲物底板・大足・出納棒・箸



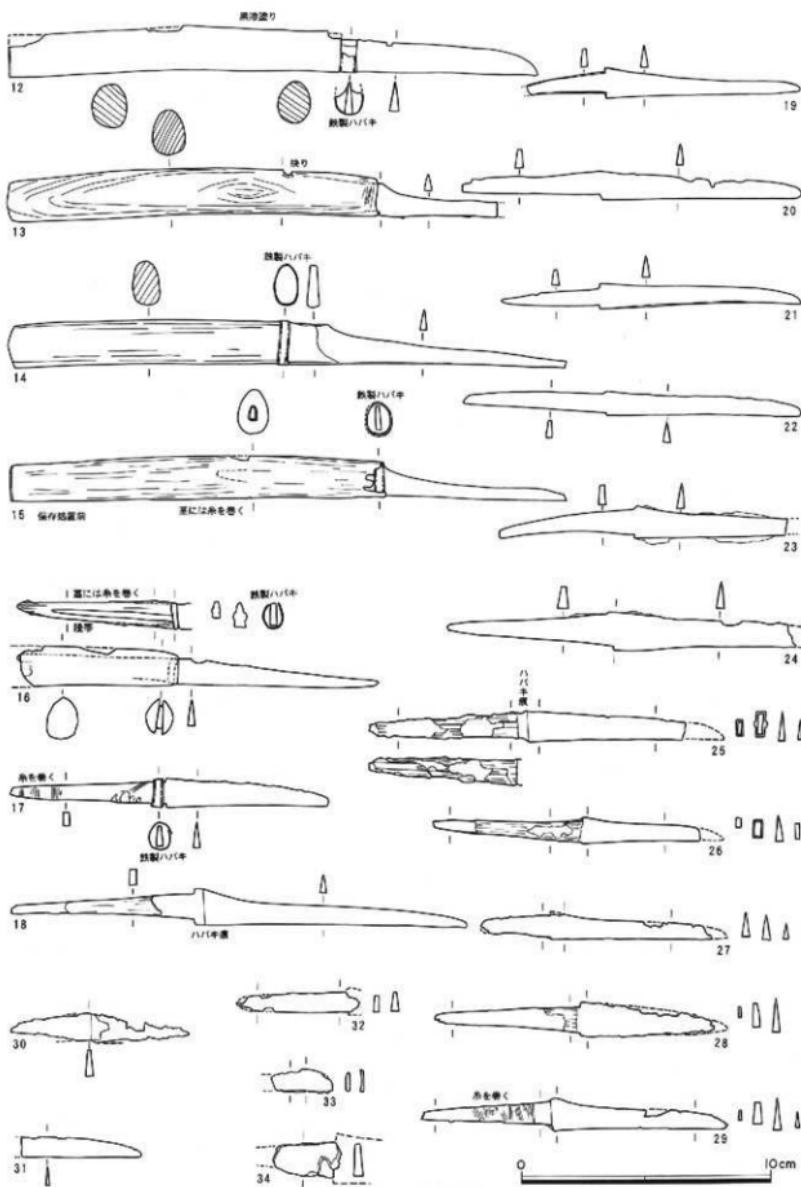
第92図 尖頭棒・有頭棒・建築部材・枘穴材・曲物まわしの側板・曲物側板・加工板

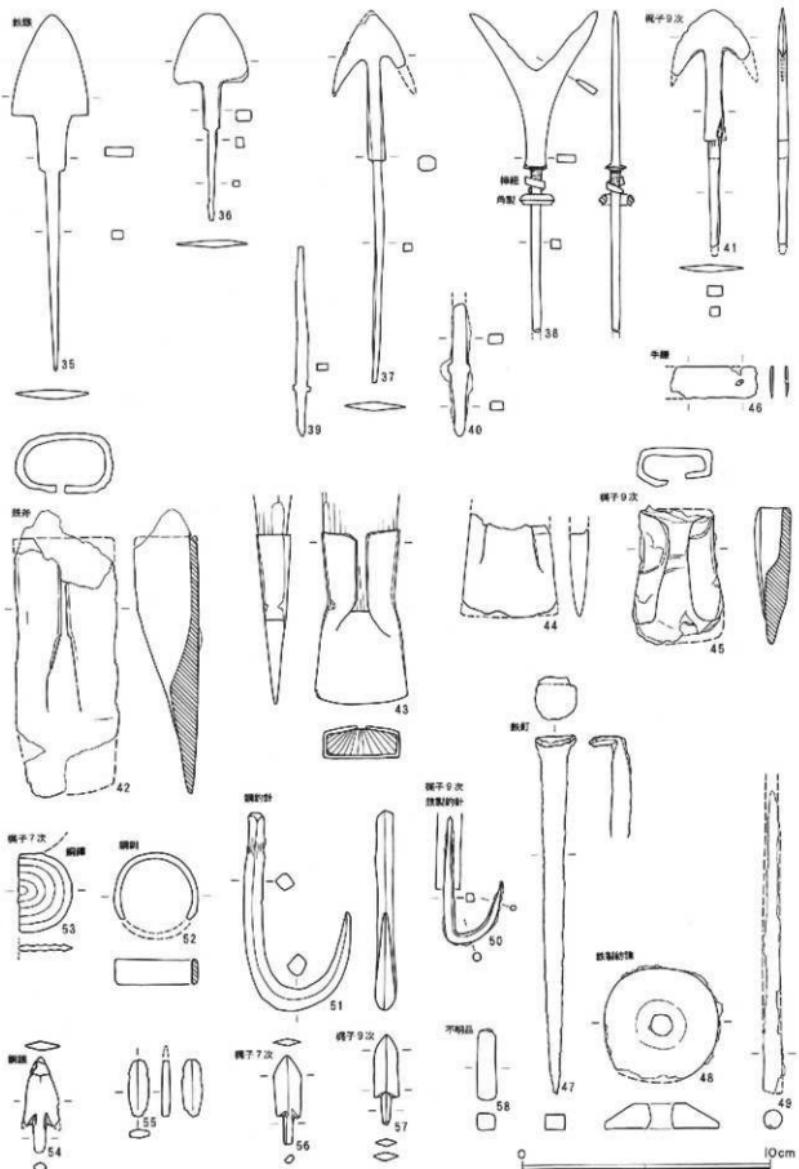


第93図 磁板（建築部材）

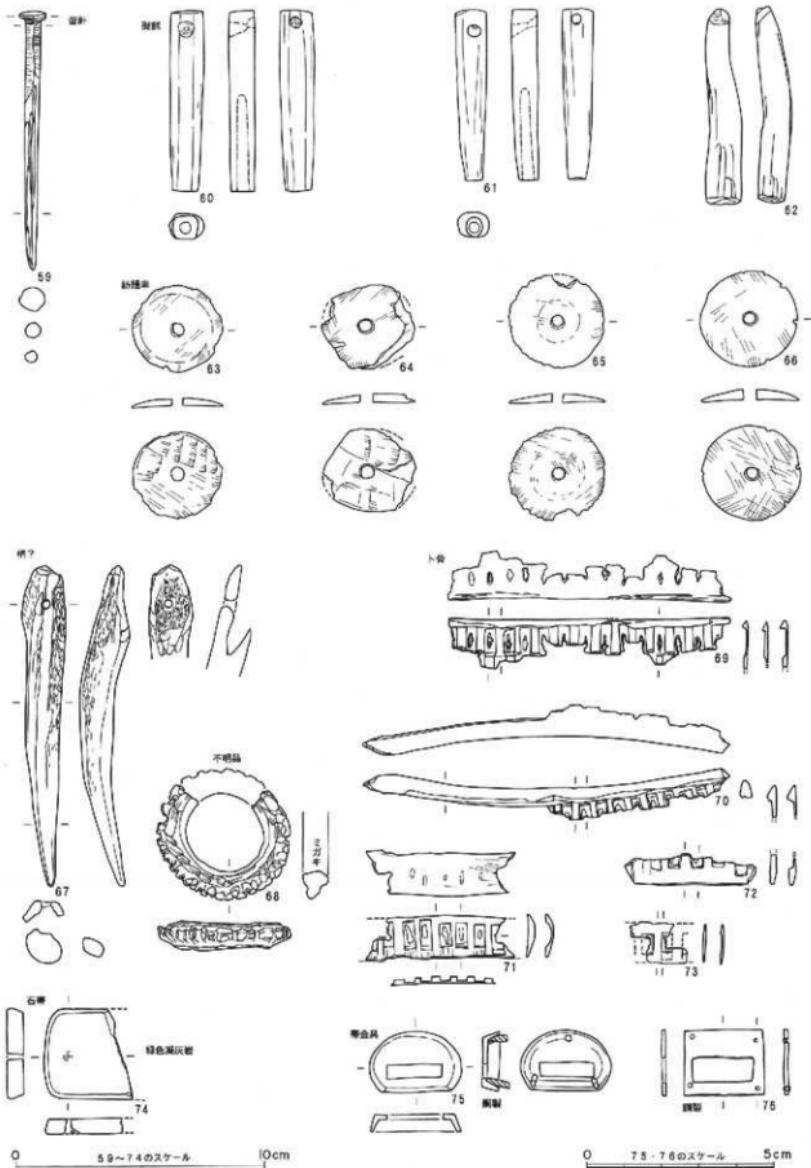


第94図 鉄鎌

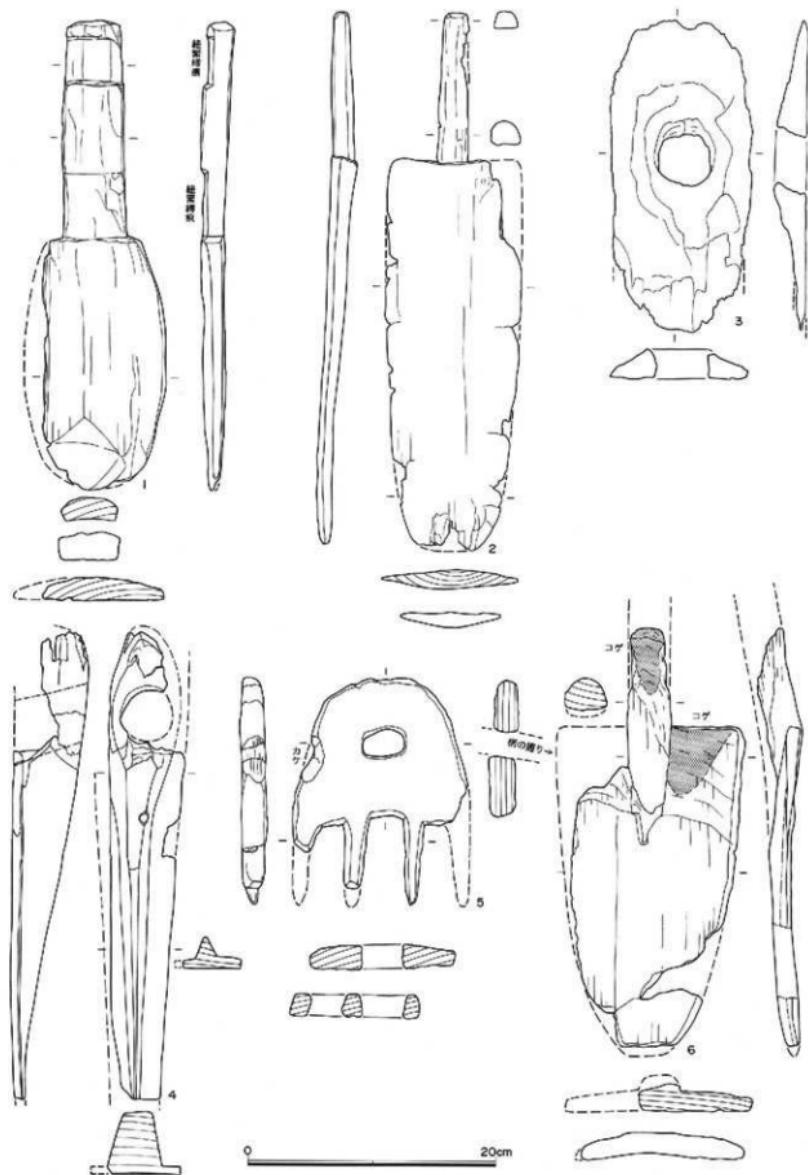




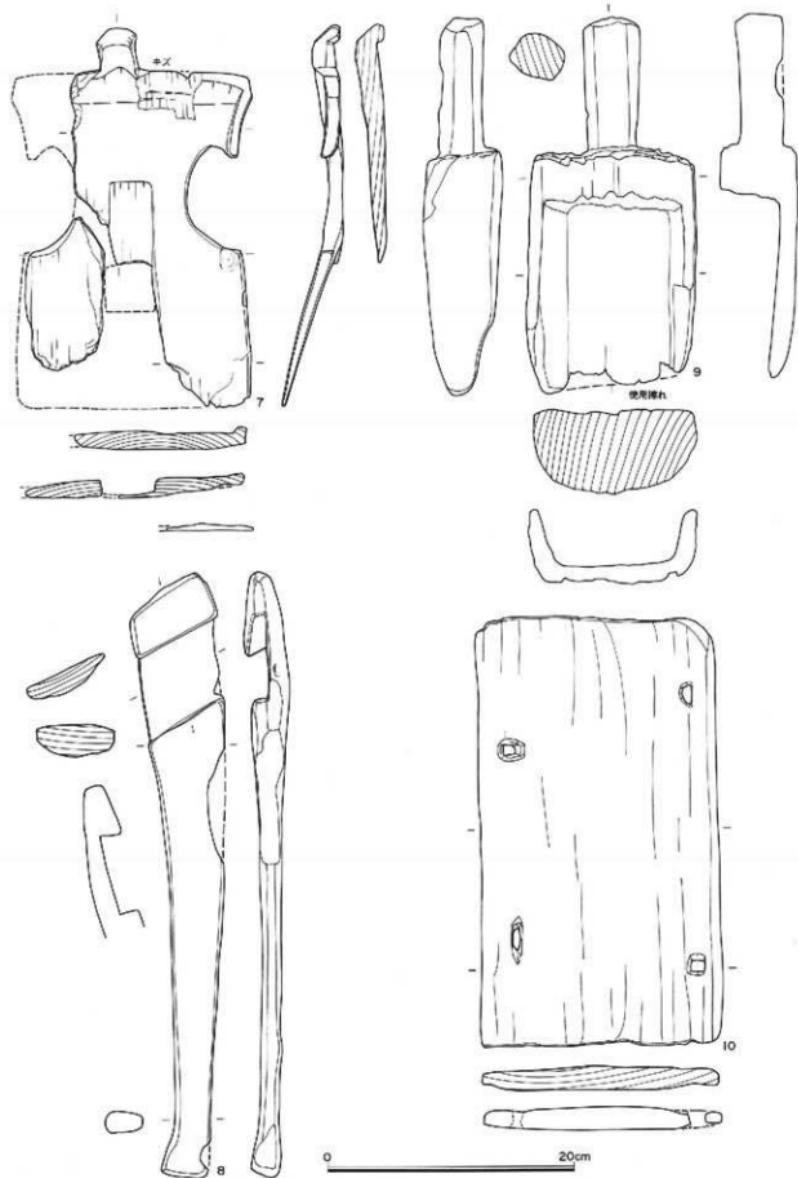
第96図 鉄鎌・鉄斧・手鎌・鉄釘・紡錘車・釣針・銅鏡・銅鐸飾耳・銅鎌



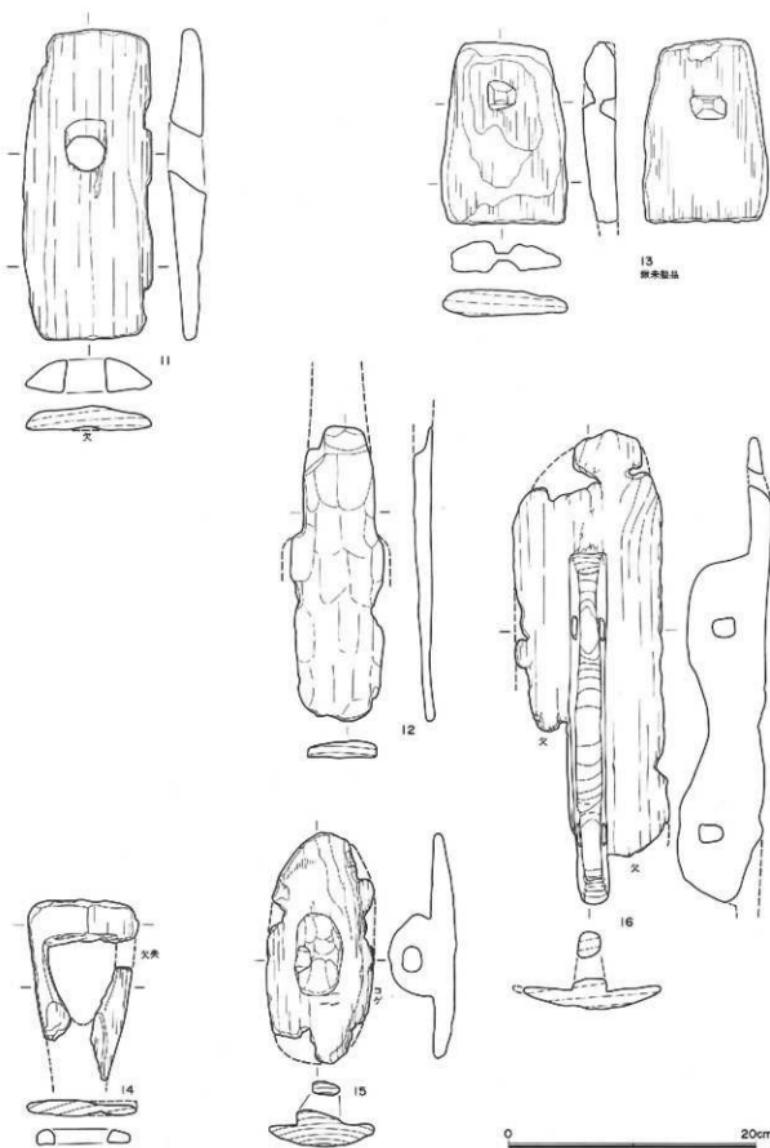
第97図 留針・擬針・紡錘車・小刀柄・鉗状製品・卜骨・石帶・銅製帶金具



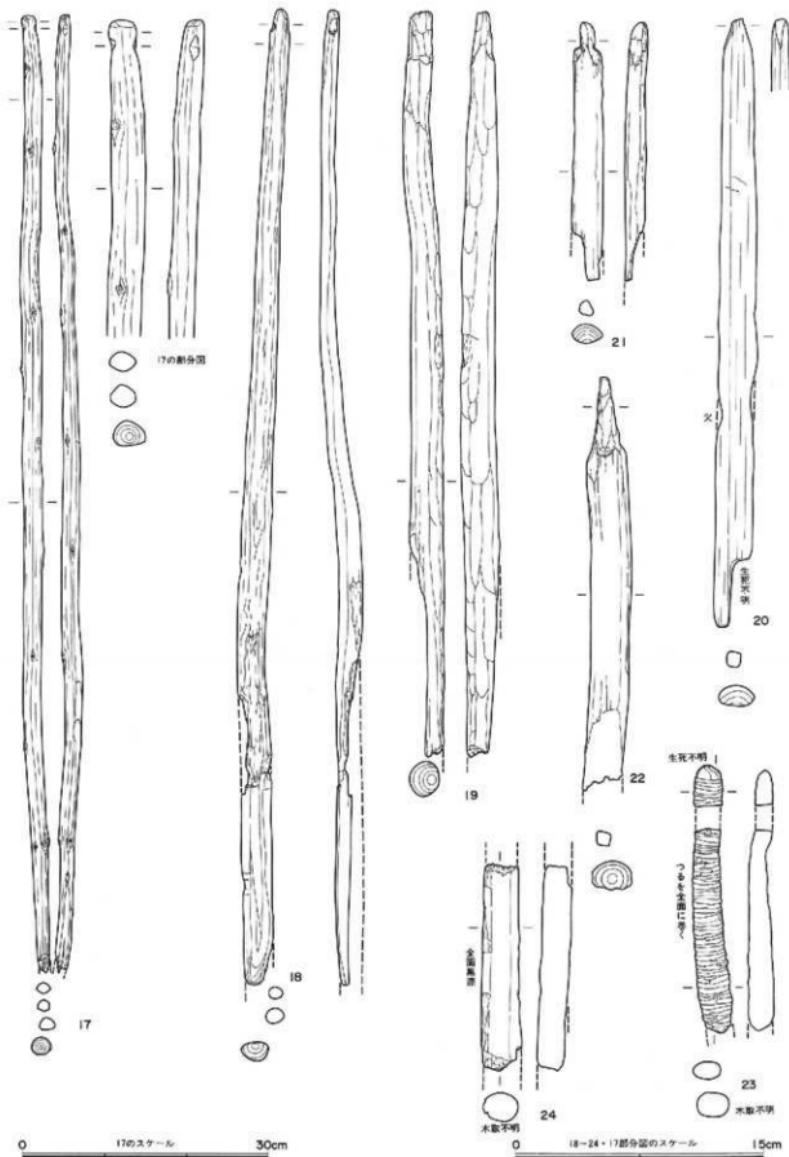
第98図 鉤・柄振・鎌



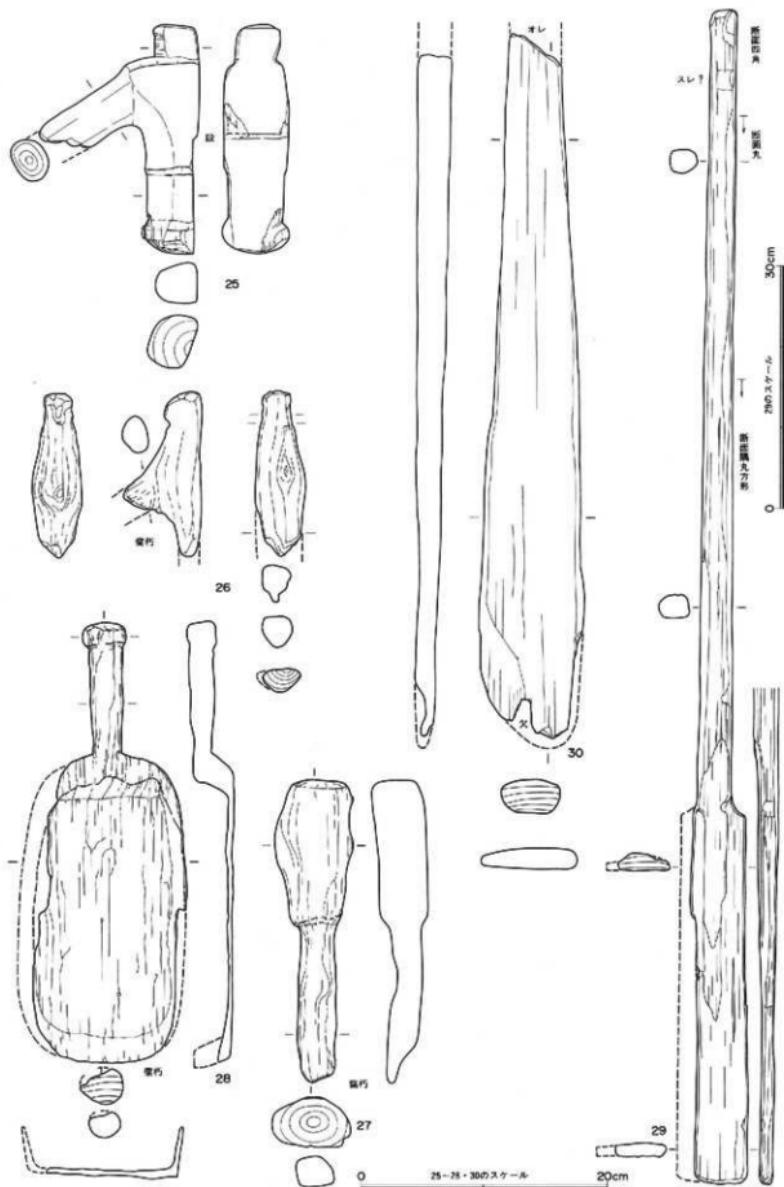
第99図 鋤・鎌柄・アカカキ・田下駄



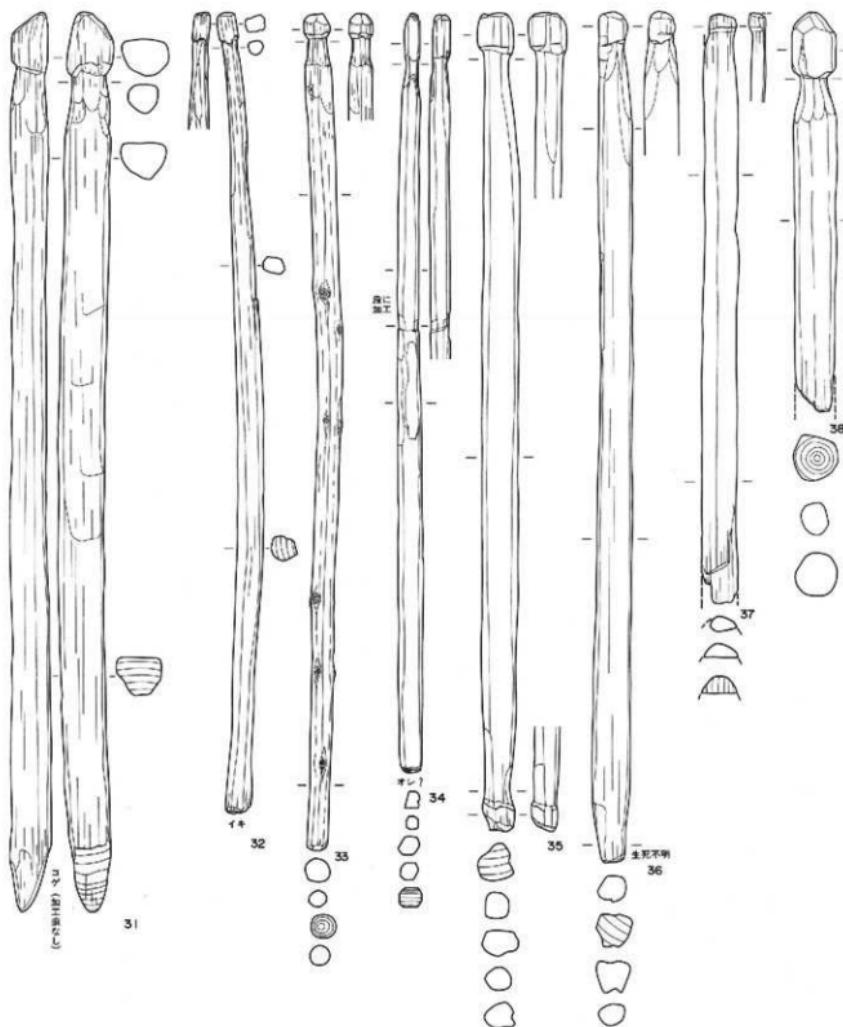
第100図 鍬・鋤・塗錆・そり



第101図 丸木弓・加工棒



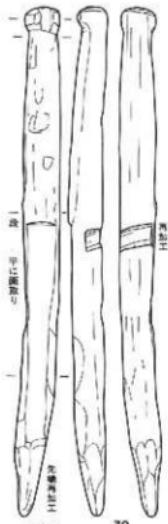
第102図 鋏柄・横槌・槽・櫂



0 31-34のスケール 30cm

0 35-38のスケール 20cm

第103図 有頭棒



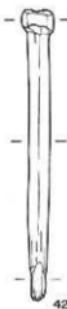
39



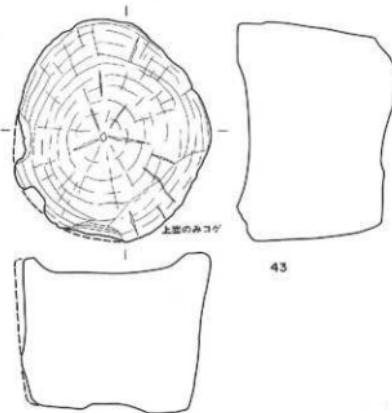
40



41



42



43

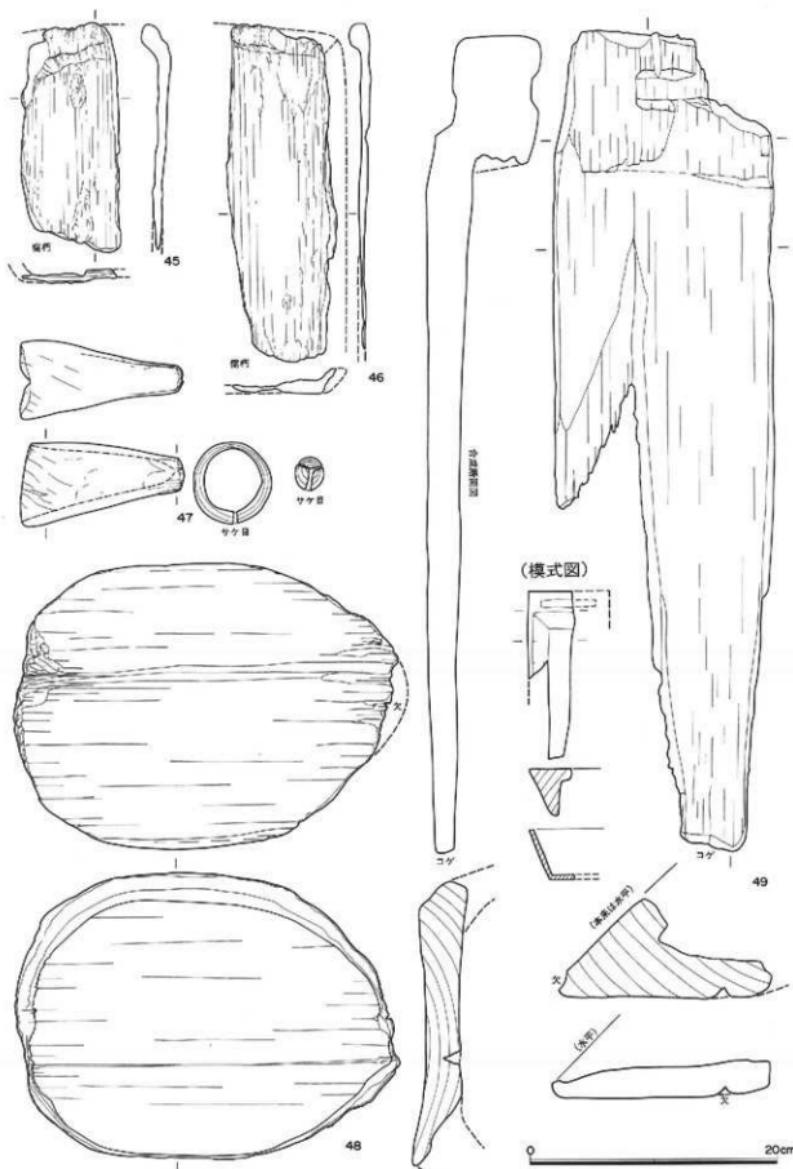


44

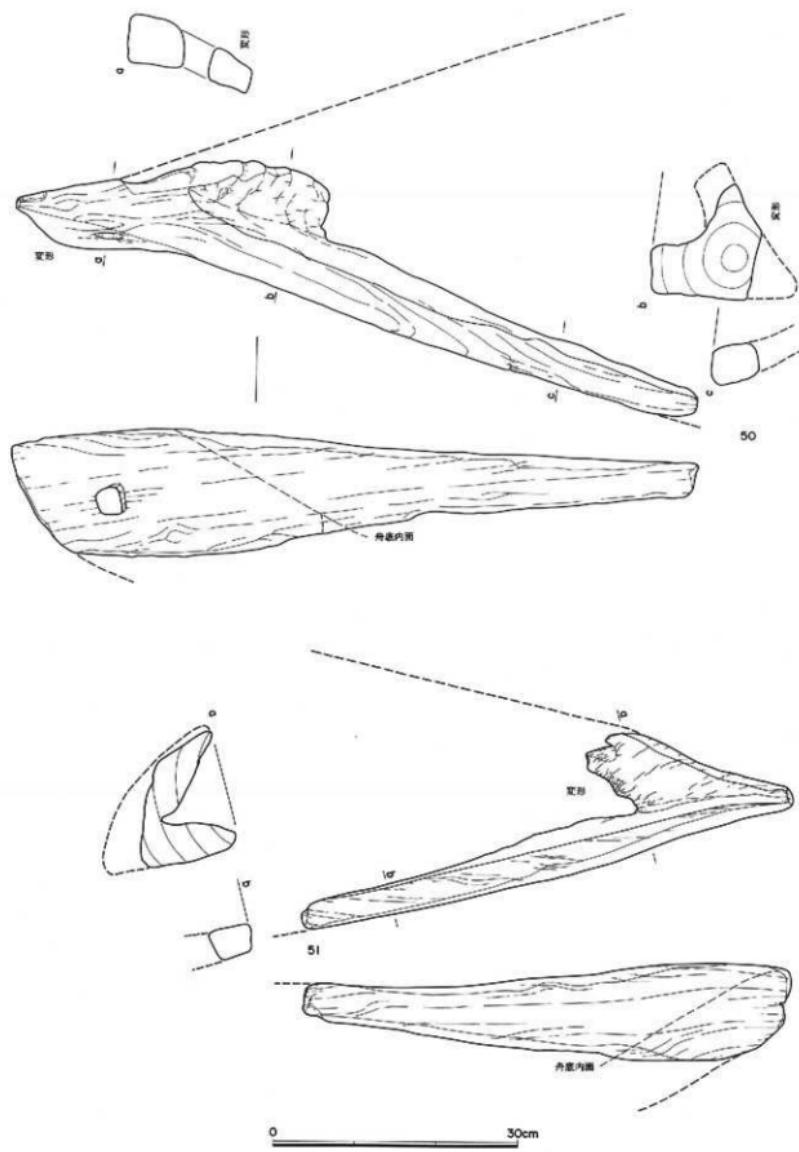
0 41・42のスケール 15cm

0 39-40-43-44のスケール 20cm

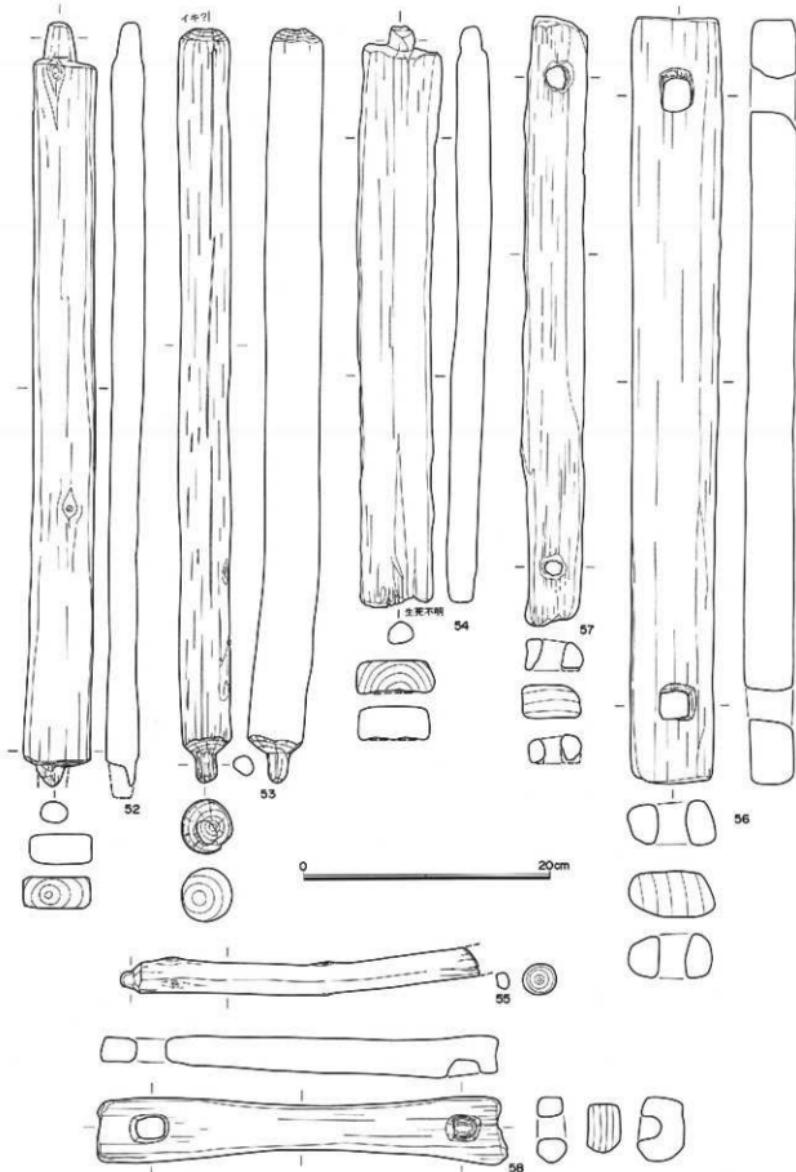
第104図 機織具・有頭棒・白底・建築部材



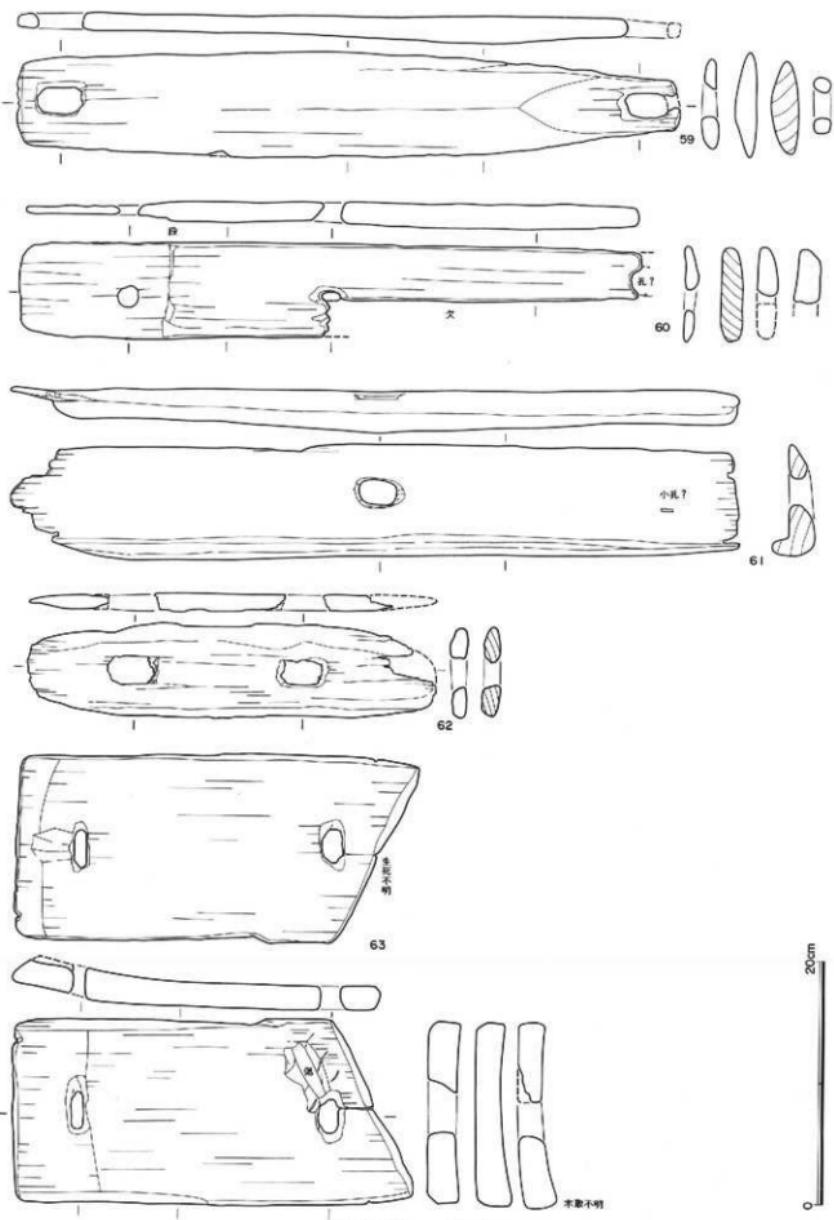
第105図 槽・片口鉢・自然遺物



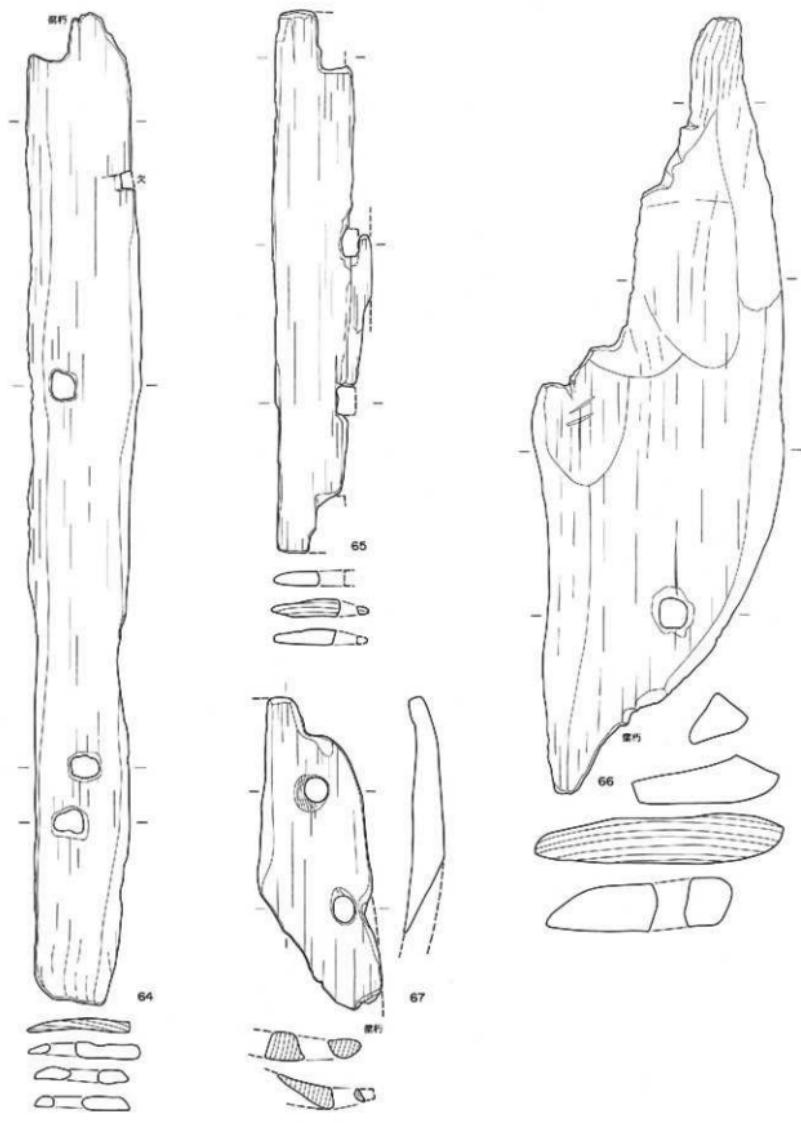
第106図 丸木舟



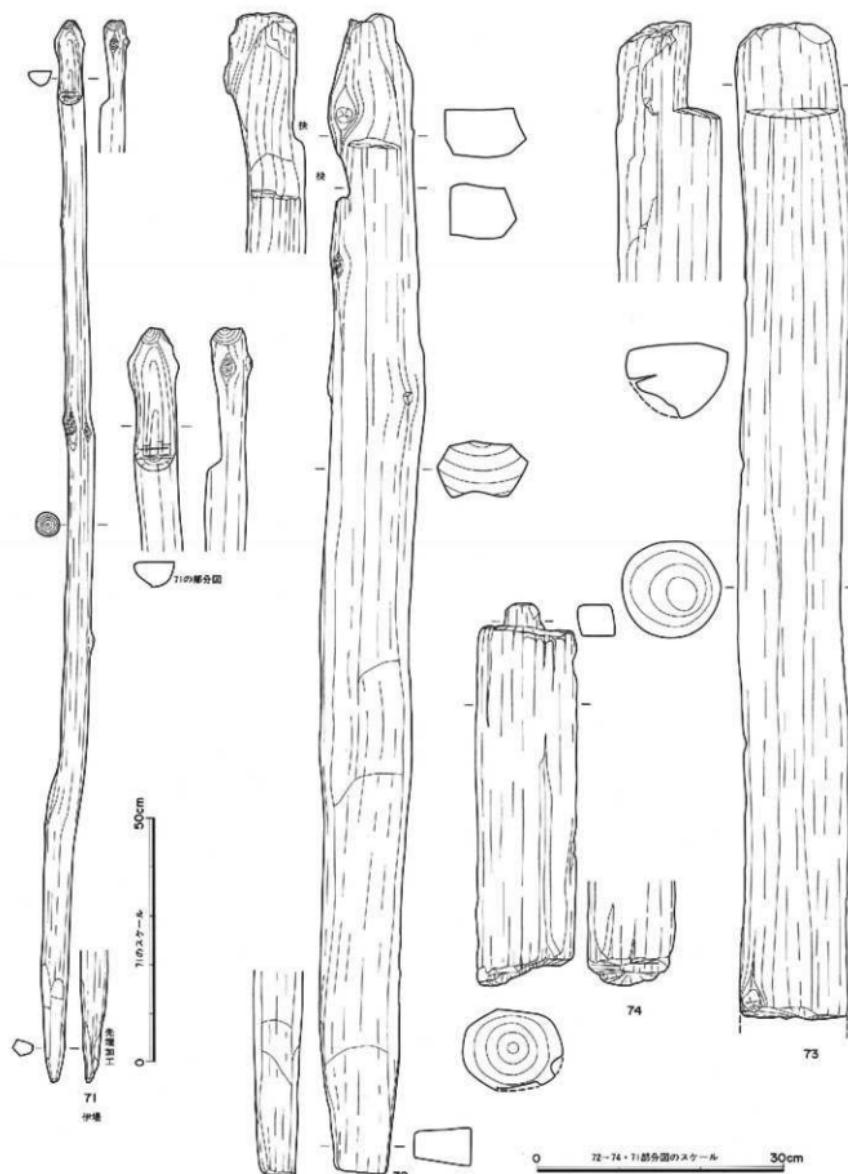
第107図 納材



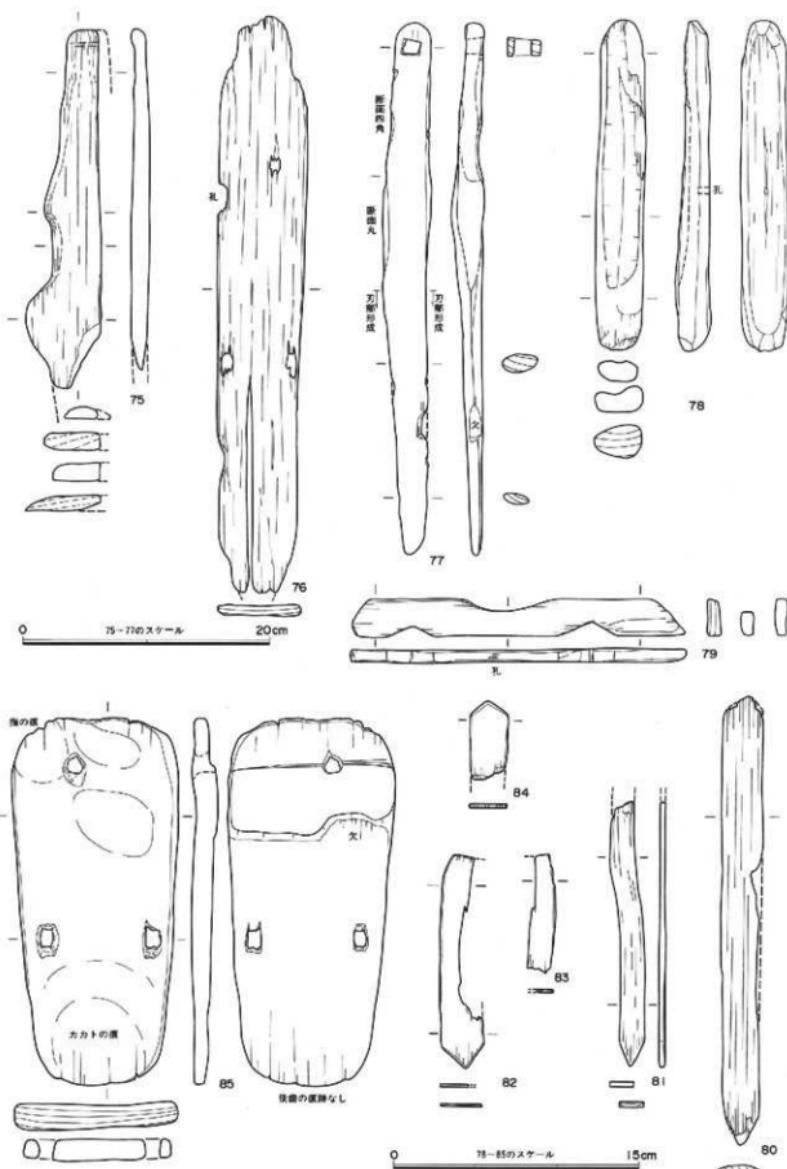
第 108 図 有孔板



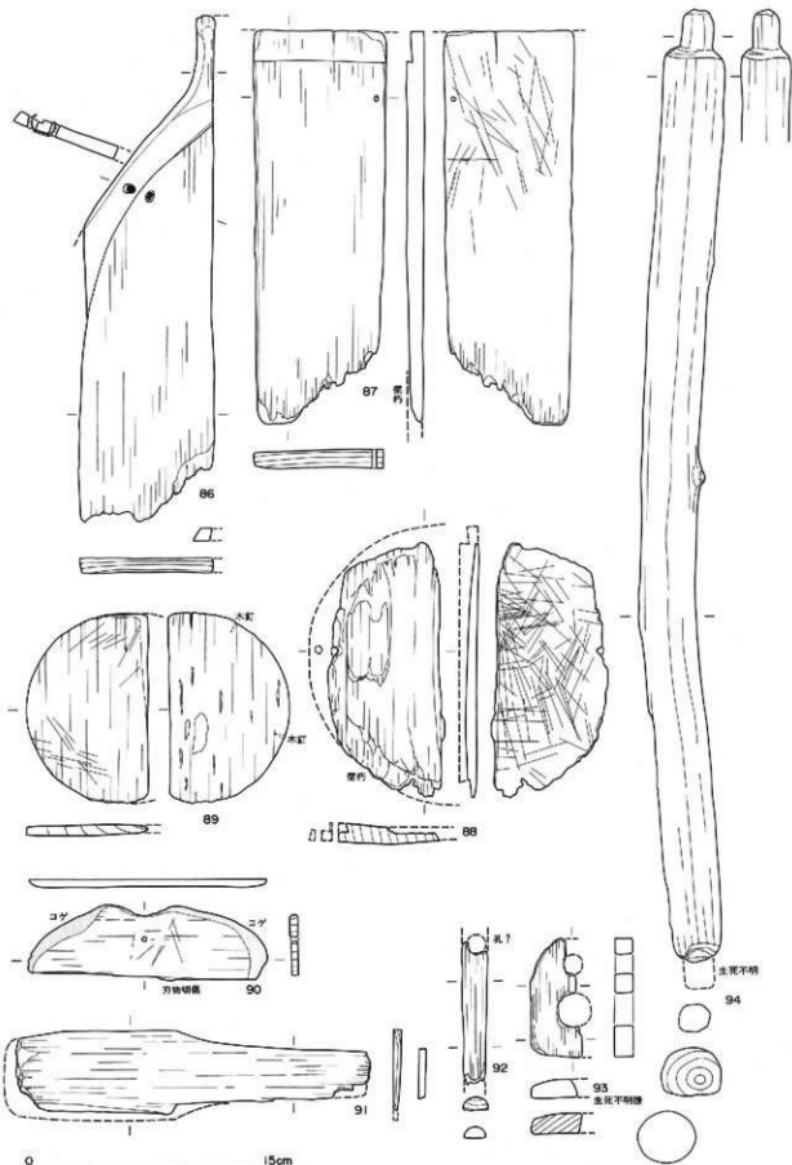
第 109 図 有孔板



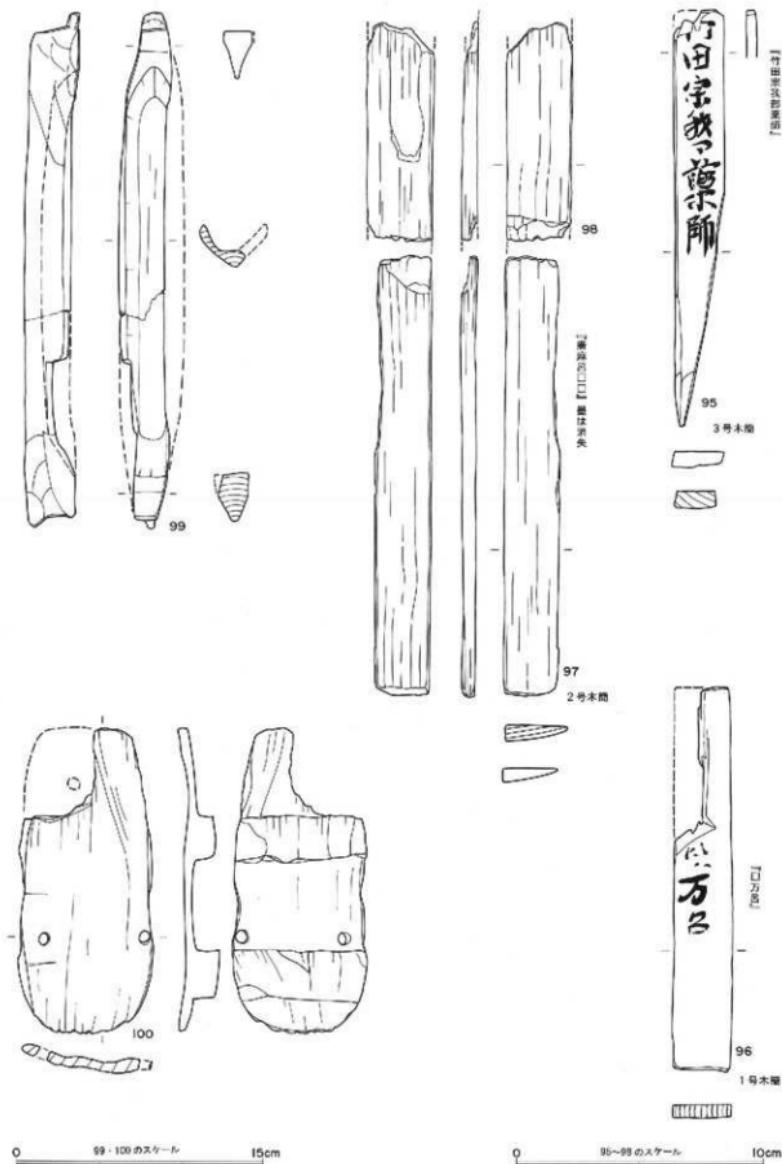
第111図 建築部材



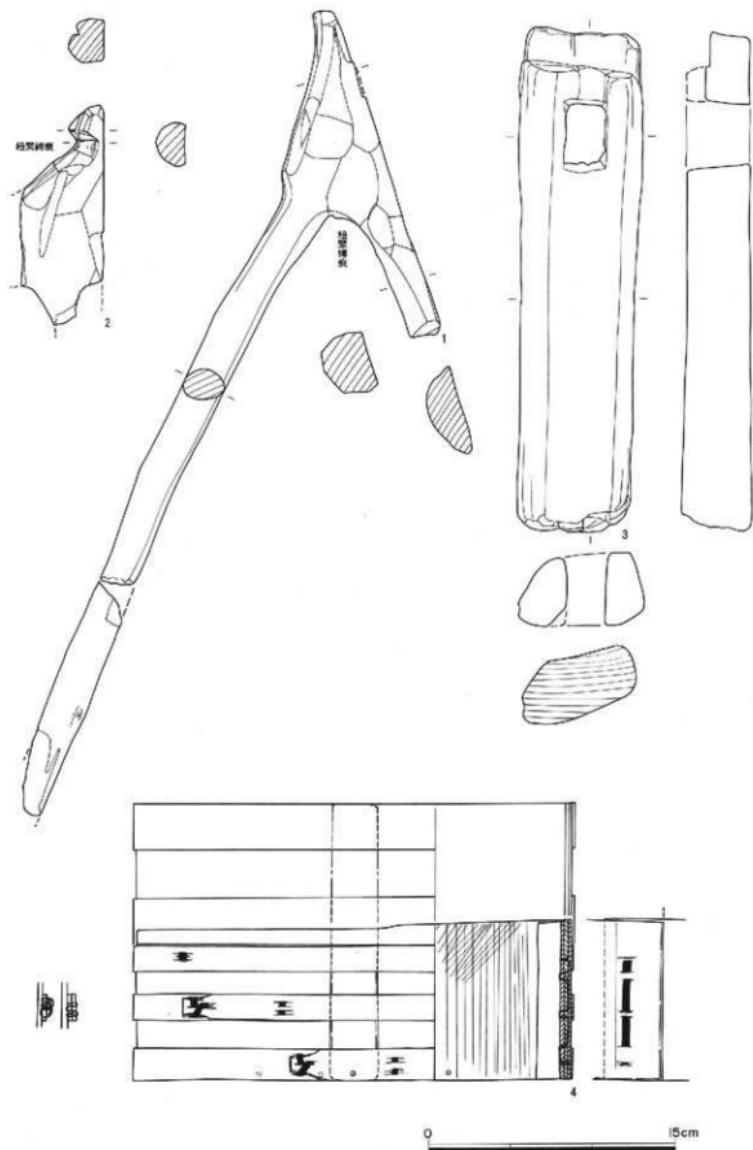
第112図 鍔身・大足・馬鍔・舟形・馬形・斎串・木簡材・下駄他



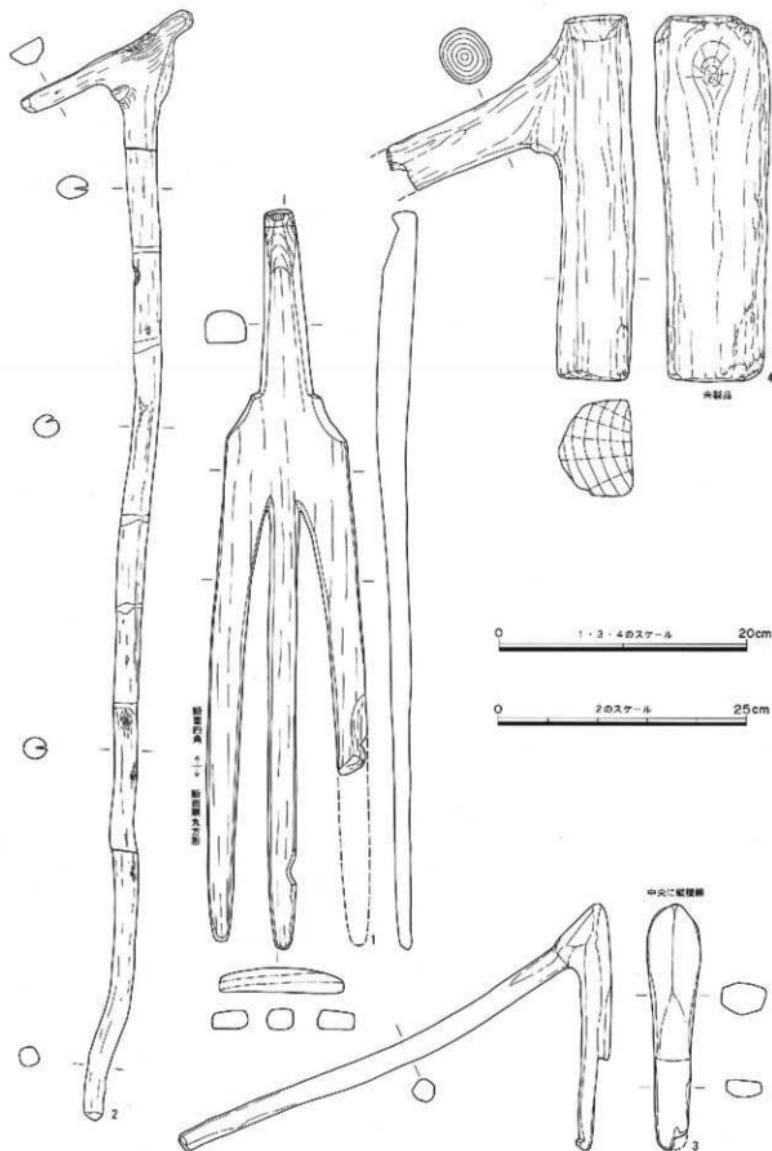
第113図 曲物底板・杓文字・有孔棒・有孔板・出枘棒



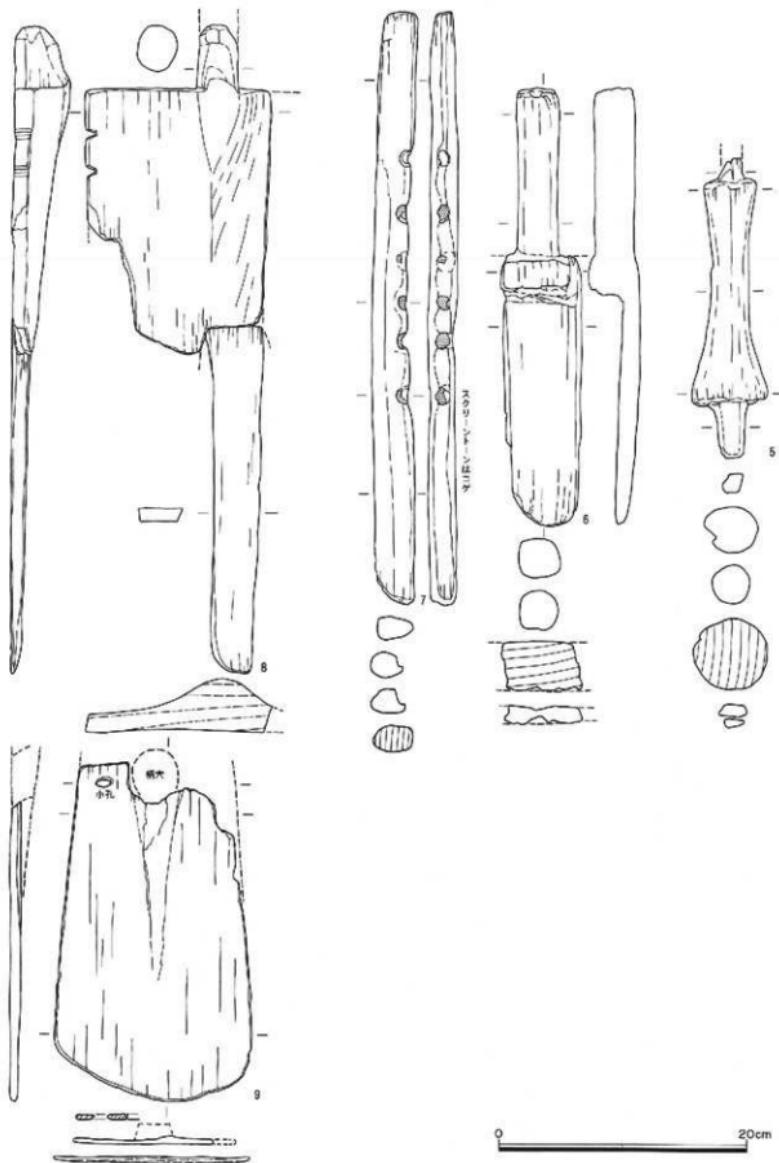
第114図 木簡・舟形・下駄



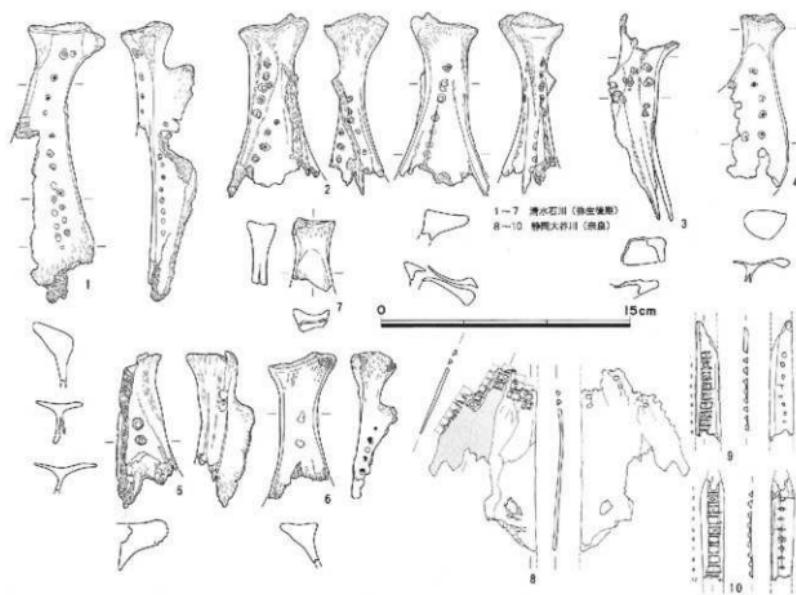
第115図 鍔柄・枘穴板・曲物側板



第116図 三本鍔・鍔柄・斧柄



第117図 高杯・アカカキ・火鑓臼・鋤・鍔



第118図 ト骨参考資料

写真図版



伊場 S=1/2



S=1/3



梯子 9



伊場大溝出土人面墨画集成

写 真 図 版 目 次

写真図版 1 ~ 4	伊場遺跡出土木甲（カラー写真）
写真図版 5 ~ 57	伊場遺跡出土木製品（遺物編 1 に写真が掲載されていないもの）
写真図版 58 ~ 61A	伊場遺跡出土金属器
写真図版 61B ~ 62	伊場遺跡出土骨角器
写真図版 63 ~ 78	梶子遺跡 6 次調査出土木製品（弥生時代中期）
写真図版 79 ~ 82	梶子遺跡 6 次調査出土木製品（奈良時代）
写真図版 83	梶子遺跡 2 次調査出土舟形木製品他
写真図版 84	三和町・鹿小路遺跡出土木製品
写真図版 85	岡ノ平遺跡出土木製品
写真図版 86	岡ノ平・石川遺跡出土木製品

写真図版 1 伊場遺跡



木甲（胸当て）

出土当時

写真図版 2 伊場遺跡



木甲（背当て）



出土当時

写真図版 3 伊場遺跡



木甲（胸当て・背当て）

出土当時

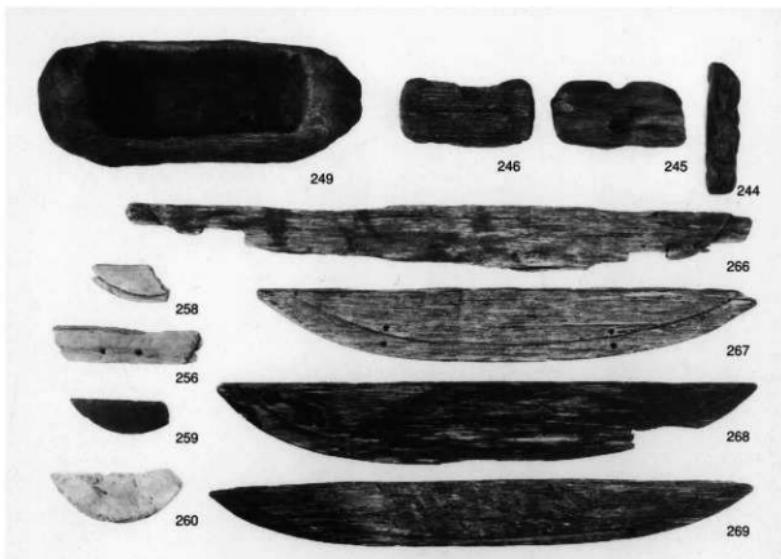
写真図版 4 伊場遺跡



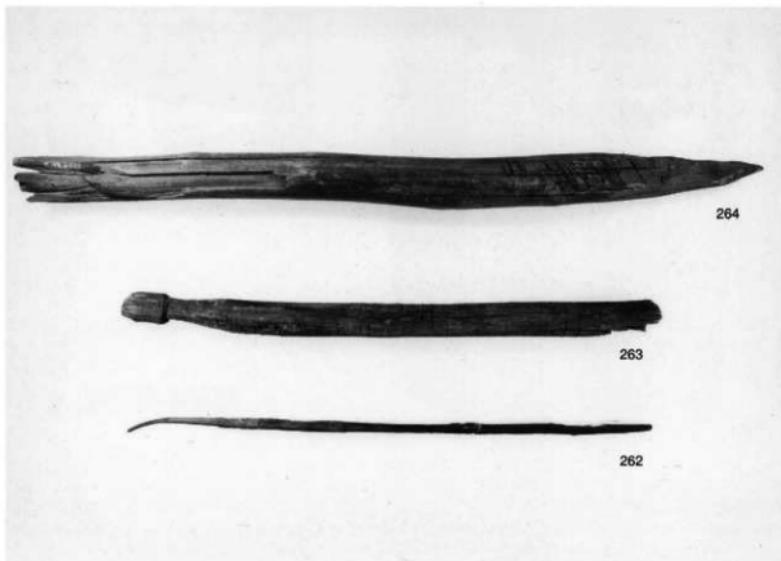
木甲（胸当て・背当て）

保存処置後（現状）

写真図版 5 伊場遺跡



A

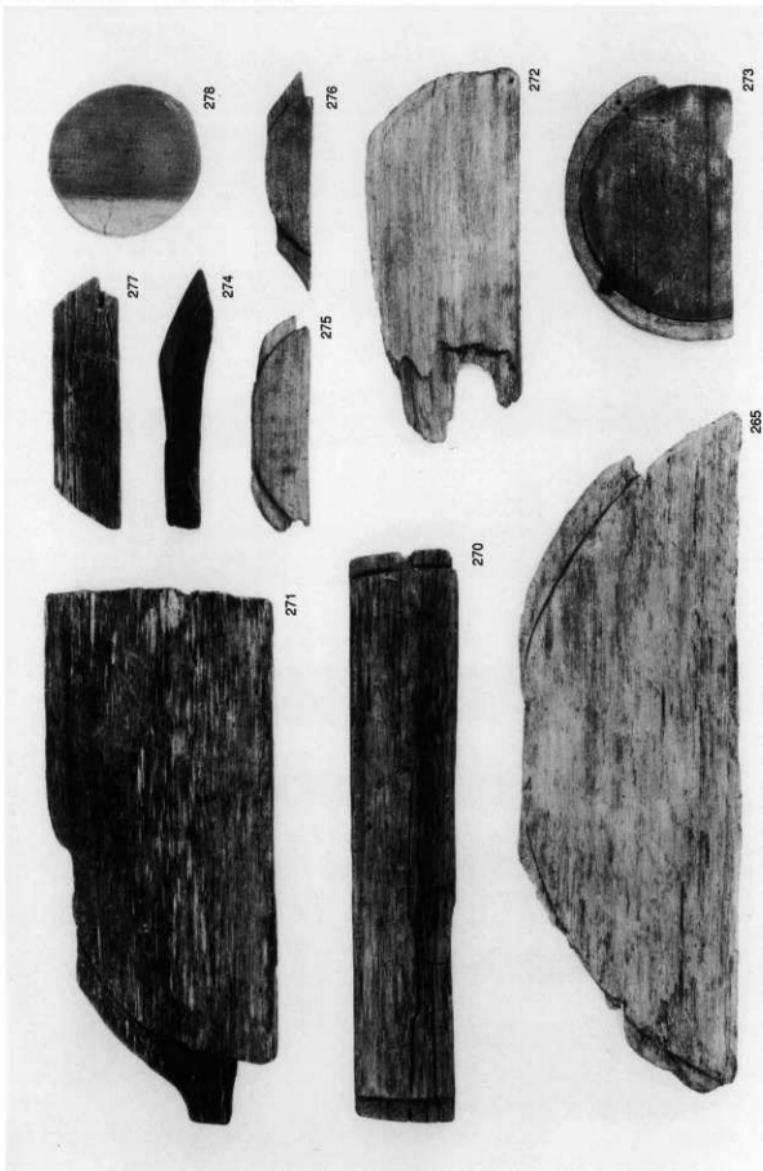


B

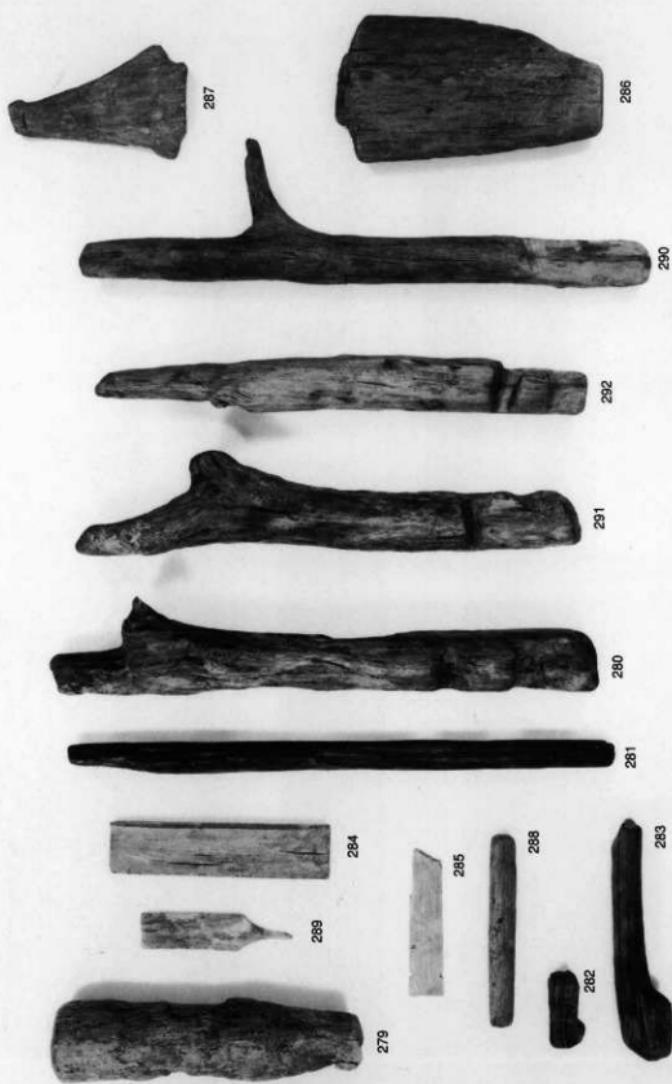
写真図版 6 伊場遺跡



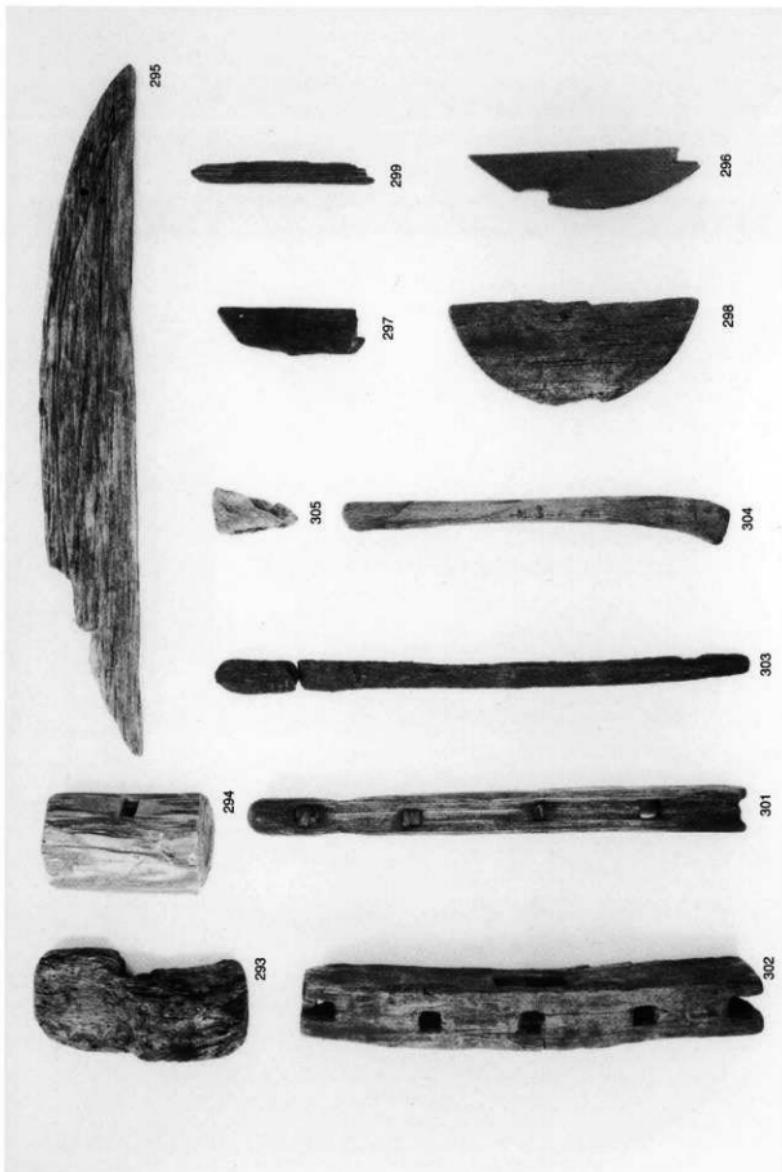
写真図版 7 伊場遺跡



写真図版 8 伊場遺跡



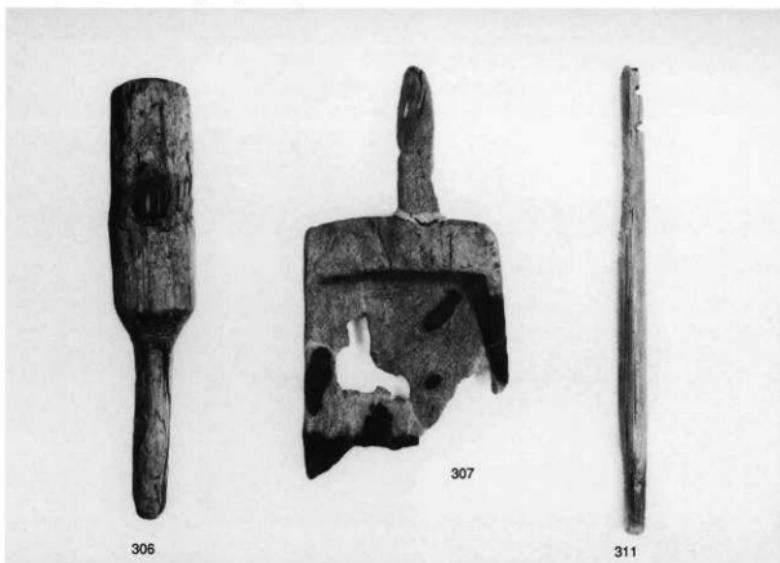
写真図版 9 伊場遺跡



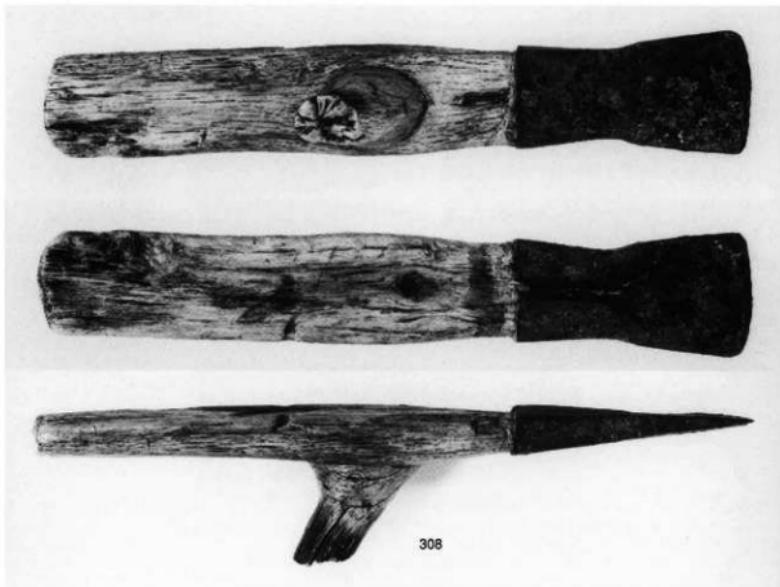
写真図版 10 伊場遺跡



写真図版 11 伊場遺跡



A



B

写真図版 12 伊場遺跡



316



317



318

A



316



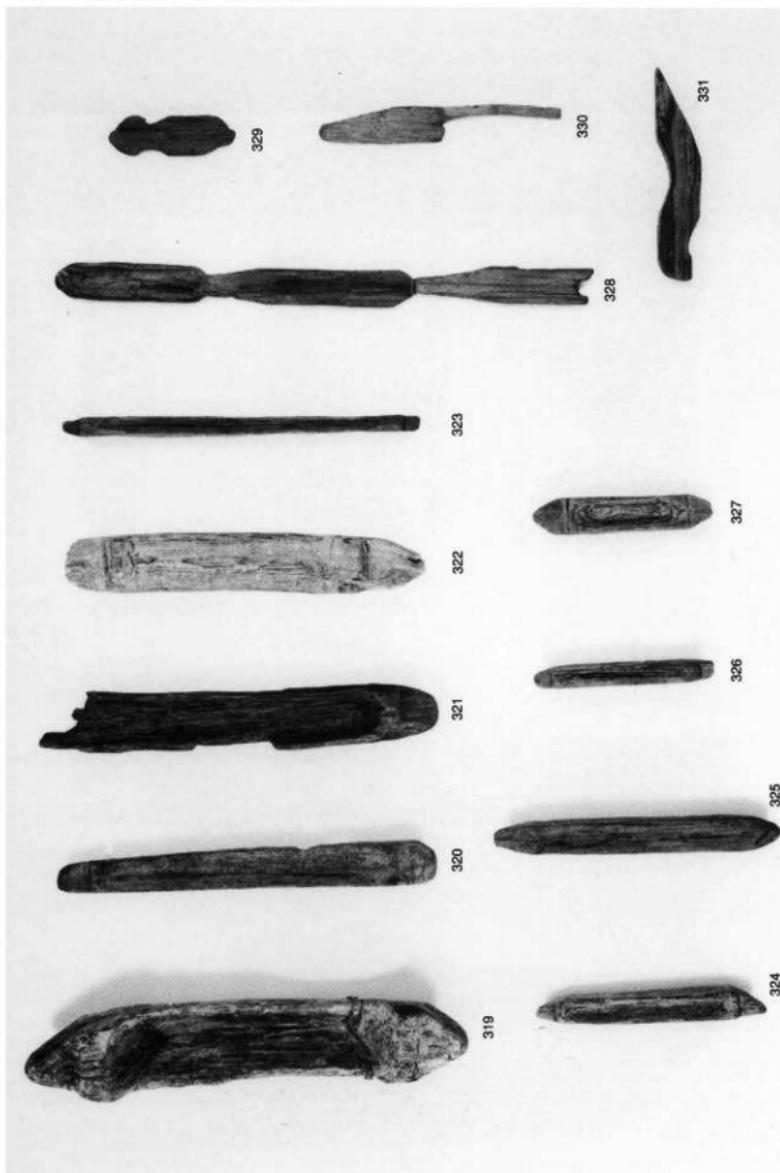
317



318

B

写真図版 13 伊場遺跡



写真図版 14 伊場遺跡



314



315



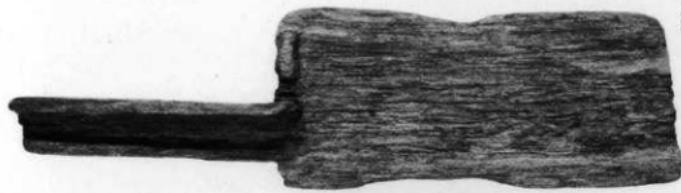
344



341



313

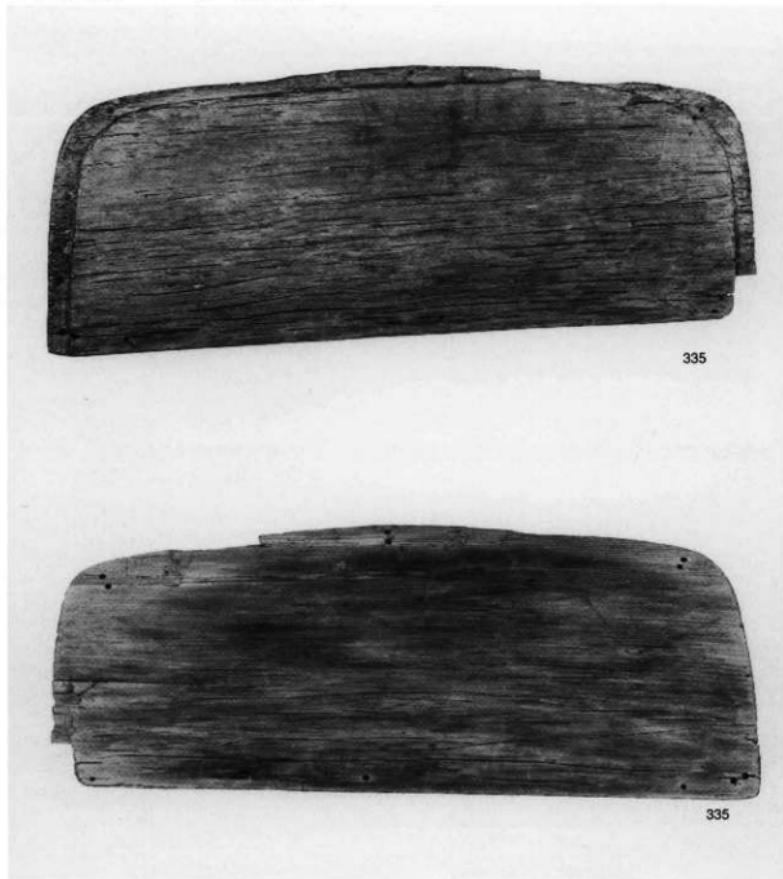


339



332

写真図版 15 伊場遺跡

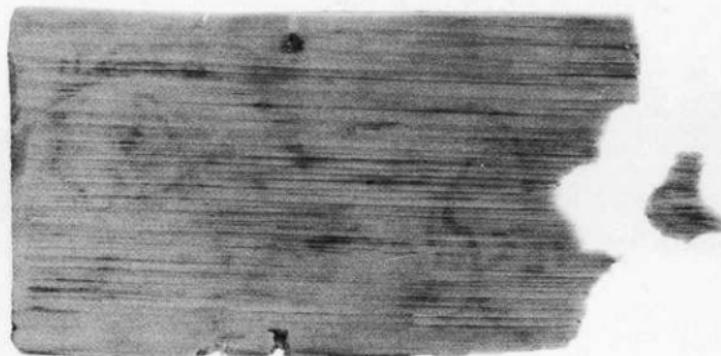


A



B

写真図版 16 伊場遺跡



346

A



348



347

B

写真図版 17 伊場遺跡



写真図版 18 伊場遺跡



344



312

A



344



312

B

写真図版 19 伊場遺跡



写真図版 20 伊場遺跡



362



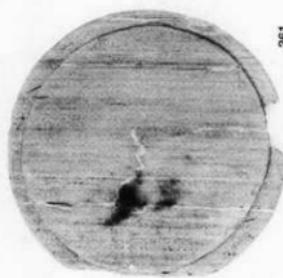
363



364



365



366



367



368

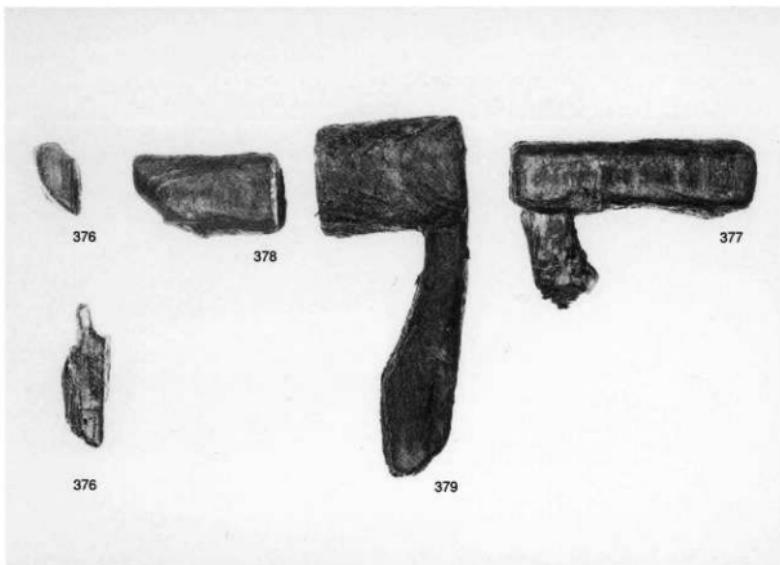


369

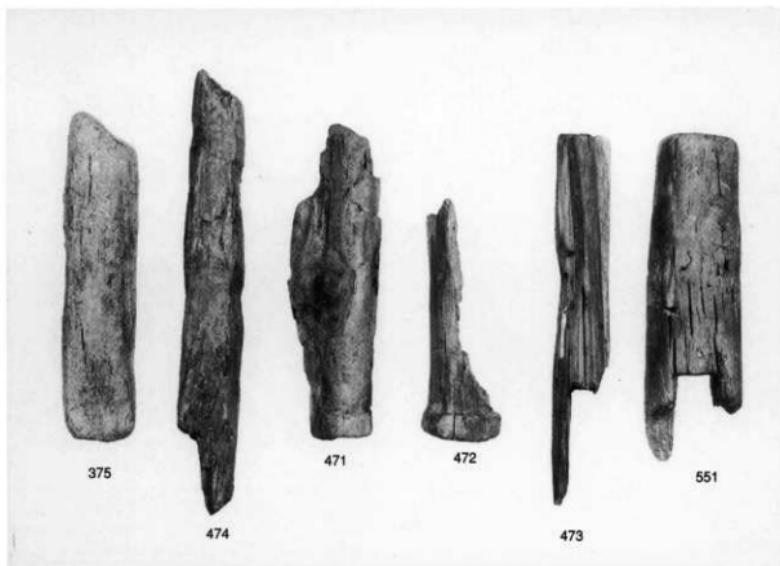


370

写真図版 21 伊場遺跡



A



B

写真図版 22 伊場遺跡



475



592

A



478



594



477



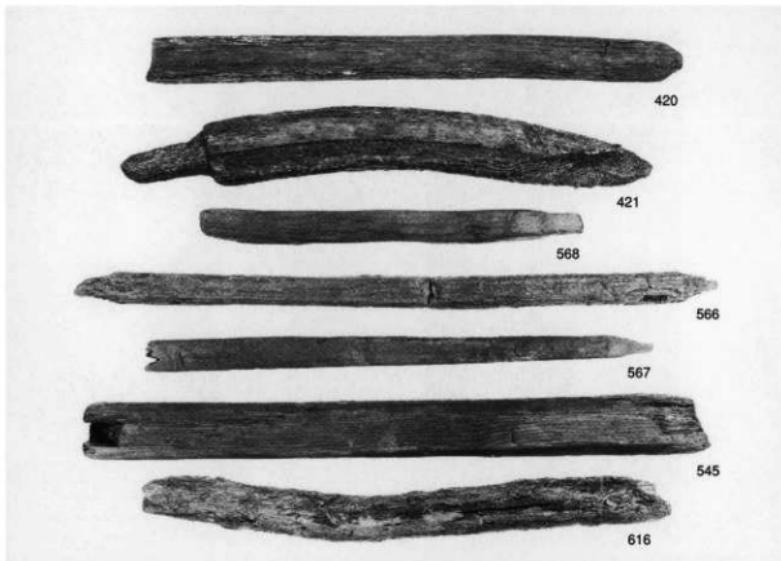
479



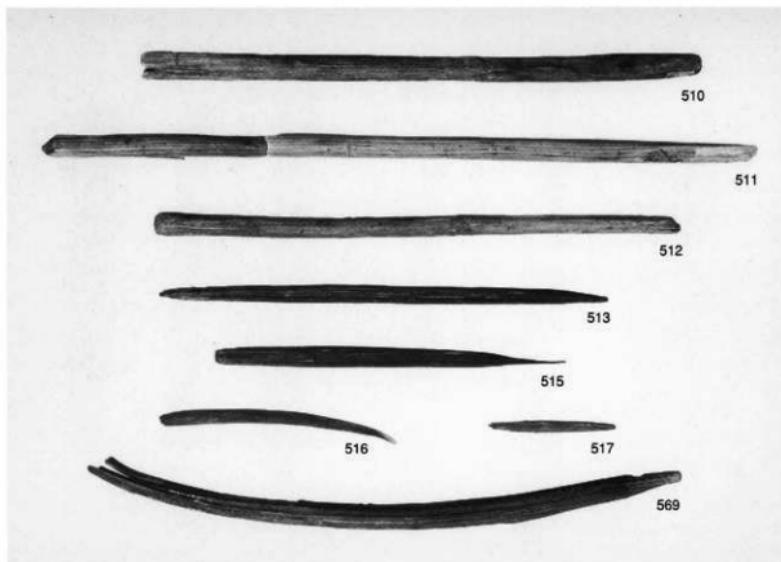
476

B

写真図版 23 伊場遺跡

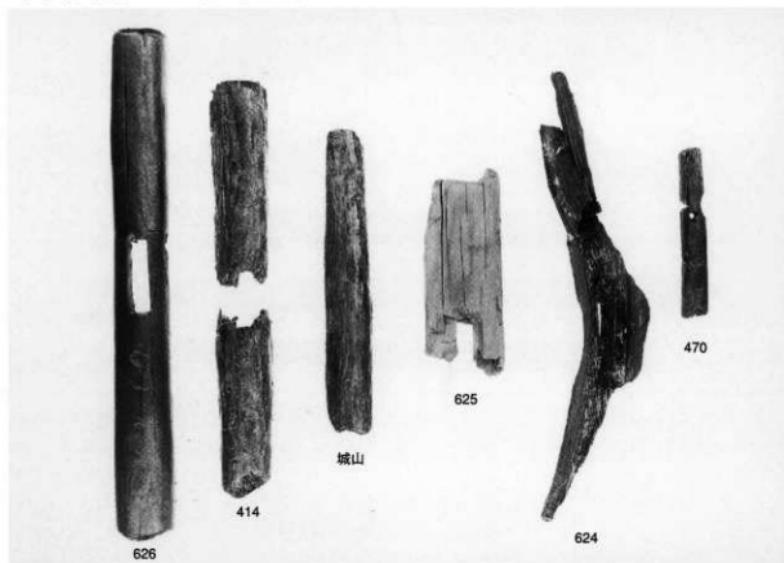


A

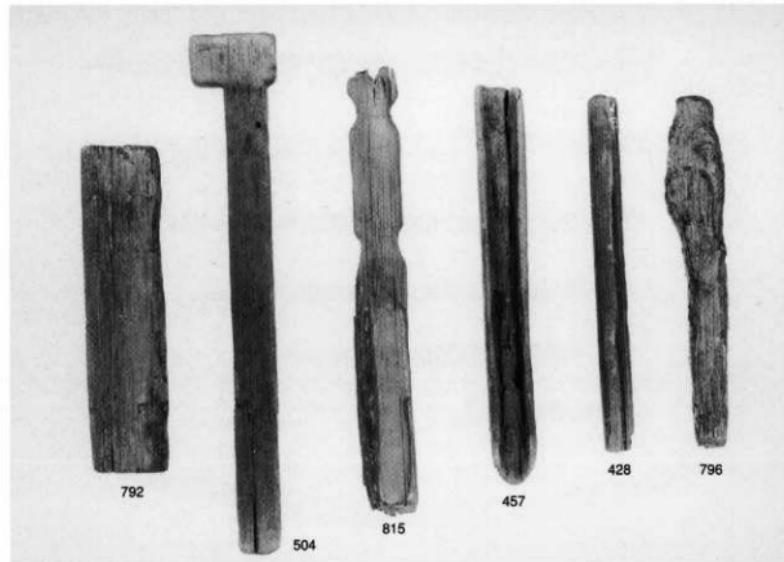


B

写真図版 24 伊場遺跡

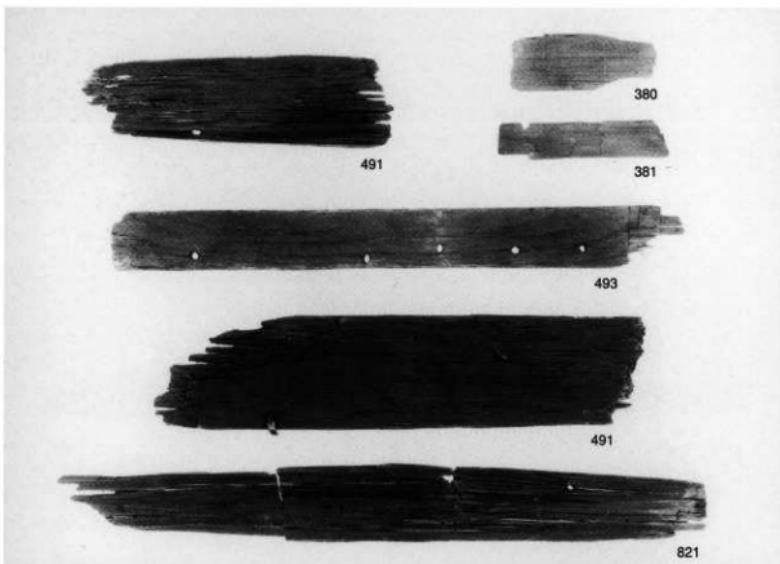


A

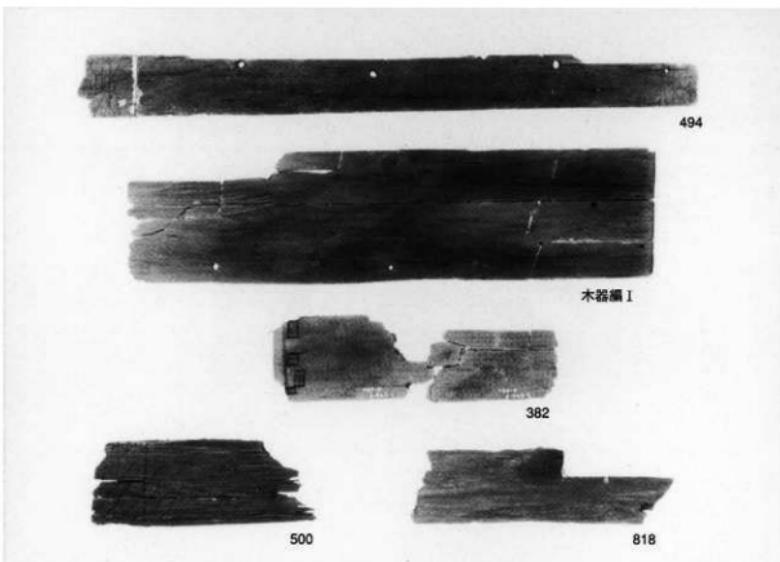


B

写真図版 25 伊場遺跡

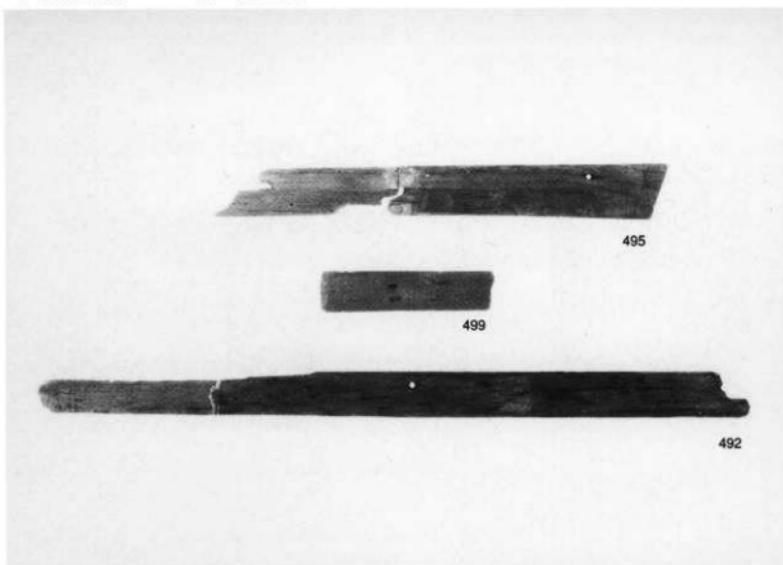


A

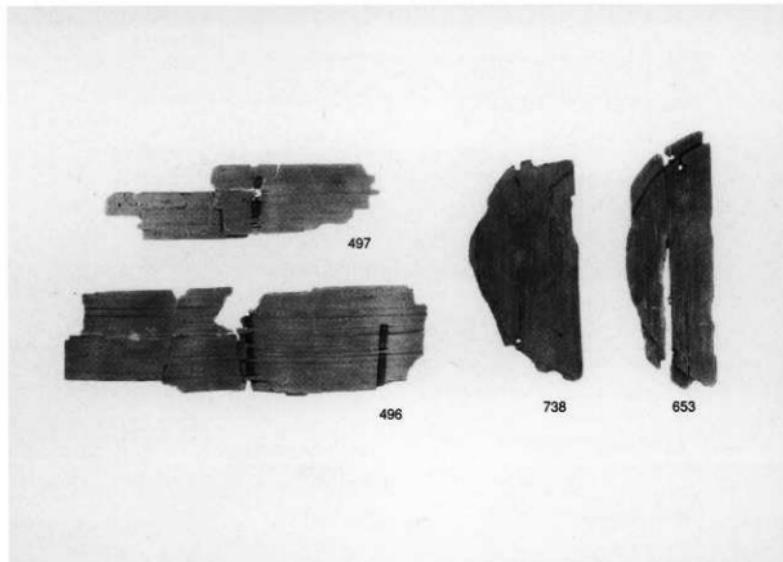


B

写真図版 26 伊場遺跡

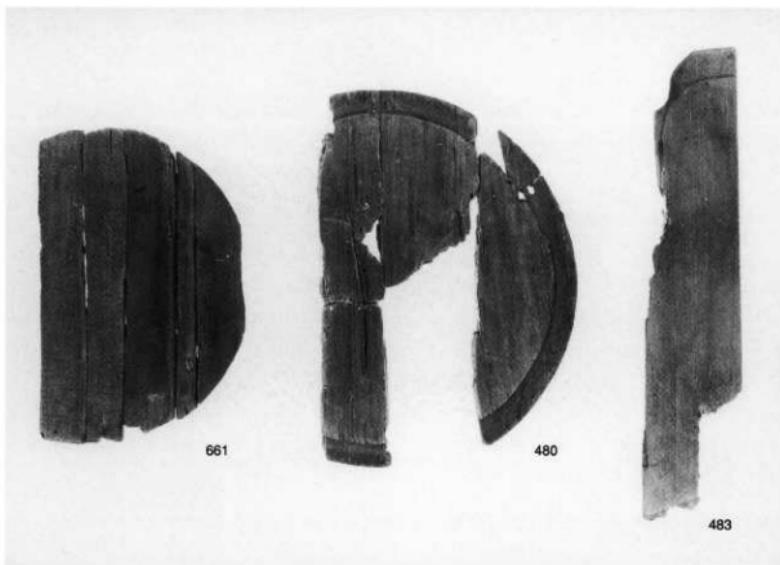


A

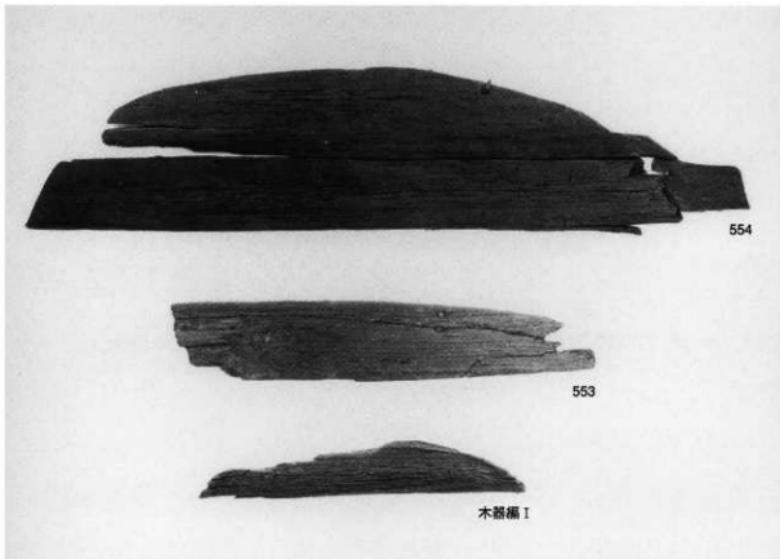


B

写真図版 27 伊場遺跡

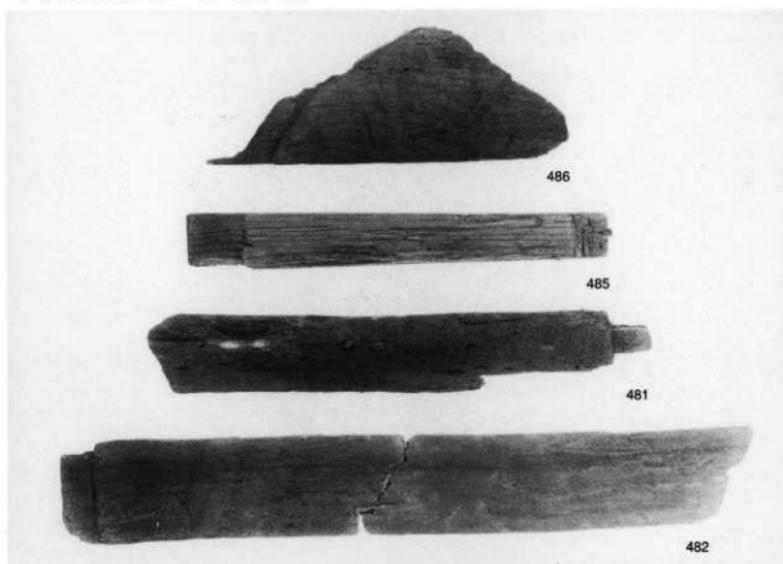


A

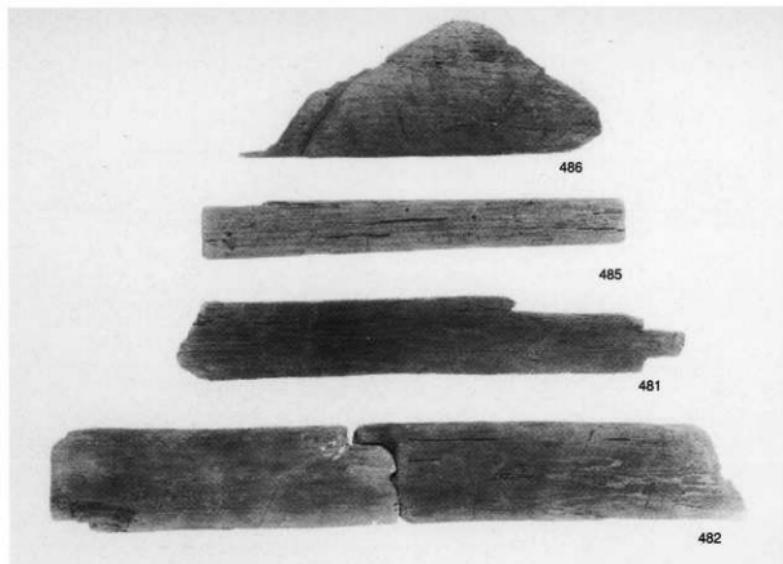


B

写真図版 28 伊場遺跡

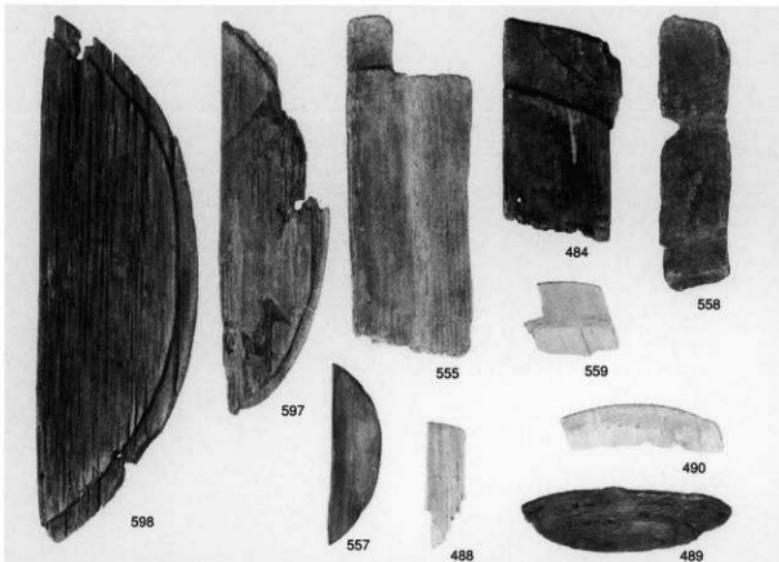


A

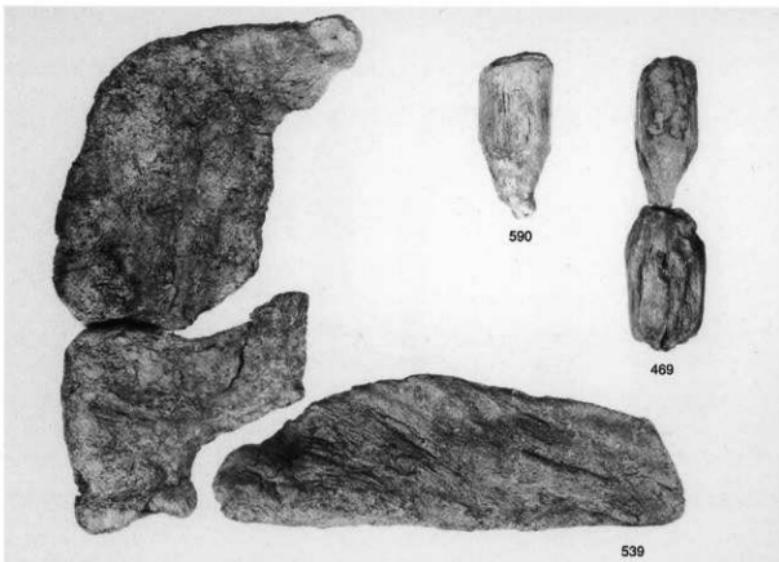


B

写真図版 29 伊場遺跡

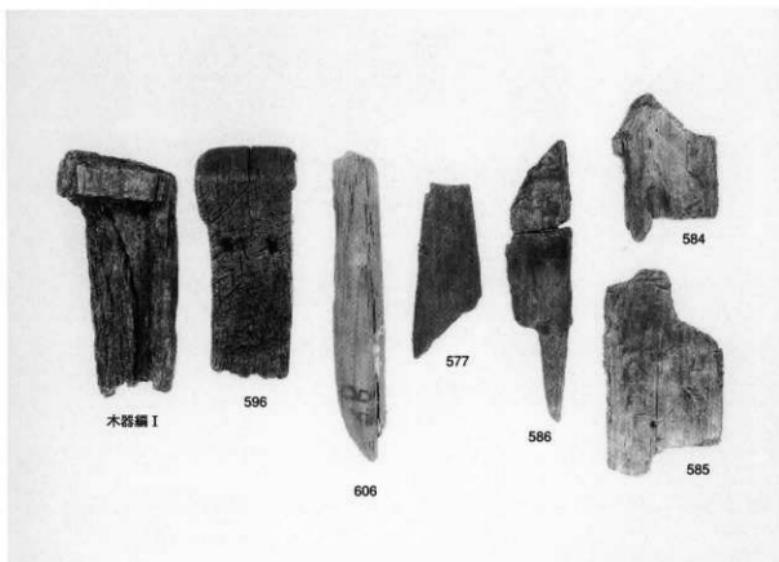


A

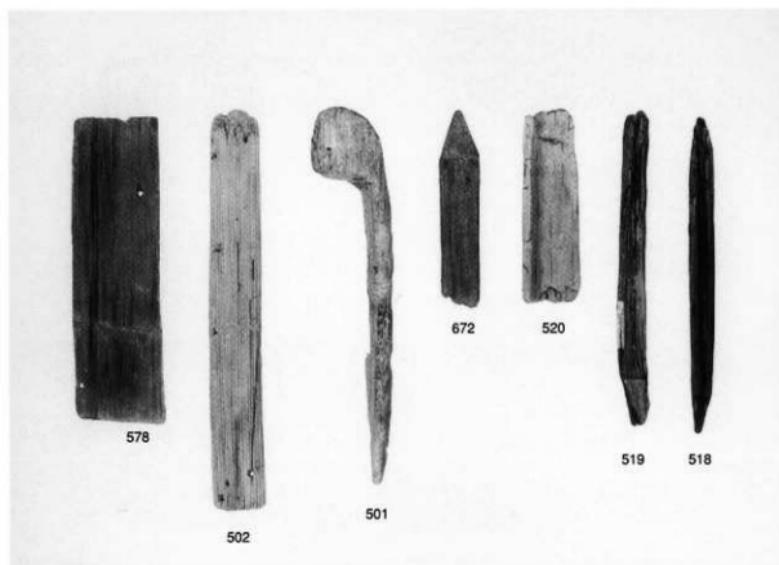


B

写真図版 30 伊場遺跡

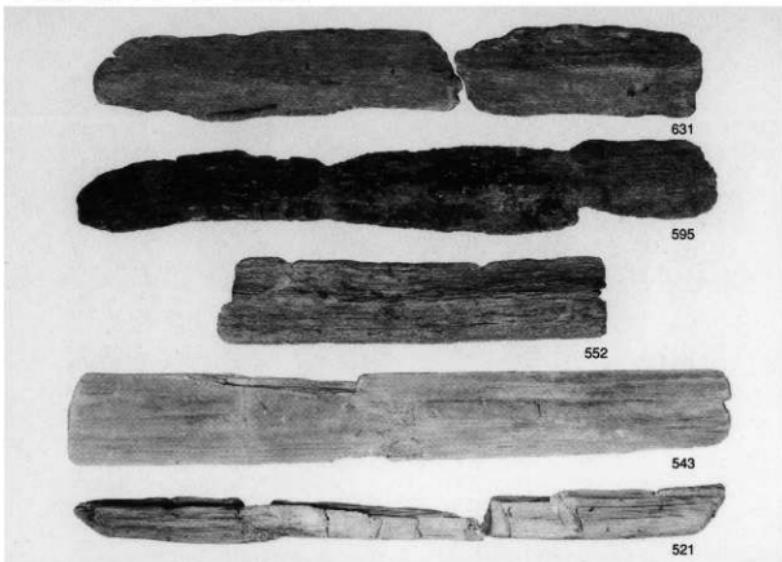


A

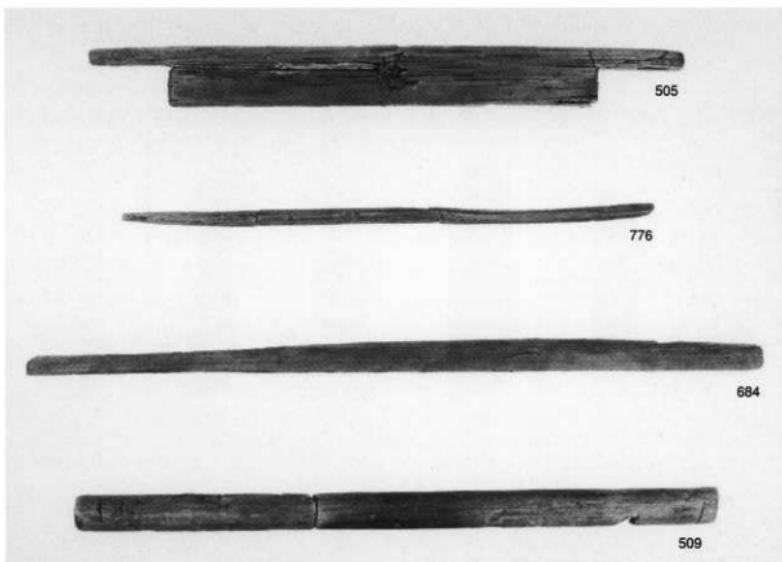


B

写真図版 31 伊場遺跡

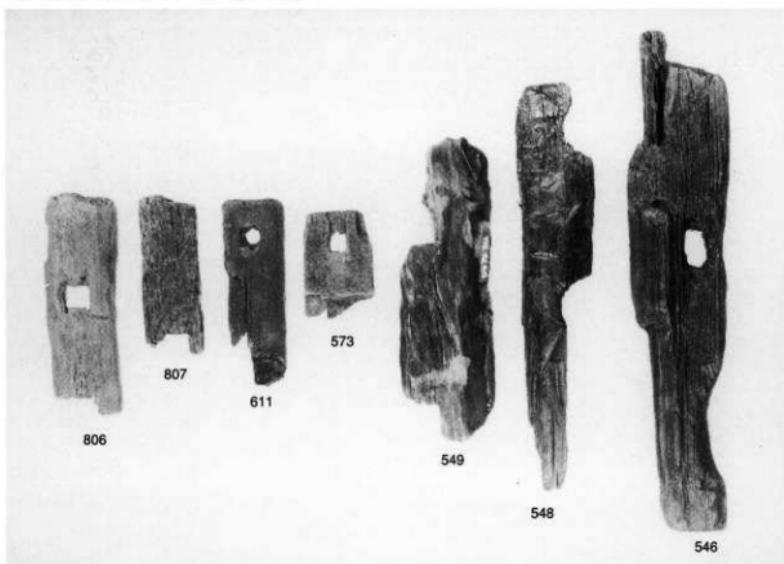


A

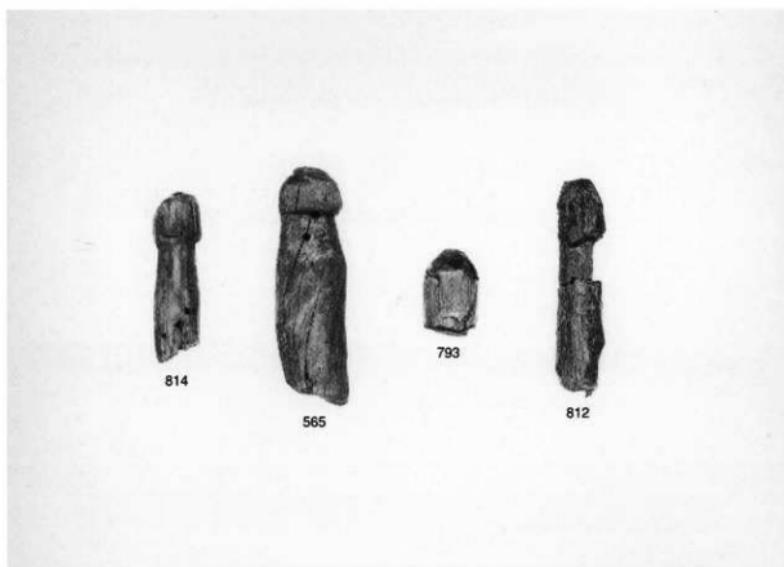


B

写真図版 32 伊場遺跡

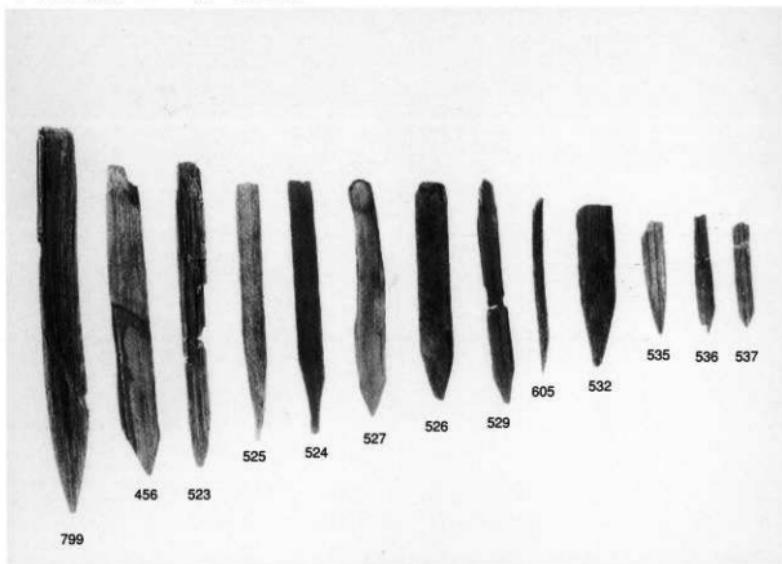


A

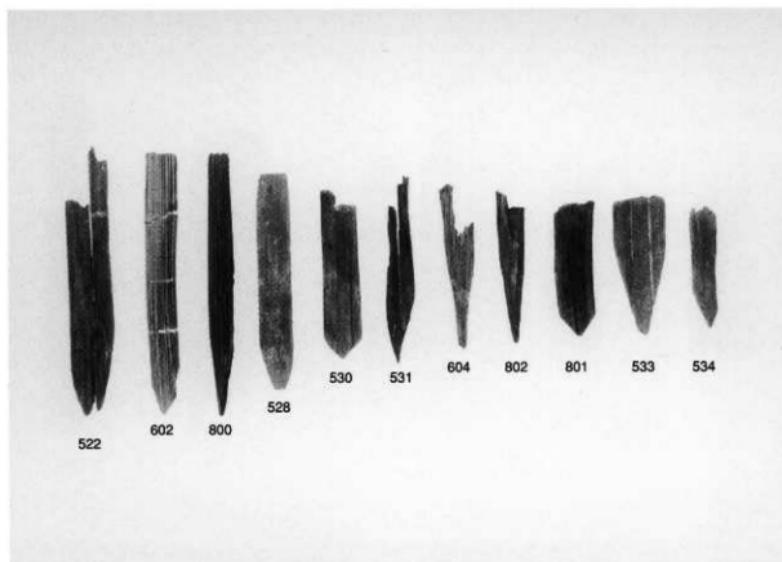


B

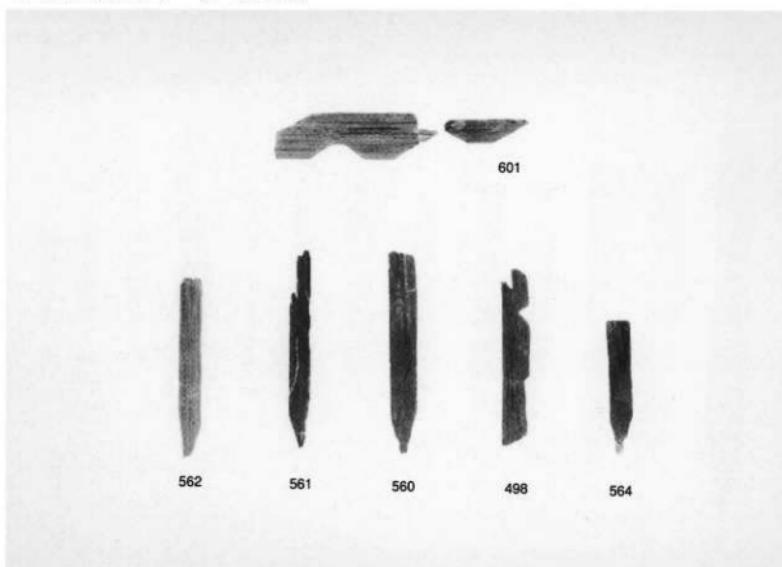
写真図版 33 伊場遺跡



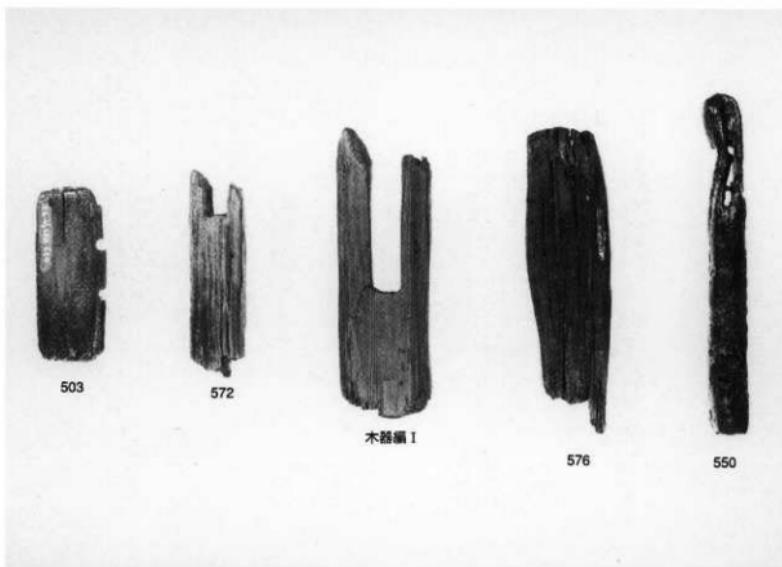
A



写真図版 34 伊場遺跡

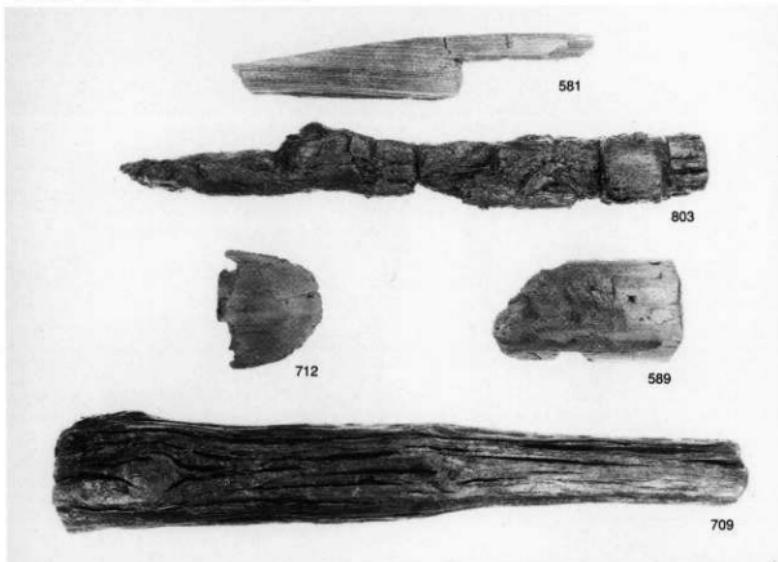


A

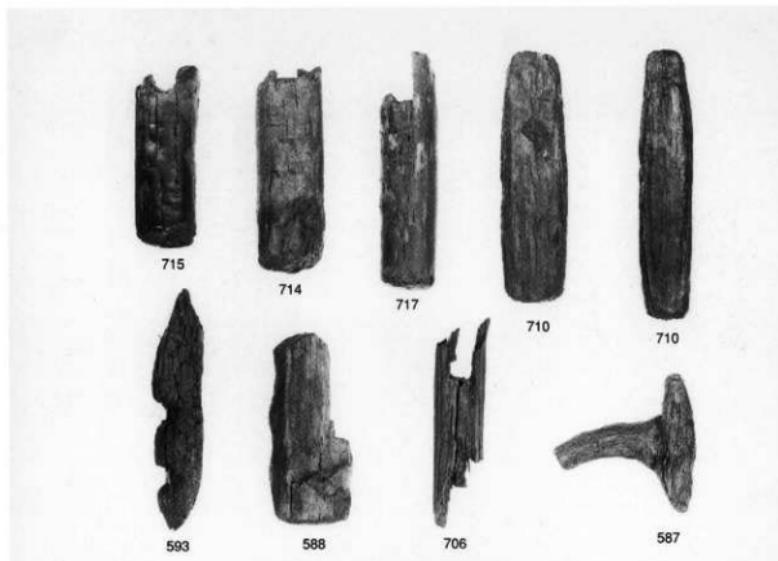


B

写真図版 35 伊場遺跡

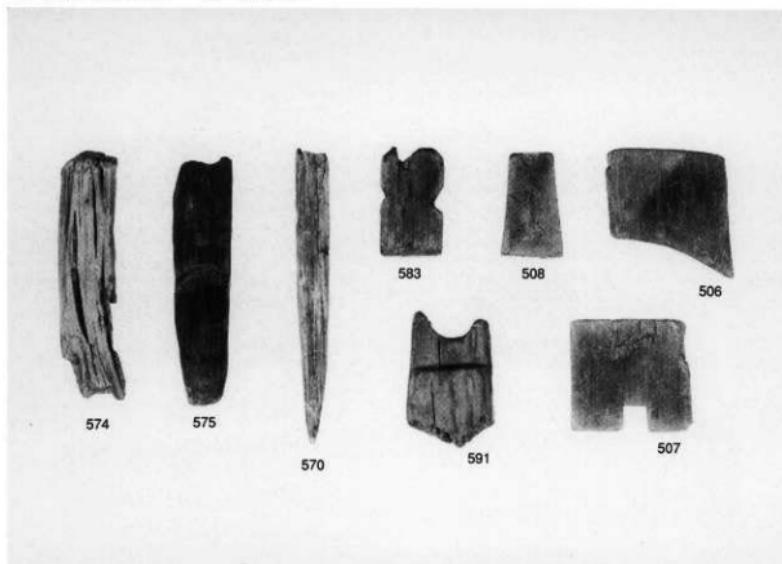


A

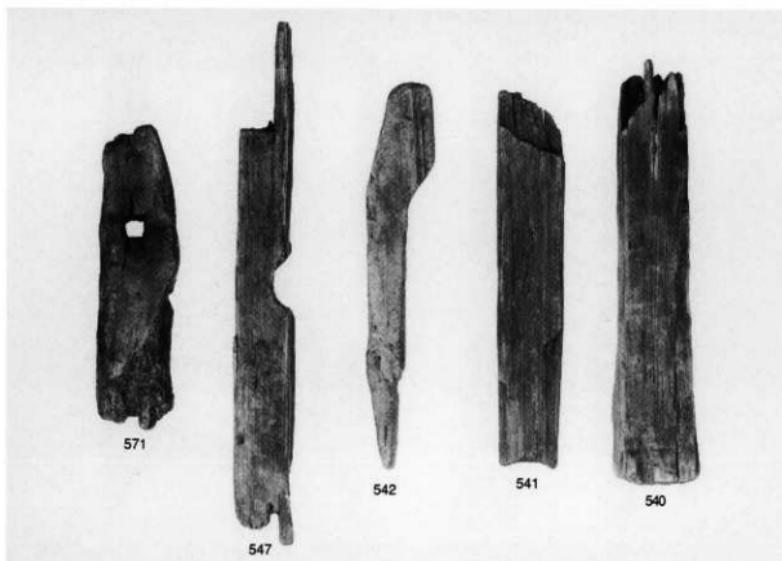


B

写真図版 36 伊場遺跡

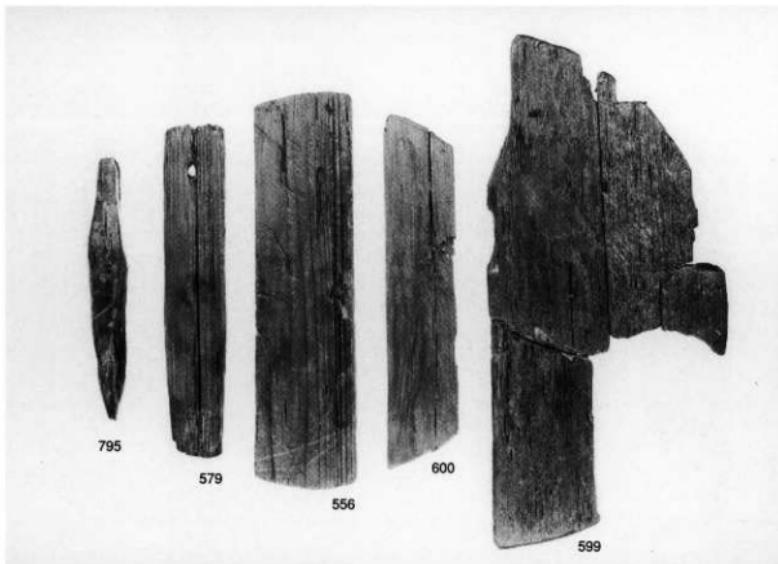


A

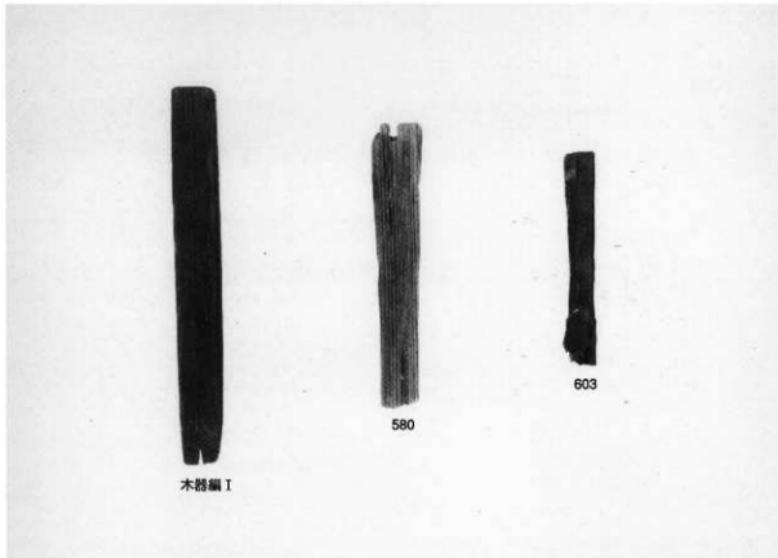


B

写真図版 37 伊場遺跡



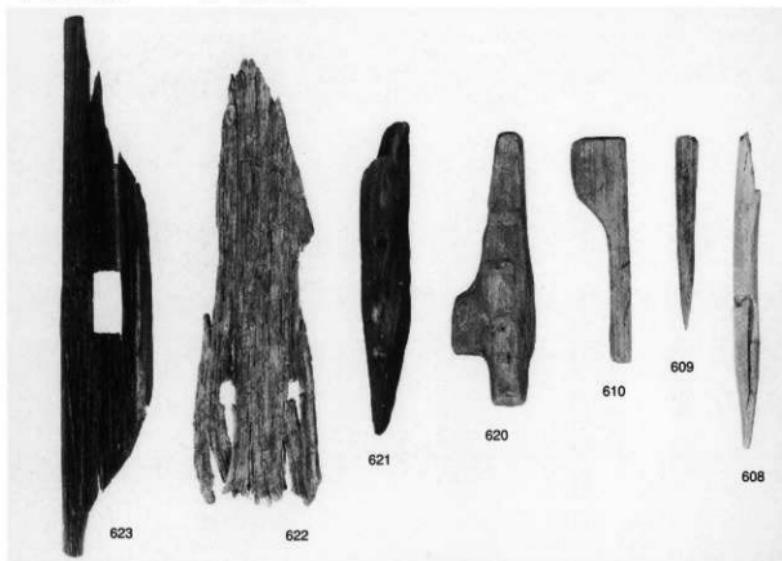
A



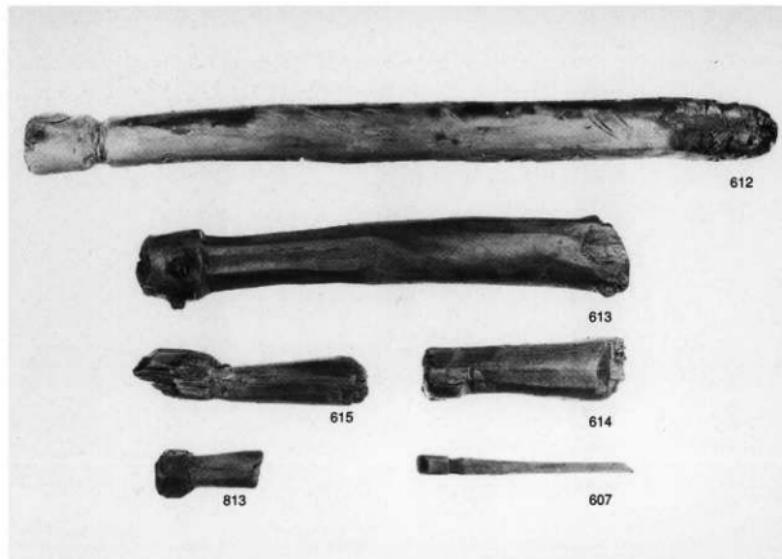
B

木器編 I

写真図版 38 伊場遺跡

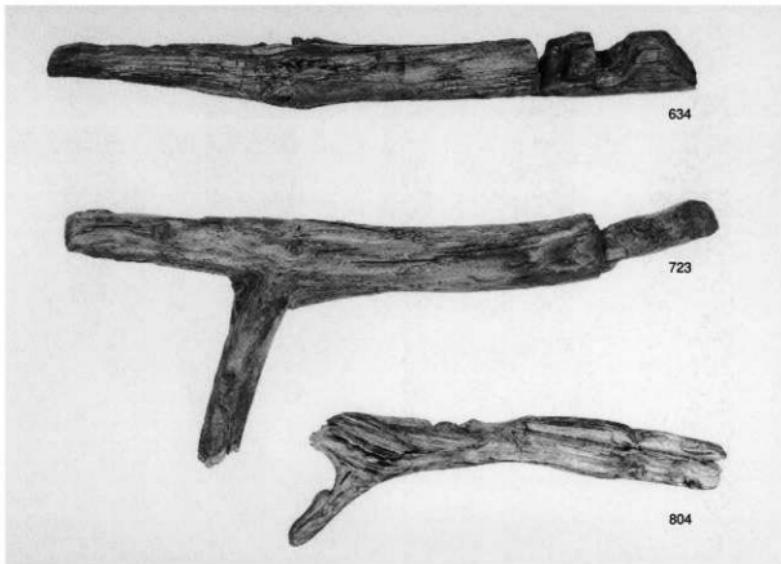


A

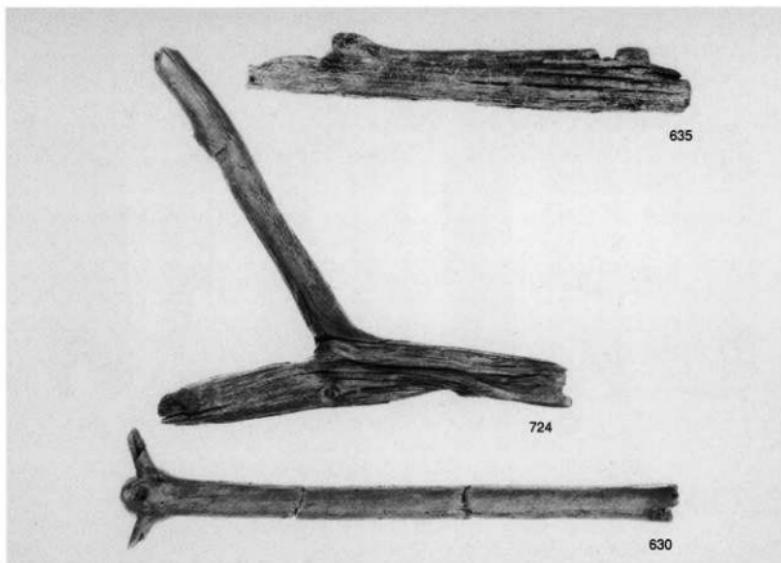


B

写真図版 39 伊場遺跡

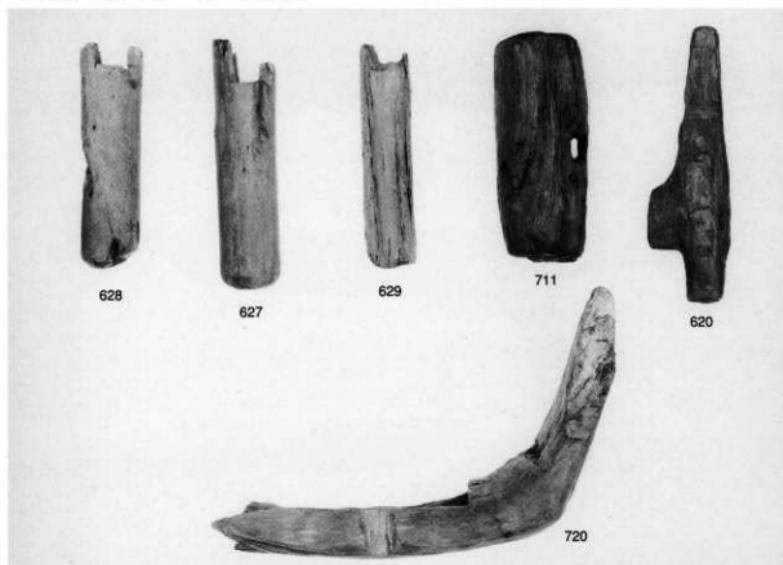


A

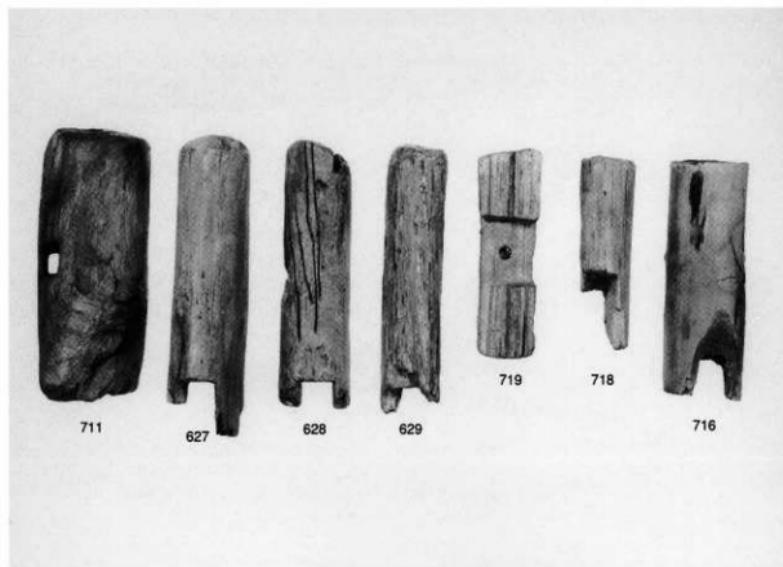


B

写真図版 40 伊場遺跡

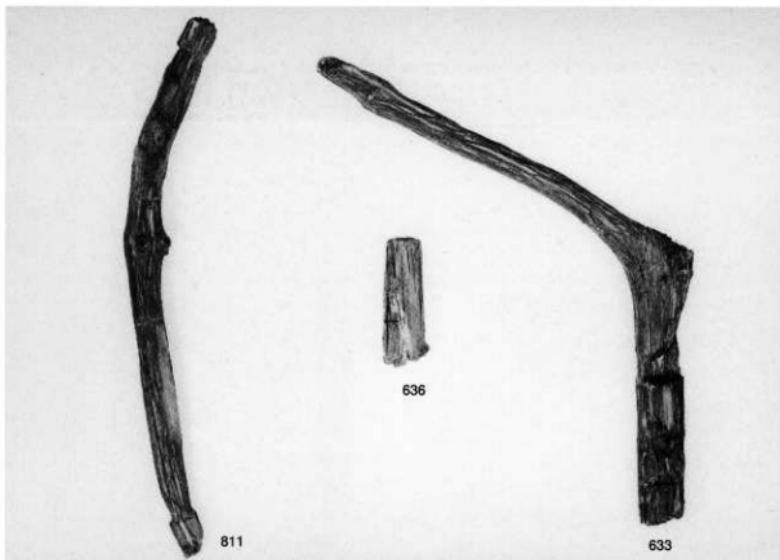


A

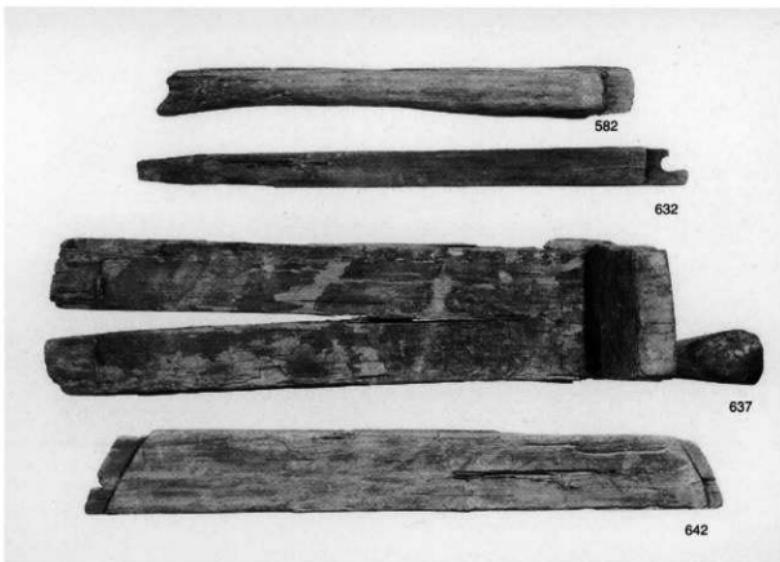


B

写真図版 41 伊場遺跡



A



B

写真図版 42 伊場遺跡



638



城山



城山



639

A



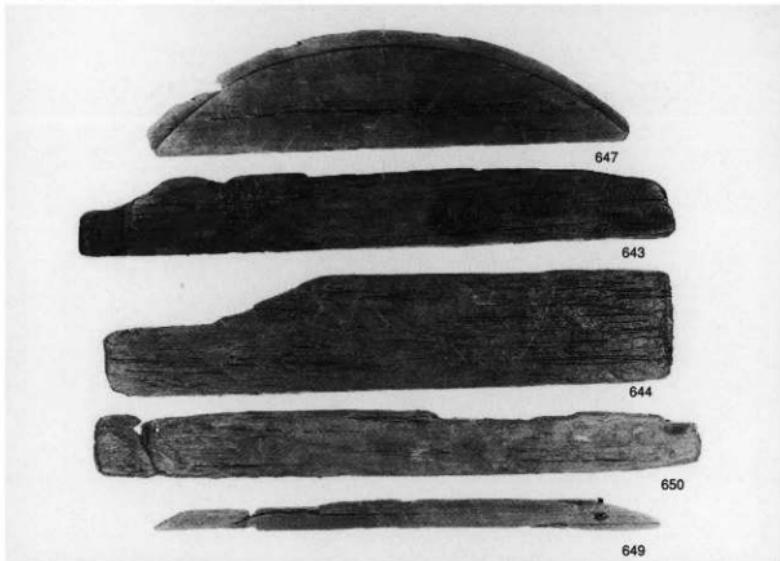
640



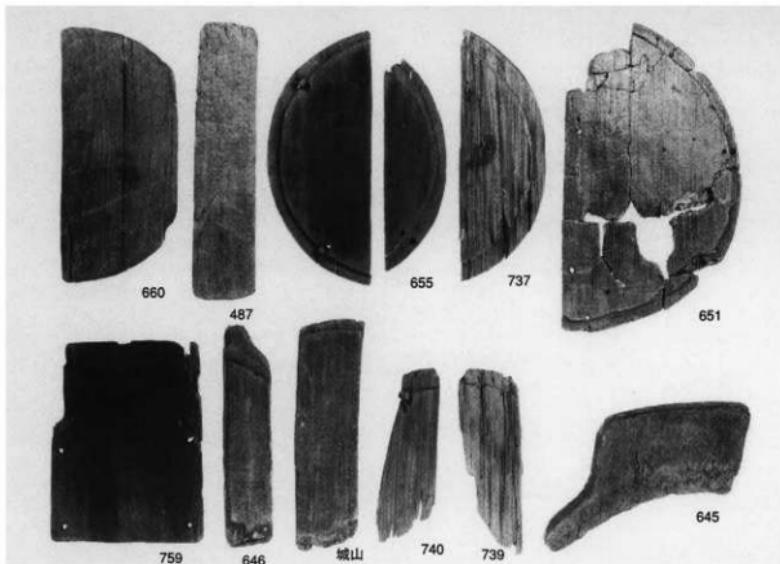
641

B

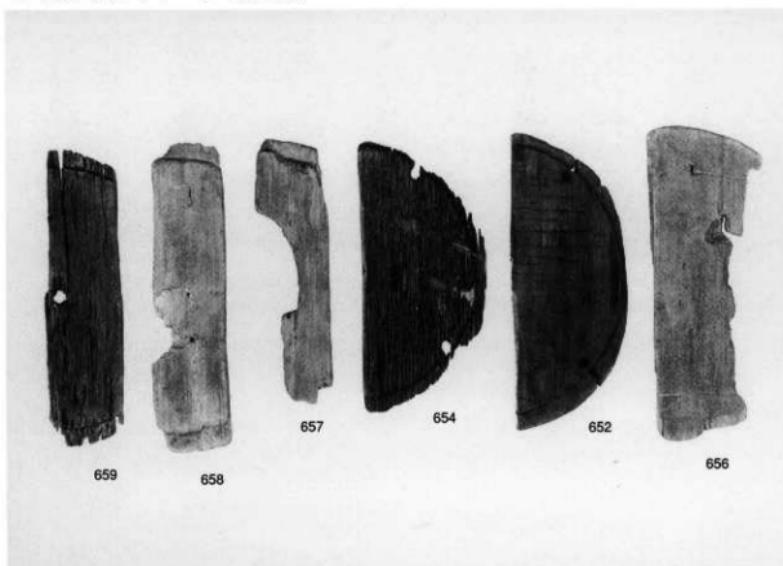
写真図版 43 伊場遺跡



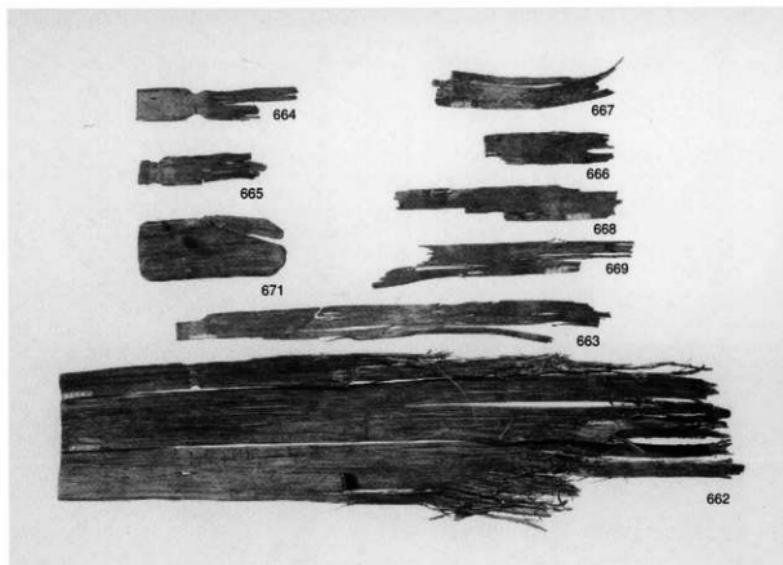
A



写真図版 44 伊場遺跡

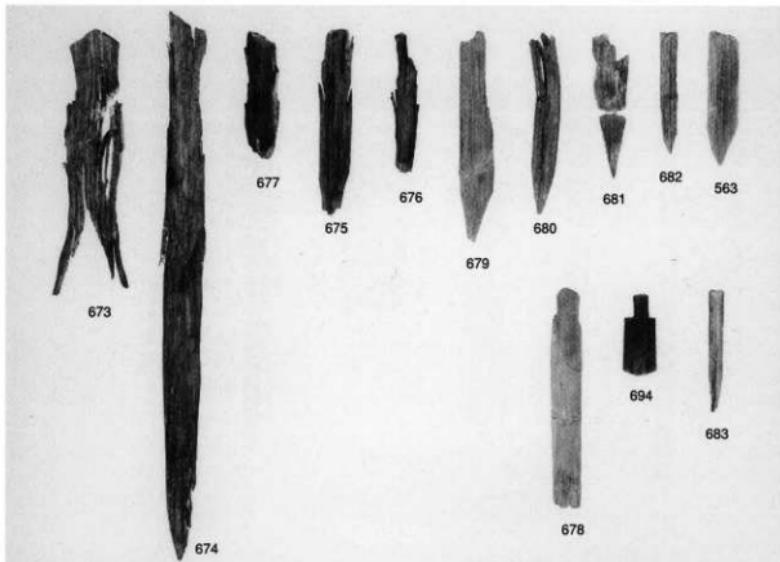


A

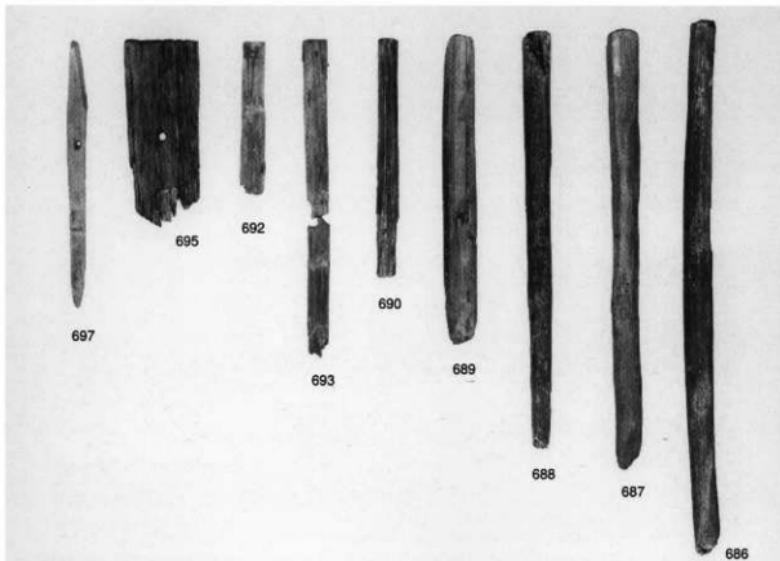


B

写真図版 45 伊場遺跡

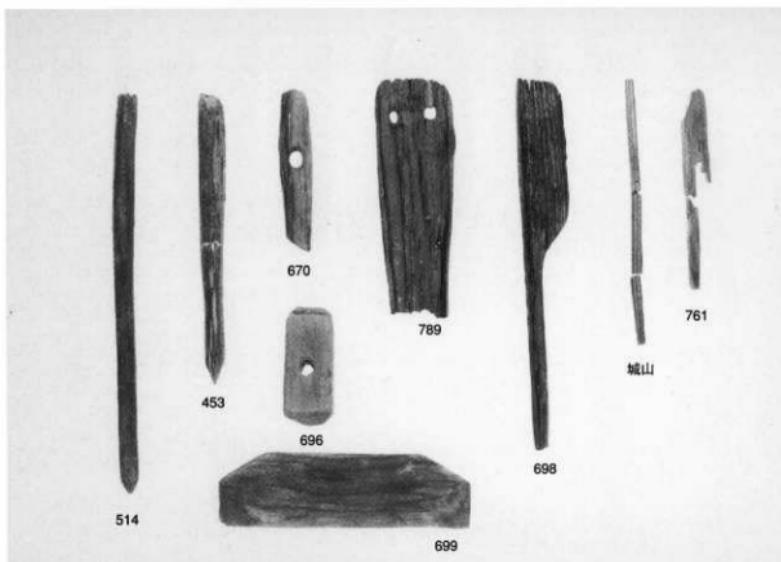


A

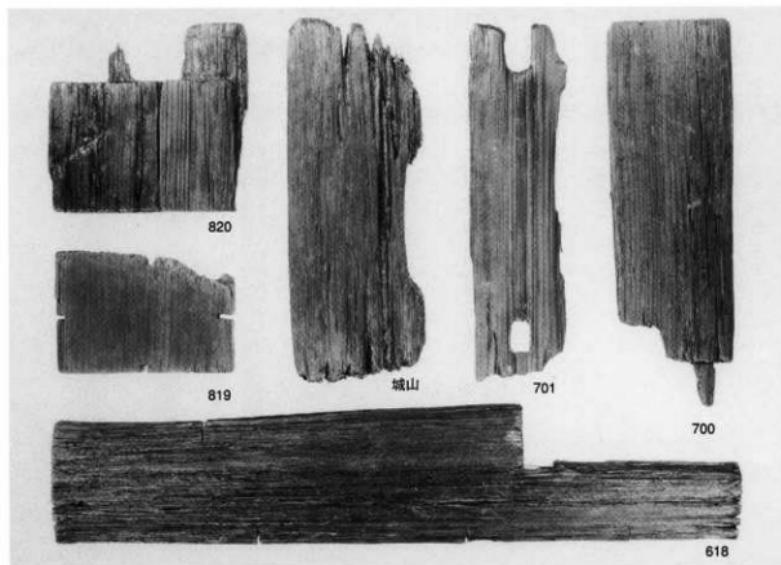


B

写真図版 46 伊場遺跡

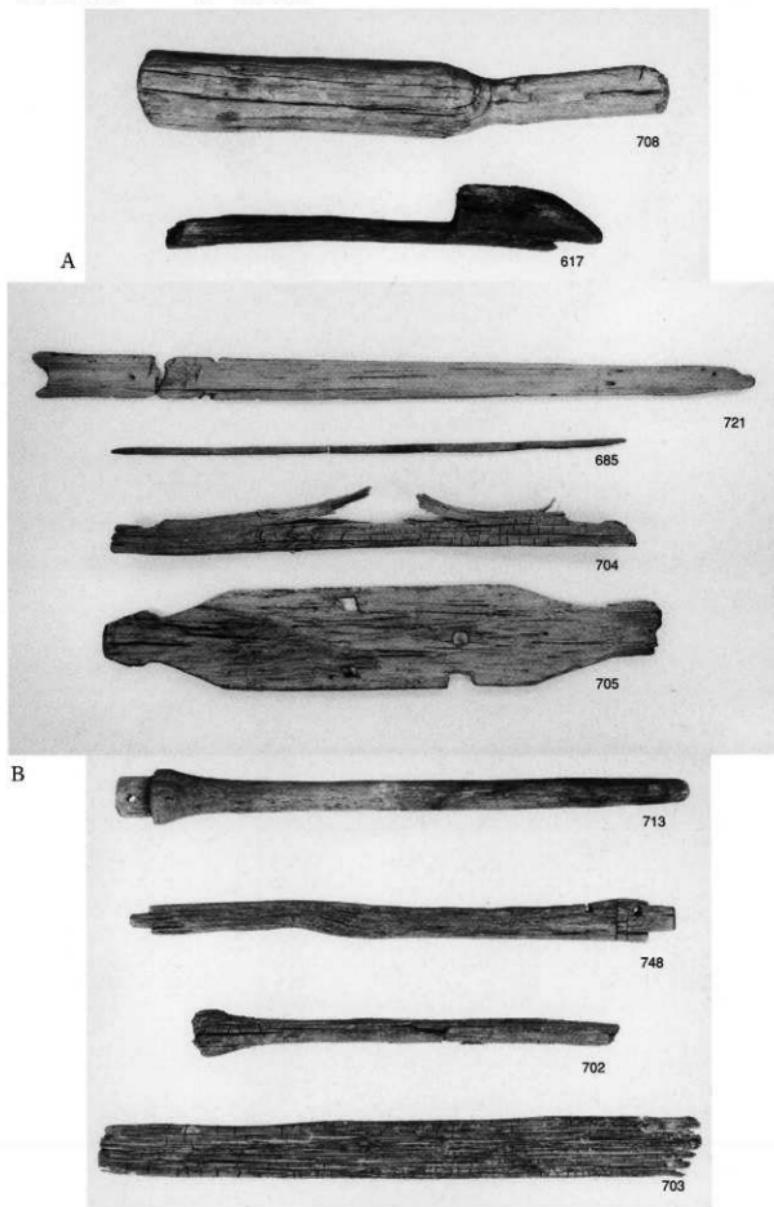


A



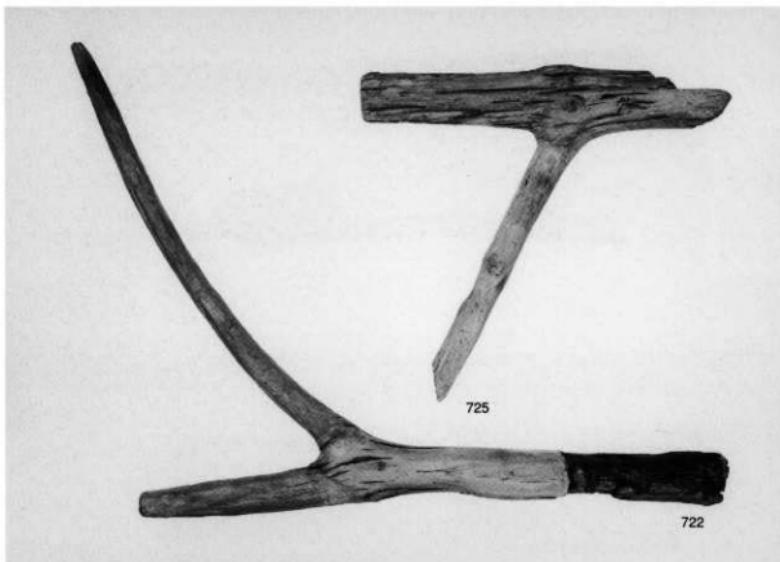
B

写真図版 47 伊場遺跡

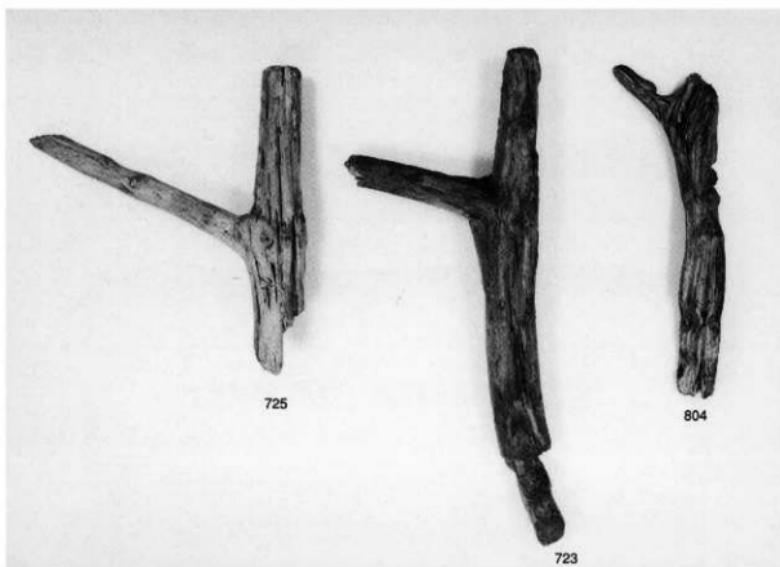


C

写真図版 48 伊場遺跡

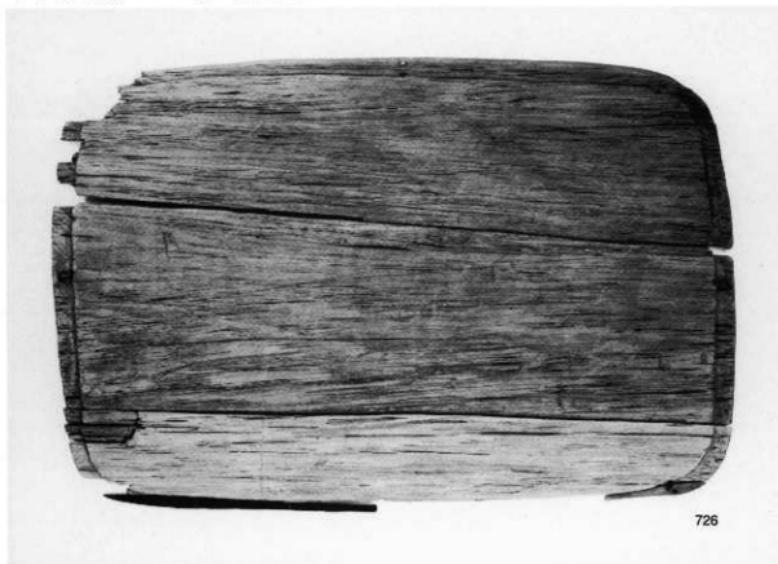


A

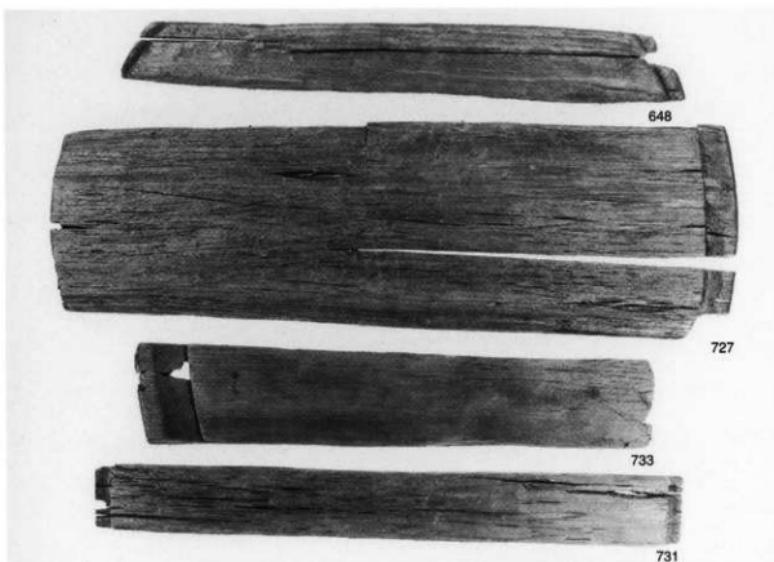


B

写真図版 49 伊場遺跡



A



B

写真図版 50 伊場遺跡



728



732

A



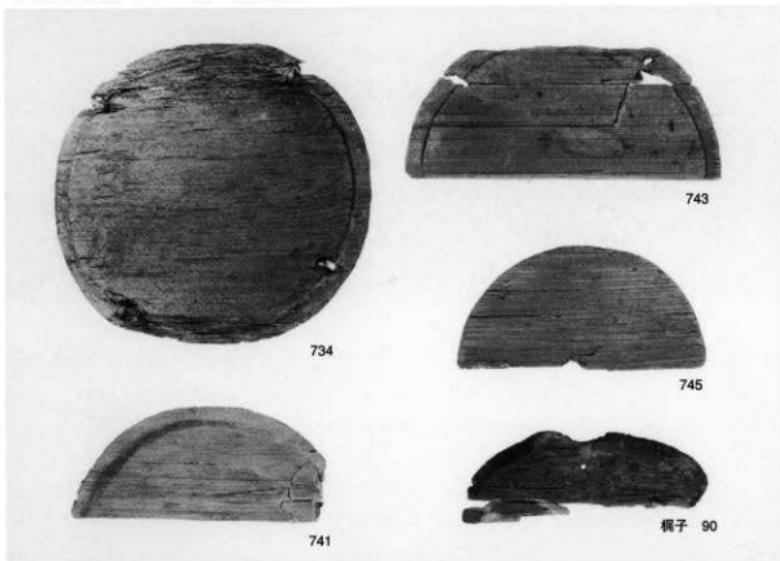
728



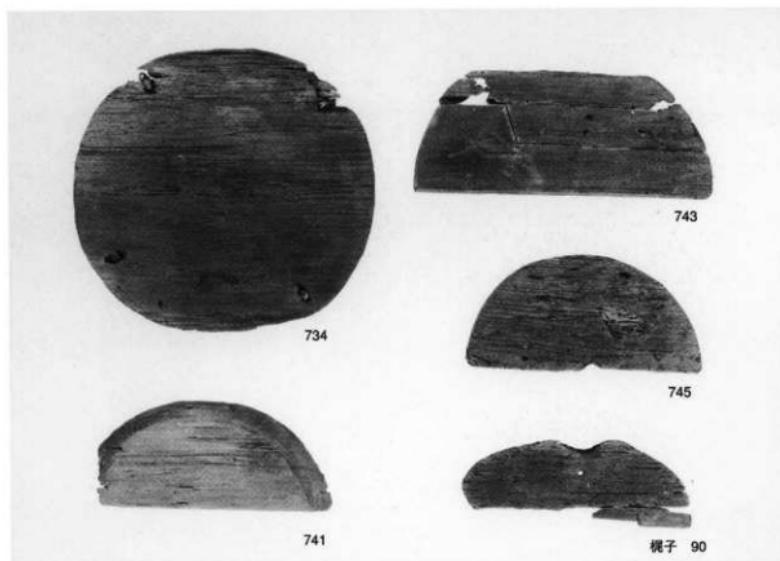
732

B

写真図版 51 伊場遺跡

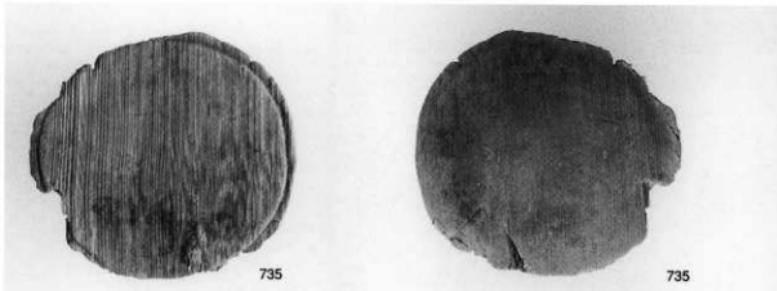


A

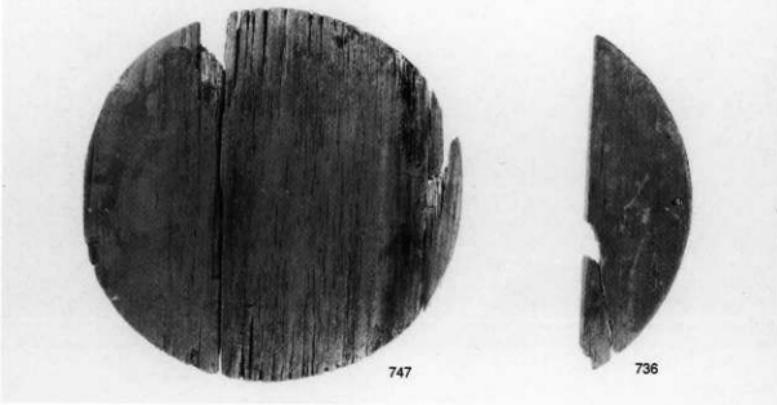
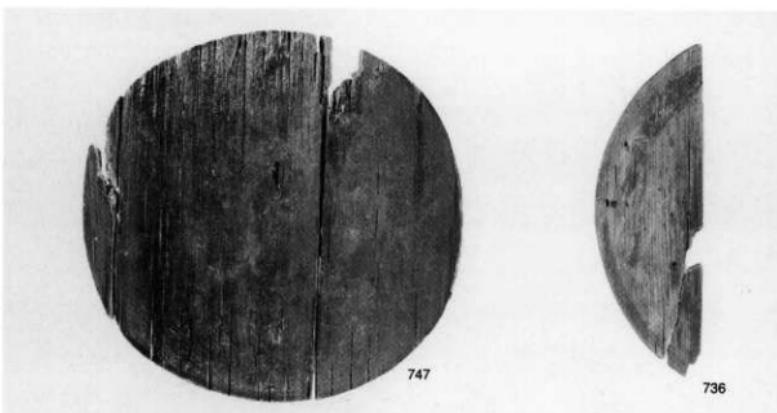


B

写真図版 52 伊場遺跡

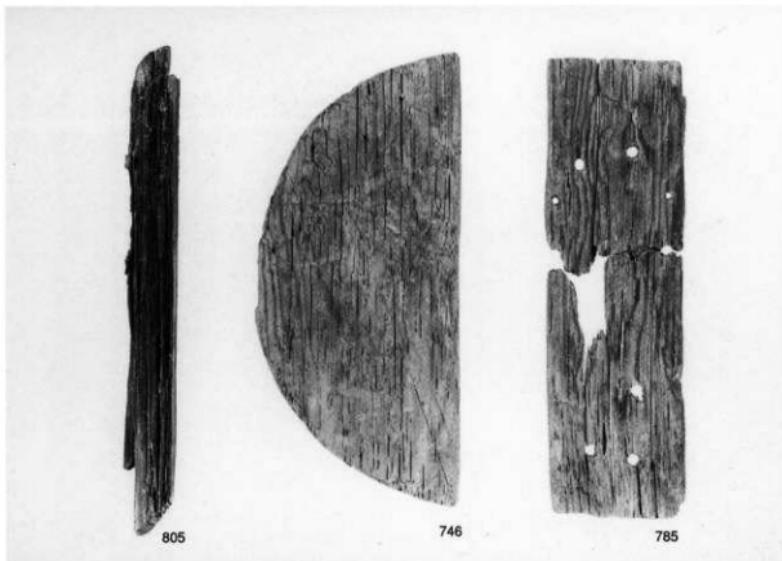


A

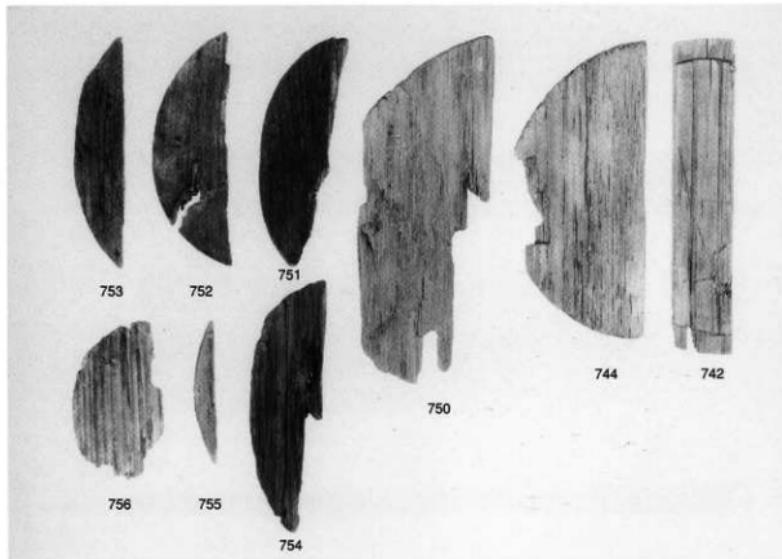


B

写真図版 53 伊場遺跡

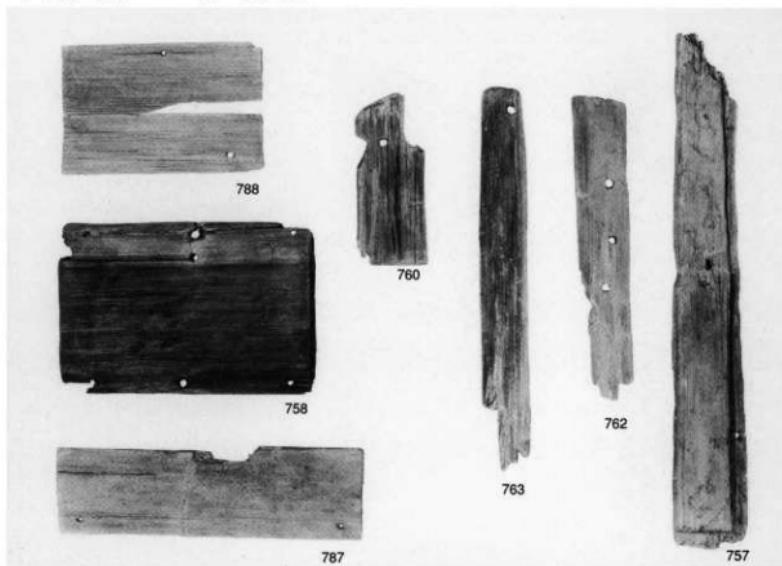


A

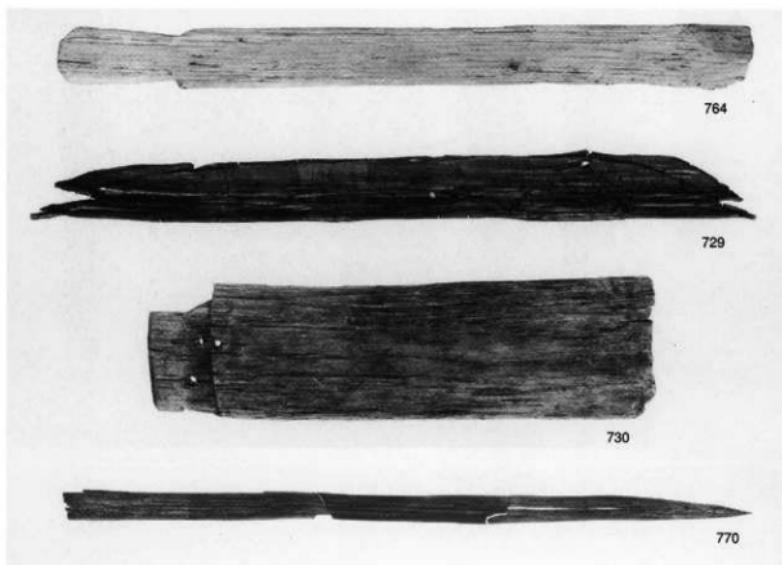


B

写真図版 54 伊場遺跡

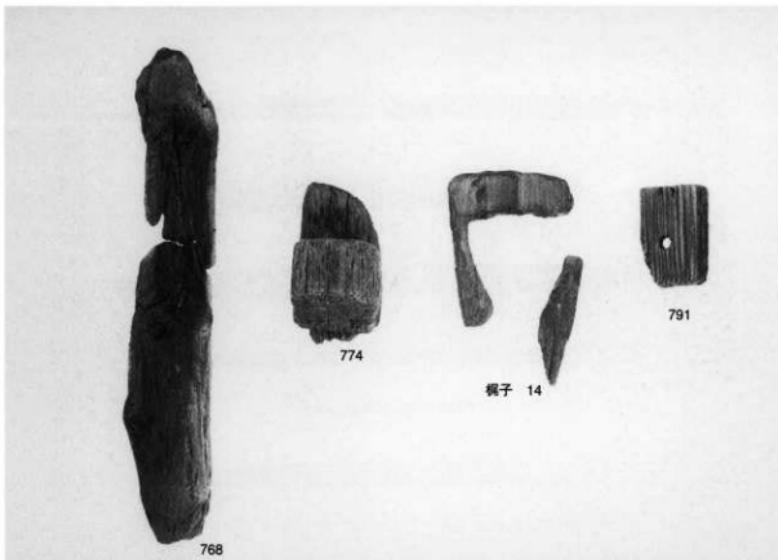


A

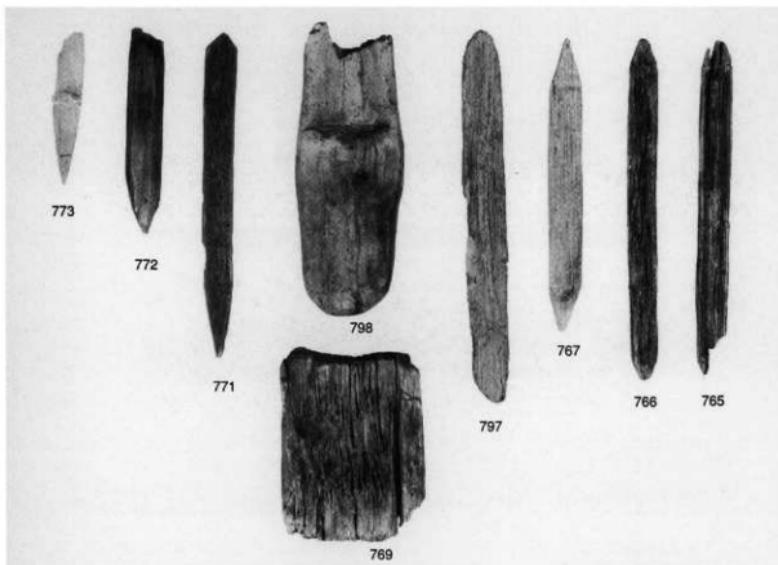


B

写真図版 55 伊場遺跡

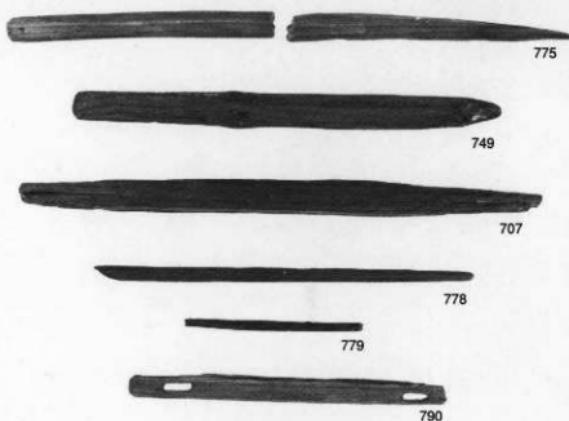


A

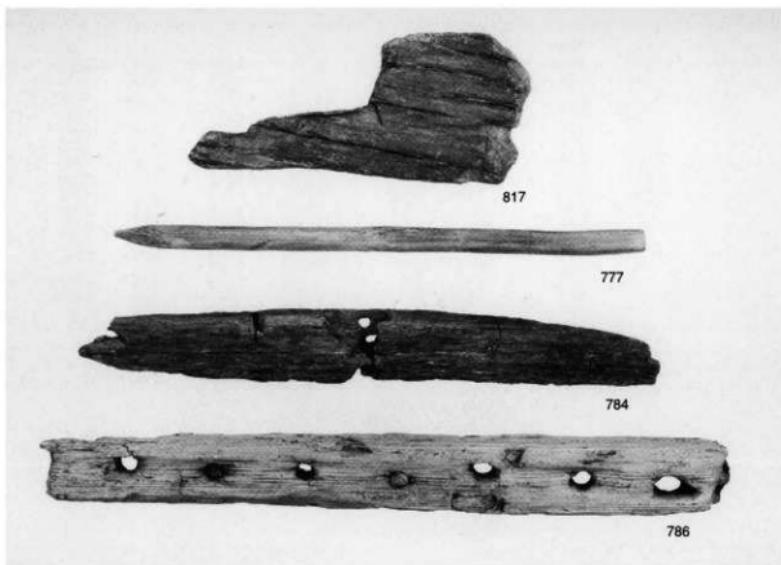


B

写真図版 56 伊場遺跡

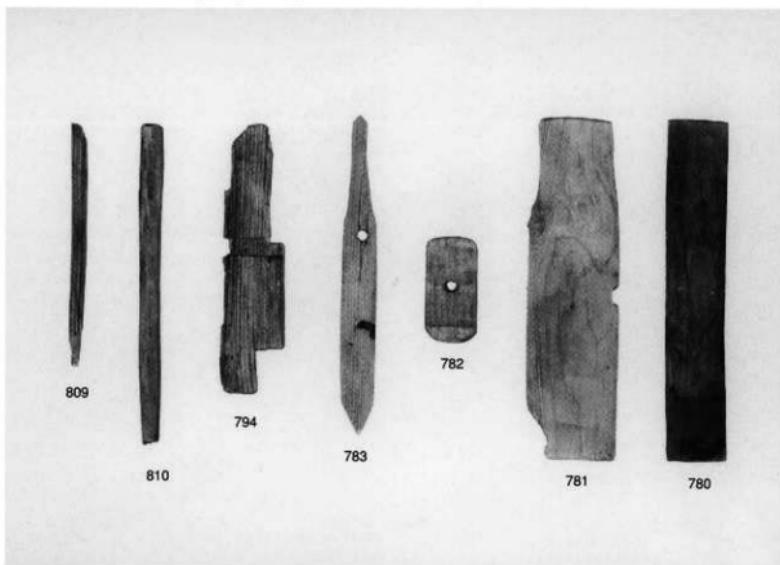


A

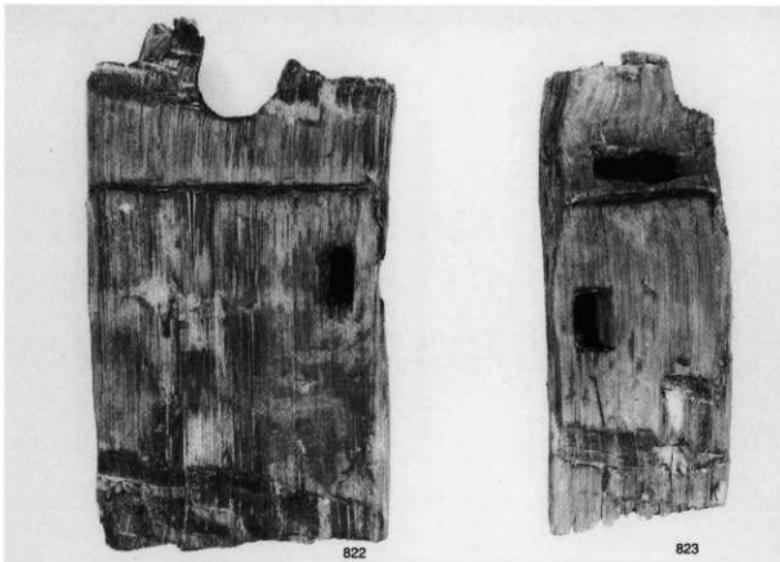


B

写真図版 57 伊場遺跡

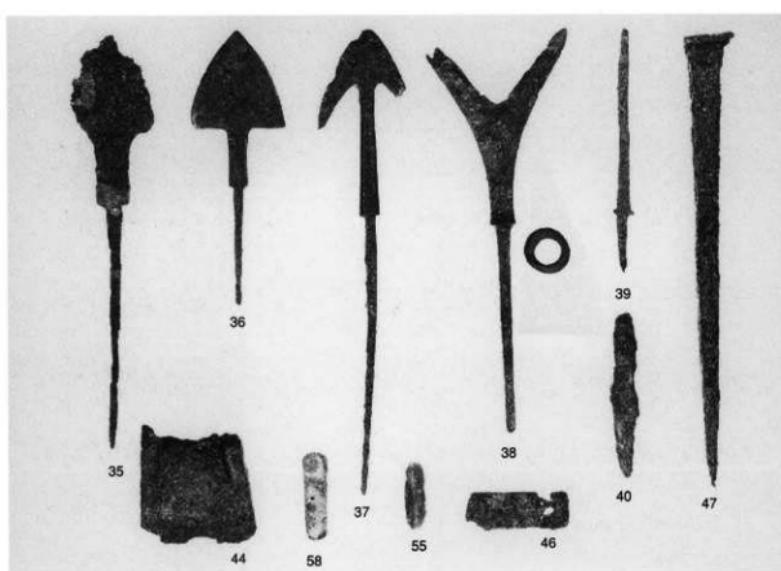


A

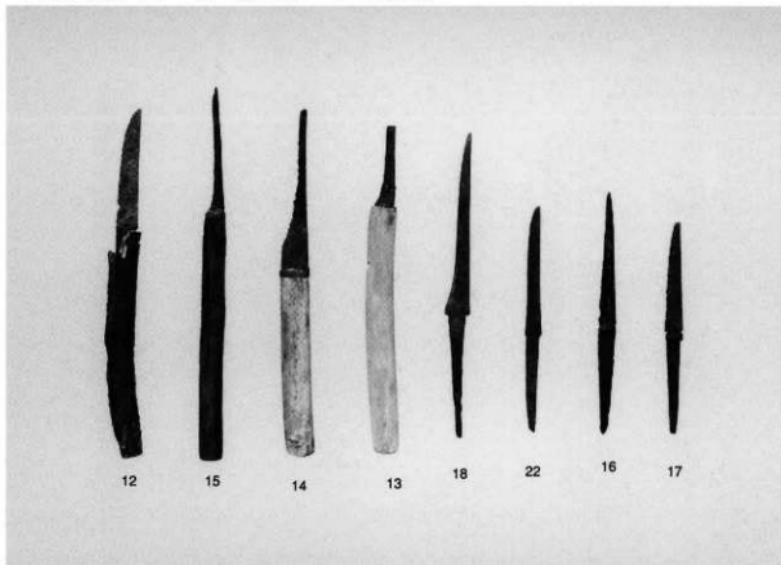


B

写真図版 58 伊場遺跡 金属器



写真図版 59 伊場遺跡 金属器



A. 刀子



B. 刀子

写真図版 60 伊場遺跡 金属器



42



48



49

A. 鉄斧・紡錘



51



58



52



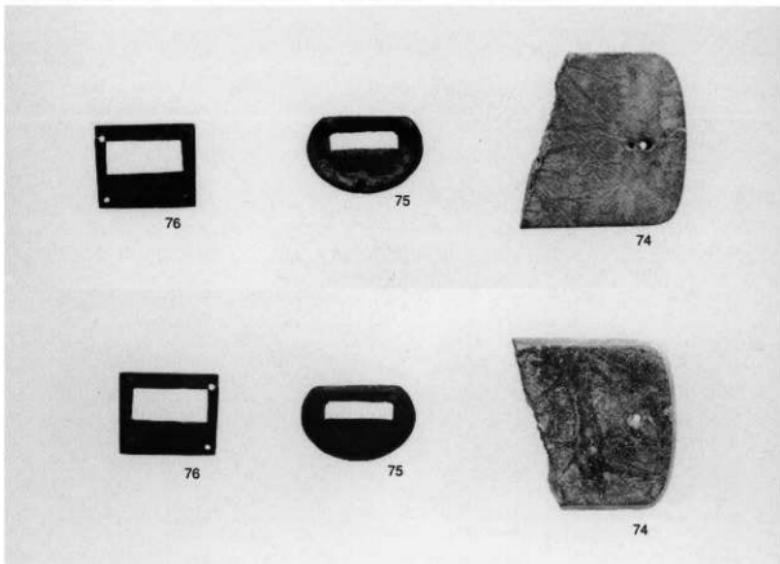
55



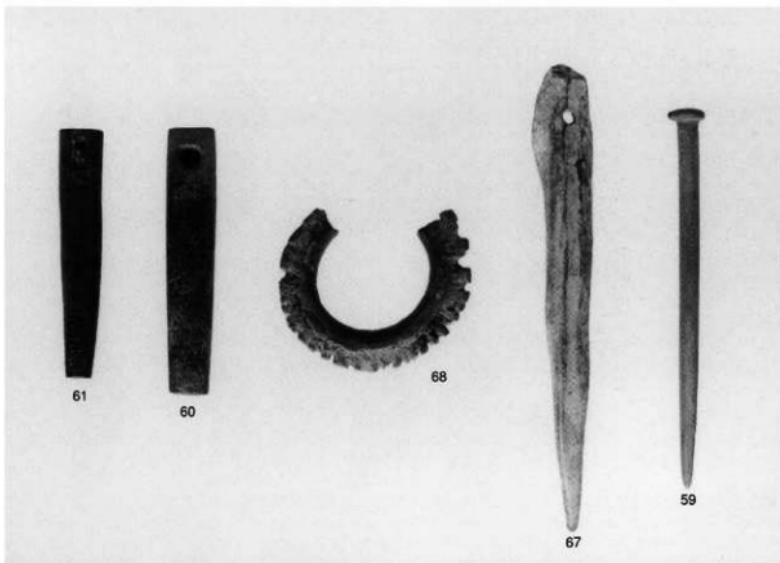
54

B. 青銅器

写真図版 61 伊場遺跡 金属器・骨角器他

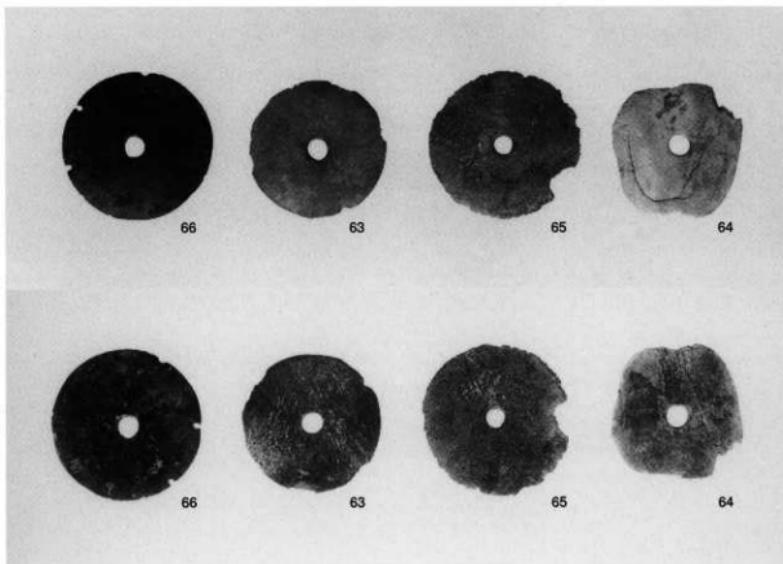


A. 鎏帶金具・石帶

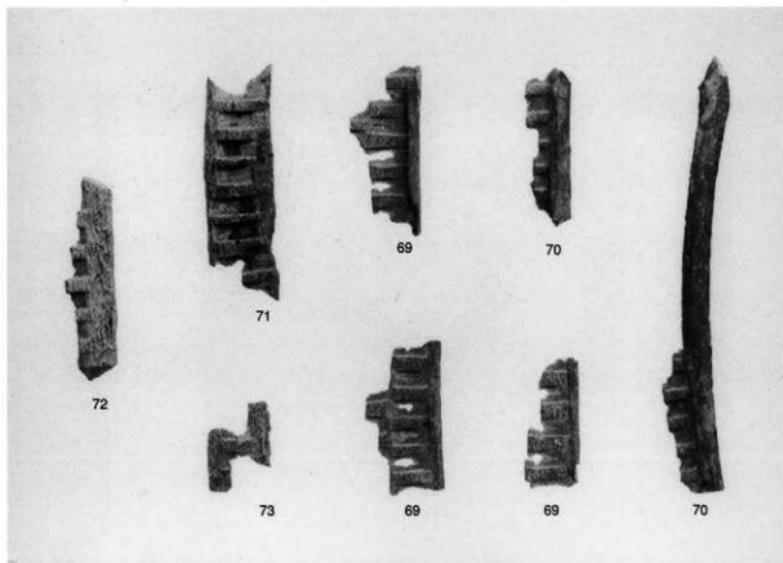


B. 骨角器

写真図版 62 伊場遺跡 骨角器

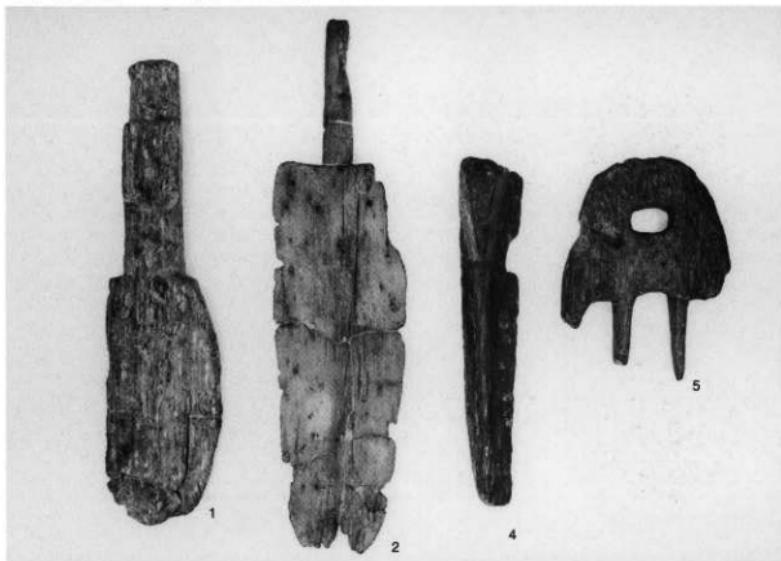


A. 骨製紡錘車

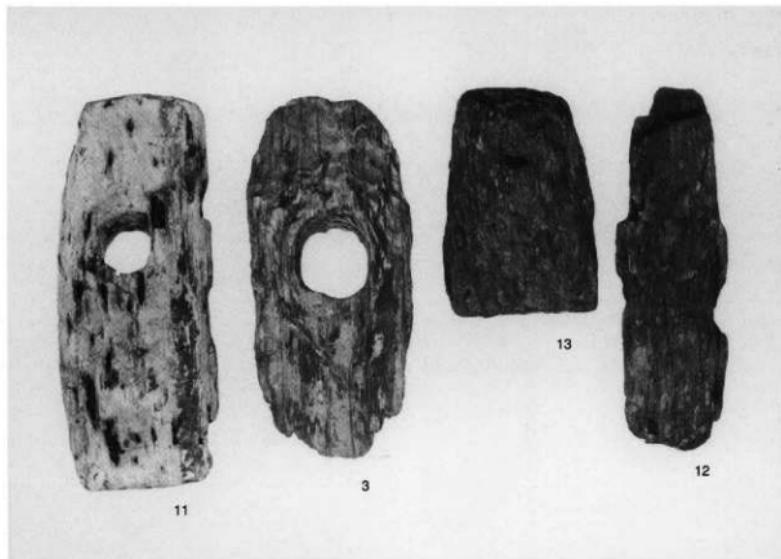


B. 卜骨

写真図版 63 梶子遺跡VI次



A. 鍤・柄振



B. 鍤

写真図版 64 梶子遺跡VI次

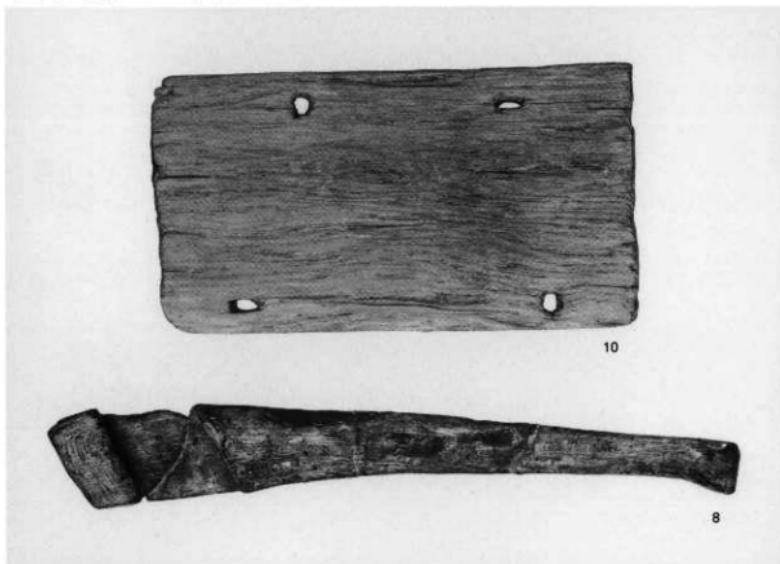


A. 鋤



B. 鋤

写真図版 65 梔子遺跡VI次



A. 田下駄・鎌柄



B. アカカキ・柵

写真図版 66 梶子遺跡VI次



15



16

A. 塗銹・そり



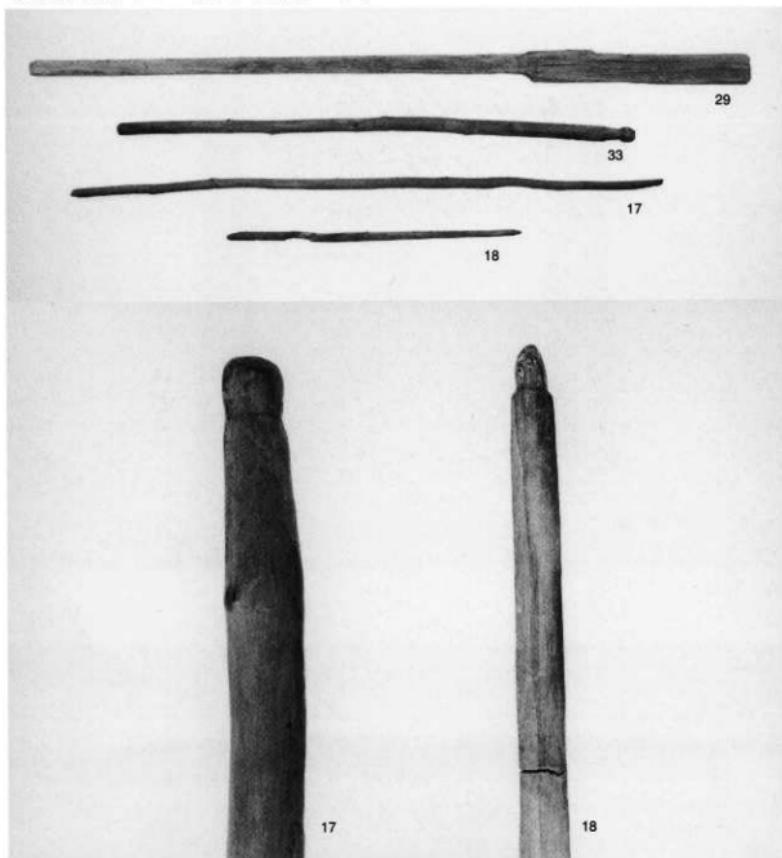
15



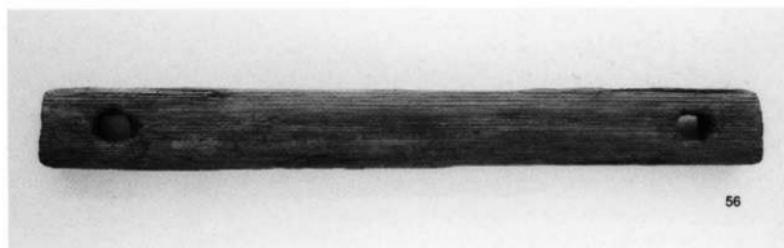
16

B. 塗銹・そり（側面）

写真図版 67 梶子遺跡VI次



A. 標・弓



B. 桟穴板

写真図版 68 梶子遺跡VI次



24



23

A. 弓



39



41



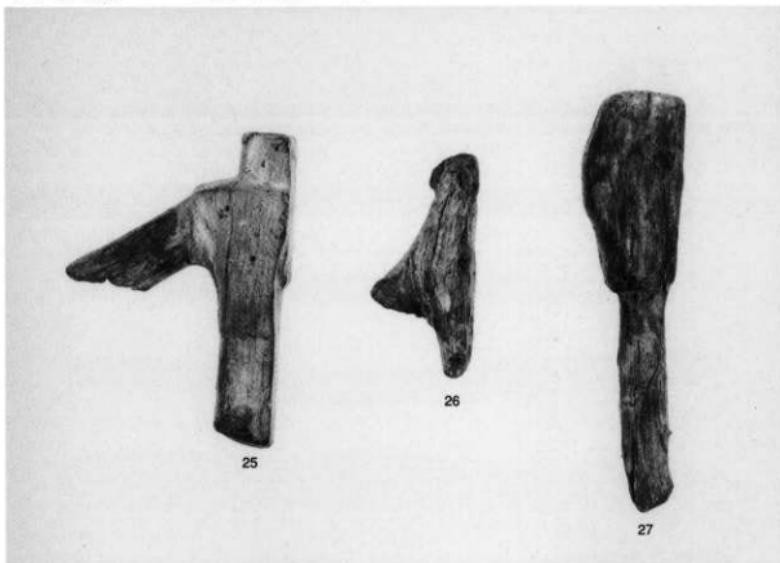
21



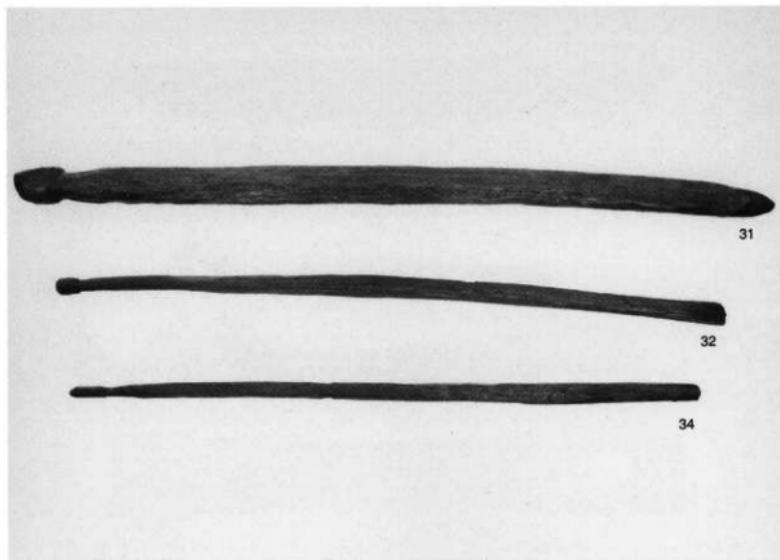
22

B. 弓・布巻貝・有頭棒

写真図版 69 梶子遺跡VI次

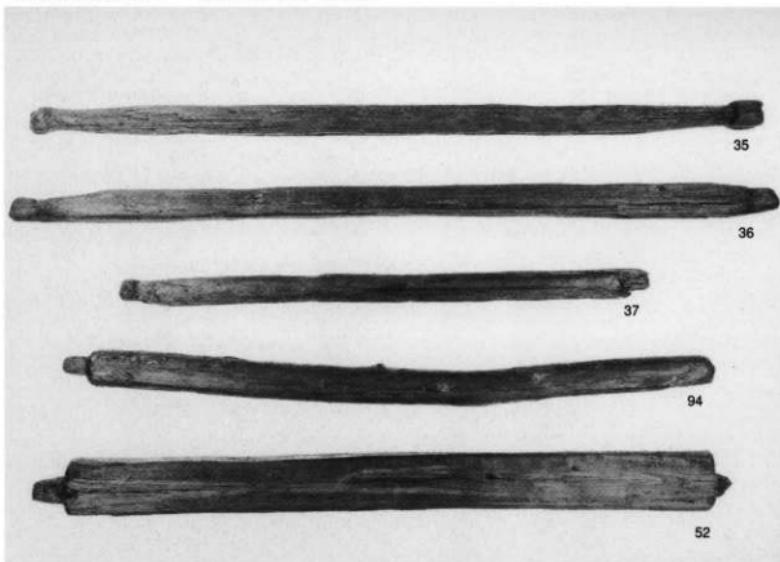


A. 銀柄・横柾

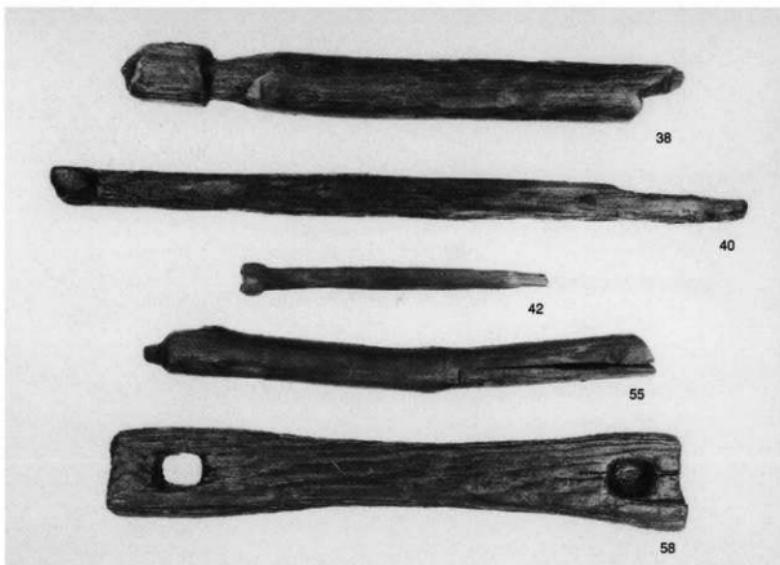


B. 有頭棒

写真図版 70 梓子遺跡VI次

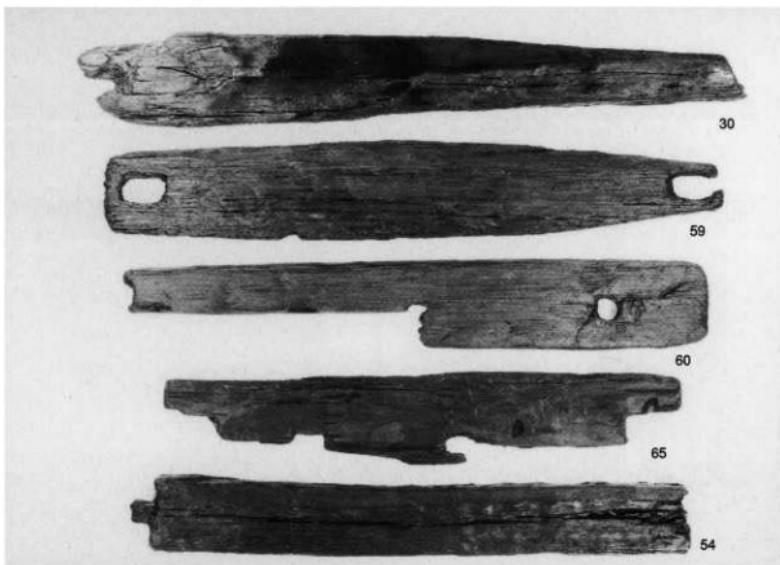


A. 有頭棒・出納材

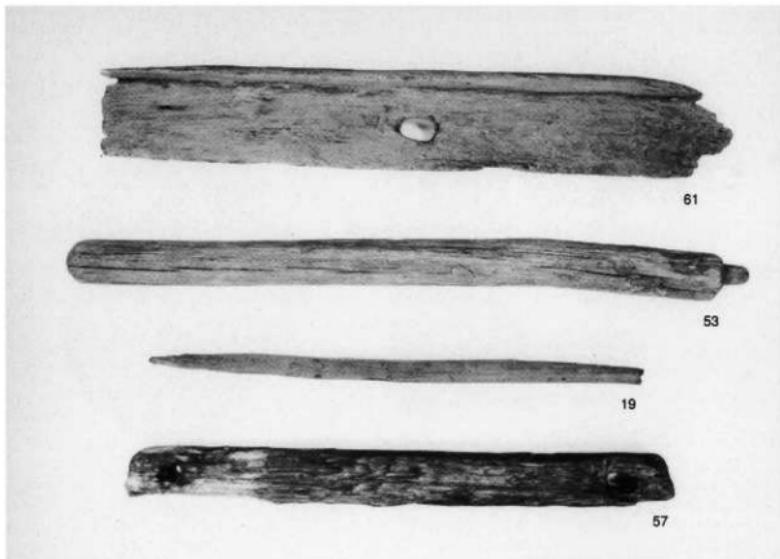


B. 有頭棒・納材

写真図版 71 梁子遺跡VI次

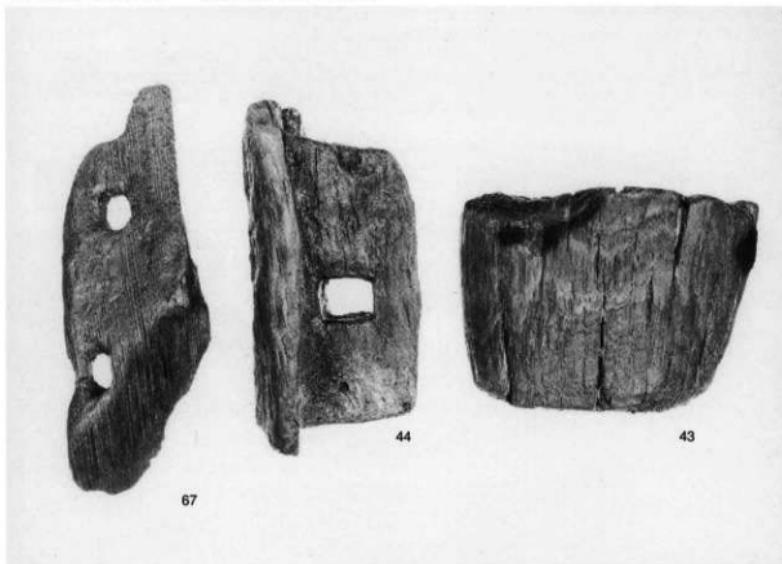


A. 梁・枘材等

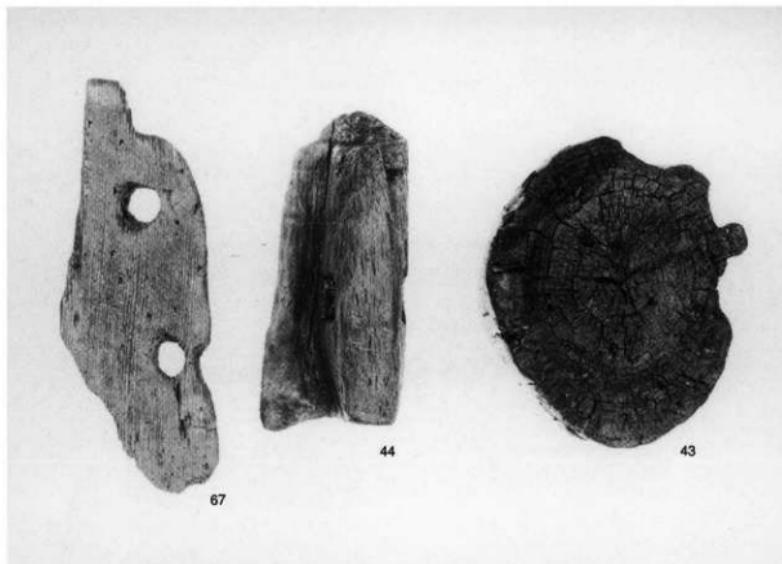


B. 各種材

写真図版 72 梶子遺跡VI次

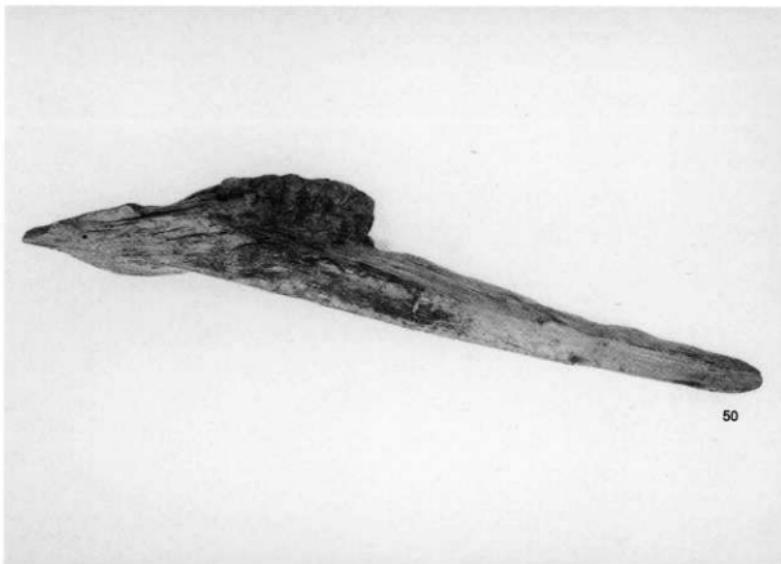


A. 有孔材・枘穴材・臼底



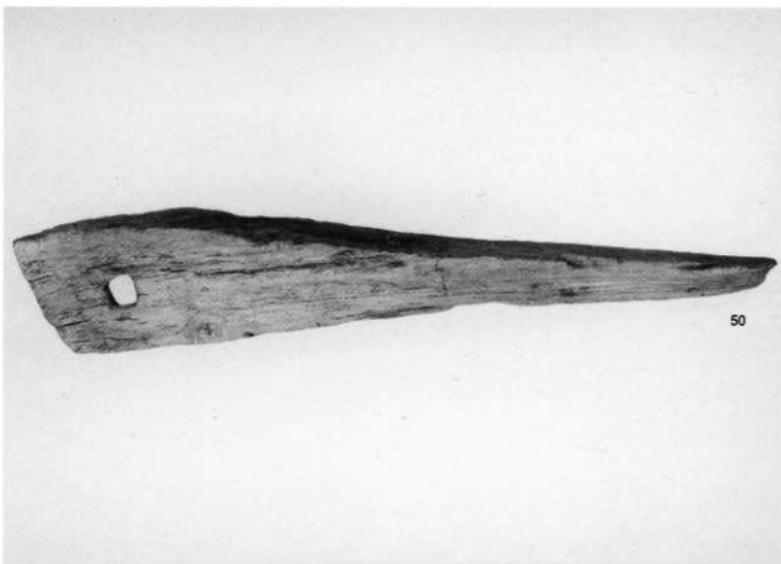
B. 有孔材・枘穴材・臼底

写真図版 73 梶子遺跡VI次



50

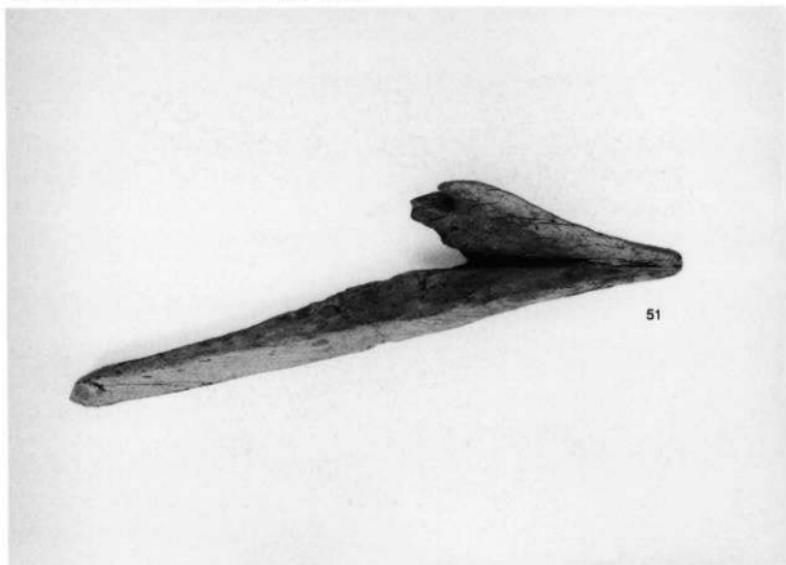
A. 丸木舟（上面）



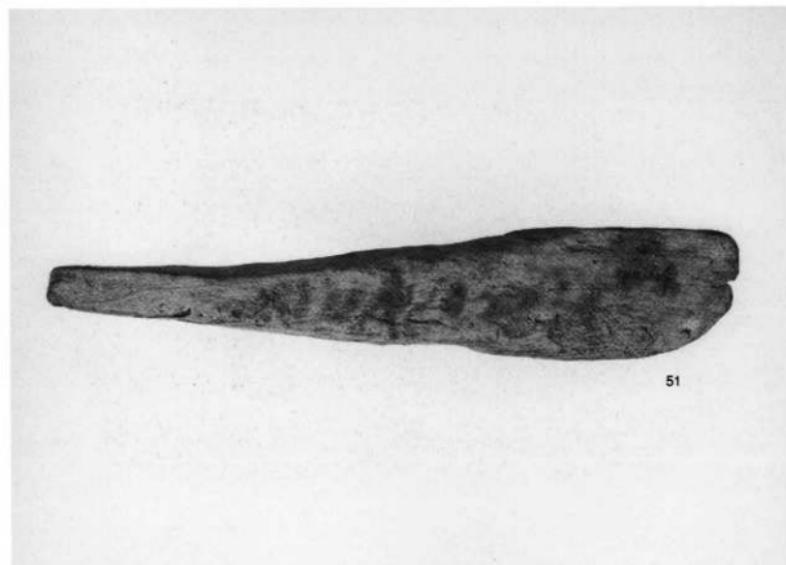
50

B. 丸木舟（側面）

写真図版 74 梶子遺跡VI次

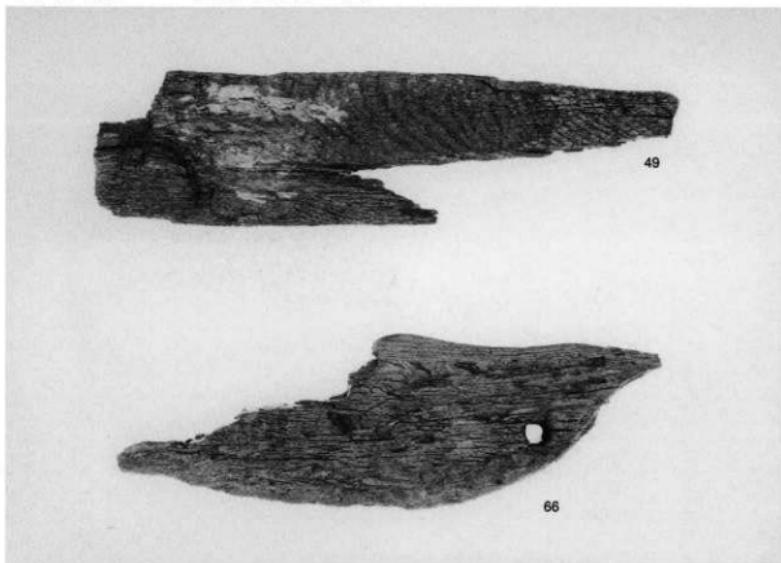


A. 丸木舟（上面）

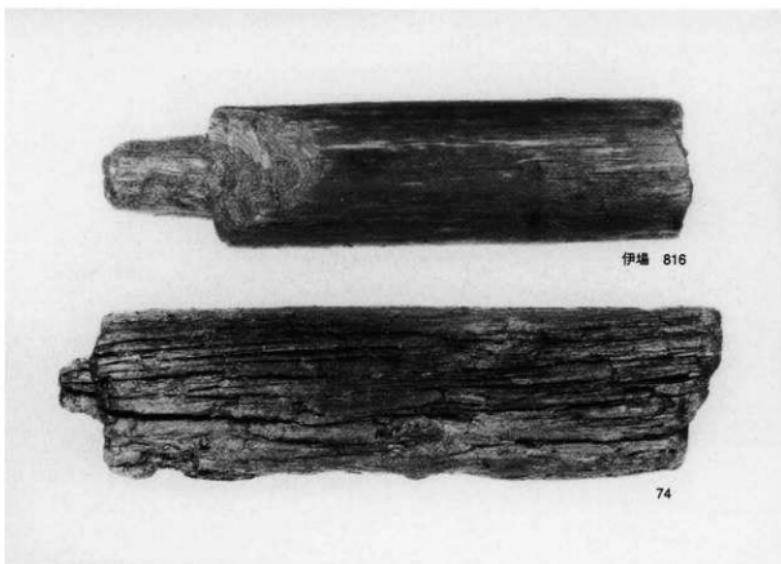


B. 丸木舟（側面）

写真図版 75 梶子遺跡VI次



A. 槽・有孔板



B. 建築部材

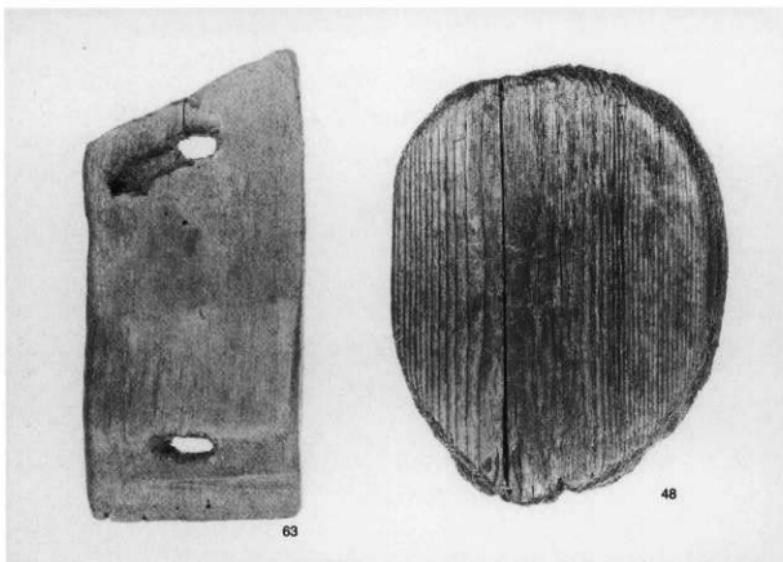
49

66

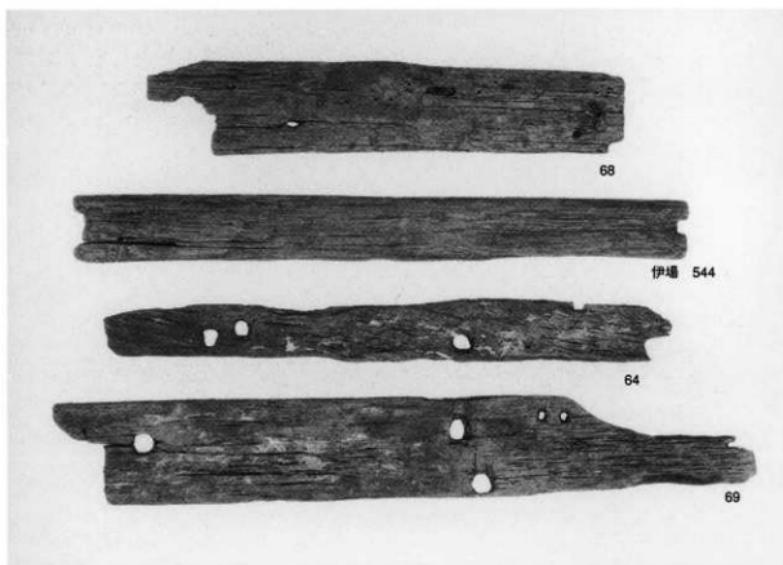
伊場 816

74

写真図版 76 梶子遺跡VI次

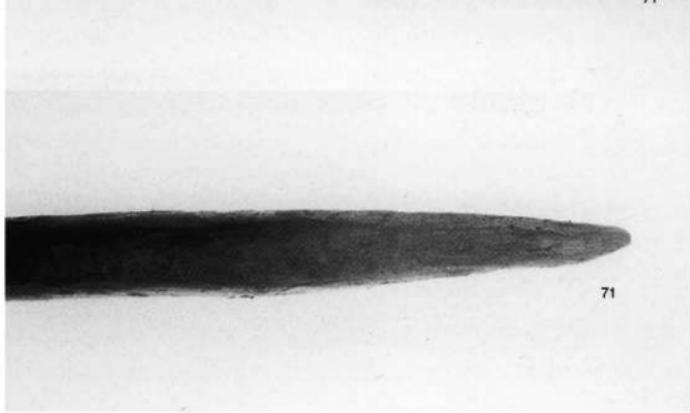
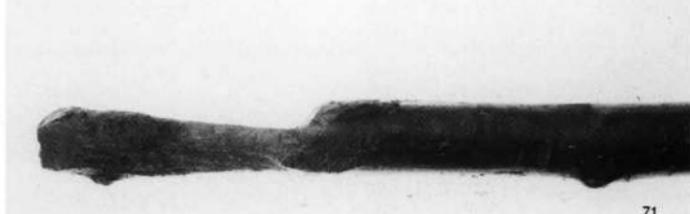
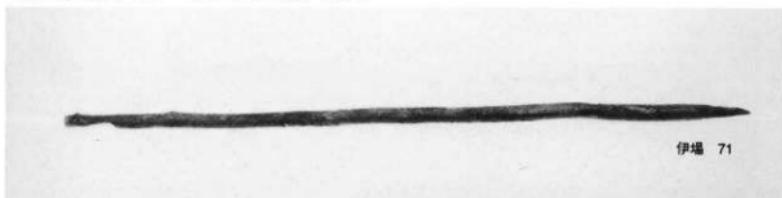


A. 有孔板・片口鉢？



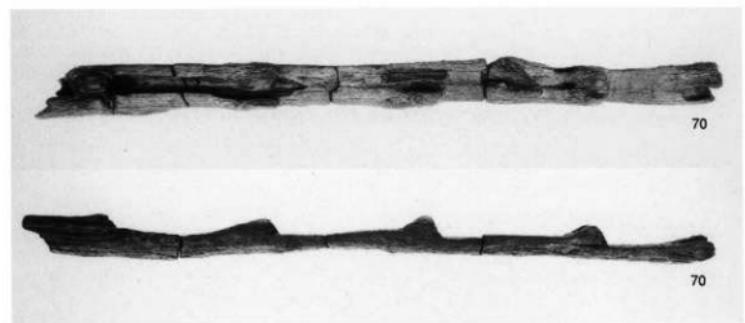
B. 有孔材・枘穴板等

写真図版 77 梶子遺跡VI次

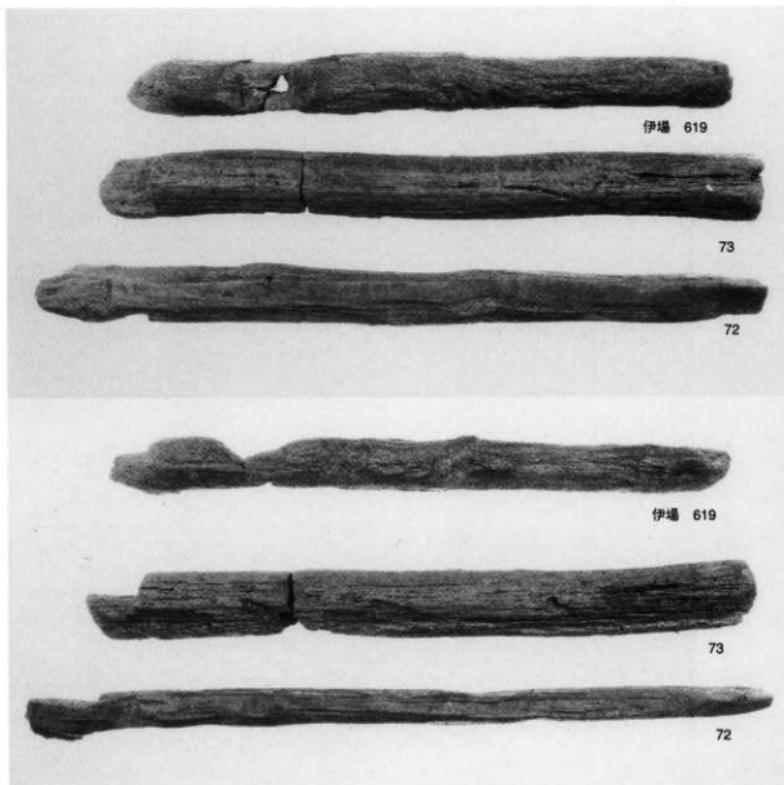


垂木

写真図版 78 梁子遺跡VI次

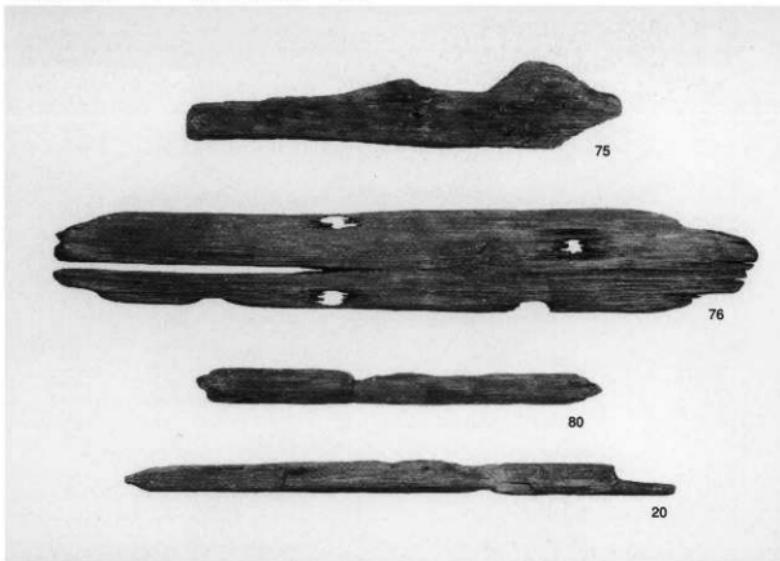


A. 梯子

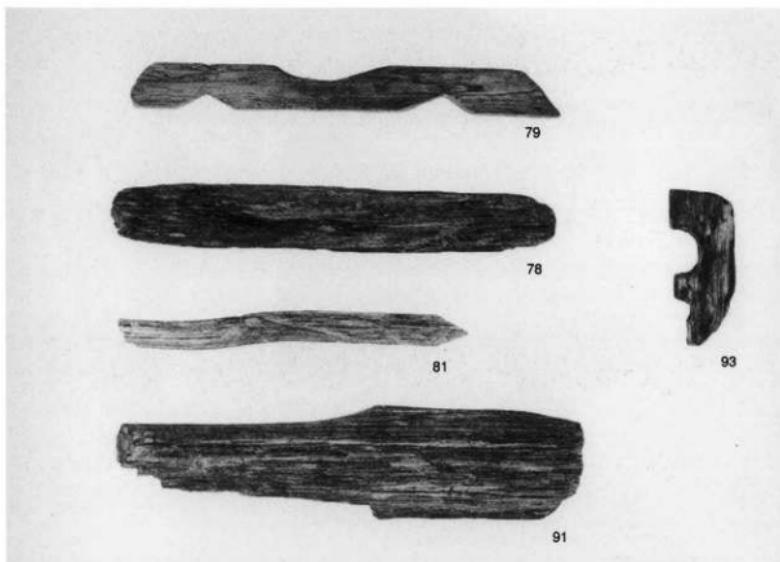


B. 垂木等建築部材

写真図版 79 梶子遺跡VI次

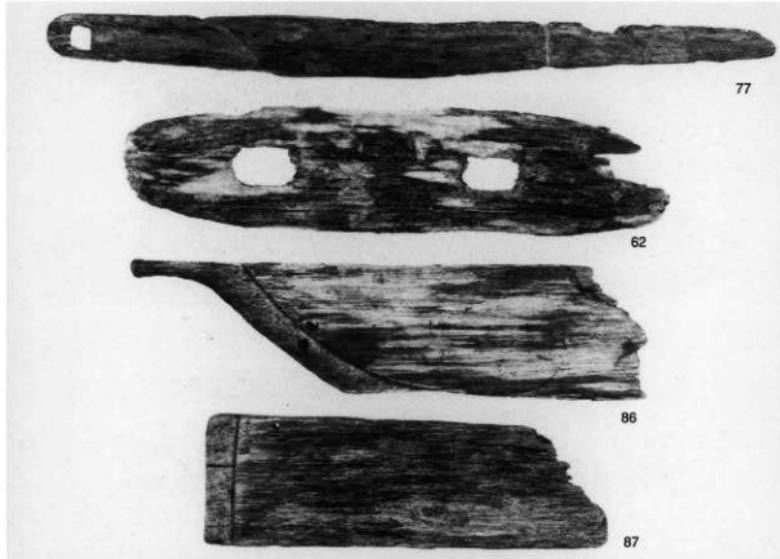


A. 鉢・田下駄等

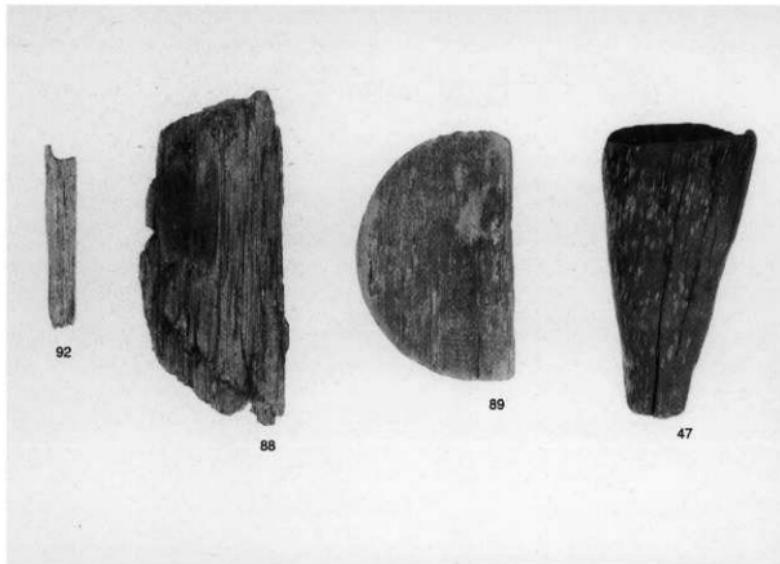


B. 馬形・舟形・斎申・杓文字等

写真図版 80 梶子遺跡VI次

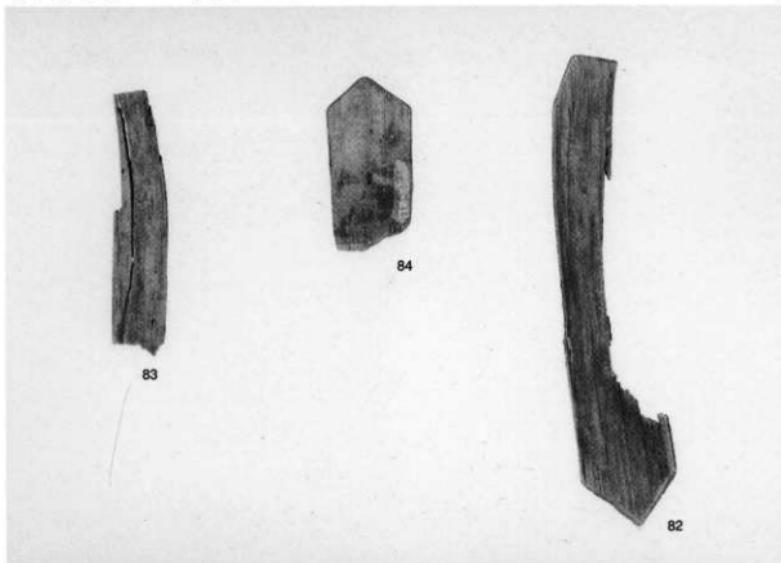


A. 馬鍬歛・曲物底板等

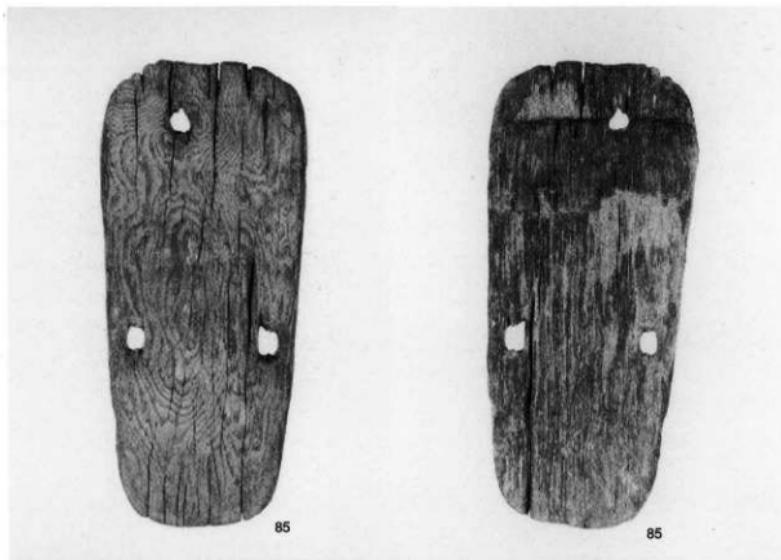


B. 曲物底板等

写真図版 81 梹子遺跡VI次

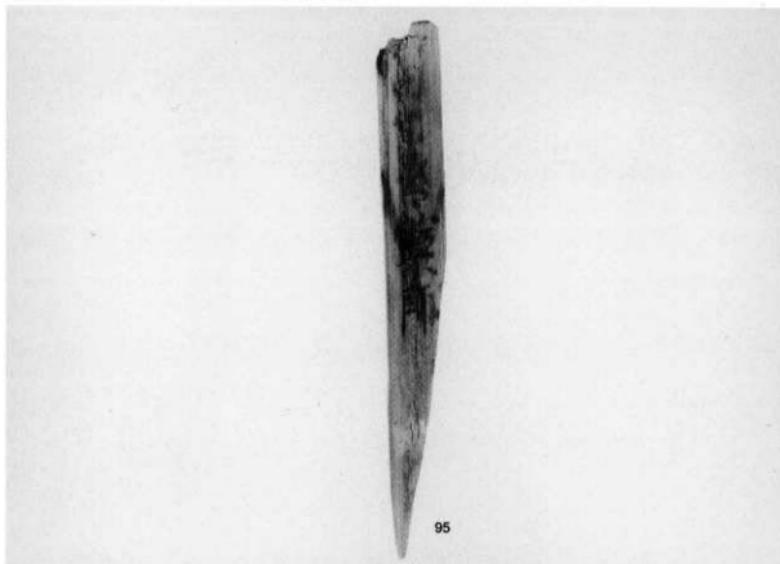


A. 木簡材

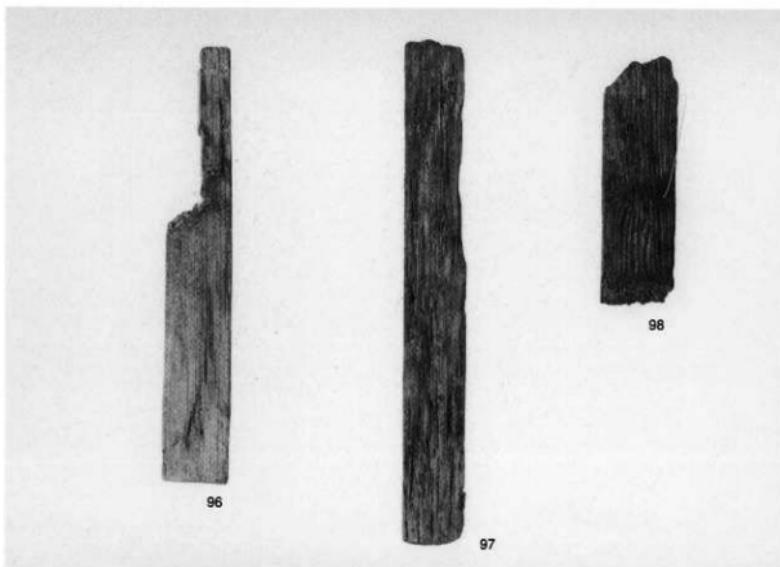


B. 下駄

写真図版 82 梶子遺跡VI次

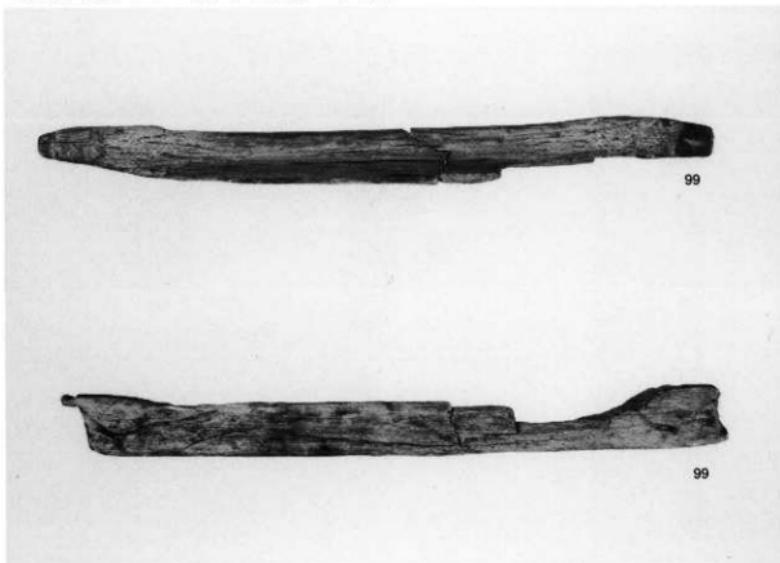


A. 3号木筒



B. 1・2号木筒

写真図版 83 梹子遺跡 II 次他



A. 舟形（弥生後期）



B. さるのこしかけ

伊場大溝出土

写真図版 84 三和町・鹿小路遺跡



2

3

A. 三和町遺跡出土鉄柄等



7



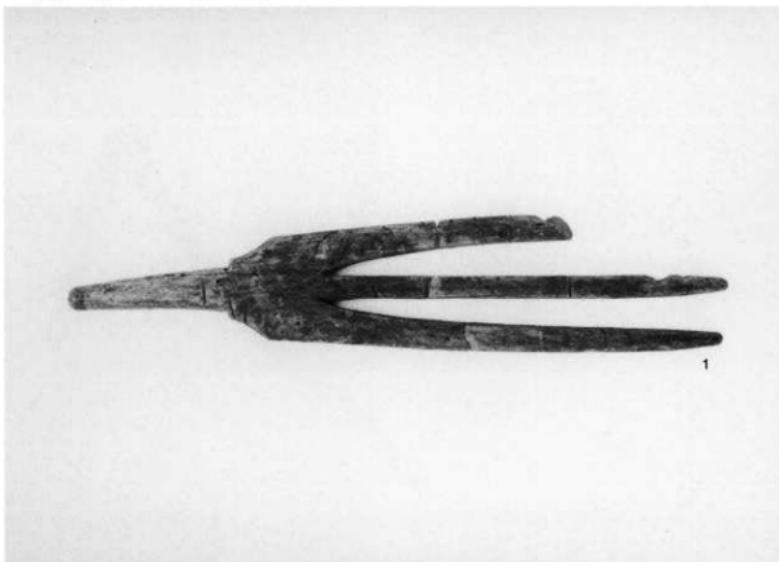
5



6

B. 鹿小路遺跡出土木製品

写真図版 85 岡ノ平遺跡

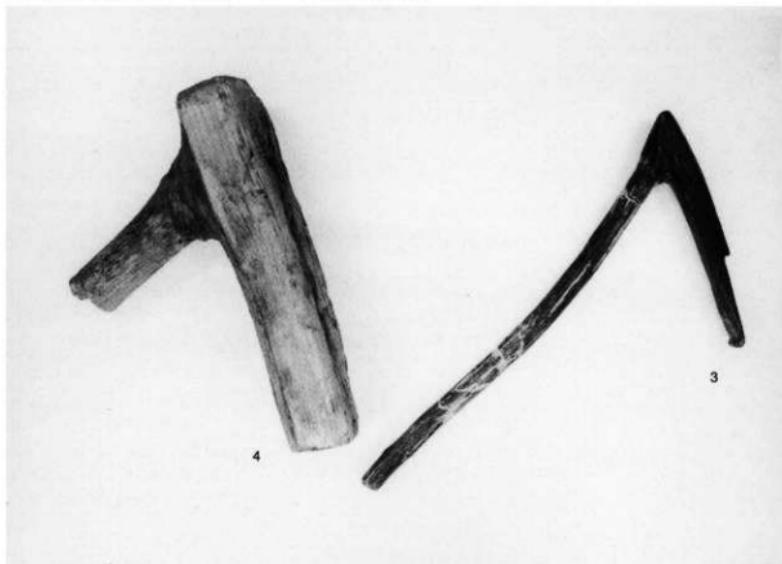


A. 三本鉤

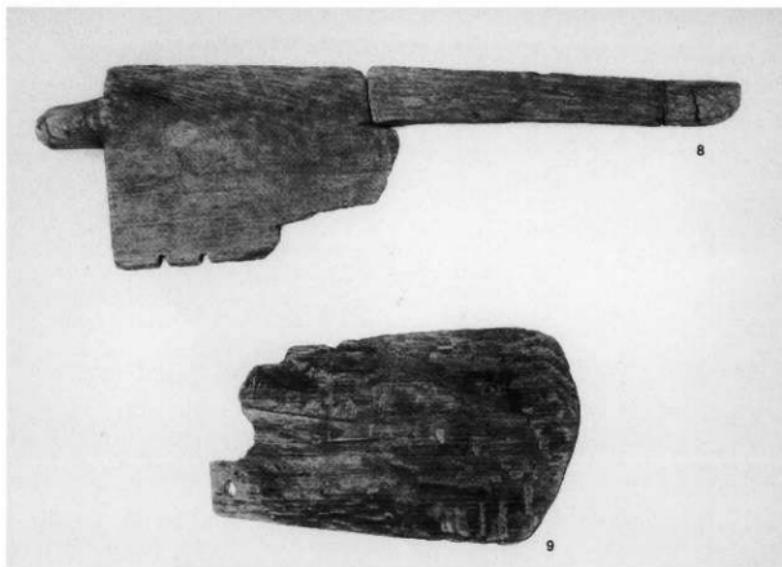


B. 鉤柄

写真図版 86 岡ノ平・石川遺跡



A. 岡ノ平遺跡出土斧柄等



B. 清水・石川遺跡出土鎌・鋤

報告書抄録

書名(ふりがな)	伊場遺跡遺物編 (いばいせきいぶつへん) 8 (木製品Ⅱ・金属器・骨角器)	
副書名・巻次	伊場遺跡発掘調査報告書 第10冊	
編著者名	鈴木敏則	
編集機関	浜松市博物館 〒432-8018 浜松市観塚四丁目22-1 TEL 053-456-2208	
発行機関	浜松市教育委員会 〒430-0917 浜松市常盤町306-5 イーステージ浜松オフィース棟5F	
発行年月日	西暦 2002年3月10日	
所収遺跡名・所在	伊場(いば)遺跡 静岡県浜松市東伊場二丁目22・東若林町	梶子(かじこ)遺跡6次 浜松市南伊場町4
遺跡コード	(市町村) 22202 (遺跡) 12-12	(市町村) 22202 (遺跡) 12-11
経度・緯度	(北緯) 34度41分30秒 (東經) 137度41分00秒	(北緯) 34度41分43秒 (東經) 137度42分44秒
調査面積	約36,000m ²	1,747m ²
調査期間・原因	1968年1月～1980年3月 東海道線高架関連事業他	1982年5月～12月 建物建設
掲載遺物の概要	木製品・金属器・骨角器(弥生時代～平安時代)	
特記事項	奈良・平安時代は敷智郡衙関連遺構 弥生時代は環濠集落	

伊場遺跡発掘調査報告書 第10冊

伊場遺跡遺物編 8

(木製品Ⅱ・金属器・骨角器)

2002年3月10日

編 集 浜松市博物館

浜松市観緑四丁目 22-1

發 行 浜松市教育委員会

浜松市常盤町 306-5

イーステージ浜松

オフィース棟5F

印 刷 株式会社シバプリント

